福岡南バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

第　6　集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(3)

1　9　7　7

福　岡　県　教　育　委　員　会

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第　6　集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(3)

序

この報告書は，福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて，昭和46年度から49年度にかけて実施した一般国道３号線福岡南バイパス建設路線内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第２・３集，筑紫郡太宰府町所在の御笠川南条坊遺跡(1)・(2)の続編をなすものであります。

十分な報告ではありませんが，本報告書を通して当遺跡を理解され，年々失われゆく埋蔵文化財保護に対し，一層のご協力をいただければ幸いです。

なお，調査に対してご協力をいただいた地元の方々をはじめ，関係各位のご援助とご配慮により本書を刊行することができましたので，ここに心からの感謝を申し上げます。

昭和52年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　森田　實

例　言

1．本書は，国道３号線福岡南バイパス建設事業に関連して，昭和49年度に実施した御笠川南条坊遺跡の第６次発掘調査の概要報告である。

2．調査は九州地方建設局福岡国道工事事務所の委託を受けて，福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆分担は次のとおりである。

一 ……新　原　正　典

二 ……新　原　正　典

三 ……新　原　正　典

四 ……新　原　正　典

五　1 ……馬　田　弘　稔

　　2～10……前　川　威　洋

　　11～15……新　原　正　典

六　おわりに……前　川　威　洋

4．掲載写真の撮影，実測図の作成および製図は執筆分担者が行なったが，遺物写真の一部は九州歴史資料館の石丸洋氏にお願いした。

5．本書の編集は前川威洋，新原正典，馬田弘稔が担当した。

第 6 次 調 査

本 文 目 次

頁

一．はじめに……1
二．調査経過……3
三．層位……4
四．遺構……5
　1．建物・柱穴……5
　2．溝……5
　3．土坑……7
　4．井戸……9
五．遺物……27
　1．須恵器……27
　2．下層土師器・Ⅰ類……39
　3．上層土師器・Ⅱ類……50
　4．片口……76
　5．土鍋……78
　6．土釜……78
　7．瓦器椀……78
　8．磁器……78
　9．雑器……85
　10．常滑陶器……87
　11．石製品……89
　12．金属製品……90
　13．土製品・木製品……93
　14．下駄……94
　15．銅銭……94
六．おわりに……99

図　版　目　次

本文対照頁

図版 1　　遺跡全景……1
2　1．遺跡全景(南から)……1
　　2．遺跡全景(東から)……1
3　1．西区下層(西から)……3
　　2．東区下層全景(西から)……3
4　1．東区下層(北から)……3
　　2．東区下層(南から)……3
5　1．ＳＤ 601 溝(北から)……5
　　2．ＳＤ 603 溝内遺物出土状態(南から)……6
6　1．ＳＤ 602 溝(北から)……6
　　2．ＳＤ 604 溝内遺物出土状態……6
7　1．ＳＫ 602 土坑(北から)……7
　　2．ＳＫ 612・613・614 土坑(西から)……7
8　1．ＳＫ 607 土坑(北から)……7
　　2．ＳＫ 602・606土坑(東から)……7
9　1．ＳＫ 601 土坑(西から)……7
　　2．ＳＫ 609 土坑(北から)……7
10　1．ＳＥ 601 号井戸……9
　　2．ＳＥ 602 号井戸……9
11　1．ＳＥ 603 号井戸……9
　　2．ＳＥ 603 号井戸……9
12　1．ＳＥ 604 号井戸……9
　　2．ＳＥ 604 号井戸……9
13　1．ＳＥ 605 号井戸……9
　　2．ＳＥ 607 号井戸……13
14　1．ＳＥ 608 号井戸……13
　　2．ＳＥ 608 号井戸側陰刻……13
15　1．ＳＥ 609 号井戸……13
　　2．ＳＥ 609 号井戸……13
16　1．ＳＥ 610 号井戸……18
　　2．ＳＥ 613 号井戸……18

本文対照

図版17　1．ＳＥ611号井戸……18
　　2．ＳＥ611号井戸……18
18　1．ＳＥ612号井戸……18
　　2．ＳＥ612号井戸……18
19　1．ＳＥ615号井戸……18
　　2．ＳＥ616号井戸……18
20　1．ＳＥ613号井戸……18
　　2．ＳＥ614号井戸……18
21　1．ＳＥ617号井戸……18
　　2．ＳＥ618号井戸……18
22　1．ＭＦ21区銅銭出土状態……3
　　2．鏡出土状態……93
23　　ＳＤ602溝出土青磁……79
24　　ＳＫ634土坑（５層）出土須恵器……27～38
25　　ＳＫ634土坑（５層）出土須恵器（上）
　　ＭＥ13区４層出土土器（下）……27～38
26　　ＳＫ633土坑出土土師器……43～49
27　　ＳＤ603溝出土土師器……59～62
28　1．白磁……78
　　2．青磁９類……84
29　1．合子……84
　　2．高麗青磁……85
30　1．常滑甕底部……87
　　2．褐釉陶製摺鉢……87
31　1．石製品（１）……89
　　2．石製品（２）……90
32　1．ガラス製品・石製品・金属製品・土製品……89～93
　　2．八稜鏡……93
33　　銅銭……94
34　　木製品・金属製品……90～94

挿　図　目　次

頁

1図　遺跡位置図……見開き
2図　遺跡全図……2
3図　D列東西壁土層図……4
4図　上層遺構配置図……折込み4～5
5図　下層遺構配置図……折込み4～5
6図　SD 601 溝南壁土層図……5
7図　SE 602 井戸実測図……10
8図　SE 603 井戸実測図……11
9図　SE 604 井戸実測図……12
10図　SE 605 井戸実測図……14
11図　SE 607 井戸実測図……15
12図　SE 608 井戸実測図……16
13図　SE 609 井戸実測図……17
14図　SE 610 井戸実測図……19
15図　SE 611 井戸実測図……20
16図　SE 612 井戸実測図……21
17図　SE 613 井戸実測図……22
18図　SE 614 井戸実測図……23
19図　SE 617 井戸実測図……24
20図　計測点各部名称模式図……27
21図　須恵器杯身実測図(1・2類)……33
22図　須恵器杯身実測図(3・4類)……34
23図　須恵器杯蓋実測図(1・2類)……35
24図　須恵器杯蓋実測図(3類)……36
25図　須恵器実測図(1)……37
26図　須恵器実測図(2)……38
27図　土師器実測図(ME13区下層出土)……40
28図　土器実測図(SE 614 井戸出土)……42
29図　土師器実測図(SK 633 土坑出土—1)……44
30図　土師器実測図(SK 633 土坑出土—2)……45
31図　土師器実測図(SK 633 土坑出土—3)……46
32図　土師器実測図(下層出土)……50
33図　土器実測図(SD 604 溝出土)……51
34図　土師器実測図(SE 610 井戸出土—1)……54

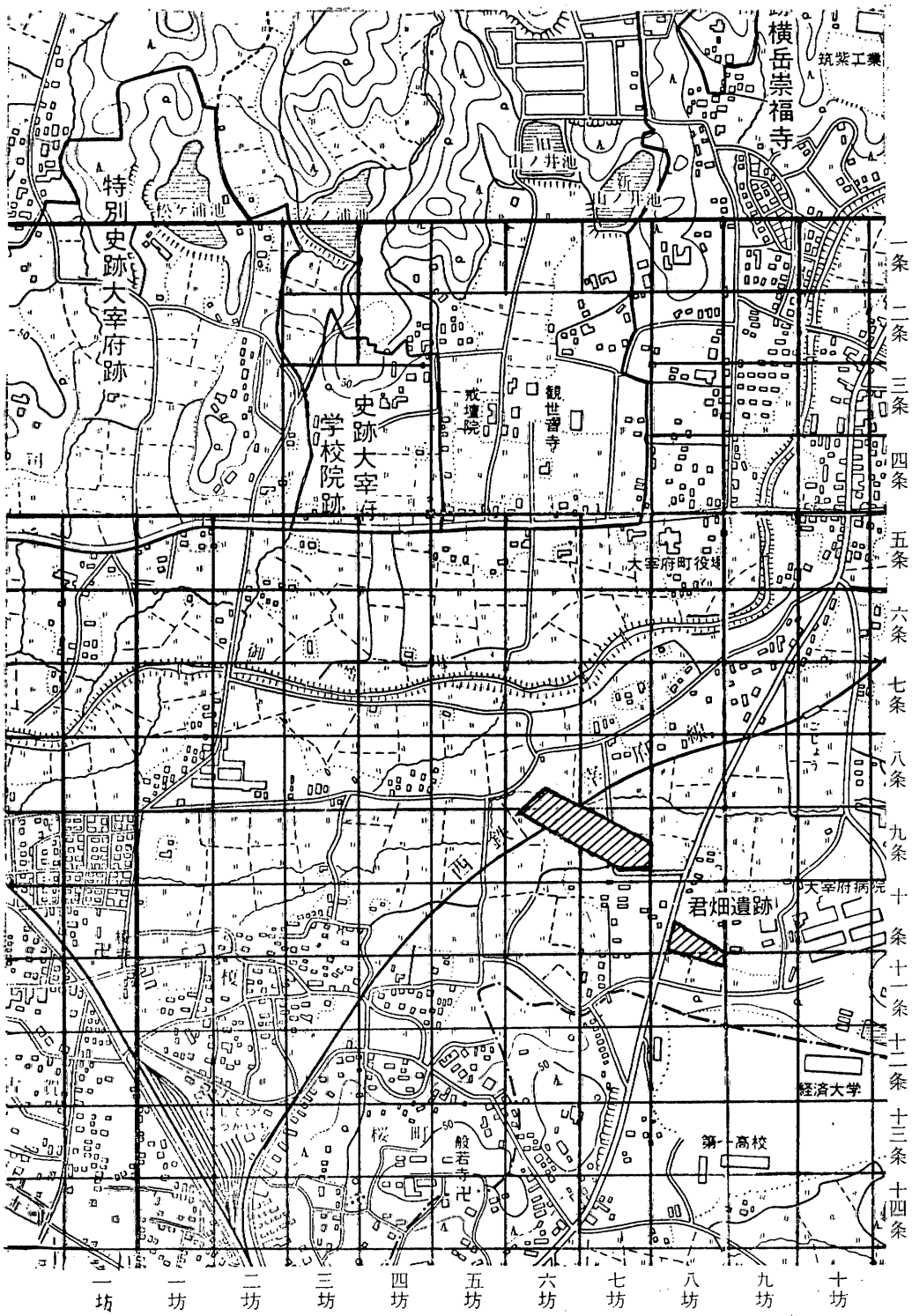
頁

35図　土師器実測図（ＳＥ 610 井戸出土―２）……55
36図　土師器実測図（ＳＥ 609 井戸出土）……58
37図　土師器実測図（ＳＤ 603 溝出土―１）……60
38図　土師器実測図（ＳＤ 603 溝出土―２）……61
39図　土師器実測図（ＳＥ 604 井戸出土）……62
40図　土師器実測図（ＳＤ 601 溝出土）……65
41図　土師器実測図（ＳＤ 602 溝出土―１）……68
42図　土師器実測図（ＳＤ 602 溝出土―２）……69
43図　土師器実測図（ＳＫ 621 土坑出土）……70
44図　土師器実測図（ＳＫ624，ＳＫ629，ＳＫ618，ＳＫ606土坑出土）……73
45図　土師器実測図（ＳＥ602，ＳＥ608，ＳＥ613，ＳＥ615井戸出土）……76
46図　各種土器実測図……77
47図　青磁，白磁実測図（１）……80
48図　青磁，白磁実測図（２）……81
49図　青磁，天目実測図……82
50図　青白磁，高麗青磁実測図……83
51図　雑器実測図……86
52図　常滑陶器実測図……87
53図　石製品実測図……88
54図　陰刻滑石製品実測図……89
55図　石製品，金属製品実測図……91
56図　木製品，土製品，金属製品実測図……92
57図　桶板焼印拓影……94
58図　下駄実測図……95
59図　銅銭拓影……96

表　目　次

頁

1表　発掘調査工程表……1
2表　土坑一覧表……7・8
3表　井戸一覧表……26
4表　須恵器杯身の法量……28
5表　須恵器杯身一覧表……29
6表　須恵器杯蓋一覧表……30
7表　須恵器杯蓋一覧表……31
8表　須恵器蓋一覧表……31
9表　須恵器高杯一覧表……32
10表　ＭＥ13区下層出土土師器の法量……39
11表　ＭＥ13区下層出土土師器計測表……39
12表　ＳＫ 633 土坑出土土師器の法量……47
13表　ＳＫ 633 土坑出土土師器計測表（１）……48
14表　ＳＫ 633 土坑出土土師器計測表（２）……49
15表　ＳＤ 604 溝出土土師器の法量……52
16表　ＳＤ 604 溝出土土師器計測表……52
17表　ＳＥ 610 井戸出土土師器計測表……53
18表　ＳＥ 610 井戸出土土師器の法量……55
19表　ＳＥ 609 井戸出土土師器計測表……56
20表　ＳＥ 609 井戸出土土師器の法量……57
21表　ＳＤ 603 溝出土土師器計測表……59
22表　ＳＥ 603 溝出土土師器の法量……62
23表　ＳＥ 604 井戸出土土師器の法量……63
24表　ＳＥ 604 井戸出土土師器計測表……63
25表　ＳＤ 601 溝出土土師器計測表……64
26表　ＳＤ 601 溝出土土師器の法量……66
27表　ＳＤ 602 溝出土土師器の法量……66
28表　ＳＤ 602 溝出土土師器計測表……67
29表　ＳＫ 621 土坑出土土師器の法量……71
30表　ＳＫ 621 土坑出土土師器計測表……71
31表　ＳＫ 629 土坑出土土師器の法量……72
32表　ＳＫ 629 土坑出土土師器計測表……72
33表　ＳＫ 606 土坑出土土師器の法量……74
34表　ＳＫ 606 土坑出土土師器計測表……75
35表　銅銭計測一覧表……97・98
36表　玉類計測一覧表……98
37表　土師器分類と遺構対照表……100



(鏡山猛著『大宰府都城の研究』より)

1図 遺跡位置図 (1/10,000)

一、はじめに

御笠川南条坊遺跡は昭和49年度の発掘調査をもって昭和46年度の第1次調査以来6次，4年間にわたる発掘調査は終了した。4年間に調査した面積は7,150m²に及び，遺跡がバイパス路線内にかかる面積の80%以上を調査した。出土遺物も多岐におよび，土器の量だけでも整理箱にして500箱に達する。今回の報告は昭和49年度，第6次調査の分についてで，『御笠川南条坊遺跡』の第3集をなすものである。

なお，当遺跡は「御笠川南条坊遺跡」と名称を与えているが，御笠川南条坊遺跡は大宰府条坊内において西流する御笠川の南に広がる広大な範囲にわたっており，当遺跡だけで限定できない。そのため調査地点は大宰府史跡発掘による標示基準によって6AYEBMなどの記号で表わしているが，呼称に不便をきたしている。調査した地区は太宰府町の行政上五条区に属し，しかも調査関係者の間でも「五条遺跡」と呼び慣らわし，それが定着してきているため，御笠川南条坊内の遺跡でもバイパス路線内において調査した遺跡に限って「五条遺跡」と呼んでもさしつかえないであろう。

発掘調査開係者

庶務担当　福岡県教育庁管理部文化課主事　滝　龍二

調査担当　同　技師　前川　威洋　新原　正典

整理関係者

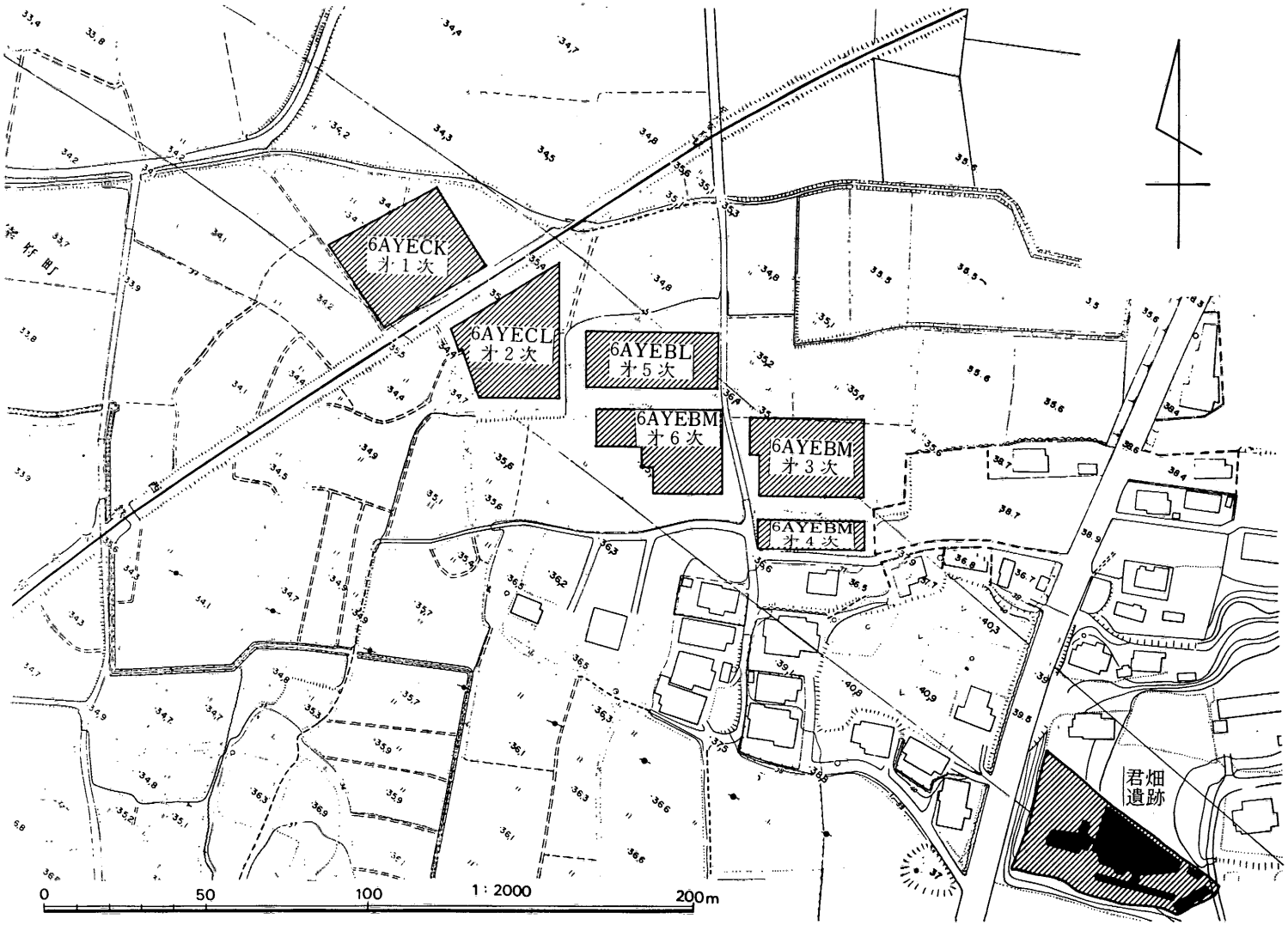
庶務担当　同　主事　豊福　金蔵

整理担当　同　技師　前川　威洋　新原　正典　馬田　弘稔

なお，発掘調査にあたっては，平ノ内幸治・土居隆臣・原田保則・日野裕之・砂田重治（以上別府大学学生），島田光一（熊本大学学生）氏及び地元太宰府町・筑紫野市の方々の，報告書の作成にあたっは教育庁文化課技師中間研二氏及び川村博，原田保則，田浦郁子氏の協力を得た。あわせて感謝の意を表したい。

調査次	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	6AYECK	2,000㎡	昭和46年10月11日～昭和47年3月20日 昭和47年8月18日～昭和47年9月12日
第2次	6AYECL	1,000㎡	昭和47年9月13日～昭和48年3月17日
第3次	6AYEBM	1,000㎡	昭和48年2月10日～昭和48年6月19日
第4次	6AYEBM	700㎡	昭和48年9月10日～昭和49年1月10日
第5次	6AYEBL	1,400㎡	昭和48年11月22日～昭和49年3月20日
第6次	6AYEBM	1,050㎡	昭和49年4月8日～昭和49年8月24日
第7次	6AYF－A （君畑遺跡）	700㎡	昭和50年11月17日～昭和51年3月1日

1表　発掘調査工程表


6AYECK
オ1次
6AYECL
オ2次
6AYEBL
オ5次
6AYEBM
オ6次
6AYEBM
オ3次
6AYEBM
オ4次
君畑
遺跡
0
50
100
1:2000
200m

2図 遺 跡 全 図

第 6 次 調 査

二、調 査 経 過

第6次発掘調査は昭和48年度に第5次調査として発掘を行なった調査区の南に接する一段高い水田（標高35.6m），地番は福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字泉水2695で行なった。期間は昭和49年4月8日より8月24日までの約80日間である。

4月9日より第Ⅰ層耕作土，17日より30日までⅡ層床土の排土作業を行なう。

5月1日より遺構検出作業に入り，Ⅲ層上面では遺構はほとんど検出されず，7日よりⅢ層の掘り下げを行なう。8日前回トレンチによる試掘の際に検出されていた20列南北溝を確認し，清掃を行なう。14日，本日にてⅢ層の排土を終了し，15日より遺構の検出作業に入る。MI 14区付近にて溝と井戸が重複して検出さる。16日，MI・MJ14区を拡張し，溝が最も新しいことが判明。MM 14区SD 604溝内より土師器が多数出土。写真撮影を行なう。25日より20列のSD601溝の発掘を行なう。ほぼ南北に真直ぐ延びる溝で，下部の灰褐色土に遺物を多く含んでいる。他は各遺構の検出及び発掘を続行する。27日，SD 601溝の完掘。30日E列にみられる黄色土の掘り下げを行なう。ME 18区付近にて南へと屈曲する溝である（SD602溝）。

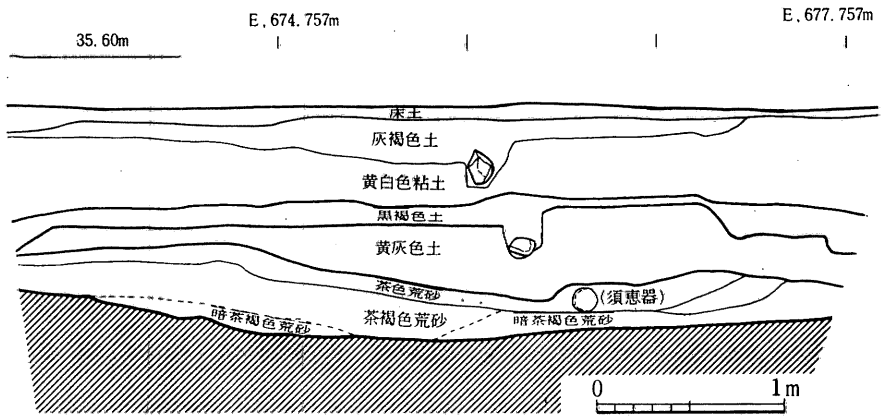
6月4日，SD602溝に切られたSK633土坑より多量（バケツで8杯分）のヘラ切り底土師器が出土。5日，ME 19区にて南北溝（SD605）が検出されヘラ切り底土師器と勾玉を出土。6日，黄色土で埋まったSD602溝はMK18区付近にて立ち上がり，完結することが判明。MF 21区Ⅲ層にて銅銭6枚が一括出土。MK19区でも八稜鏡が出土。10日より一部西区遣り方くみ，14日より実測を開始する。他は遺構の発掘を続行し，11日にはⅢ層にて牡丹模様の青磁と懸仏が出土。19日，13•14列付近の発掘，下層の存在が予想される。実測は本日にて終了。22日，上層遺構の再検出を行ない25日まで続行。26日から29日まで全景及び部分写真撮影。

7月1日より西区上層の実測を開始。2～3日調査区南側のバイパス予定路線内の台地にトレンチを設定し，調査を行なうが既に削平をうけていて遺構は存在しなかった。19日，西区上層の実測を終了，22日より下層の調査を開始。東区は実測。23日MF11区にて荒砂層より古墳時代の須恵器が多数出土。遺構はよくつかめない。24日，ME14区にて当遺跡では最も古いタイプに属するヘラ切り底土師器が出土する。黒色土器，内黒土師器も共伴。31日東区上層実測終了。

8月2日から井戸の実測及び取り上げを行なう。東区下層の調査開始。3日，SE614井戸検出。Ⅳ層にてビーズ玉出土。12日，東区下層全景写真撮影。13日より実測を開始し，19日までに終了。20～22日まで土層図の作成と図面の見直しを行ない，23日，遣り方の除去。24日，器材の撤去を行ない6次の調査を全て終了する。

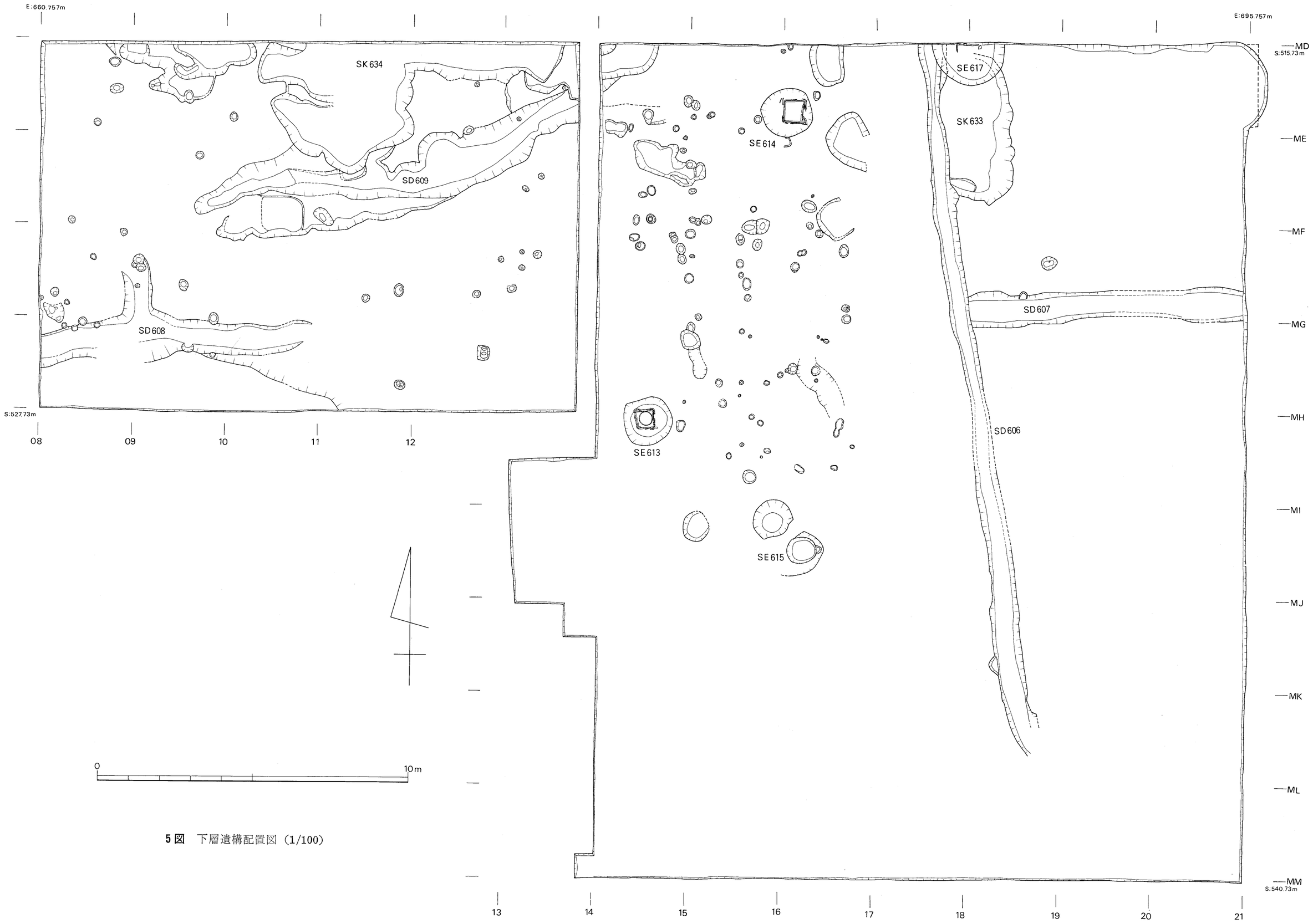
三、層　　位

調査区水田面の標高は35.6mで，上層の遺構は現地表面より北半で－50cm，南半で－30cm下がった面で検出され，北へと傾斜している。層位は北へ厚く堆積し，南半は上層の遺構面が黄色砂質土の地山である。調査区14列南北畦の土層が標準的な堆積をしているのでそれに準拠すれば，**1**層は耕作土で約20cm，**2**層は床土で茶褐色の鉄分を多く含み，約20cmの厚さで近世の遺物の出土を見る。SD 602溝内にみられる黄白色粘質土は調査区の南側台地にみられる地山の土で，溝内だけに見られるものであるがここでは一応2層としてとり扱った。**3**層は北半では黒褐色土，南半では上部は灰褐色土，下部は茶褐色土であるがあまり大差はない。遺物は各種のものを最も多く含んでいるが，土師器ではⅡ－4・5類に区分される時期のものが出土している。この3層下にて上層の遺構が検出される。**4**層は南半には見られず，北半にて暗黄色砂層及び黄灰色土の堆積がみられ，ヘラ切り底土師器を包含している。4層下にて下層の遺構面が検出される。**5**層は西区北端付近にだけ見られるもので，上部に茶褐色砂層，下部に茶褐色荒砂層が堆積する。この5層からは古墳時代後半から奈良時代に及ぶ須恵器が多量に出土している。これらの遺物は5層として取り上げたが，土が荒砂であることや堆積の範囲が落ち込んだ状態で限定されることなどから遺構内の流入土かとも考えられるが明確な遺構はつかめなかった。



3図　D列東西壁土層図

4図　上層遺構配置図（1/100）



5図 下層遺構配置図（1/100）

四、遺　　構

第6次調査では上下の2面にわたって遺構が確認され，上層では溝6条，井戸15基，土坑約50基などが，下層でも溝4条，井戸3基，土坑約10基が検出されているが上層ほど明確にはつかみにくい。

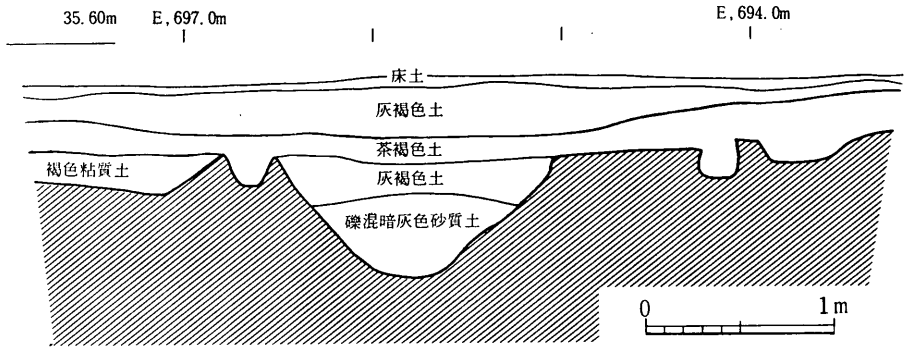
1.　建物・柱穴

柱穴は調査区全域において見い出され，上層で約1,000個，下層で130を数える。ＳＤ602溝に囲まれた区域内に多く分布し，それ以外の区域ではあまり分布していない。径20～40cm，深さも30～50cmのものがほとんどで，炭化物の混入した灰褐色土がつまっている。根石をもつものもあるが，柱痕を残すものはほとんど検出されていない。詳細な検討はしていないが建物跡としてまとまるものは少ないようである。ただＳＤ602溝は掘とも考えられるところからこの区域内に柱穴が多いのも当然のことだと思われる。

2.　溝

上層において6条，下層に4条の計10条の溝が検出されている。

ＳＤ601溝は20列に沿ってほぼ南北方向に延びるもので，南壁にて幅1.48m，深さ0.61mをはかりゆるやかなＵ字状をなして立ち上がる。底面は灰色砂層まで掘り込み，両端では約50cmの比高差で北へと流れる。溝内上部は灰褐色土，下部は礫混暗灰色砂質土で灰褐色土に遺物を多く含んでいて土師器・磁器・陶器・須恵器・瓦・片口・土鍋など各種のものが出土している。土師器はⅡ―4類に分類されるものである。溝の北端付近は乱れているが東側からくるＳＤ610溝と交わっている。溝の東側は礫混り黒色土面で西側に比して硬くしまっている。第3次調査にてＳＤ601溝の東側14mのところに南北に走る溝（ＳＤ304）が確認されており，こ



6図　ＳＤ601溝南壁土層図

の溝間の硬くしまった面が道路敷とも考えられる。またこのＳＤ601溝は第５次調査にて検出されたＳＤ501溝と連なるもので，両溝の延長計は約50mに及ぶ。（６図）

ＳＤ602溝は東区中央部から西区北端へとほぼ直角に屈曲する溝である。東区においてはほぼ南北方向に延び，南端はＭＫ18区付近にて完結する。北半はＭＥ17区付近にて西へ直角に向きを換えそのまま西区の北端沿いに延びる。東区での溝最大幅4.1m，底面幅3.5m，深さ0.33mで比較的浅い溝である。西区の溝北側肩部は調査区外にかかるため検出されていないが，西端寄りにて立ち上がり部が見られ，現存幅3.1m，深さ0.5mをはかる。溝は更に西へ延びている。底面は南端，コーナー部，西端ともほぼ同一レベルである。溝は４層に掘り込まれており，３層の暗灰色粘質土が流入している。溝には黄白色粘土がほぼ全面にわたって埋っていて通常の状態での溝の埋まり方とは考えられず，一気に埋められたものである。一端が完結して底面がほぼ同一レベルであることから，掘としての性格をもつものであろう。この黄白色粘土は調査区の南側台地に見られるもので，この台地の土を削平して埋めたものであろう。溝内底面黄白色粘土との間からは土師器・須恵器・青磁・陶器・常滑焼・フイゴ羽口・滑石製品などが出土し，土師器はⅡ—５類に分類されるものである。

ＳＤ603溝は調査区のほぼ中央部にて検出され，南北方向に延びるが，南端はＭＪ14区で完結し，北端は畦より北では確認されていないので延長約５mほどの小溝である。幅0.9m，深さ0.3m，断面Ｕ字状をなす。溝内からは土師器などが出土し，Ⅱ—４類に分類されるものである。ＳＫ623土坑，ＳＥ609，610井戸を切っている。

ＳＤ604溝は調査区南端にて検出され，東端は完結するが，西は更に延びる。幅0.55m，深さ0.24mをはかり壁はほぼ垂直に立ち上がる。溝内上部には灰黒色土の堆積がみられ，Ⅱ—１類の土師器，青磁，白磁，須恵器，土鍋などが出土している。

ＳＤ605溝は南北方向の19列に沿って延びる小溝で，幅１m，深さ0.4mをはかり断面Ｕ字状をなす。北端から南へ５mほどのところにて完結する。ヘラ切り底土師器，勾玉が出土している。

ＳＤ606，607，608，609溝はともに下層にて検出されたもので，上層の溝はほぼ南北，または東西方向をとるものが多いが，下層のものは不定方向をとる。ＳＤ606溝はＳＤ602溝底面にて検出された溝で，主軸方向Ｎ—17°—Ｗをとりやや西へ傾きながら北流する。幅0.9m，深さ0.15mの浅い小溝である。南端はＭＬ19区付近にて消失する。溝内からの出土遺物はヘラ切り底土師器，糸切り底土師器が出土しているが，ヘラ切り底土師器が主体である。ＳＤ607溝は，ほぼ東西方向をとるが，東半の一部をＳＤ601溝により切られ，西端はＳＤ606溝と交わる。Ⅱ—１類に分類される土師器が出土している。ＳＤ608・609溝はおおむね東西方向を向くが，幅・底面・深さも一定せず遺物も少量出土したのみで確実なものはない。自然の流路かも知れない。

3. 土　　坑

今回検出した土坑は上層で約50基，下層で約10基を数えるが，遺物の出土もあまりなく性格の分かるものはほとんどない。

SK608，609，610，623，625，626，627，628，630などは円形ないし楕円形をなすもので，比較的小さいものが多く2mを越えるものはSK 610，626などわずかしかない。深さも20cmほどの浅いものがほとんどでSK626は青色粘土層まで掘り込まれている。

SK603，605，607，611，613，620などは長辺1.5m，幅1m前後の方形に近い形をなすものでいずれも浅いものばかりである。

SK619，624，629などは小形の長方形土坑で，SK629は土師器中皿が5個ほど完形のままで出土している。SK619は底面に炭層の堆積をみ，遺物も多数出土している。

SK627，630は円形をなし，SK603は底面に焼炭層の堆積がみられる。

SK617，618，633，634は不整形をなすが，SK 617は木炭と焼土を混じた埋土で，摺鉢が出土している。**SK 633**は下層にて検出されたもので長辺約5mに及ぶ長方形をなす。西半は上層のSD 602溝により切られている。黄灰色土が堆積し，多量のヘラ切り底土師器及び黒色土器などが出土している。SK 634も下層にて検出されたもので明確な遺構は伴わず，茶色荒砂が堆積している。この荒砂層からは古墳時代後半から奈良時代頃までの須恵器が多数出土しており，特に杯身・蓋とが多く約100個を数える。

以上土坑の計測，出土遺物は一覧表の通りである。

2表　土　坑　一　覧　表

遺構番号	地　区	旧番号	平面形態	規模 長径	規模 短径	規模 深さ	出　土　遺　物
SK 601	MF11	P-65	方　形	2.81		0.31	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器6・8，12類雑器　11類　片口
〃 602	〃	P-64	長方形	2.50	0.85	0.5	土師器Ⅱ-4類磁器8・7C類，雑器1・7・10類，緑釉片
〃 603	MG10	P-61	方　形	1.13	1.07	0.41	土師器Ⅱ類，須恵器，磁器7・12類，雑器，石ナベ，瓦，片口
〃 604	〃	P-60	不整形	1.27		0.18	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器3・4・7・9・12類，片口，瓦
〃 605	MG11	P-59	方　形	1.24	1.24	0.23	土師器Ⅱ類
〃 606	〃	P-63	長方形	3.0+α	2.2	0.24	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器1・5 6・7・7A・7C・9類，雑器，内黒土器7・10類，石鍋，片口，瓦
〃 607	MH11	P-66	方　形	1.36	1.25	0.08	土師器Ⅱ類，須恵器，磁器6・7・9類片口
〃 608	MH12	P-67	楕円形	1.97	(1.5)	0.14	土師器Ⅱ-4類，須恵器，6・7・7C・9類合子，雑器1・1か2・10類，青白磁，片口
〃 609	MF13	P-73	〃	(1.8)	1.45	0.2	土師器Ⅱ-3か4類
〃 610	MF14	P-72	〃	2.3	1.35	0.28	土師器Ⅱ類，磁器12類，雑器3類
〃 611	MG12	P-68	方　形	2.1	1.4+α	0.16	土師器Ⅱ-3類，磁器1・7類，雑器2・11類，片口

遺構番号	地　区	旧番号	平面形態	規　模			出　土　遺　物
				長径	短径	深さ	
SK 612	MH 13	P-70$_{-2}$				0.13	土師器，Ⅱ-1類，須恵器，雑器1類，滑石
〃 613	MH 14	P-70$_{-3}$	方　形	1.65+α	1.5	0.21	土師器Ⅱ-3か4類，須恵器，磁器3・4・8類，瓦
〃 614	〃	P-70	隅丸方形	(2.4)	2.1	0.19	土師器Ⅱ類，須恵器，磁器1・12類雑器1・3類，瓦，片口
〃 615	MH 13	P-74		消　滅			土師器Ⅱ-1類
〃 616	MG 15	P-46	長方形	(1.3)	0.85		土師器Ⅱ類，須恵器，磁器6・C・7C・9類，雑器1・7類，青白磁，合子，砥石，片口
〃 617	MH 15	P-44	不整形			0.14	土師器Ⅱ-2類，雑器9類
〃 618	MI 15	P-42	長方形			0.10	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器3・4・6・7B・8・9類，雑器1類，瓦器椀，黒色土器，瓦器質ナベ
〃 619	MI 16	P-43	〃	1.97	1.05	0.16	土師器Ⅱ-3類，須恵器，雑器1・11類，石鍋
〃 620	MI 15	P-4	方　形	(1.13)	1.09	0.2	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器7A類，雑器1類，石鍋，瓦，片口，瓦器椀
〃 621	MF 18	P-49	長方形	2.5+α	2.6	0.31	土師器Ⅱ-5類，須恵器，磁器3・7A・7C類，雑器1・7・11類，瓦・砥石，片口
〃 622	MI 18	P-51	〃	1.8	1.3	0.38	土師器Ⅱ-3類，磁器8類
〃 623	MI 14	P-9	楕円形	(1.6)	1.15	0.22	土師器Ⅱ類，磁器5・9類，雑器7・11類，片口
〃 624	MI 15	P-5	長方形	1.13	0.71	0.22	土師器Ⅱ-4類
〃 625	MJ 16	P-19	楕円形	1.03	0.97	0.19	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器3・7A・7C類，雑器1・10・11類，土鍋，片口
〃 626	MK 16	P-10	〃	2.0+α	1.6	0.58	土師器Ⅱ類
〃 627	MJ 21	P-54	円　形	1.4	1.25	0.25	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器4・6類，雑器3類，常滑，瓦，片口
〃 628	MM 16	P-15	楕円形	2.85	1.8	0.7	土師器Ⅱ-1類，須恵器，磁器4・(7)類，雑器10・11類，(常滑)，鉄鋌，瓦器椀，黒色土器
〃 629	ML 19	P-33	長方形	1.4	1.0	0.25	土師器Ⅱ-3類，磁器1類
〃 630	ML 19	P-32	円　形	1.15	1.13	0.49	土師器Ⅱ-2類，磁器9類
〃 631	ML 20	P-31	長方形	(2.8)	1.7	0.33	土師器Ⅱ-2類，須恵器，磁器7A・7B類，雑器3類，常滑，石鍋，瓦
〃 632	MM 20	P-30	楕円形	1.22	0.94	0.43	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器7A・7C類，合子，瓦
〃 633	ME・F19	P-48	長方形	(4.64)	2.2+α	0.35	土師器Ⅰ-2B類，須恵器，磁器1類，雑器3・10類，瓦，石鍋，片口，紡錘車
〃 634	ME12・13	荒砂層	落ち込み				古墳時代～奈良時代須恵器

(　) 内は復原値，単位m

4. 井　　戸

今回の調査では上層にて15基，下層にて3基の井戸が検出されている。以下各井戸についてみると

SE601（図版10の1）

桶側を据えたものであるが，桶板は抜き取られていてわずかに2枚と上下2段のタガの一部が残存するのみである。

SE602（7図，図版10の2）

径約2mの正円の中央に桶側を3段に構築した井戸で，3段にも及ぶものは初めての検出である。下段桶の長さは1m，内径0.48m，中段は長さ0.74m，内径0.52m，上段は3分の2ほど上端が欠損しているが内径0.6mをはかり，上部へ大きな桶を据え，上段と中段の接合部すき間には拳大の丸礫を充塡し，上段桶側の外側にも石をあてがって安定をよくしている。最下段の桶には4枚に5×6cmほどの方形の孔が穿たれた板材が使用されている。

SE603（8図，図版11）

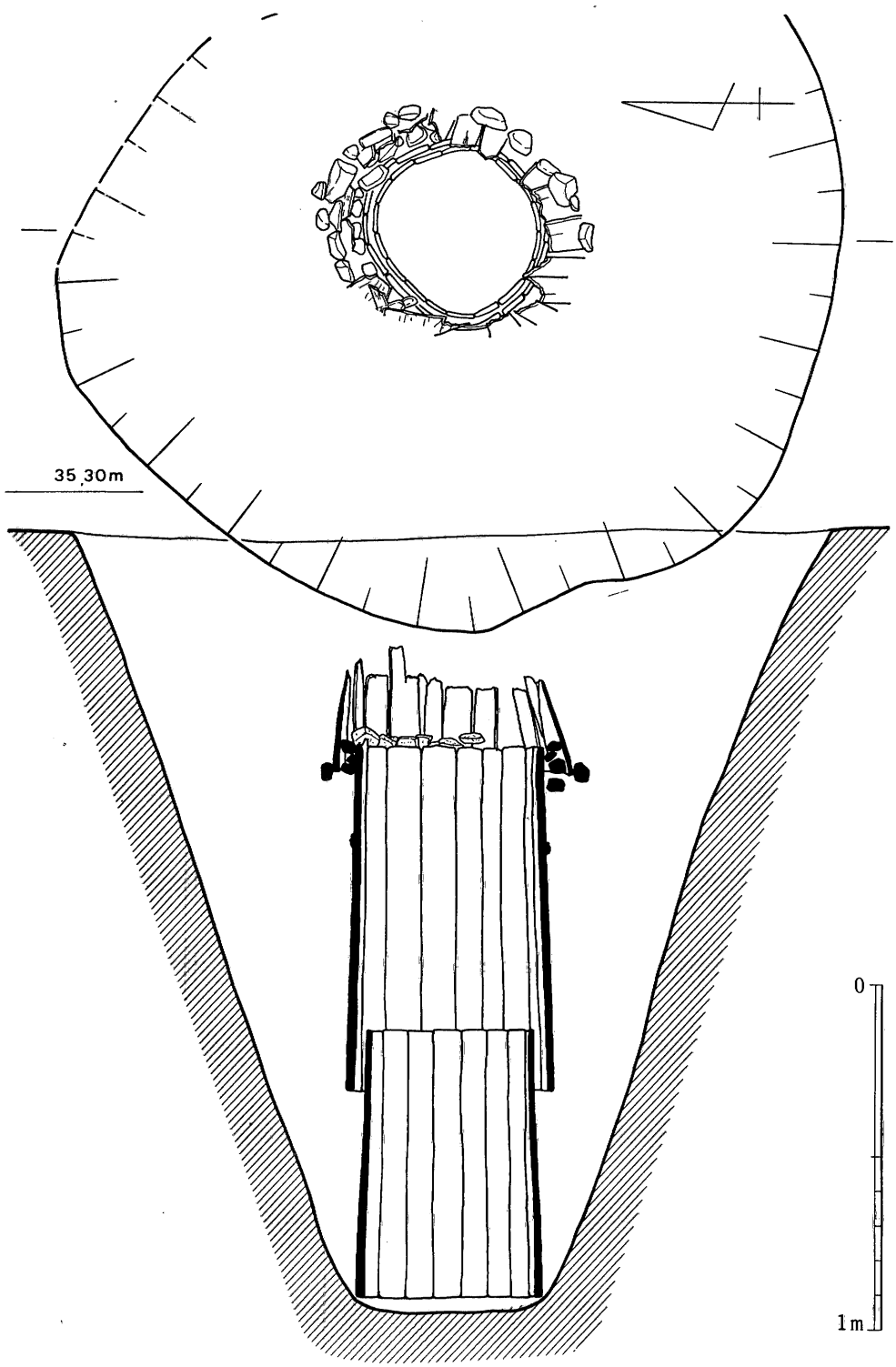
径約2mの正円のやや東寄りに桶側を上下2段に据え，下段のものは長さ0.35mの小形の桶である。構築に際しては口径の大きい方を上にし，3ヶ所タガによる緊束がみられ，桶側の接合部には礫の充塡がみられる。最上段には一辺4cmほどの角材を用いて方形の枠組をつくり上段桶側上端を囲い，角礫を敷きつめている。枠組は枘などで組み合わせたものではなく単に囲っただけのものであり，これを横桟とすれば上部構造が方形枠組の桟としては貧弱で，また縦板や支柱を立てた痕跡も見い出せなかったところから，この枠組の面が井戸の上面となり地表施設としての井桁様のものは存在しなかったものと思われる。井戸内埋土上部より，下駄が，下部よりクシが出土。

SE604（9図，図版12）

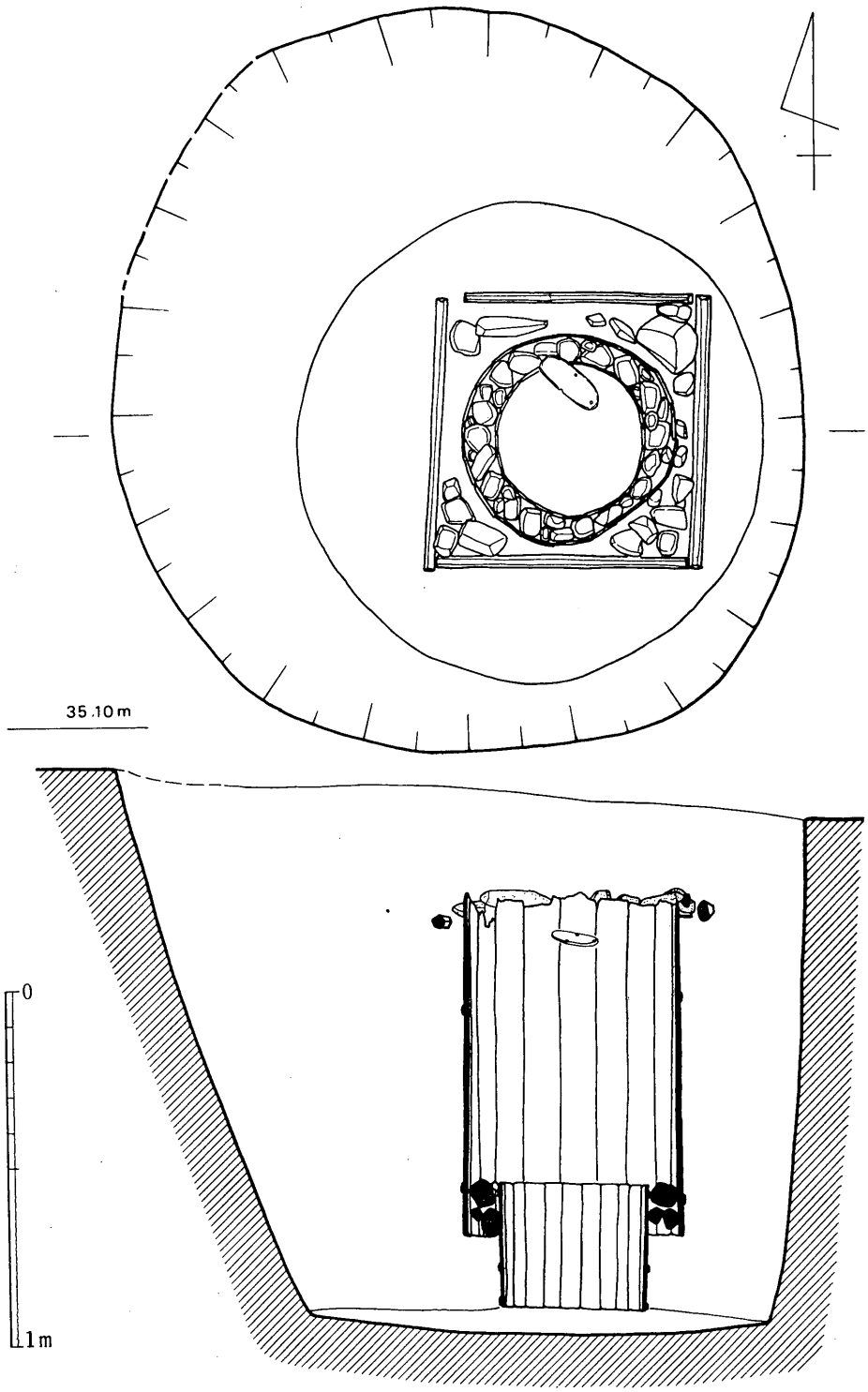
径約3mもある大きな掘り方の中央に桶側を上下2段に据えた井戸で，接合部には2cmほどの長方形の礫を差し込んで充塡し，外側からは小礫であてがって桶を固定させている。更にその下には青色粘土を巡らして目張りを施し，水もれの手立てとしている。また上桶に2枚（57図1），下桶に1枚（57図2・3），焼印の押された板材が使用されている。上桶のものは2ヶ所に同一焼印がみられる。

SE605（10図，図版13の1）

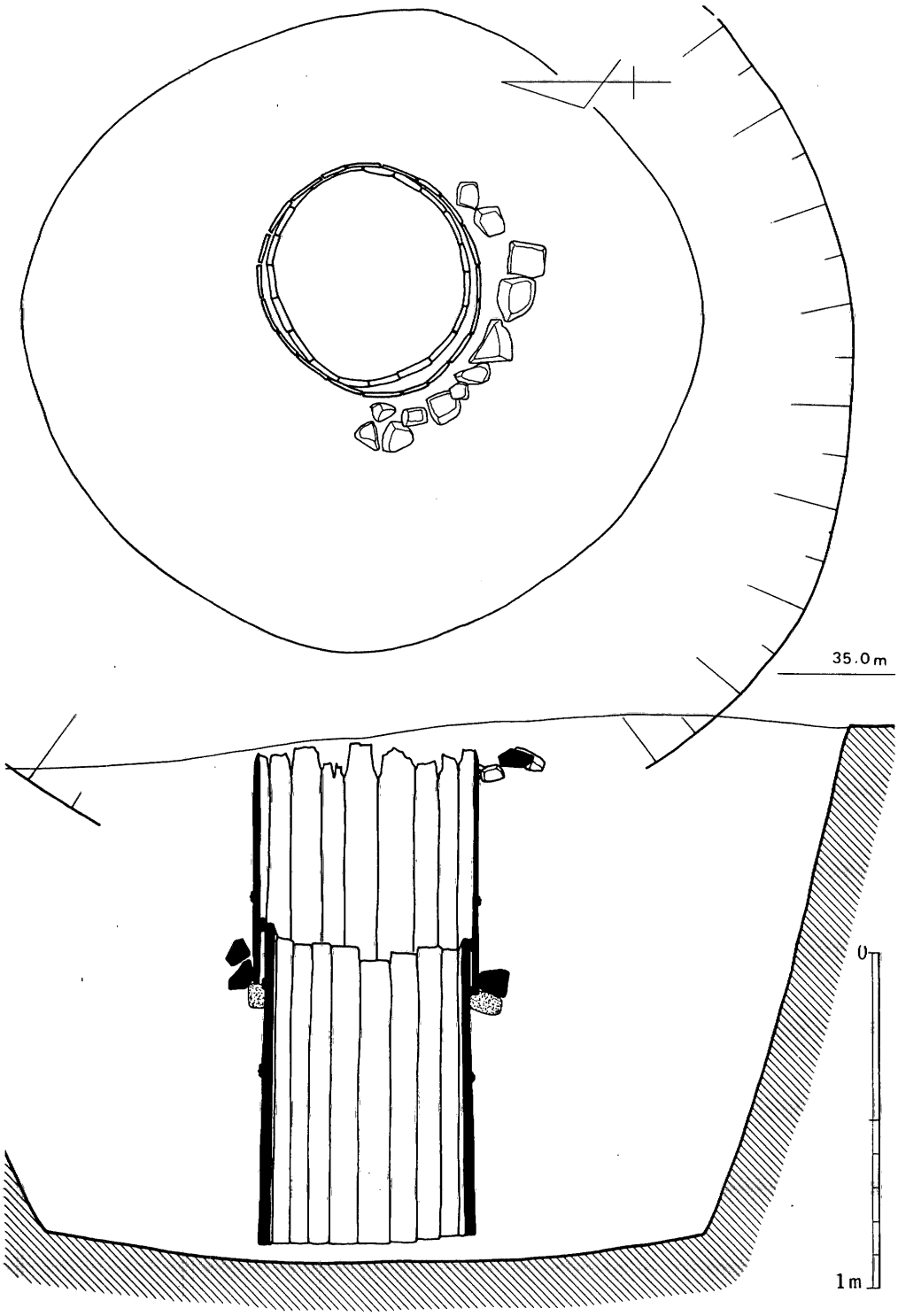
掘方は約1.7mの円形で，底面は方形に近い形状をなす。井戸側は方形枠縦板組であるが東南及び北西側の板材が抜かれていて損壊が著しい。構築にあたっては最下段に3～4cmの角材を打抜枘仕口で組み合わせて横桟とし，それに長さ1.3m，幅0.1m，厚さ1cm前後の薄板を四面に立掛けて側板としている。側板は薄板を一板ずつ並置するのではなく，両端を重ね合わせて間隙をつくらないように立掛けている。隅柱と桟との接合は特別な仕口はなされず，桟の上に隅柱の下端が単にのせられているだけである。側板には釘穴と思われる小孔のある板はわず



7図　SE 602 井戸実測図



8図　SE 603 井戸実測図



9図　ＳＥ 604 井戸実測図

かに2枚のみで釘による打ち着けは考えられず，外側からの土圧で枠組が保たれたものであろう。ということは井戸側構築は外で組み立てた井戸側をそのまま掘り方の中へ設置する「据え付け式」のものではなく，掘り方底面にまず横桟を組み，隅柱を立て順次側板を立掛けていく「組み立て式」のものだと考えられる。掘り方内埋土より「上」と記した墨書土師器が出土。

SE606

径約2.5m，深さ1.8mの素掘りの掘り方のみが検出され，底面は礫混砂層の湧水層まで達しているので井戸だと思われる。

SE607（11図，図版13の2）

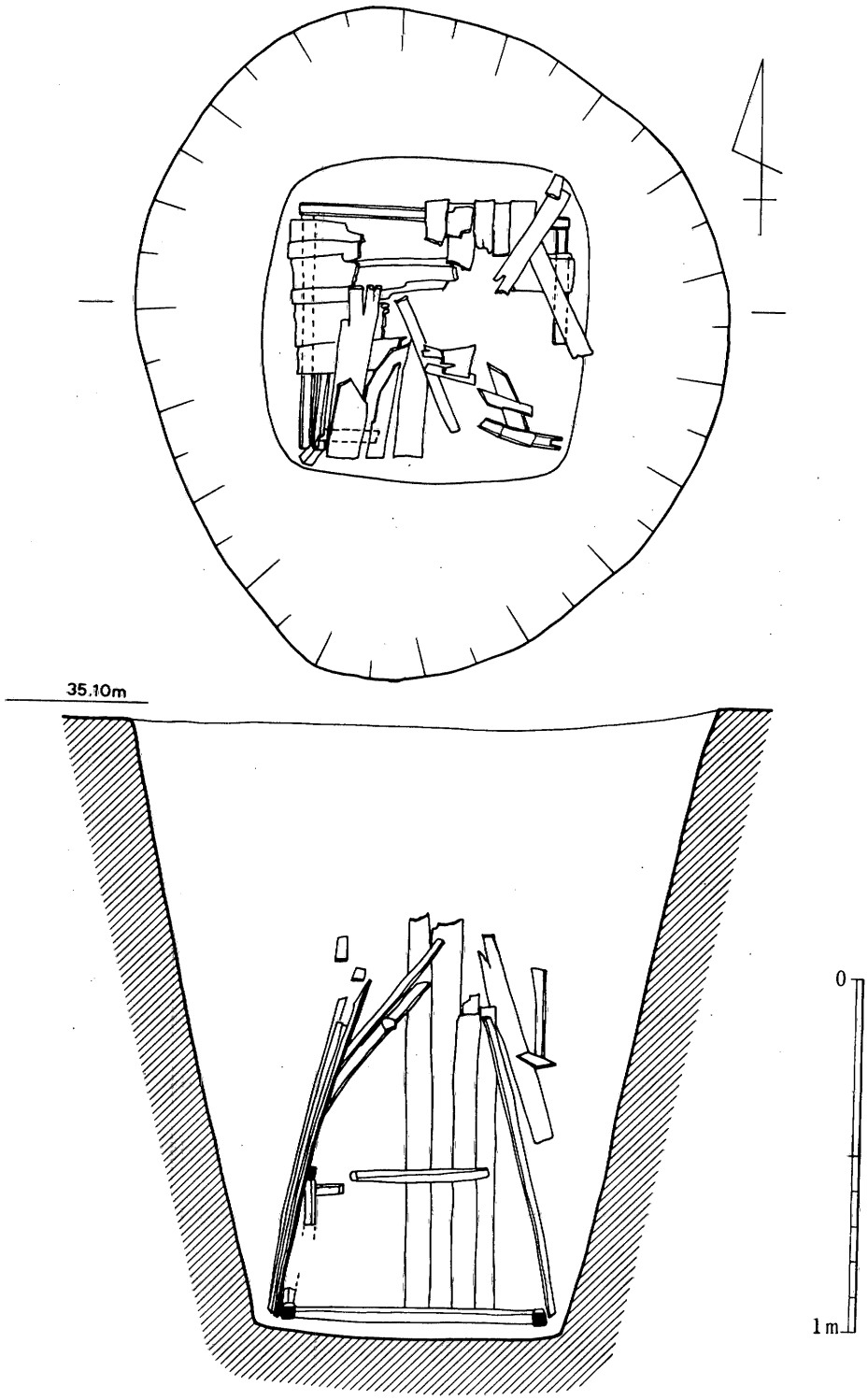
径約1.9mの掘り方東寄りに構築した2段の桶側を有する井戸である。下段の桶は上端が内径0.53m，下端が0.62mと下開きの桶で上部に2ヶ所，下部に1ヶ所タガによる緊束がある。また下段の桶には同じ焼印を2ヶ所に押した板材が一枚みられる（57図4）。

SE608（12図，図版14）

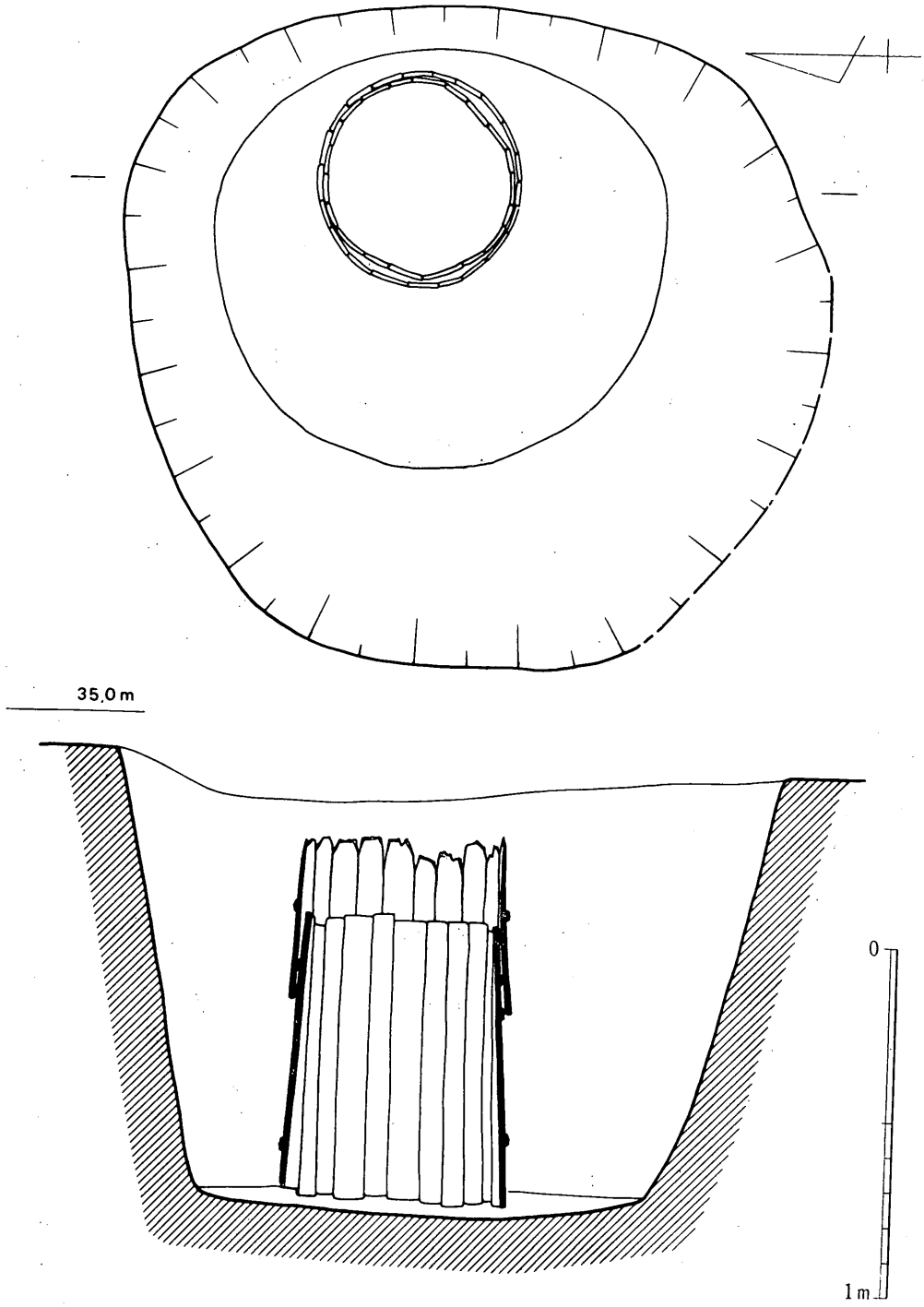
径約2.7mの掘り方中央に桶側を2段に据えた井戸で，上段の桶は抜き取られていて下端のタガと板材が一部分残存している。下段桶は分厚い板材を使用している。またそのうちの6枚には5×4cmの方形孔がみられ，別の4枚には焼印の跡がみられる（57図5・6）。一枚に図5と6のように異なった焼印をもつものもある。タガは中位より上に2箇所でなされている。

SE609（13図，図版15）

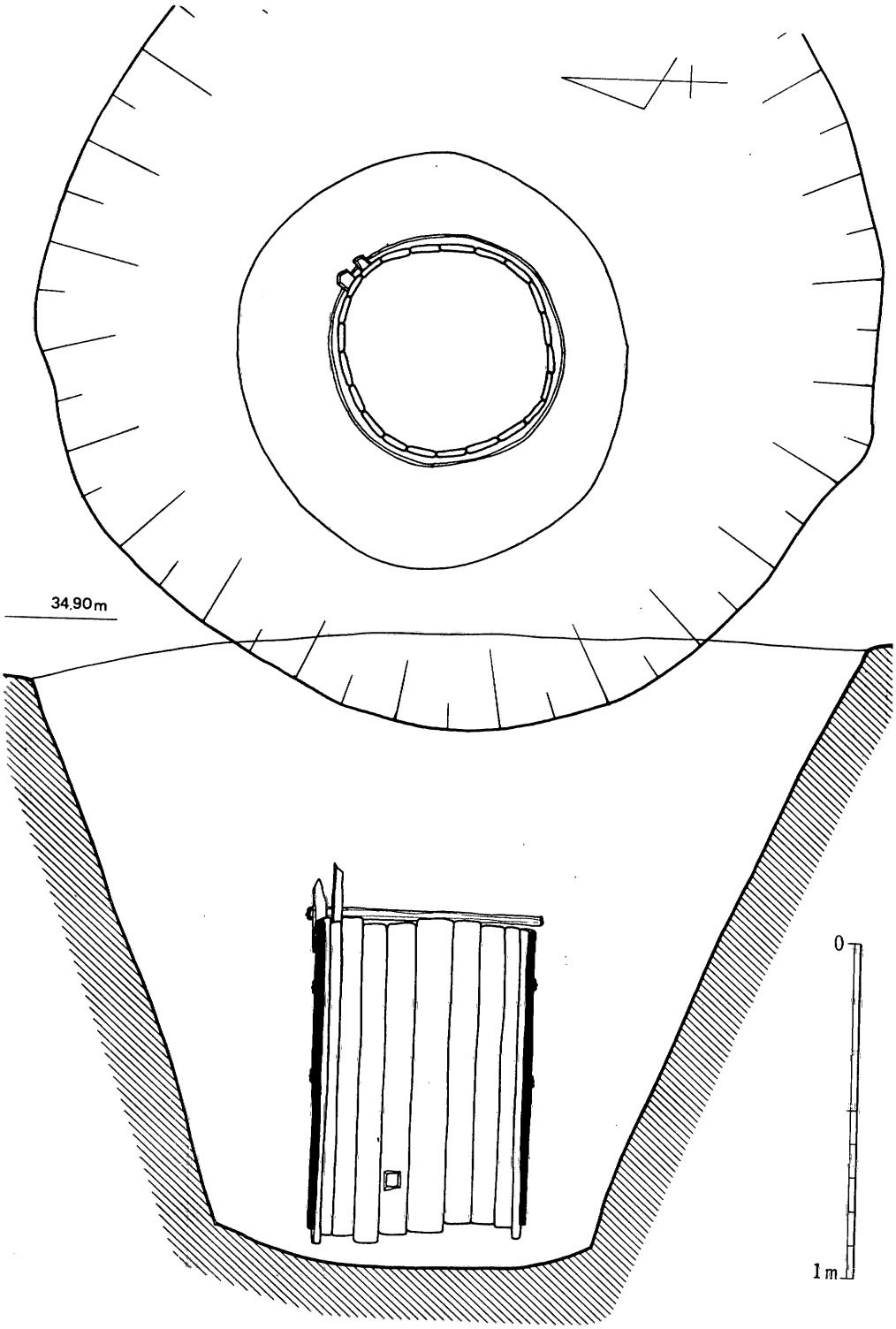
長円形のやや東寄りに据えられた桶側の井戸で，2段に構築されているが上段桶の上に更に2枚ほどの桶板がみられるので3段に築かれていたものと思われる。上段の桶には下端の厚さが3cmを超える分厚い板材を使用し上段には2ヶ所タガによる緊束がなされ，上は4本，下のものは3本の竹で編んでいる。上段と下段との接合部には拳大の礫を充塡している。下段の桶は長さ0.47mほどの短かい桶で，中位に2ヶ所タガによる緊束がみられる。上段桶には3枚，下段桶には1枚長方形孔がある板材が使用されているが，下段のものは孔のある方を上に据え，しかも上段桶側との接合部内面に位置する。湧水の導入には不便さを思わせる。上段桶には1枚（57図7），下段桶には2枚焼印のある板材が使用され，下段のものの1枚は上段のものと同一で他は57図8にみられるものである。



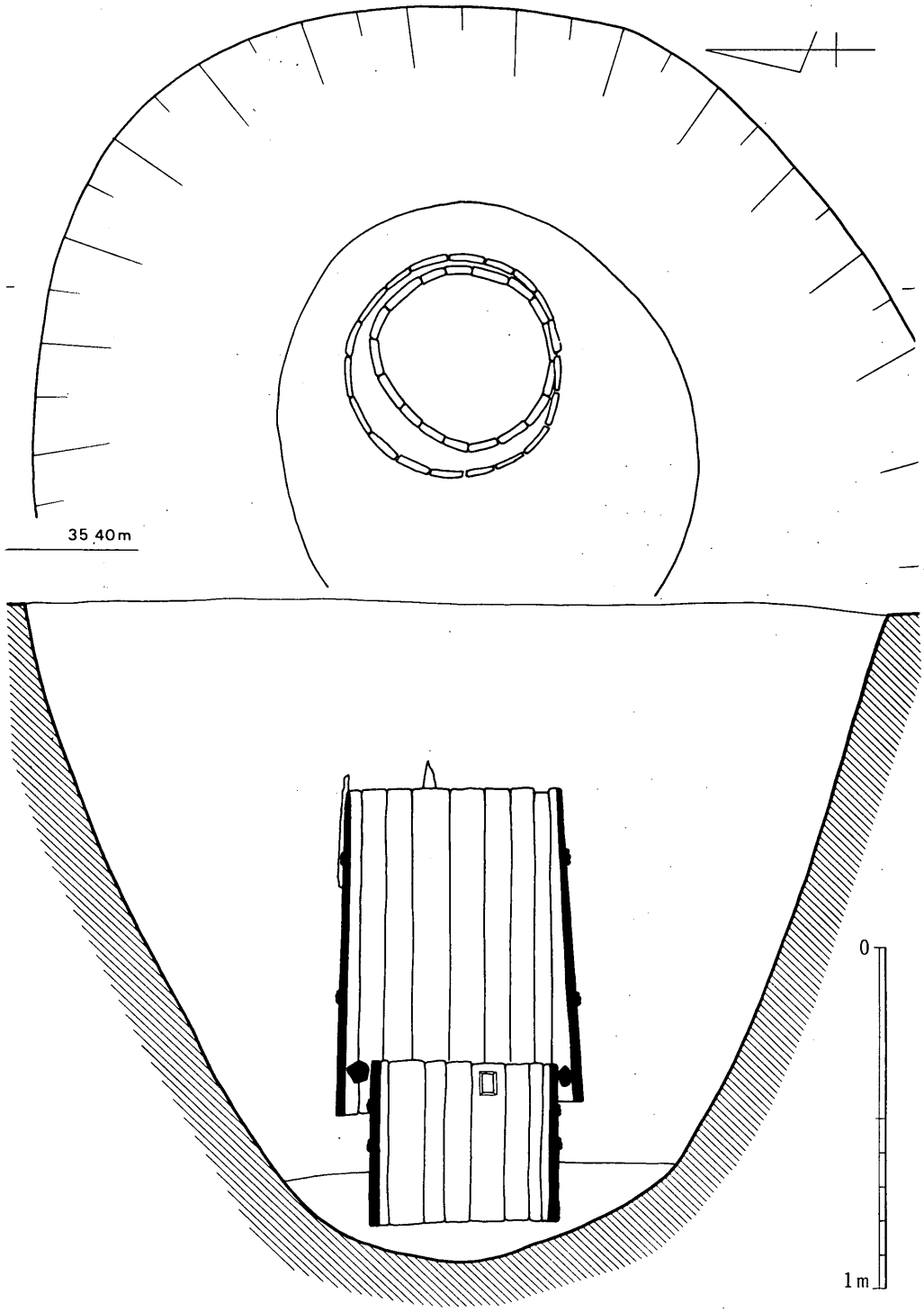
10図　ＳＥ 605 井戸実測図



11図　607 井戸実測図



12図　ＳＥ 608 井戸実測図



13図　ＳＥ 609 井戸実測図

ＳＥ610（14図，図版16の１）

方形枠縦板組の井戸で三段に横桟を渡し，最下段の横桟は３～４cmの角材の両端を凸と凹及び凹と凹の仕口で組み合わせ，その接合部に長さ約30cmの貧弱な隅柱を立てそれに特別な仕口をしない丸柱を構架させて中段の横桟としている。更に上段の横桟は中段と同様の構造をなす。側板には縦長の板を使用しており東と南面には１cmほどの板で西と北面のものはそれ以下の薄い板材が使用されている。薄板を立て掛けた側には外から小さい横桟を３本ほどあてがって補強をしている。

ＳＥ611，ＳＥ612（15・16図，図版17・18）

ともに桶側を２段に構築した井戸で，ＳＥ611は上段と下段の接合部に礫の充填がみられ，ＳＥ612は上・下段ともに下端部の厚さが４cmもある分厚い板材を使用している。井戸内より小刀が出土している。

ＳＥ613（17図，図版16の２）

方形枠縦板組井戸側下段に曲物を据えた井戸で，４本の隅柱上下に２ヶ所枘穴をあけ，それに横桟を渡しているが上の横桟は丸材で下のものは角材を使用している。側板としている縦板は北面のものは薄板が多く，東面はやや厚めのものを使用しその外側には幅の狭い薄板片が20枚ほど重ね合わせてあてがっている。また北西隅にも外から半截竹管をあてがっている。

ＳＥ614（18図，図版20の２）

方形の井戸で，南北方向の横木両端に枘を削り出し，東西方向の横木に挿入して横桟としているが北西隅のものは枘穴からはずれている。隅柱はなく，４面を１枚あるいは２枚の厚さ約2.5cmの幅広い板材で囲って側板としている。東面及び北面の板材には下部に造り出し状の切り込みが見られ，井戸側板に再利用したものと思われる。下層の井戸である。

ＳＥ615，ＳＥ616（図版19）

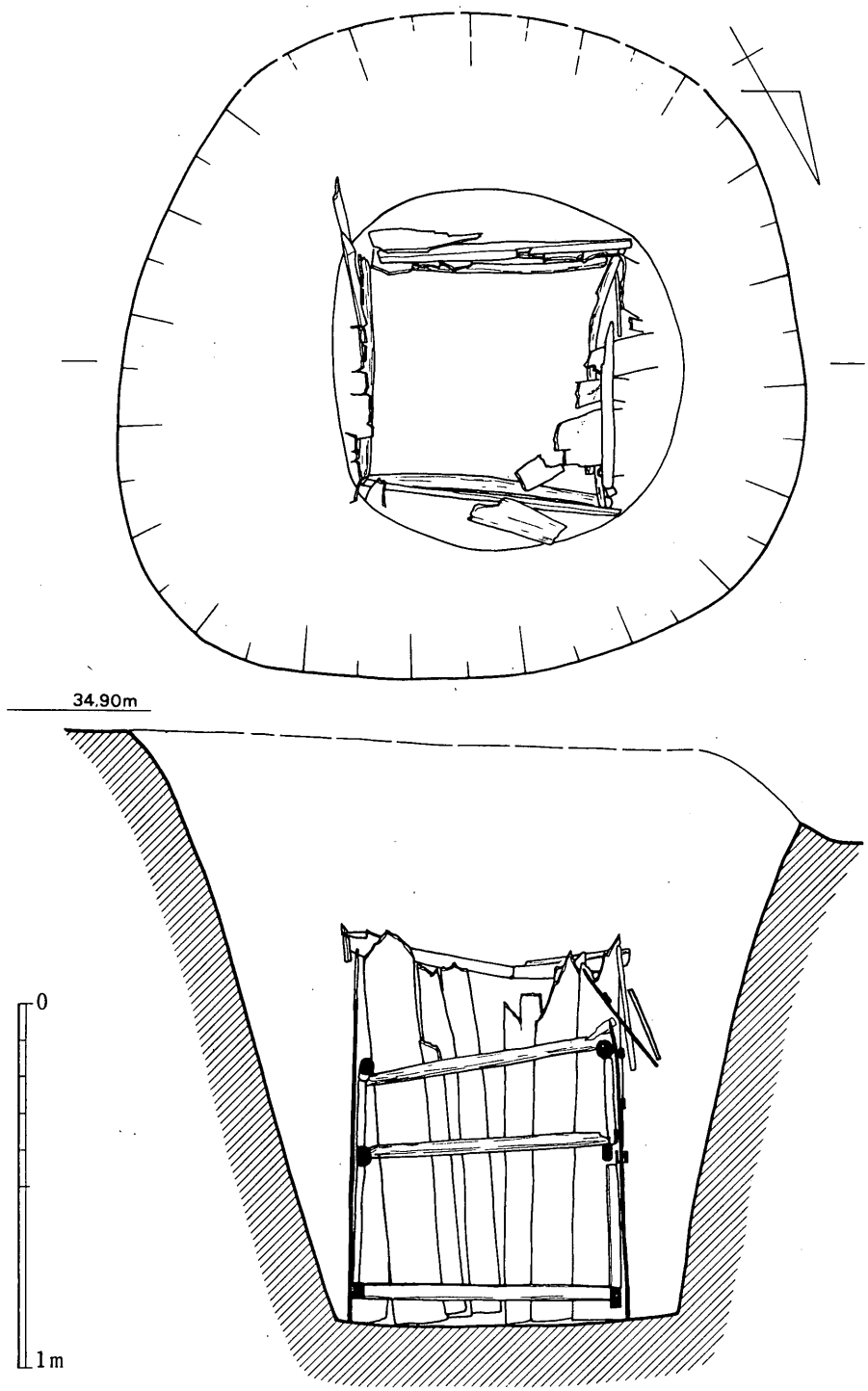
ともに掘り方のみで井戸側が抜き取られたものと思われるが，特にＳＥ616井戸は二段の掘り方を有する。

ＳＥ617（19図，図版21の１）

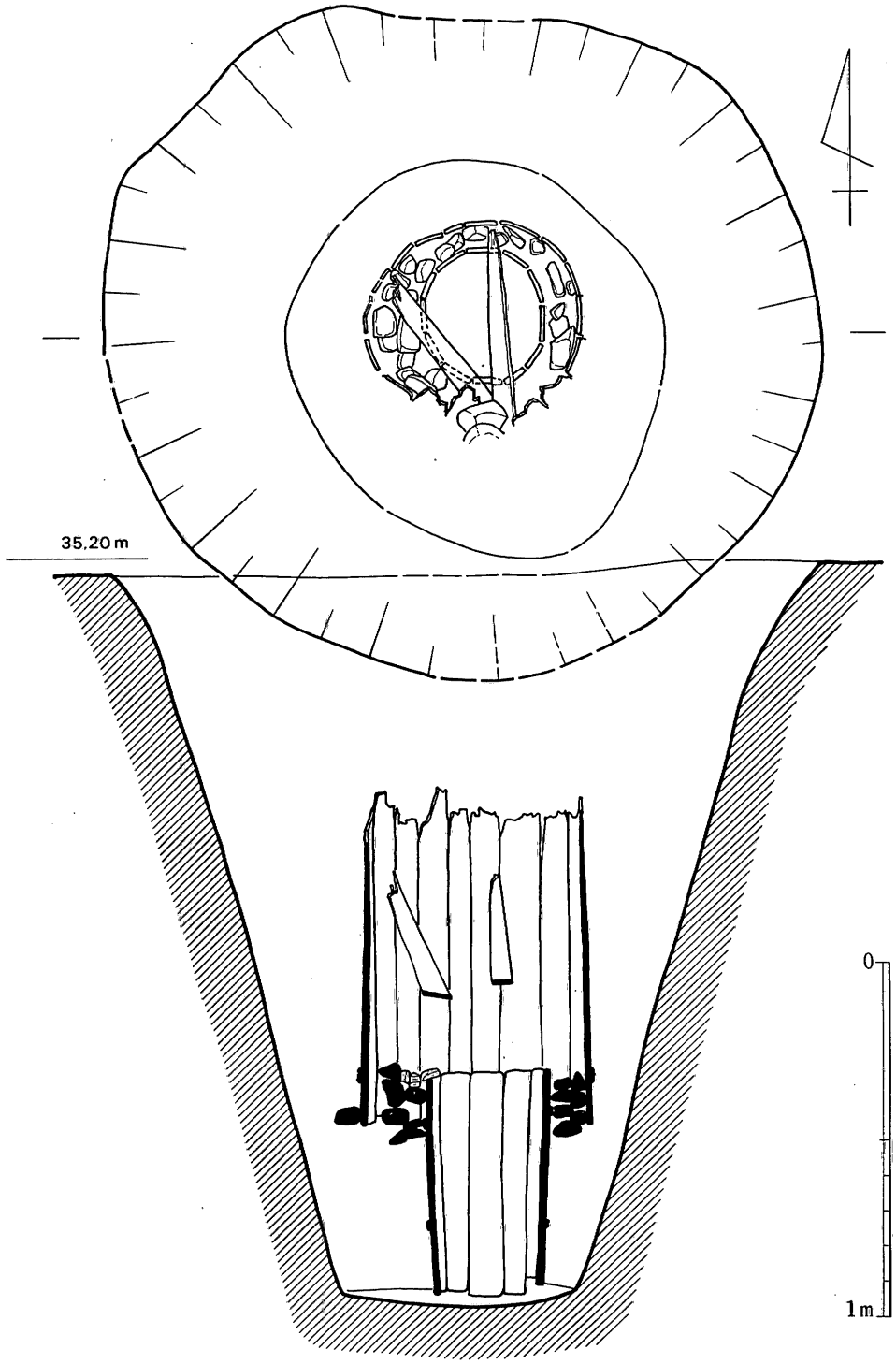
北面側板を残すのみで他の板材は抜き取られているが方形の井戸である。隅柱はなく横桟を渡しそれに側板を立て掛けるものでＳＥ614井戸と同じ構造をなすものである。横木西端は凸状に，東端は単に丸く尖がらせて仕口としているがこれにみあう隅柱はない。下層の井戸である。

ＳＥ618（図版21の２）

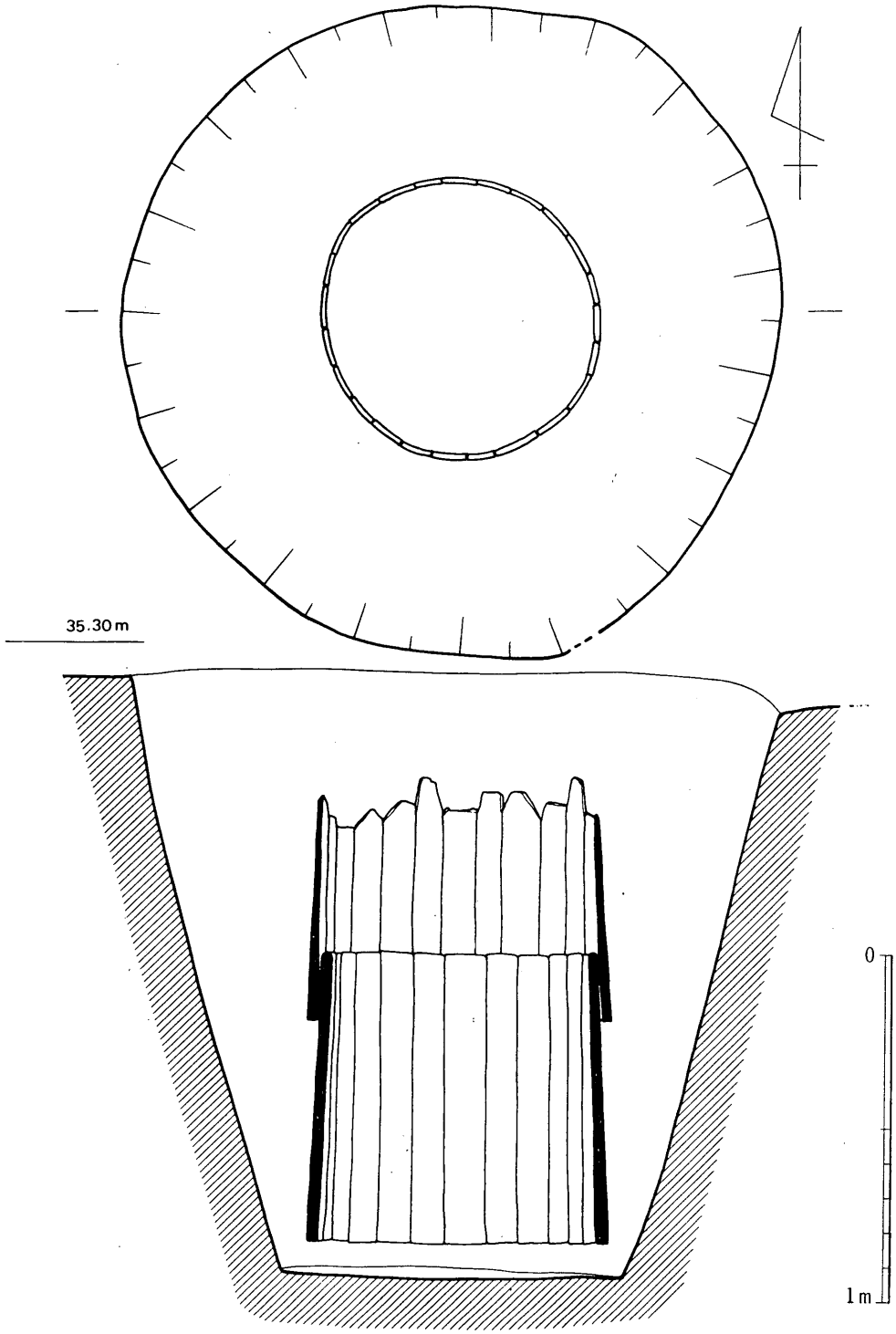
径2.8m，深さ３mを超える深い井戸で，下半部に20～30cm大の石が80個余り乱雑に積み重なった状態で埋没していた。木製の井戸側などは見られず石組みの井戸とも考えられるが積極的な証左はない。糸切り底土師器や高麗青磁椀片などが出土し，今回検出した井戸18基のうち最も新しい井戸である。



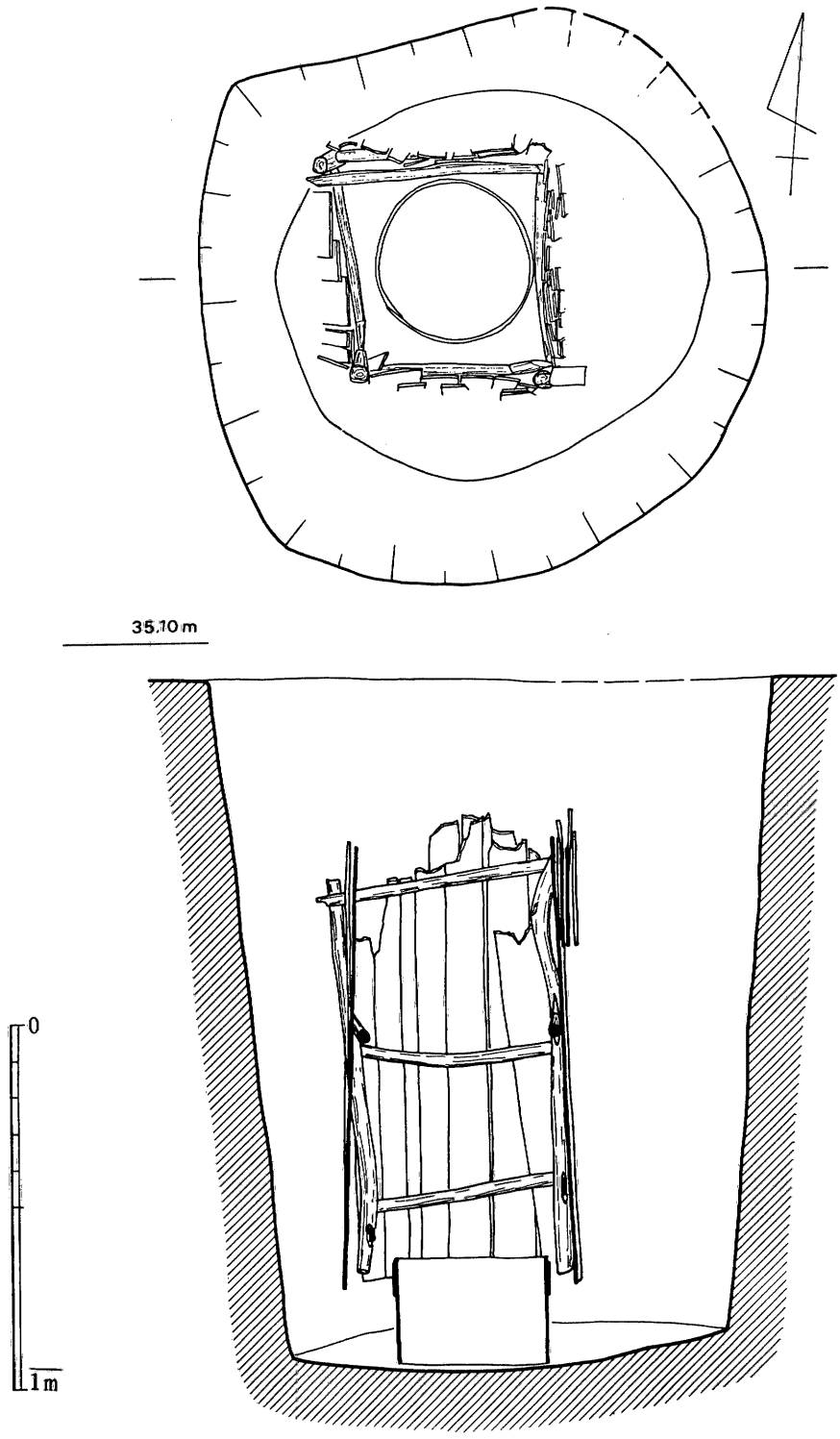
14図　ＳＥ 610 井戸実測図



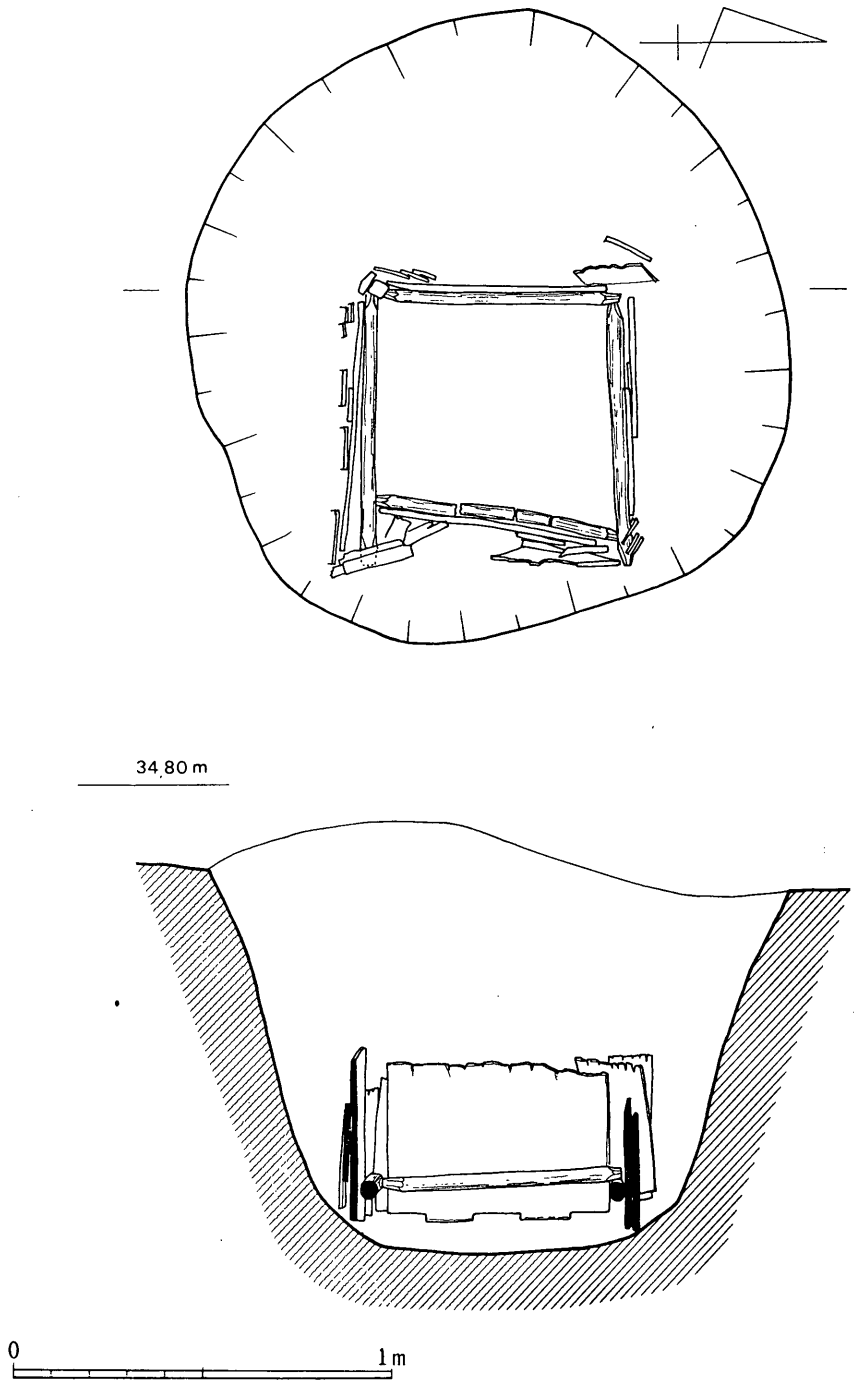
15図　ＳＥ 611 井戸実測図



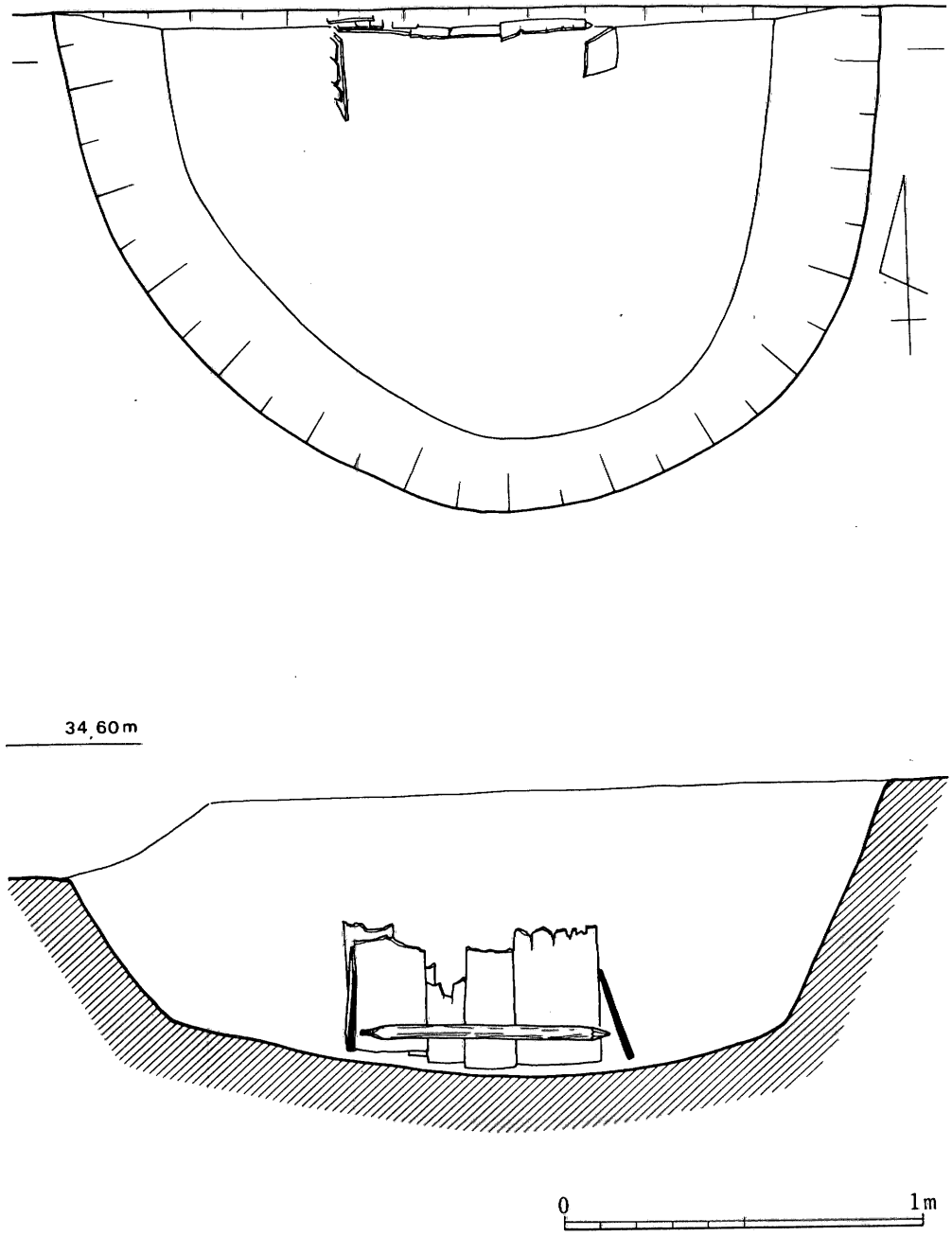
16図　ＳＥ 612 井戸実測図



17図　ＳＥ 613 井戸実測図



18図　ＳＥ 614 井戸実測図



19図　ＳＥ617井戸実測図

過去の調査例により井戸側の組み合わせによって，A・方形の井戸側だけのもの，B・方形井戸側の下に曲物を据えたもの，C・桶側の下に曲物を据えたもの，D・桶側だけのもの，E・方形井戸側に桶側を据えたもの，に大別したが今回の調査でも，同様な調査結果が得られた。ただ桶側を3段に据えたものは当遺跡では始めての検出であり，曲物を使用したものは1基だけである。その他に石組みの井戸とも考えられるものも出土しているが，大体以上の井戸側の組み合わせで当遺跡出土の井戸は理解できるものと思われる。

次に井戸の構造によるおおまかな変遷についてみると，ＳＥ614・617井戸はともにヘラ切り底土師器を出土していて，とくにＳＥ614井戸出土のものはＩ―２Ｂに属するものである。また層位的にも下層から検出されていてこれらの井戸は古い形式の井戸ということができる。すなわち平面形態は方形で一段のみであり，四隅に隅柱をもたないものが多く，横桟も一段だけで側板をつっぱって支えている形式のものである。しかも側板に使われている板材は厚手で幅広いものを使用し，長さも比較的短かいものを立掛けている。同じ方形の井戸でも糸切り底土師器を出土する形式のもの，例えばＳＥ605・610・613井戸などの方形枠縦板組井戸は四隅に隅柱を立て，それに横桟を2～3段枘などで組み合わせたもので，特に側板に使われる板材は1cm以下の薄手のもので長さは1mを超えるものを使用している。同じ方形枠縦板組井戸でもＳＥ613井戸は下段に曲物を据えており，出土遺物もⅡ―２類に分類される古いタイプの糸切り底土師器を出土していて方形枠縦板組井戸の内でも古いタイプのものであろう。桶側を使用する井戸はすべて糸切り底土師器を出土するものがほとんどで土師器Ⅱ―１類まで遡ることが確認されている。曲物については桶に先行するものと考えられるが，曲物単独の確実な時期はおさえられていない。

また，井戸側に使用した桶で桶板材内面にアルファベット状の記号を彫り込んだ焼印を押したものがＳＥ604・607・608・609井戸にて検出されている。一枚の板に2箇所押したものや，一つの桶に3種類もの焼印をもつもの（ＳＥ608）などがあって規則性はみられない。焼印が半分に切断されているものもあって桶製作後に押されたものではないことを物語るものもある。桶製作者あるいは桶屋を示す記号とも考えられるが，同一桶に3種類もの焼印がみられるものもあることからしてそうとも言い切れない。（57図，図版14の２）

なお，今次の調査では18基の井戸のうち5基の井戸から櫛が出土している。櫛の出土は過去の調査でも確認されていて他の木製品に比して出土率が高い。井戸に櫛を埋納することは民俗例でも指摘されていることで，井戸祭祀と櫛との関係は類例をまって今後に残された問題点の一つである。

井戸番号	掘方規模	掘方深度	井戸側組み合わそ			出　土　遺　物
			上	中	下	
SE 601	1.57×1.33	1.61			桶側	土師器Ⅱ類，須恵器，磁器7・7A・9類，雑器1・6・10・11類，片口，曲物
〃 602	2.34×1.9+α	2.25	桶側	桶側	桶側	土師器Ⅱ-2類，須恵器，磁器7・7B・9類，雑器11類，河原石
〃 603	2.09×1.95	1.52	方形枠	桶側	桶側	土師器Ⅱ類，須恵器，磁器3・7A類，雑器1類，片口
〃 604	3.10×3.03	1.58	桶側		桶側	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器6・7・(8)・7C類，雑器8・10類，片口，高麗青磁
〃 605	2.32×1.9+α	2.25			方形枠縦板組	土師器Ⅱ類，須恵器，磁器
〃 606	2.52×2.23	1.88				土師器Ⅱ類，須恵器，磁器
〃 607	2.0×2.0	1.23	桶側		桶側	土師器(Ⅱ-5)類，須恵器
〃 608	2.73×2.51	1.9	桶側		桶側	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器6・7・7C・9類，雑器1・7・11類，片口，青磁器，石鍋，瓦
〃 609	2.9×2.63	1.94	○	桶側	桶側	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器6・7・7C・9類，雑器1・6・11類，片口，青磁器
〃 610	1.87×(1.8)	1.6			方形枠縦板組	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器6・7・7C・8類，雑器1・7・11類，石鍋，片口
〃 611	2.03×1.89	2.06	桶側		桶側	土師器Ⅱ-3か4類，須恵器，磁器3・6・7・7B・8・12類，雑器1・3類，片口
〃 612	1.93×1.87	1.75	桶側		桶側	土師器Ⅱ-4類，須恵器，磁器6類，雑器1類，片口，常滑
〃 613	1.56×1.55	1.91	方形枠縦板		曲物	土師器Ⅱ-2類，須恵器，磁器7B類，石鍋
〃 614	1.63×1.6	1.1			方形枠縦板組	土師器Ⅰ-2B類，須恵器，瓦
〃 615	0.95×0.89	1.0				土師器Ⅰ-2Aか2B類，須恵器，磁器1類
〃 616	2.05×1.5	1.55				土師器Ⅰ類，須恵器，雑器10類
〃 617	2.28×—	0.79			方形枠縦板組	土師器Ⅰ類，須恵器
〃 618	2.85×2.80	3.06				土師器Ⅱ類，須恵器，磁器，瓦，天目瓶，片口，土鍋，常滑

3表　井　戸　一　覧　表　　(単位m)

五、遺　　物

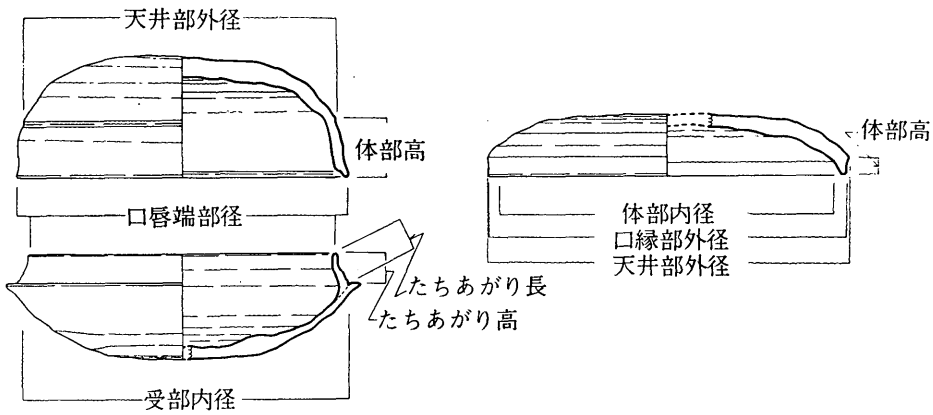
1. 須 恵 器

4層とその下層の5層から出土したもので，杯類だけで100個体以上が認められ，完形品14個が含まれる。また器種としては，他に高杯・大形甕・瓶等を含んでいるが，古墳等の明確な遺構に伴ったセット関係で把握される資料ではないので，杯類の計測値を中心に以下説明する。

杯　身　(21・22図958～982)

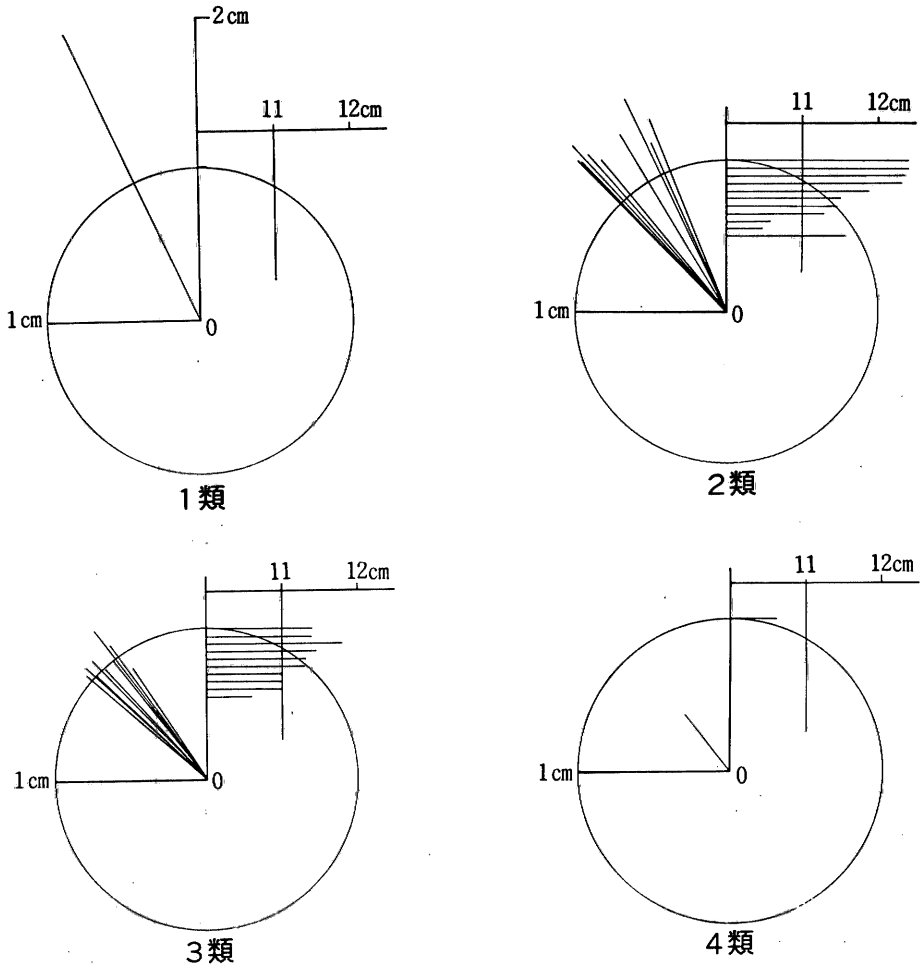
器周残¼（口縁部残存周が⅛であっても，受け部周が¼残っている例等）前後のものまでを図示したが，それ以下の破片は約50個体前後を数える。

5表は，杯身の各部位の計測実数値である。その計測点およびその呼称は，20図模式図で示したものに従いたい。杯身と杯蓋とのセット関係の場合，蓋の口唇先端部は身の受け部とたちあがり部との屈折点に位置させることが本来の姿であるから，その屈折点を以って受け部内径とし，通称の受け部径（受け部外径）と区別した。したがって蓋については，その口唇端部径で示し，通称の口縁径と区別した。



20図　計測点各部名称模式図

4表は，上記計測値の中でその器形の特徴をより明確に示すために，ⓐ口唇端部径・ⓑたちあがり高・ⓒたちあがり長の三者を摘出して図表化したものである。ⓐでは10.0cm以下を省略した横方向実線長（11.5cmは1.5cmの実線長）で示した。ⓑでは縦軸の度数を2倍（1.25cmは2.50cmの度数）で，ⓒでは計測値の2倍の斜線長（1.5cmは3.0cm）でそれぞれ0を起点として示した。なお，ⓑは2cmの円を併記することで，たちあがり長の実際では1.0cmを前後するか否かの一応の規準とした。



4表　須恵器杯身の法量

1類（21図958・4表1類）ⓐ10.0cm・ⓑ2.0cm・ⓒ2.0cmをそれぞれ前後するものと思われる。

2類（21図959～970・4表2類）ⓐ11.5cm～13.0cm・ⓑ1.0cm～1.3cm・ⓒ1.3cm～1.5cmをそれぞれ前後するもので標象される。**967**・**968**のⓐは10.6cm・9.9cmとやや小さいが，ⓑが共に1.0cmを測り円外に大きく斜線が位置するのでこの類とした。

3類（22図971～981・4表3類）ⓐ11.0cm～11.5cm・ⓑ1.0cm～1.1cm・ⓒ0.7cm～0.8cmをそれぞれ前後するもので標象される。**980**のⓐは10.6cmを測り，**974**のたちあがり部は円内に位置してそれぞれ小さいが，**980**のⓒは1.25cmで円外に位置し，**974**のⓐは11.4cmを測るのでこの類とした。

4類（22図982・4表4類）ⓐ11.0cm以下・ⓑ0.5cm・ⓒ0.5cmをそれぞれ前後するものと思われる。

土器番号	口唇部端径	受け部内径	器高	たちあがり高	たちあがり長	ヘラ記号	胎土	焼成	色調	器周残	備考
958	10.1	11.4	5.6	1.9	2.1	無	砂粒をあまり含まず	普通	灰色	¼	内底タタキ
959	12.4	14.0	5.0	1.4	1.55	無	〃	不良	〃	½ 弱	
960	12.4	13.3	4.2	1.25	1.35	有	砂粒を多く含む	良	青灰色	⅜ 強	
961	12.4	13.7	4.1	0.85	1.2	無	砂粒をあまり含まず	普通	〃	½ 強	
962	12.3	13.3	4.7	1.15	1.35	〃	〃	不良	灰色	⅜ 強	
963	11.9	13.2	3.9	0.9	1.2	〃	砂粒を多く含む	普通	青灰色	½	内底ヨコナデのまま
964	11.5	12.9	4.4	1.05	1.4	有	砂粒をあまり含まず	不良	灰茶色	〃	
965	11.5	12.6	4.4	1.0	1.4	無	砂粒を多く含む	普通	灰色	⅜	内底タタキ
966	11.3	13.0	3.7	1.1	1.5	〃	〃	良	青灰色	⅜ 強	〃
967	10.6	12.2	4.0	1.0	1.3	〃	砂粒をあまり含まず	不良	明青灰色	¼ 弱	〃
968	9.9	11.6	3.3	1.0	1.4	〃	〃	普通	灰色	略完形	
969	10.3	11.8	3.5	0.9	1.15	〃	〃	良	青灰色	⅜ 強	
970	11.6	13.1	3.3	0.65	1.1	〃	砂粒を多く含む	〃	〃	½ 強	焼成時の杯蓋口縁部付着
971	11.4	12.4	4.2	0.9	1.1	無	〃	普通	灰色	¼	
972	11.4	12.9	4.5	0.75	1.1	有	砂粒をあまり含まず	〃	〃	完形	
973	11.8	13.1	4.1	0.7	1.05	無	〃	不良	〃	¼	
974	11.4	12.1	4.0	0.75	0.9	有	〃	良	青灰色	⅜	
975	11.3	12.8	3.6	0.8	1.1	〃	〃	普通	明青灰色	½ 弱	
976	11.3	12.8	4.0	0.7	1.0	〃	〃	良	青灰色	完形	
977	11.0	12.3	4.2	0.8	1.1	無	〃	不良	灰褐色	〃	内底ヨコナデのまま
978	11.0	12.3	4.2	0.8	1.1	有	〃	良	青灰色	〃	窯壁の一部付着
979	11.0	12.5	4.2	0.75	1.1	無	〃	不良	明褐色	〃	内底ヨコナデのまま
980	10.6	12.2	3.8	1.0	1.25	有	砂粒を多く含む	良	青灰色	〃	
981	10.6	11.8	3.7	0.8	1.1	無	砂粒をあまり含まず	〃	〃	⅜	
982	11.4	12.4	3.2	0.4	0.5	〃	〃	〃	〃	¼ 強	

（単位cm）

5表　須恵器杯身一覧表

杯　蓋　(23・24図983～1003)

1類（23図983～986）いずれもⓐは，13.3cm以上を測る。**983**のⓐは15.8cmであるが，器高は4.8cmを測るのでこの類とした。

2類（23図987～992）いずれもⓐは12.55cm以上を測る。

3類（24図993～1003）完形品のⓐは，**1001～1003**の順に12.25cm・12.1cm・11.3cmを測り，11.0cmを前後するもので標象される。完形品以外のⓐは焼成時のヒズミが著しく，器周残からの復原から得たⓐには差位が生じやすい。

土器番号	口唇部端径	天井部外径	器高	体部高	ヘラ記号	胎土	焼成	色調	器周残	備考
983	15.8	14.8	4.8	2.3	無	砂粒をほとんど含まず	良	青灰色	¼	
984	13.6	12.6	4.8	2.5	〃	〃	〃	〃	〃	
985	13.3	12.6	4.8	2.3	〃	〃	〃	〃	完形	天井内面ヨコナデのみ
986	13.3	12.5	4.1	2.8	〃	〃	〃	〃	¼	
987	13.2		4.6		有	砂粒をあまり含まず	普通	〃	¾	
988	12.8		4.4		〃	〃	不良	灰白色	完形	
989	12.8		4.0		〃	〃	〃	灰褐色	略完形	天井部ヨコナデのまま
990	12.55		4.0		〃	〃	普通	青灰色	½	
991	12.55		3.7		〃	砂粒を多く含む	〃	〃	½弱	天井部ヨコナデのまま
992	12.55		3.9		〃	砂粒をあまり含まず	良	暗青灰色	〃	〃
993	13.5		4.2		無	〃	不良	灰褐色	完形	〃
994	13.6		3.8		有	〃	普通	青灰色	½弱	〃
995	13.2		3.6		〃	〃	良	暗青灰色	〃	
996	12.6		3.6		無	〃	普通	青灰色	〃	
997	12.5		4.3		有	〃	〃	〃	½	
998	12.45		3.1		〃	〃	良	暗青灰色	¾	
999	12.4		4.1		〃	砂粒を多く含む	〃	青灰色	⅜	
1000	12.3		4.0		〃	砂粒をあまり含まず	普通	〃	½弱	天井部ヨコナデのまま
1001	12.25		4.2		〃	砂粒を多く含む	不良	灰褐色	完形	〃
1002	12.1		4.2		〃	砂粒をあまり含まず	普通	灰色	〃	
1003	11.3		3.4		〃	〃	良	暗青灰色	〃	天井部ヨコナデのまま

（単位cm）

6表　須恵器杯蓋一覧表

その他の蓋　(25図1004～1013)

1類（1004・1005）**1004**の ⓐは12.9cmを測る。ⓐ13.0cmを前後するものと思われる。器高は5.8cmを測るが宝珠状鈕高1.2cmを含んでおり，その差4.6cmは杯蓋の器高4.8cm **983**に類似する。

2類1006の ⓐは12.3cmを測る。ⓐ12.5cmを前後するものと思われる。

3類（1007・1008）ⓐ12.0cmを前後するものと思われる。

土器番号	口唇端部径	天井部外径	器高	体部高	胎土	焼成	色調	器周残	備考
1004	12.9	11.6	4.6+1.2	2.5	砂粒をあまり含まず	良	青灰色	7/8	天井部カキメ
1005	?	?	+1.1	?	〃	〃	〃	破片	
1006	12.3		4.1+0.7		〃	不良	灰白色	1/4	天井部カキメ
1007	12.0		3.6+0.7		〃	良	暗青灰色	完形	〃
1008	11.4		3.4+0.7		〃	〃	青灰色	略完形	

7表　須恵器杯蓋一覧表　（単位cm）

5類（1009）天井部外径と口縁部外径が等しく，**1009**の体部内径15.1cmには，口縁部外径15.1cmの身とのセット関係が本来の姿である。体部内径15.0cmを前後するものと思われる。

6類（1010・1011）天井部外径よりも口縁部外径が小さく，体部内径13.0cmを前後するものと思われる。

7類（1012・1013）共に破片で，天井部の宝珠状鈕の有無を確認することができないが，6類に含まれる可能性が強い。

土器番号	体部内径	天井部外径	口縁部外径	器高	体部高	胎土	焼成	色調	器周残	備考
1009	15.1	16.0	16.0	1.2+0.5	0.4	砂粒をあまり含まず	普通	青灰色	1/4	
1010	12.8	12.95	13.6	1.1+0.4	0.25	〃	〃	〃	1/2	
1011	?	?	?	+0.5	?	〃	不良	灰白色	破片	
1012	15.0	16.35	16.0	?	0.6	砂粒を多く含む	良	暗青灰色	1/8	
1013	13.4	14.5	14.4	2.5+?	0.7	〃	不良	灰白色	1/3	

8表　須恵器蓋一覧表　（単位cm）

高杯　(25図1014～1019・9表)

3類（1014～1017）杯身の3類に共通点が多い。

8類（1018・1019）脚部高4.5cmを前後するもので標象される。

土器番号	口唇端部径	受け部内径	器高	たちあがり高	たちあがり長	胎土	焼成	色調	器周残	備考
1014	11.8	13.2	4.0+?	6.5	9.5	砂粒をあまり含まず	普通	青灰色	3/8	
1015	10.6	11.9	3.8+?	8.0	1.1	〃	良	青灰色	3/8	体部外面カキメ
1016	10.8	11.9	3.7+?	7.5	1.0	〃	不良	明青灰色	1/4 弱	
1017	?	?	?+?	?	?	砂粒を多く含む	良	暗青灰色	1/3	
1018	?	?	?+4.4			砂粒をあまり含まず	良	〃	1/8	
1019	?	?	?+4.0			〃	不良	明灰褐色	3/4	

9表 須恵器高杯一覧表 (単位cm)

その他に，26図に示した高台付杯（1020～1028），高台付盤1029，短頸壺1030，長頸壺1031・1032，盌1033，甕1034および瑳2個体が出土した。

ところで以上述べてきたものは，計測値を中心に1類から8類までを説明してきたが，整形上の特徴を補足して，一応の時期決定を行ないたい。

1類 杯身の口唇部内面に明瞭な段を有し，たちあがり高とその長が他類に比べて非常に大きく，丁寧なヨコナデを施している。図示した**958**の口唇端部径はこの類では若干小さい例に属するものであろう。杯蓋および宝珠状鈕付蓋も同様の段を有し，それは体部と天井部との外面屈折部にも認められる。後者の中でカキメを施した**1004**は高杯の蓋であろう。蓋の口唇端部径13.0cmを前後するセットの身が考えられる。Ⅲ式に属するもので，6世紀後半でも古い所産である。

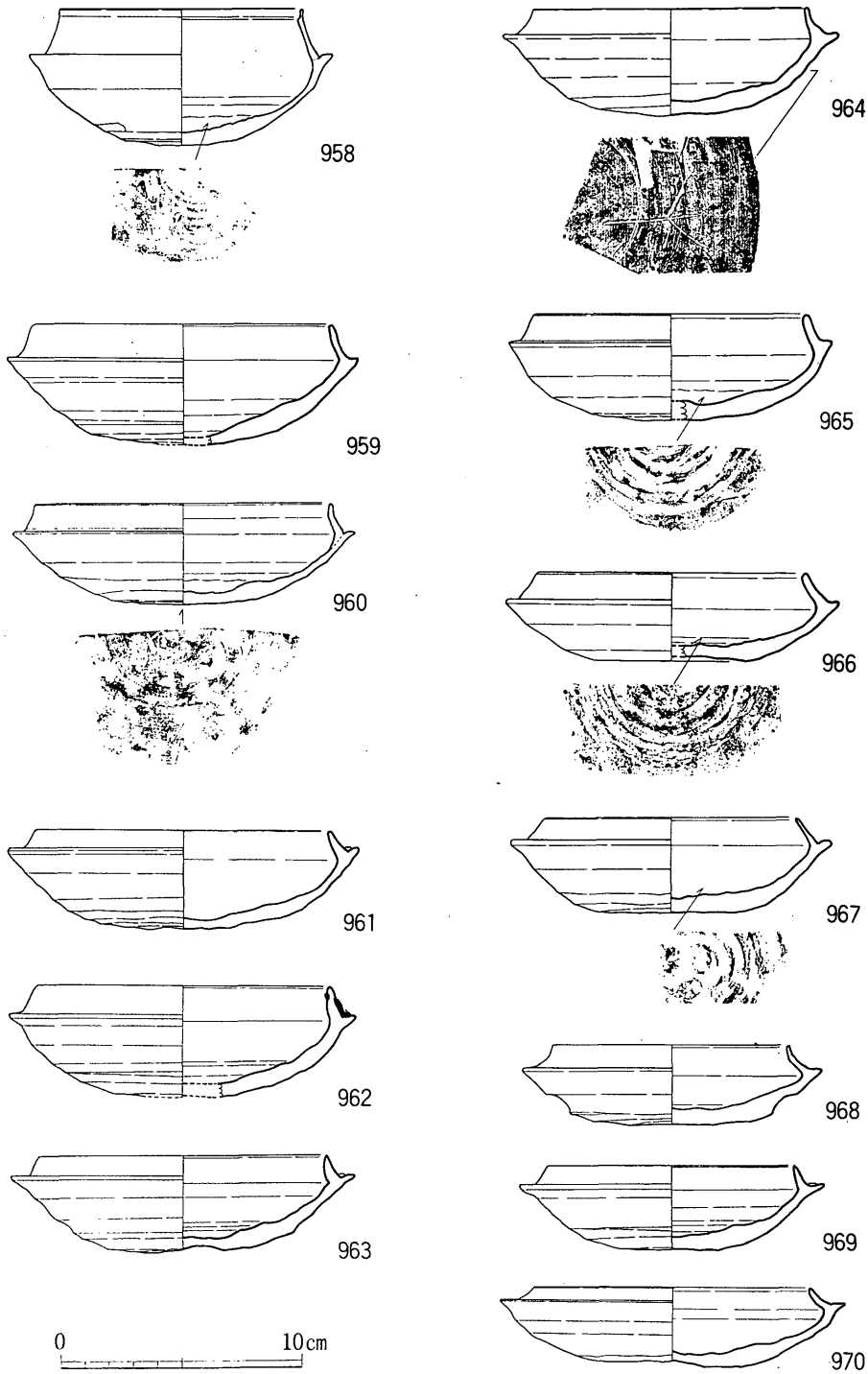
2類 杯身はタタキ成形をなすものが認められ，ヘラ記号のあるものは少ない。杯蓋と共にその口唇部にシャープさがなくなり，蓋の体部と天井部との外面屈折部は丸味をなすが，区別は可能で3類に比べると高い位置にある。ヘラ記号は＝状を記すものが多い。蓋の口唇端部径12.5cmを前後するセットの身が考えられる。Ⅲ式に属するもので，6世紀後半の所産である。

3類 杯身は口唇部やたちあがり部と受け部の屈折にシャープさがなくなり，内底面のタタキ成形が認められない。またヨコナデやヘラ削りの雑なものが認められる。蓋は，口縁部近くで**997**のように器壁が薄くなってその端部で厚く丸味をもつ例が多くなる。ヘラ記号は身・蓋共に多く施され，×印をなす例が大半である。蓋の口唇端部径12.0cmを前後するセットの身が考えられる。Ⅲ式に属するもので，6世紀末の所在である。**1033**の盌もこの期と思われる。

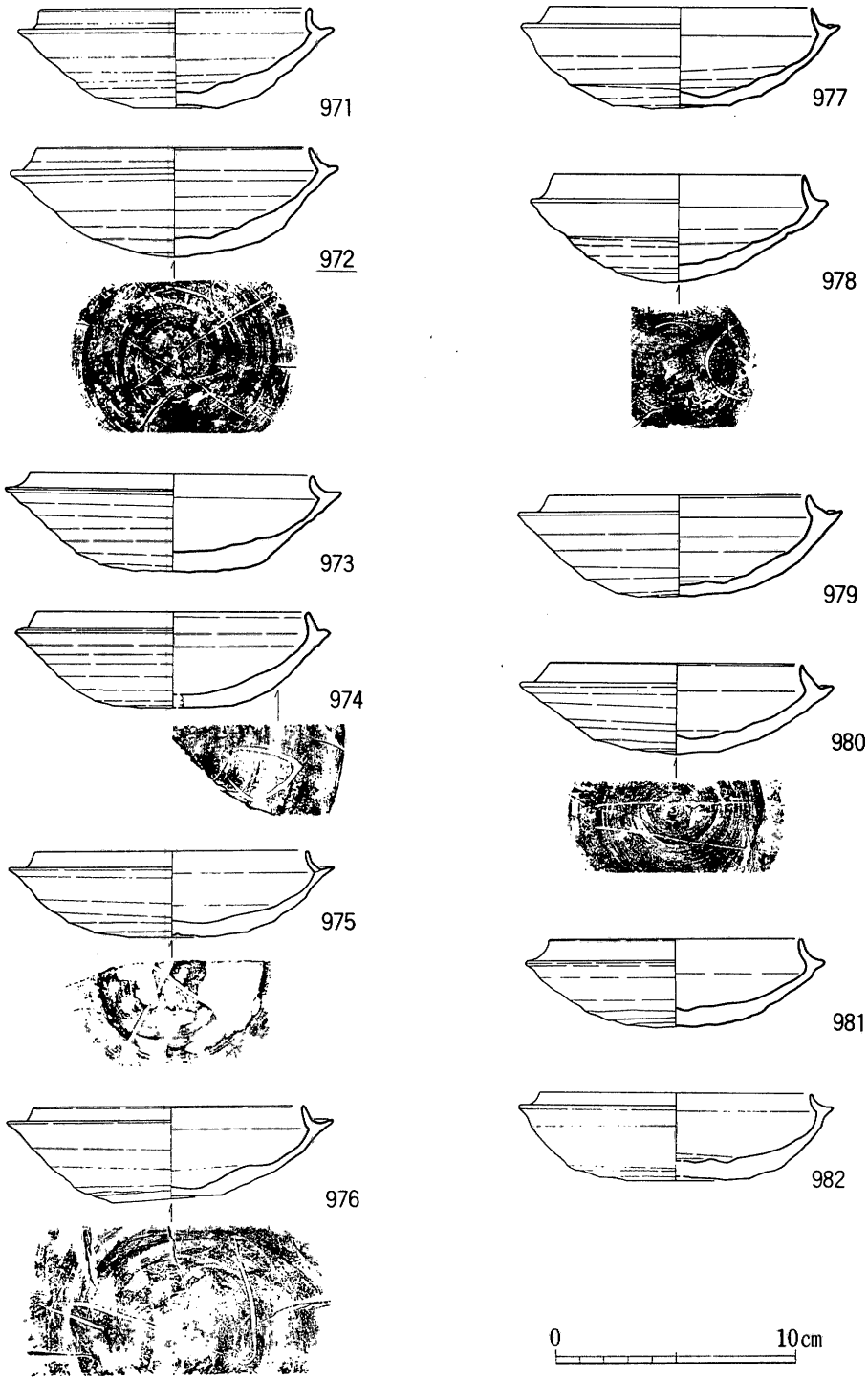
4類 杯身は，たちあがり長と受け部長がほぼ等しく，その屈折は丸味をなしてヨコナデ時の指先腹部のカーブそのままでシャープさがないが，口唇端部は器壁が薄くシャープさが認められる。蓋の口唇端部径11.0cmを前後するセットの身が考えられる。Ⅳ式に属するもので，7世紀初頭の所産である。

6類・7類は，体部と天井部との屈折その他にシャープさが認められ，高台付杯の**1022**と共に8世紀前半の所産と考えられる。

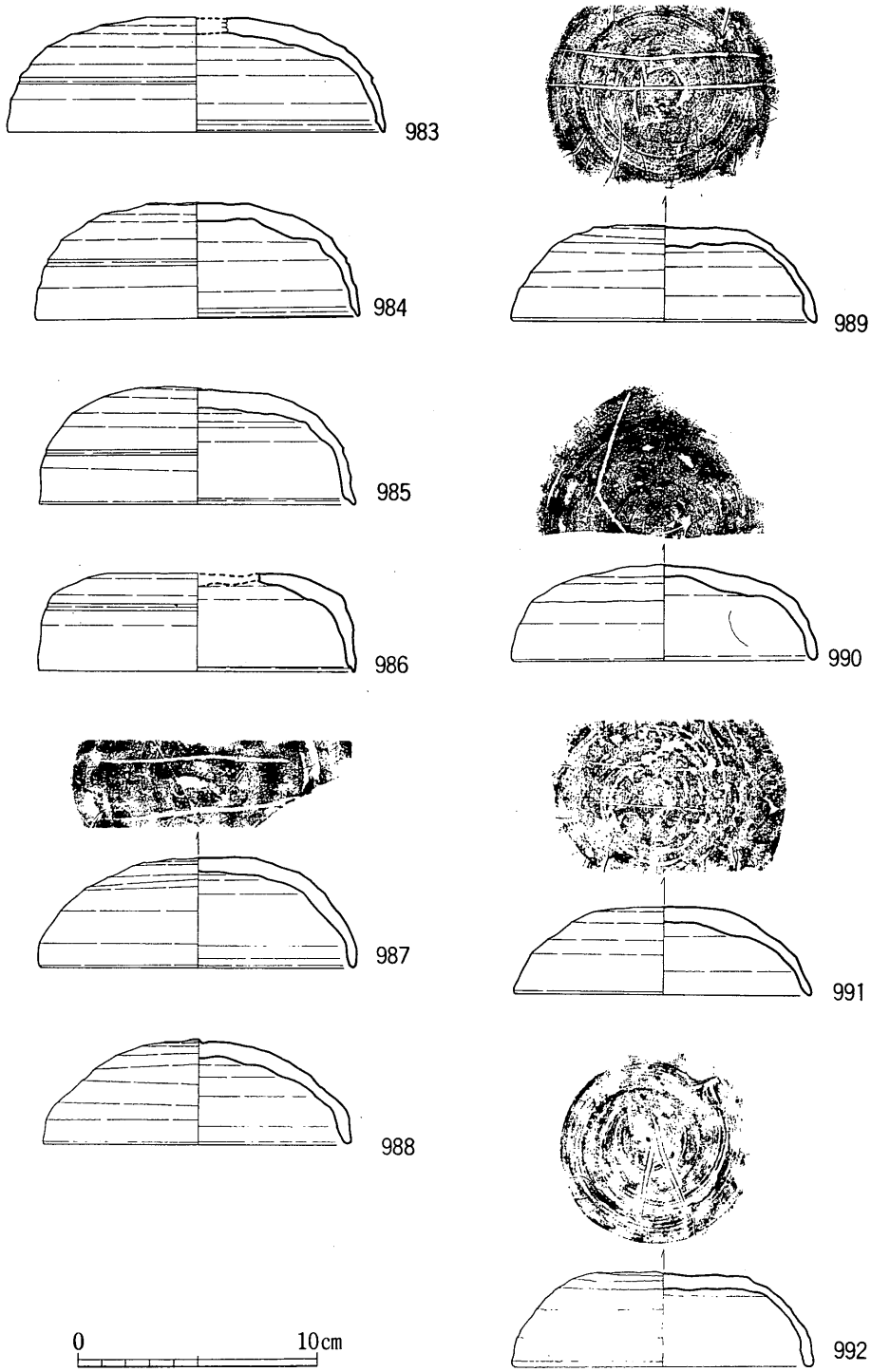
5類は，高台付盤の**1029**と共に8世紀後半の所産と考えられる。



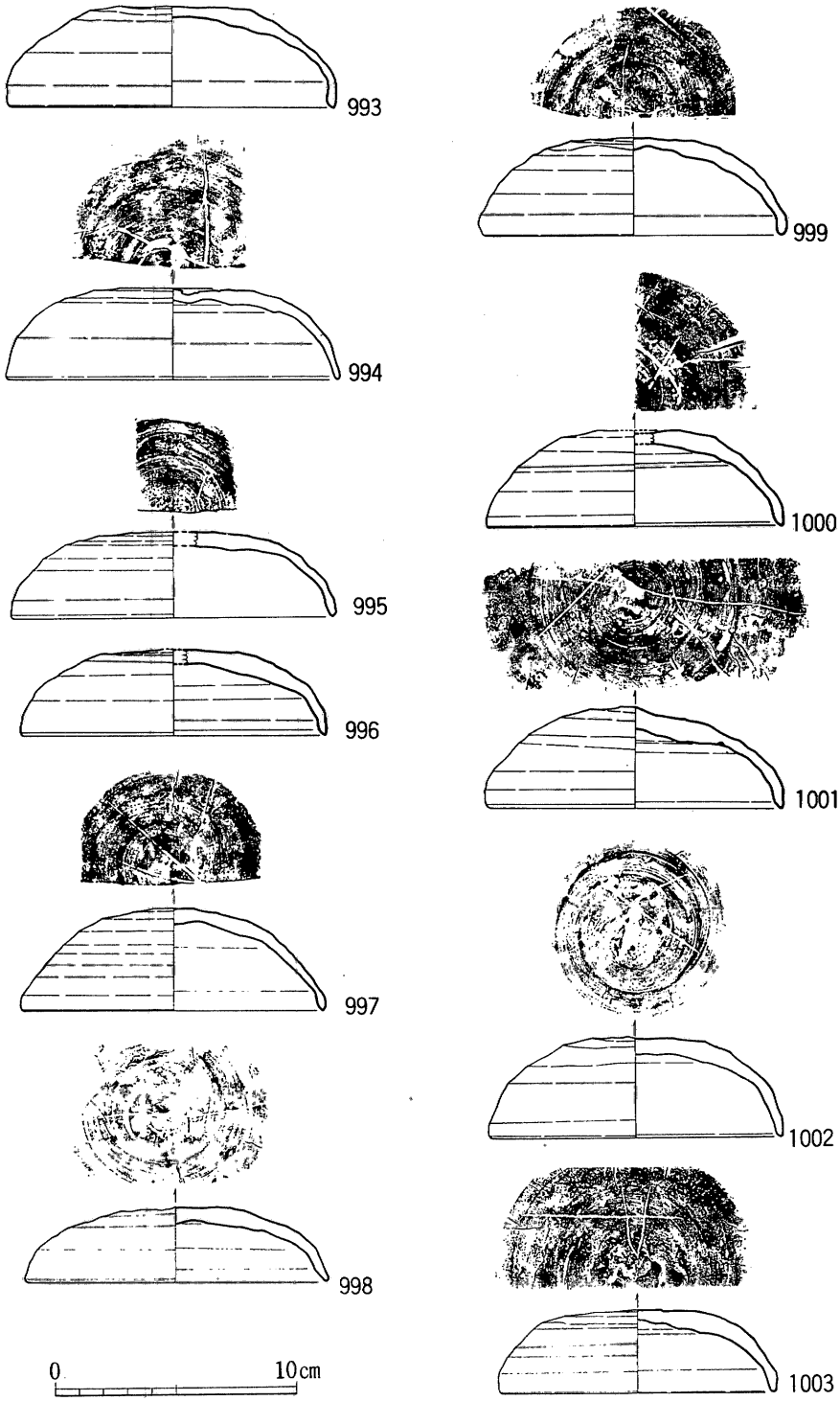
21図　須恵器杯身実測図（1・2類）



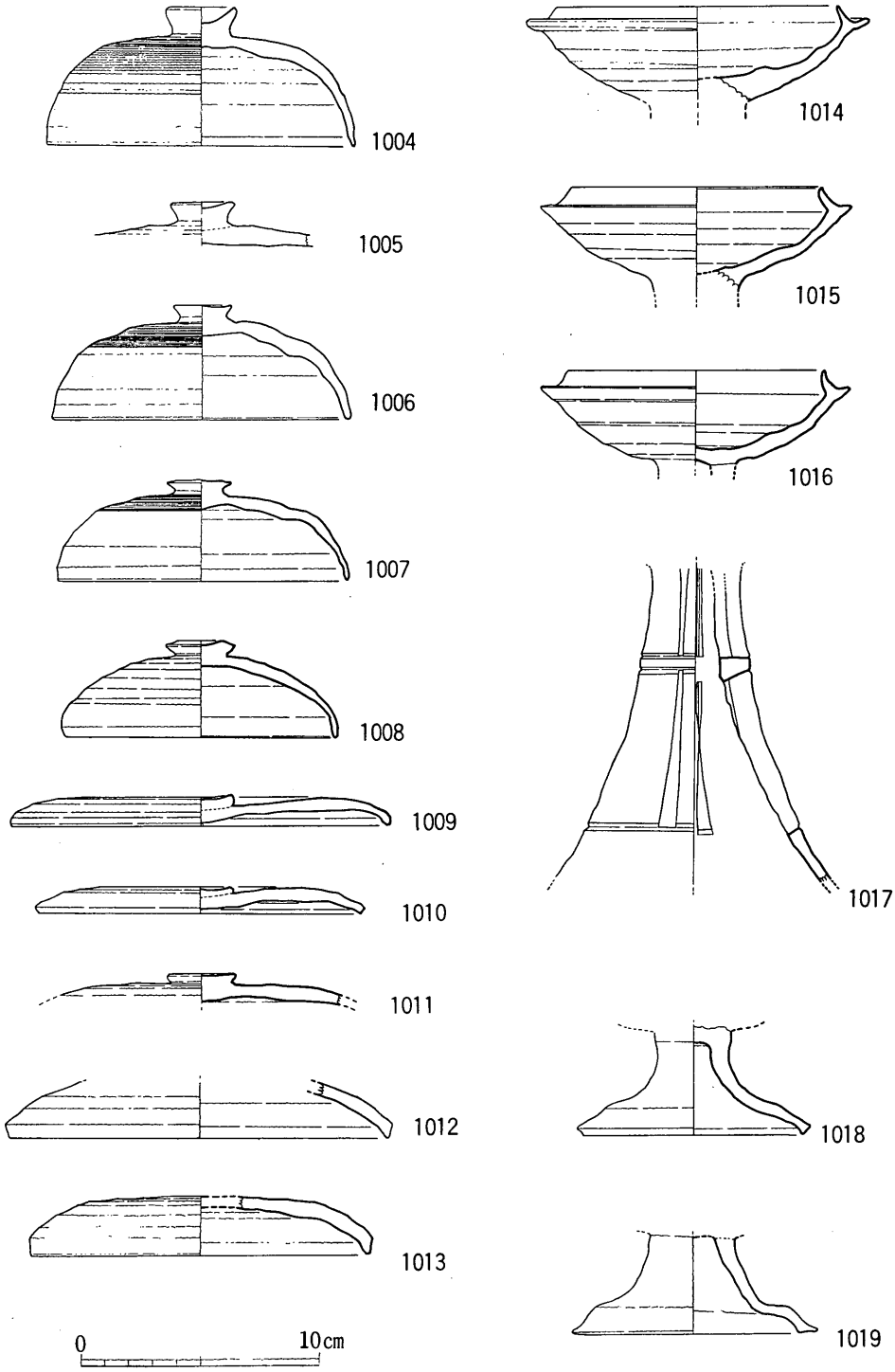
22図　須恵器杯身実測図（3・4類）



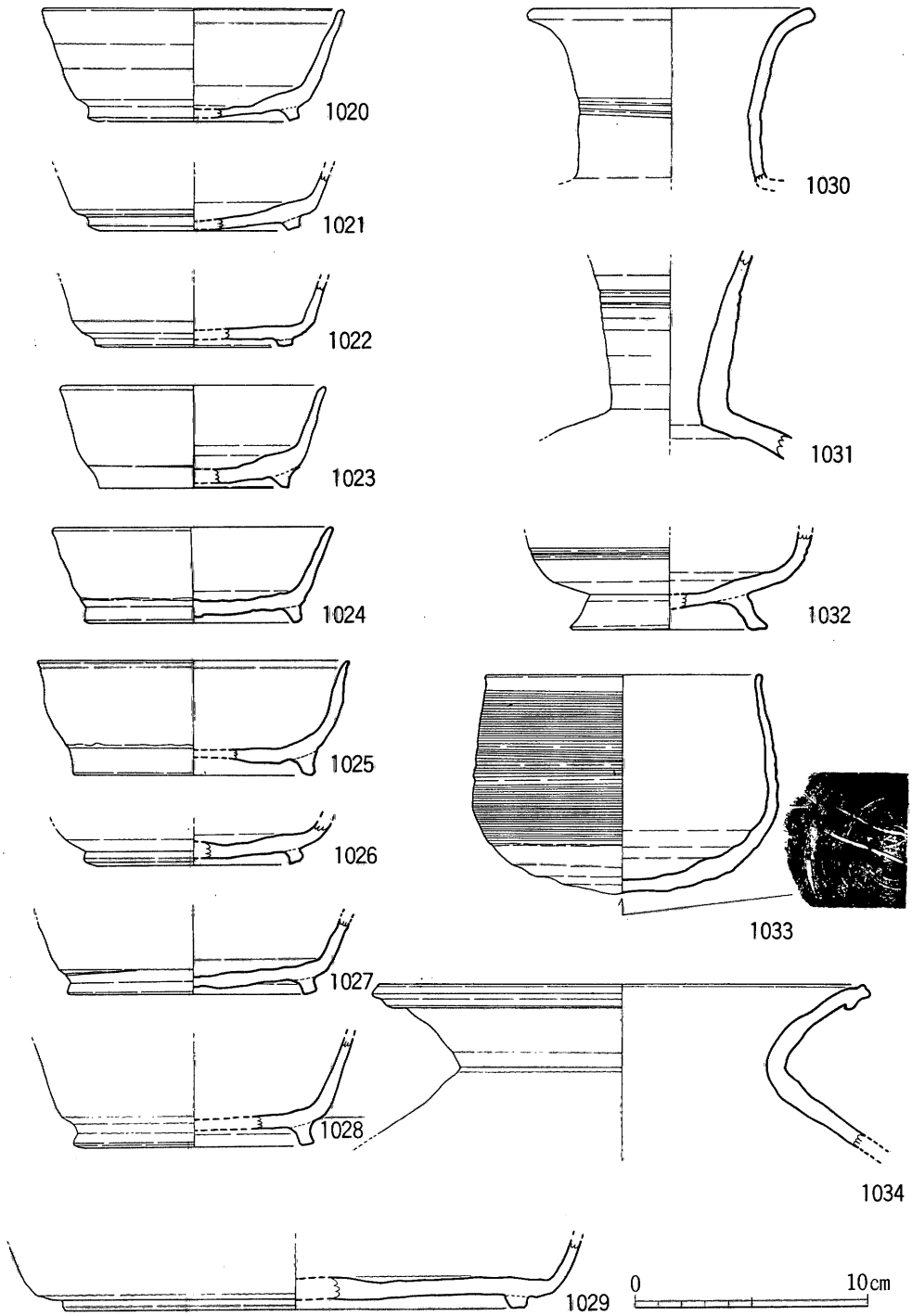
23図　須恵器杯蓋実測図（1・2類）



24図　須恵器杯蓋実測図（3類）


1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
0
10cm

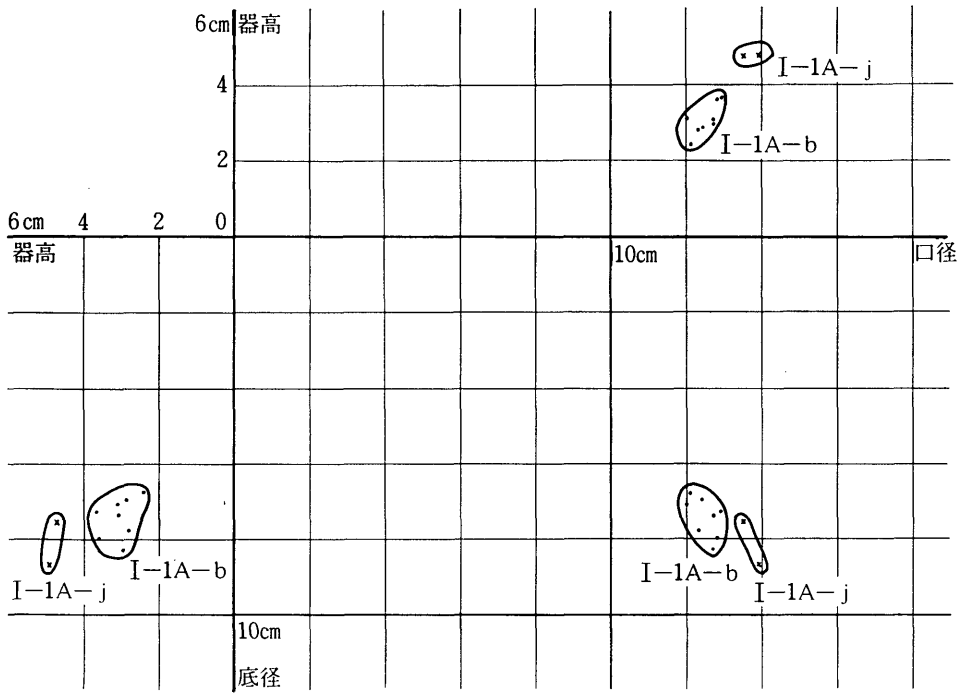
25図　須恵器実測図（1）


1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
0
10cm

26図　須恵器実測図（2）

2. 下層土師器・Ⅰ類（27～32図）

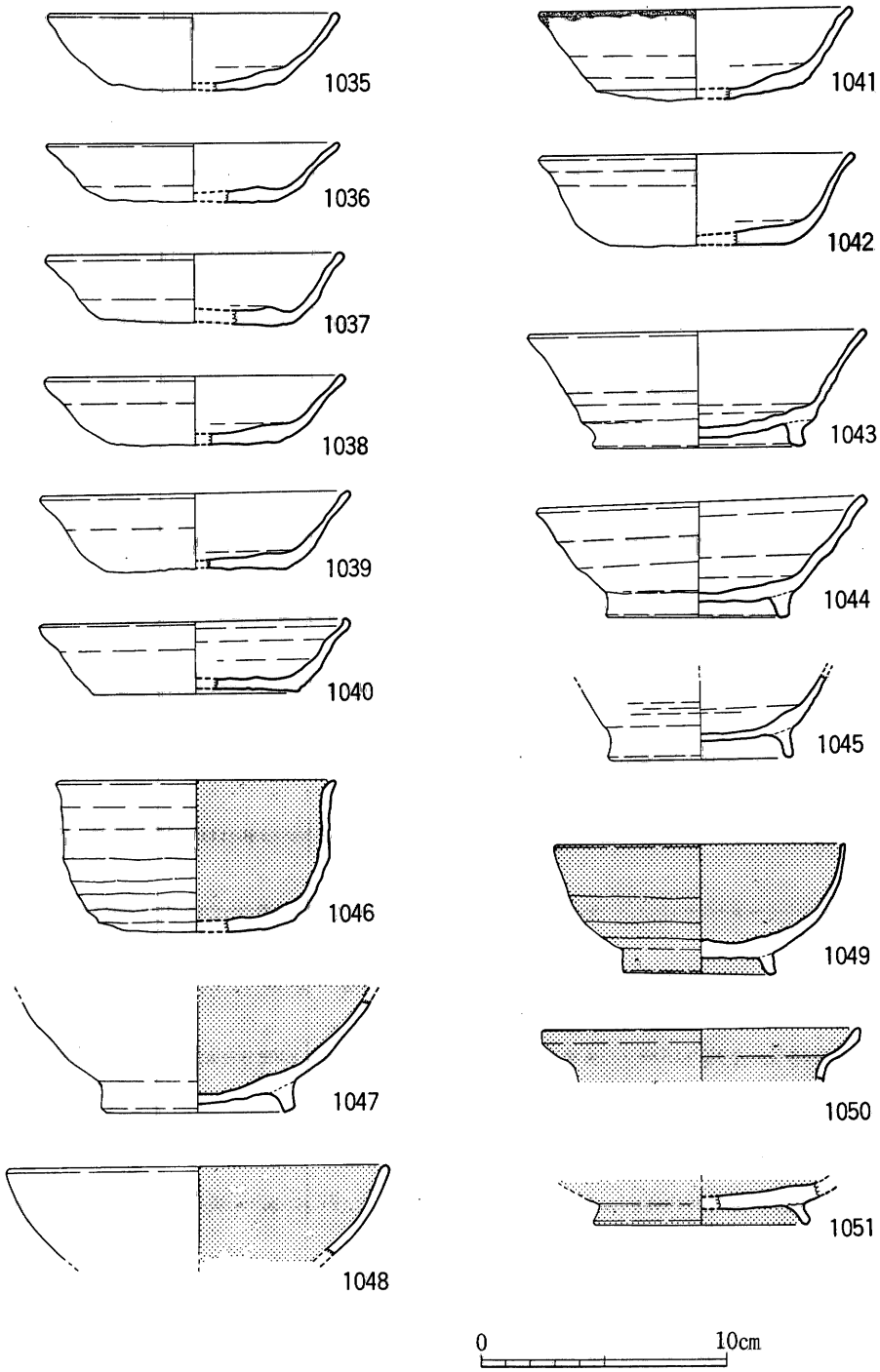
下層から出土したヘラ切り離し底（以下ヘラ切り底）の土師器を総称してⅠ類とした。Ⅰ類の土師器は主に調査区の北側壁面近くの下層（4層）や井戸内から出土し，特に今回は当遺跡でも古手の土師器を把握できた。なお時期が古くなるにつれ，杯，椀，高台付椀，小皿などの名称が矛盾をきたすところもあるが，一つの系統としてとらえたいので，従来の名称に従った。



10表　ME13区下層出土土師器の法量

杯				杯				高台付椀			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	高台径	器高
1	(12.0)	(7.1)	3.1	5	(12.7)	(7.4)	3.05	1	(13.9)	(8.7)	4.8
2	(12.1)	(6.8)	2.4	6	(12.7)	(8.3)	2.95	2	(13.5)	7.55	4.7
3	(12.3)	(7.8)	2.8	7	(12.8)	(8.0)	3.6	3		7.6	
4	(12.4)	(7.0)	2.85	8	(12.9)	(7.3)	3.65				

11表　ME13区下層出土土師器計測表



27図　土師器実測図（ＭＥ13区下層出土）

〔1 A〕

ME13区下層（4層）（27図，10・11表）

下層であるME13区の4層から一群の土器が出土しているが，4層の中でも他区出土の土器と大きな隔りがあるので，この一群の土器をもってI—1A類としたい。

b．小皿（**I—1A—b**）（27図1035～1042）口径12.0～12.9cm，底径6.8～8.3cm，器高2.4～3.65cmで，器面には回転による横ナデが，内底には指先によるナデがみられ，底面にヘラ切り痕が残り，板目がついているものもある。**1041**は口縁にススが付着し，灯明皿に使用されていたことがわかる。浅黄色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。

j．高台付椀（**I—1A—j**）（27図1043～1045）口径は13.5～19.5cm，高台径7.55～8.7cm，器高4.8～4.7cmで体部は直線に近く，杯部底面いっぱいに高台がついている。器面には横ナデが施され，高台内の底面にヘラ切り痕が残っている。黄褐色ないし灰黄色を呈し，胎土に砂粒を少量含む。

内黒土器（27図1046～1048）**1046**は口径11.5cm，底径8.0cmでやや丸味を帯び，器高6.2cmで，口縁がやや開く深めの椀である。内面は黒色で横方向にていねいに研磨され，外面の上半は横ナデが，下半はヘラ削りが施され，黄褐色を呈している。胎土に砂粒をあまり含まず，焼成は良好である。底面にはヘラ切り痕が残っている。**1047**は高台付椀の底部で，内面は灰黒色であるが，器面が荒れているため，研磨の有無は不明である。外面は明褐色で，焼成はやや悪く表面が荒れている。高台内の底面にヘラ切り痕が残っている。**1048**は高台付椀の口縁で，内面は黒色で研磨され，外面は黄白色で，器面は荒れている。胎土には砂粒をほとんど含まない。

黒色土器（27図1049～1051）**1049**は高台付椀で，体部は丸味をもち，口径11.9cm，高台径6.1cm，器高5.1cmで全体が黒色で，外面上半と内面はていねいに研磨され，外面下半はヘラ削りが施されている。高台付近には横ナデがみられる。胎土は精製され焼成もよい。**1050**は小片から復元したもので口縁が内弯しながら開くもので，内面を，外面の口縁より下に研磨がみられる。**1051**は底部で，内外面とも黒色で，内面に研磨がみられ，高台接合面に2本の沈線を入れている。

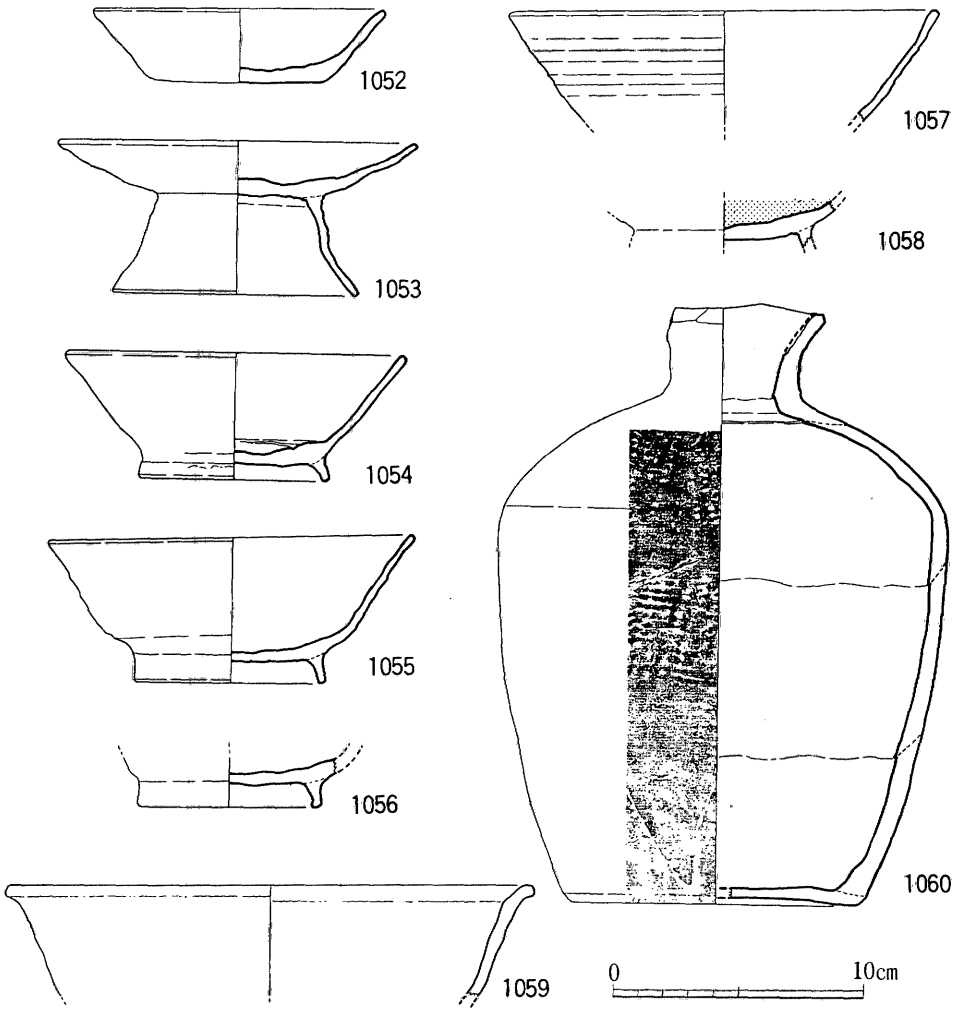
この一群の土器には，内黒土器，黒色土器が多数見受けられ，土器片数では，内黒土器14.4%，黒色土器3.2%で高い割合になっている。

〔1 B〕

S E614井戸（28図）

b．小皿（**I—1 B—b**）（1052）口径11.6cm，底径6.9cm，器高3.0cmで，器面には横ナデが，内底にはナデが施され，底面にヘラ切り痕が残っている。白灰色を呈し，表面が荒れている。胎土に少量砂粒を含む。

脚付皿（1053）むしろ高杯とでもよんでいいほどで，口径14.4cm，脚部の径9.8cm，脚部の高さ4.0cmで，器高は6.1cmである。器面に横ナデがみられ，灰黄色で，胎土に砂粒少なく精



28図

28図　土器実測図（S E614井戸出土）

製され，焼成も良好である。

j．高台付椀（**I－1 B－j**）（1054～1057）**1054**は口径13.6cm，高台径7.6cm，器高5.1cmで体部は直線的である。灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。**1055**は口径14.55cm，高台径7.7cm，器高5.8cmで，体部は直線的で丸味を持たず，底部近くにゆるい屈折部をもつ。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，高台内の底面にはヘラ切り痕が認められる。灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。**1056**は高台径7.4cmで，灰白色を呈し，胎土はあまり砂粒を含まない。

そのほか**1057**は口径約17.0cmで，口縁内側に黒色のいぶしが認められ，他は灰白色であるが，内面にヘラ磨きかと思えるものもある。外面は黄白色で横ナデが認められる。あるいは内黒土器かもしれない。

内黒土器椀（1058）内面は黒色で，細かでていねいな研磨が施されている。外面は横ナデであり，黄褐色を呈している。高台内の底面にヘラ切り痕と板目が残っている。胎土は精製され，ほとんど砂粒を含まない。

須恵器壺（1060）口縁部は打ち欠かれ，肩部にやや稜線が認められる短頸壺で肩部から胴下部にかけて格子の叩き目があり，底部近くはヘラ削りが施され，頸部には横ナデがみられる。底面にも青海波の叩き目がついている。褐色を呈し焼成は良好である。

土鍋（1059）上半部のみで，口縁はやや外に折れ，器面は横ナデが施され，内面は灰味暗褐色で，外面は灰褐色で煤が付着し，土鍋と思われる。

〔**2 C**〕

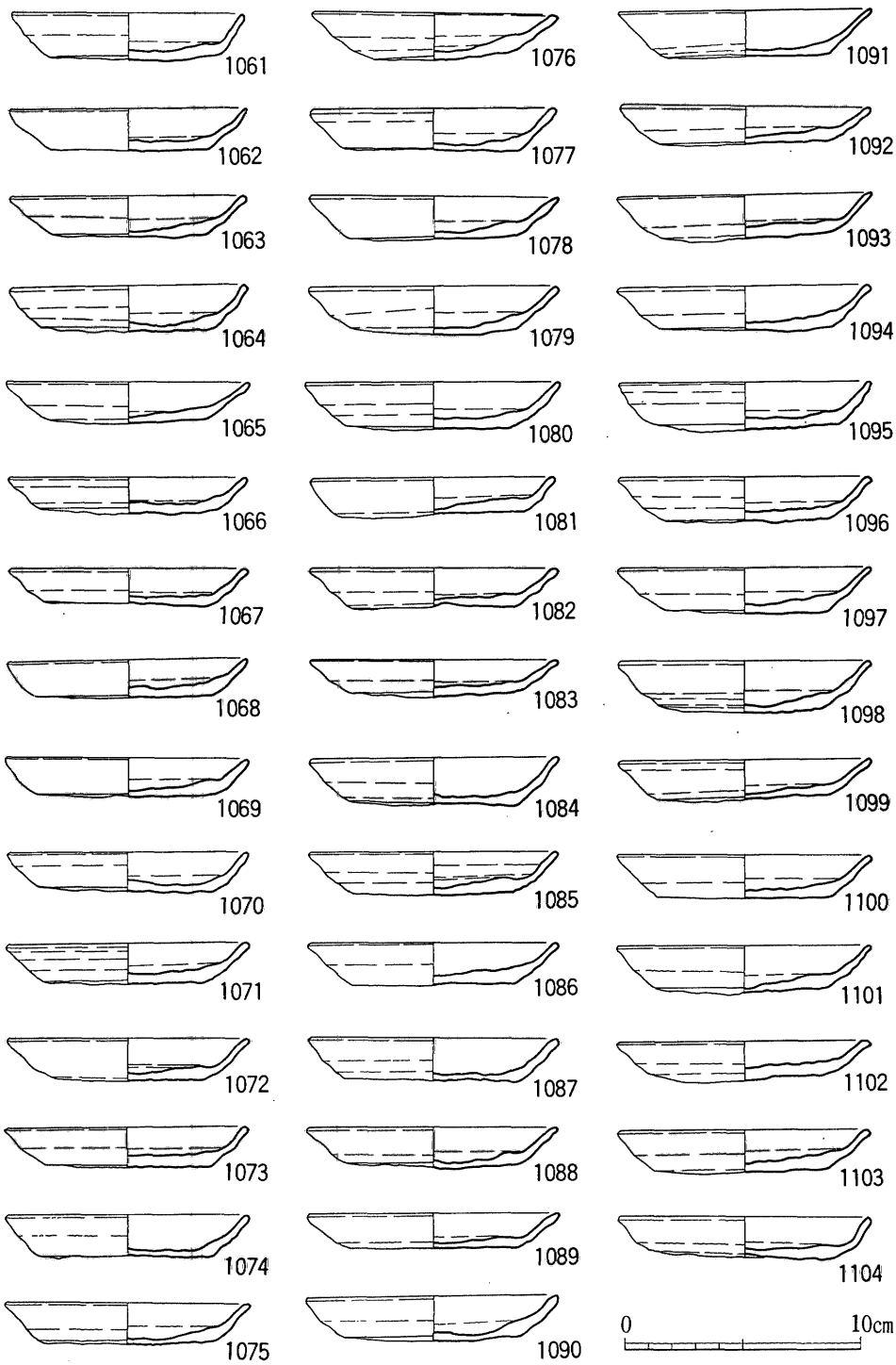
SK633土坑（29～31図，12～14表）

b．小皿（**I－2 C－b**）（29・30図 1061～1118）口径9.9～11.2cmで，ほぼ10～11cmの範囲にはいり，底径6.25～7.9cm，器高1.4～2.2cmである。器面には回転による横ナデが，内底に指先によるナデが施され，底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。黄灰色ないし灰褐色を呈し，胎土少量砂粒を含む。なかには灯明皿に使用されたらしく，口縁に煤が付着しているのもある。

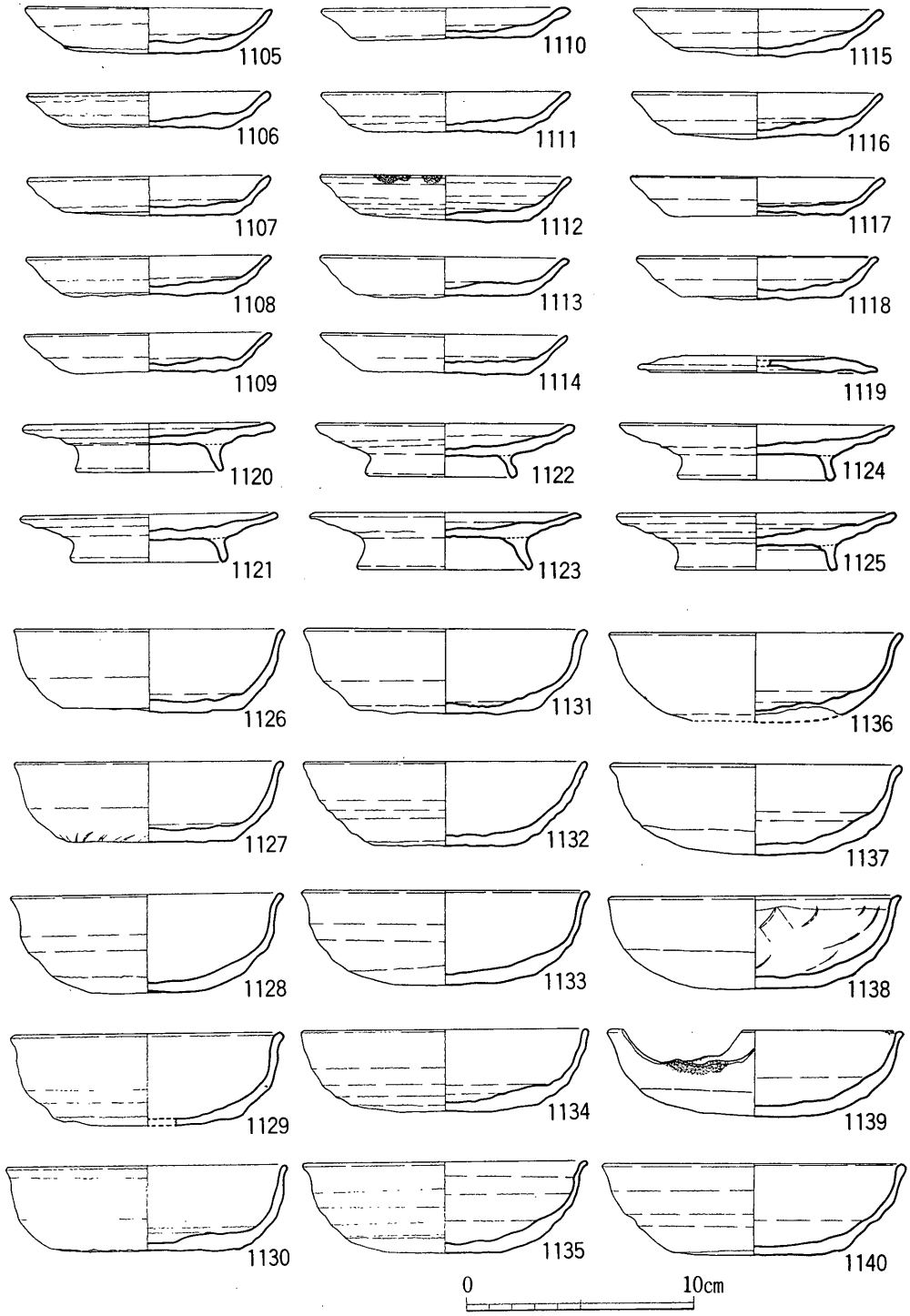
蓋（30図1119）口径8.4cm，器高0.7cmで，天井部はヘラナデが施され，平滑である。

f．高台付小皿（**I－2 C－f**）（30図 1120～1125）口径10.1～12.4cm，高台径6.4～7.85cm，器高2.1～2.55cmで，器面には横ナデが，内底にはナデが施され，高台内の底面にヘラ切り痕や板目が残っているものもある。黄白色ないし黄灰色を呈し，胎土に細砂を含む。

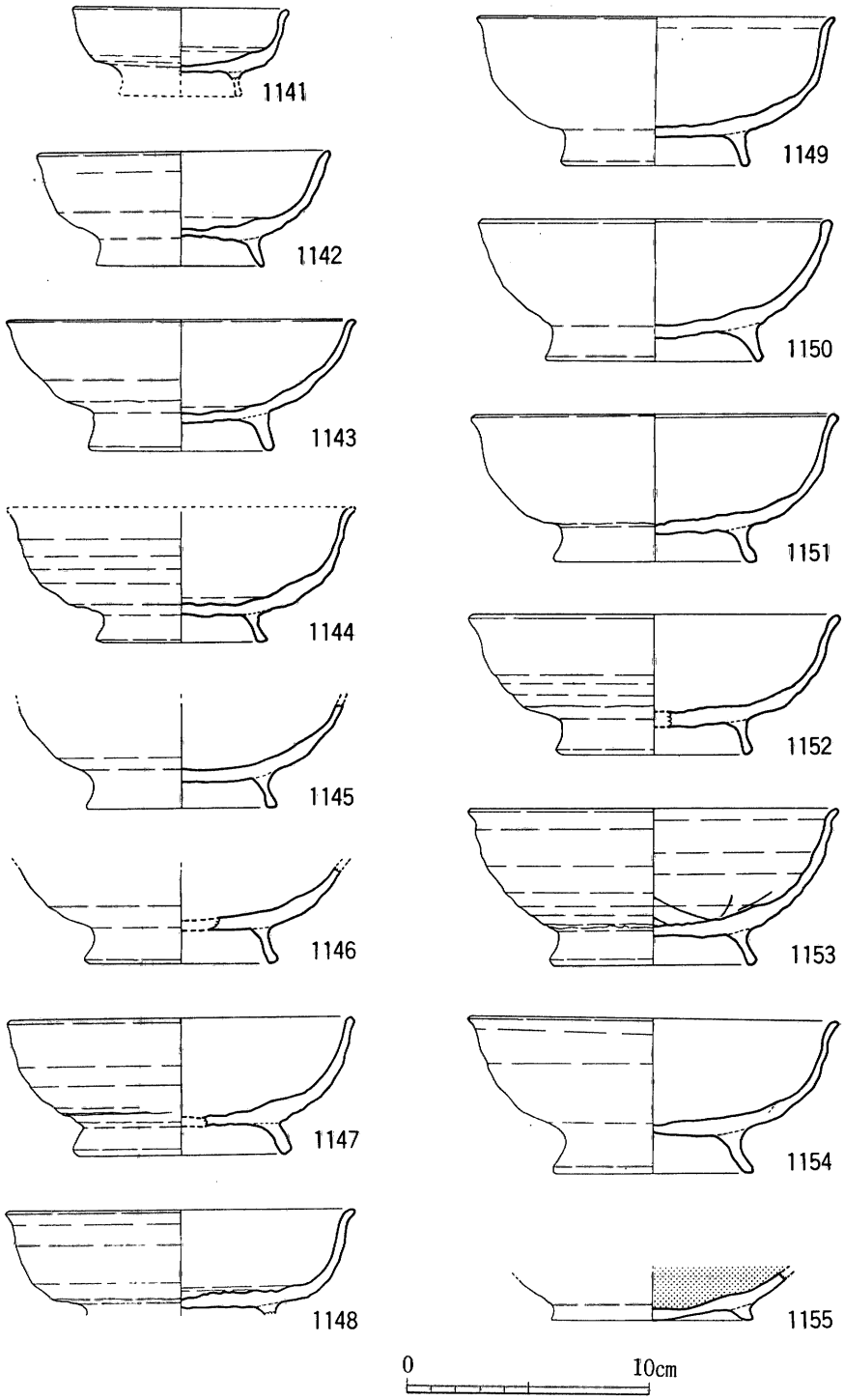
g，椀（**I－2 C－g**）（30図1126～1140）口径11.8～13.4cm，器高3.5～4.0cmで，底部は丸底であるが，平底に近いものも多い。口縁端がやや外へ開くものも多い。**1139**は壊れた椀を灯明皿に利用している。**1138**は内面がコテによる器面調整がおこなわれていて，その抜きあと



29図　土師器実測図（ＳＫ633土坑出土―１）



30図　土師器実測図（ＳＫ633土坑出土―２）



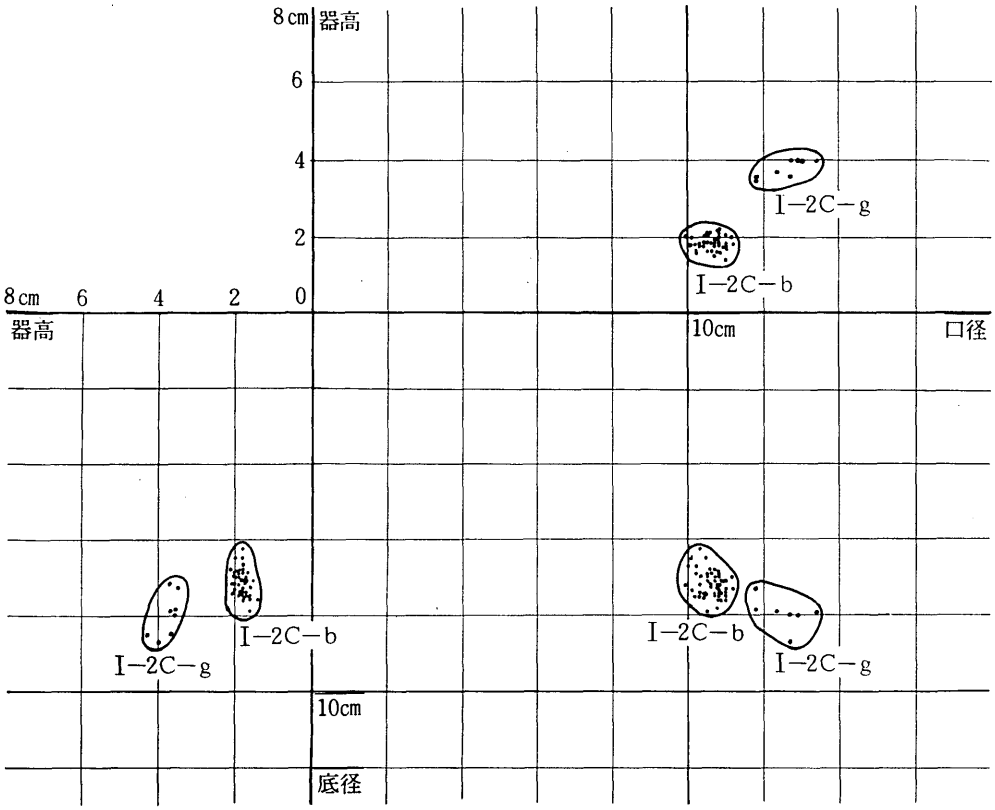
31図　土師器実測図（ＳＫ633土坑出土―３）

が内面に残っている。ただし，全体として量は少なく，内面も横ナデが多い。**1126・1127**はやや小形で全体をしぼったようにしてロクロで引きあげてつくられている。そのことは胎土内の縞文様で確認され，輪積みのように途中で継ぎたしたものではない。ただし，すべての椀がロクロによる引き上げとはまだ断定しがたい。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底部外面に指圧痕が認められるものもある。

高台付椀形土器は，口径9～10cm前後のものを高台付特小椀（h），口径12cm前後のものを高台付小椀（i），口径13～15cmのものを高台付椀（j），口径15cmを越えるものを高台付大椀（k）と便宜的に分けてみたが，土器自体が厳密に分かれるものではない。特に（i）と（k）との差は明確ではない。

h．高台付特小椀（**I－2C－h**）（31図1141）口径9.0cmで黄灰色を呈し，胎土に細砂を含む。

i．高台付小椀（**I－2C－i**）（31図1142）口径12.4cm，高台径6.85cm，器高4.7cmで，器面には横ナデが，内底にナデが施され，高台内の底面にヘラ切り痕と板目が残っている。



12表　SK633土坑出土土師器の法量

j．高台付椀（**I－2 C－j**）（31図1143～1150）口径14.5～14.6cm，高台径7.3～9.0cm，器高5.4～6.1cmで，器面に横ナデが，内面上半にナデがみられ，内底部にコテによるナデが認められるものも多い。淡橙色ないし黄白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。高台内底面にヘラ切り痕と板目が残っているものもある。

k．高台付大椀（**I－2 C－K**）(31図1151～1154)口径15.2～15.6cm，高台径8.35～8.5cm，器高5.8～6.6cmで，**1153**は器面に横ナデがみられ，内底にはコテによるナデが施されている

小皿				小皿				小皿			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	9.9	7.2	2.0	24	10.6	7.2	2.1	47	10.85	7.1	1.75
2	10.0	6.7	1.8	25	10.6	6.9	1.8	48	10.85	7.6	1.75
3	10.05	6.5	1.8	26	10.7	6.8	1.8	49	10.9	7.1	1.7
4	10.1	7.35	2.0	27	10.7	7.5	1.85	50	11.0	7.6	1.4
5	10.2	6.7	1.8	28	10.7	7.45	1.75	51	11.0	7.1	1.75
6	10.2	7.5	1.6	29	10.7	7.1	1.5	52	11.0	7.5	1.9
7	10.2	6.9	1.65	30	10.7	7.5	1.9	53	11.0	7.3	1.8
8	10.2	7.5	1.6	31	10.7	6.9	1.9	54	11.0	7.4	1.7
9	10.3	7.5	1.7	32	10.75	7.3	1.6	55	11.0	7.4	2.05
10	10.3	7.4	1.8	33	10.75	7.2	1.9	56	11.15	7.0	2.0
11	10.3	7.2	1.75	34	10.75	7.2	1.9	57	11.2	7.3	1.8
12	10.3	6.25	1.8	35	10.75	7.8	2.15	58	10.7	7.0	1.9
13	10.32	7.0	1.7	36	10.78	6.85	1.95	蓋			
14	10.4	7.45	1.85	37	10.8	6.9	2.0	No.	口径		器高
15	10.4	7.55	1.75	38	10.8	7.0	2.2	1	8.4		0.7
16	10.42	6.5	2.0	39	10.8	7.35	1.8	高台付小皿			
17	10.45	7.45	1.85	40	10.8	7.3	1.8	No.	口径	高台径	器高
18	10.5	7.1	1.85	41	10.8	7.45	2.1	1	10.1	6.4	2.2
19	10.5	7.0	2.05	42	10.8	7.5	1.8	2	11.4	6.8	2.1
20	10.5	6.9	2.05	43	10.8	7.4	1.88	3	11.5	6.75	2.3
21	10.5	7.9	1.6	44	10.8	7.6	1.75	4	(12.1)	7.85	2.3
22	10.55	6.8	1.85	45	10.8	7.2	2.0	5	(12.2)	7.0	2.45
23	10.6	7.25	1.6	46	10.8	7.6	1.6	6	12.4	7.2	2.55

13表　SK633土坑出土土師器計測表（1）

ため，なめらかである。高台内の底面にヘラ切り痕が残っている。灰黄色を呈し，胎土に砂粒を少量含む。

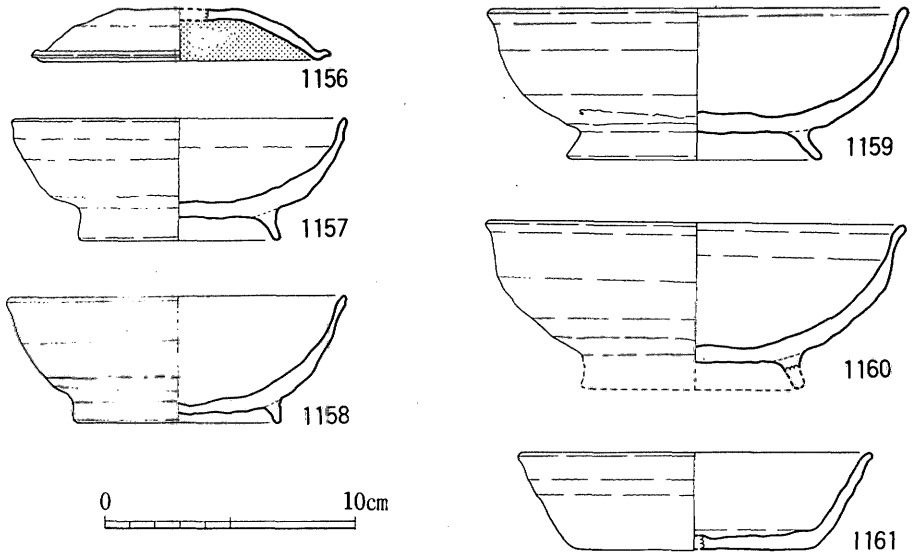
内黒土器椀（31図1155）低い高台をもつ椀で内面は黒色であるが，研磨の跡は不明である。外面は黄白色で，胎土に砂粒を含む。

椀				椀				高台付椀			
No.	口径	高台径	器高	No.	口径	高台径	器高	No.	口径	高台径	器高
1	11.8	7.85	3.6	12	12.9	8.0	4.0	6		8.0	
2	11.8	7.3	3.5	13	13.0	(7.6)	4.0	7	(14.5)	(8.5)	5.6
3	(12.0)	8.5	4.3	14	13.1		3.8	8	14.55		
4	(12.0)	(8.3)	4.05	15	13.4	7.9	4.0	9	14.6	7.6	6.1
5	12.35	7.9	3.7	高台付椀				10	(14.65)	9.0	5.85
6	(12.5)	8.5	3.7	No.	口径	高台径	器高	11	15.2	8.5	6.05
7	(12.5)	7.2	3.7	1	9.0			12	(15.4)	(8.2)	5.8
8	12.7	(8.7)	(4.1)	2	12.4	6.85	4.7	13	(15.3)	8.5	6.5
9	12.7	8.0	3.6	3	14.5	7.7	5.4	14	15.4	8.35	6.6
10	12.7	8.7	4.0	4	(14.3)	7.3	(5.6)				
11	(12.8)			5		7.95					

14表　SK633 土坑出土土師器計測表（2）

その他の下層出土土器（32図）

1156は内黒土器の蓋で，口径12.0cm，器高2.1cmで，内面黒色で粗く研磨され，外面下半は灰黒色で他は灰黄色である。Ⅱ—1 A類土師器に伴うものかもしれない。**1157**は口径13.4cm，高台径7.5cm，器高4.95cmで，深めで高台は低く内面はコテによるナデが施されている。灰白色を呈している。**1158**は口径13.6cm，高台径8.3cm，器高5.0cmで，浅黄橙色である。**1159**は口径16.8cm，高台径9.2cm，器高6.2cmで，浅黄橙色を呈す。**1160**は口径16.8cmで，灰白色を呈している。**1159**と**1160**は両者とも高台は大椀の範囲にはいり，ほぼ同じ作りで口縁部はやや外反している。**1157・1159・1160**は同一地区出土で，**1158**も含めてⅠ—2 C類土師器の前後であろう。**1161**は須恵器で，口径14.1cm，底径9.5cm，器高3.9cmで器面に横ナデが，内底にはナデが，底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。



32図　土師器実測図（下層出土，1161は須恵器）

3.　上層土師器・Ⅱ類　(33～44図)

上層から出土した糸切り底の土師器をⅡ類と総称したが，糸切り底の土師器は一部下層面からも出土している。Ⅱ類の糸切り底の土師器は２・３層の包含層や，溝・井戸・土坑などから多量に出土している。なお，分類は当遺跡の従来の報告に従った。

〔**2**〕

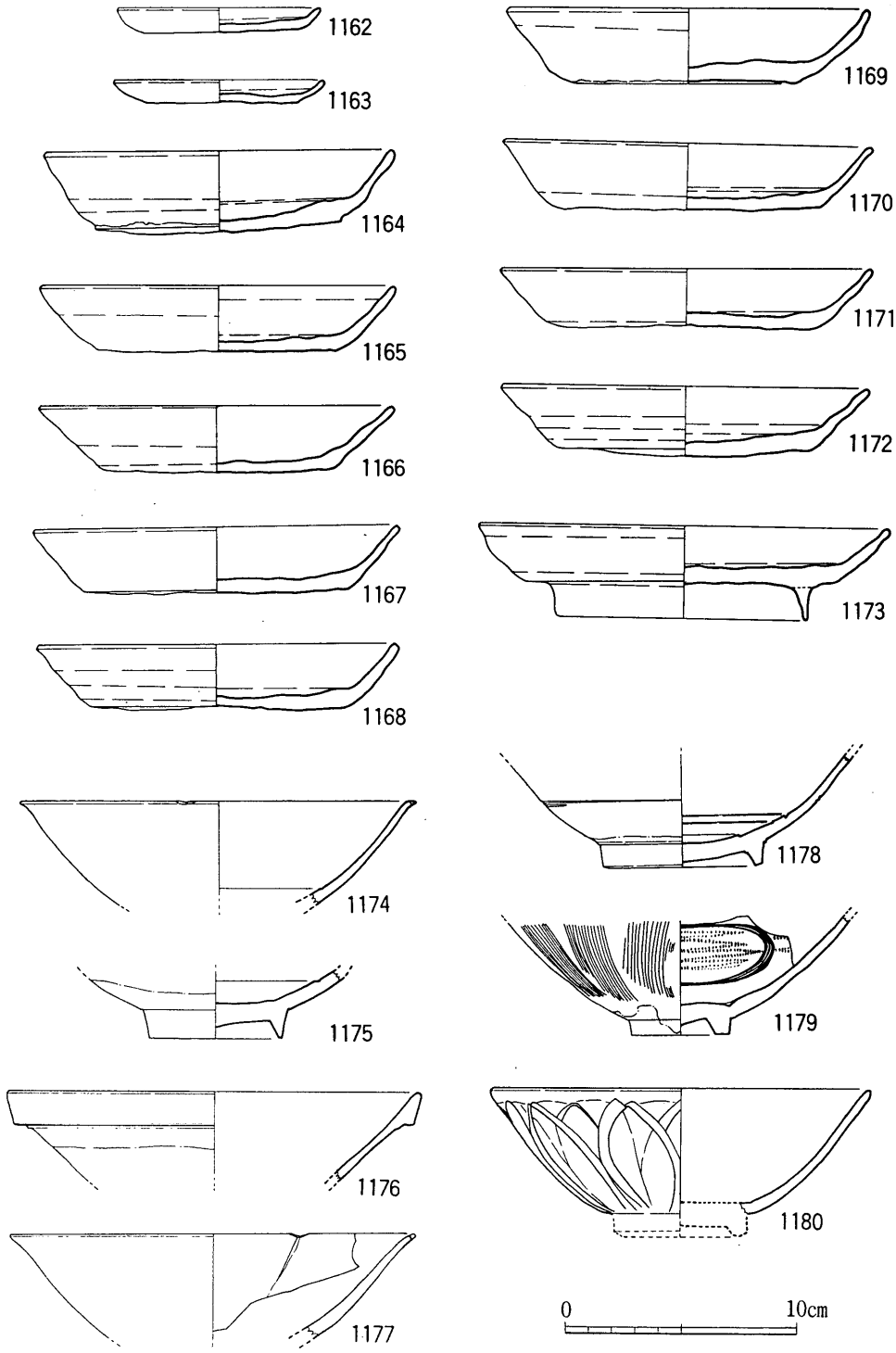
ＳＤ604溝（33図，15・16表）

b．小皿（Ⅱ－**1**－**b**）（1162・1163）口径8.8～9.2cm，底径6.5cm，器高0.9～1.0cmで，器面には回転による横ナデが，内底にはナデがみられ，底面には糸切り痕と板目がのこっている。浅黄色を呈し，胎土にやや砂粒を含む程度である。薄手の小皿である。

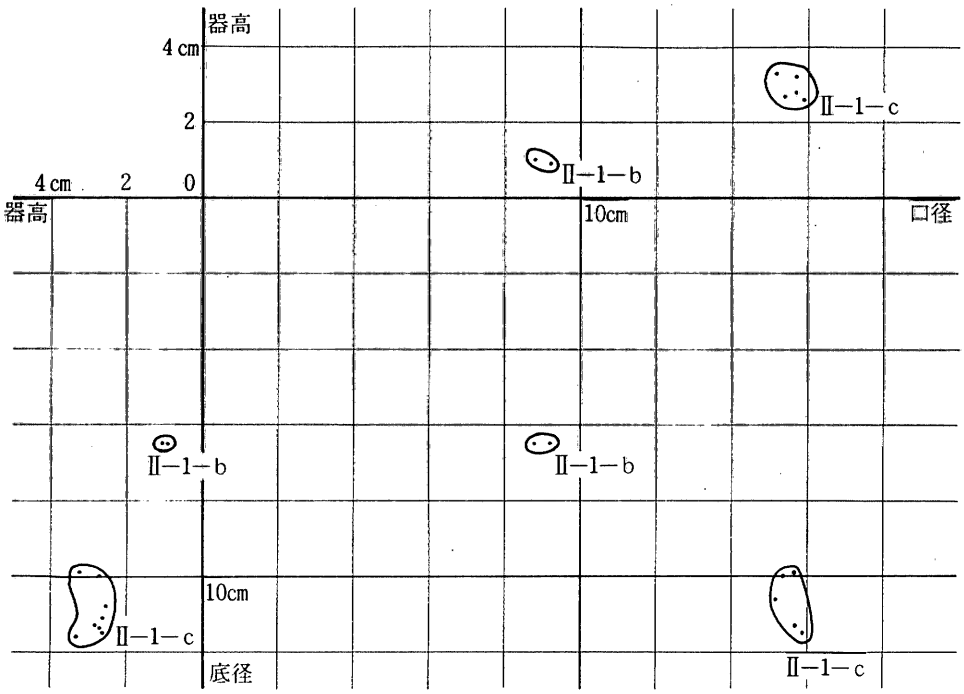
c．杯（Ⅱ－**1**－**c**）（1164～1172）口径15.2～15.9cm，底径9.9～11.5cm，器高2.5～3.3cmで，器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面には糸切り痕と板目がのこっている。浅黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。

高台付大杯（1173）口径17.9cm，高台径10.8cm，器高3.9cmで，杯部は他の杯よりもひとまわり大きい。灰白色を呈し，胎土にほとんど砂粒を含まず，焼成は良好である。

なおこれらの土師器に伴う磁器類は白磁が多いが，７Ｃ類と９類の青磁もありその共伴関係が重要であるので磁器類についてもこの項で説明する。**1174**は３類の白磁で，見込みに沈線がめぐり口縁に輪花の削りがみられる。胎土は明灰白色で，灰白色の釉がかかっている。**1175**は



33図　土師器実測図（ＳＤ604溝出土）



15表　ＳＤ 604 溝出土土師器の法量

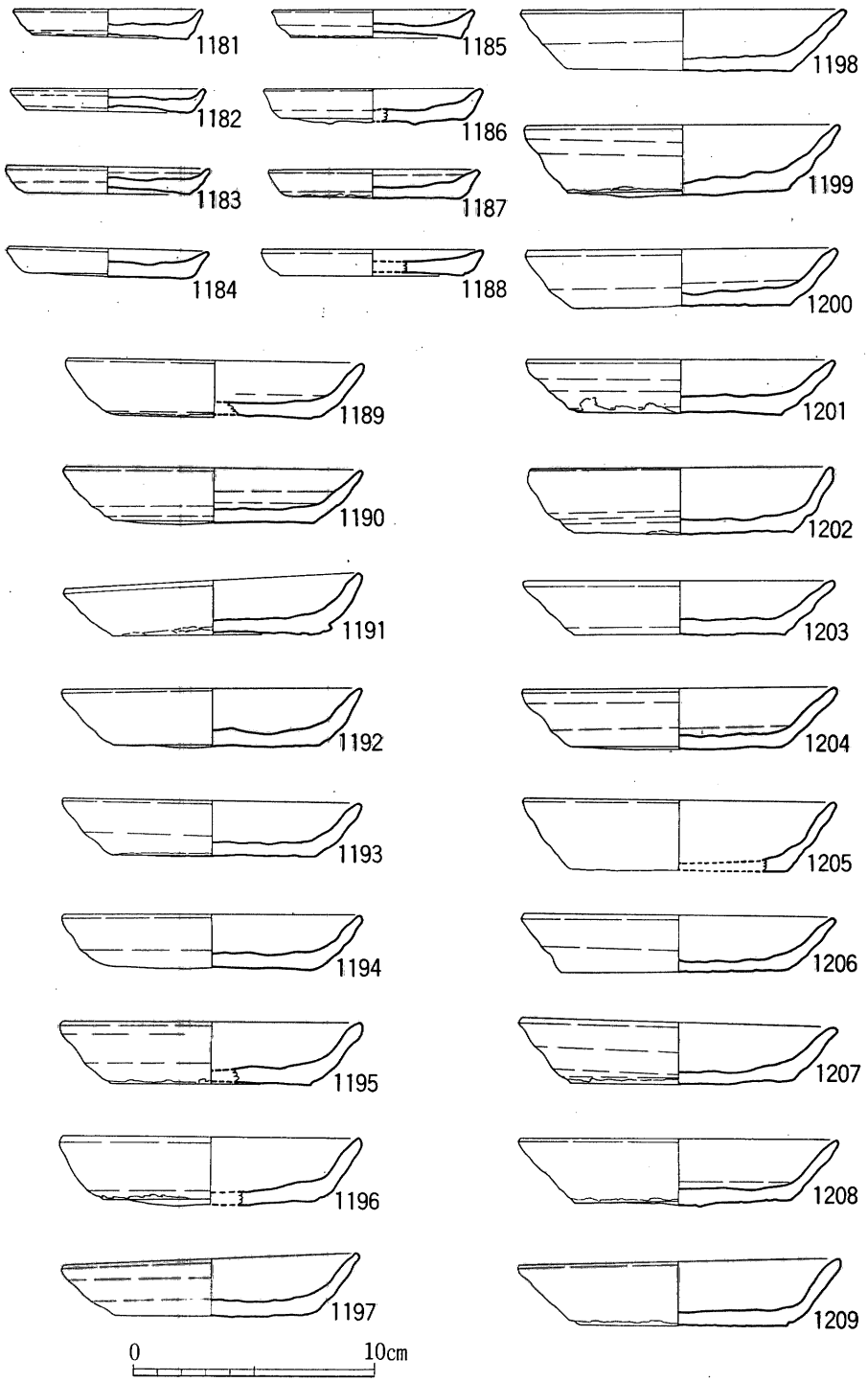
小　皿				杯				杯			
No.	口　径	底　径	器　高	No.	口　径	底　径	器　高	No.	口　径	底　径	器　高
1	8.8	6.5	1.0	3	15.4	10.0	2.7	9	15.9	11.5	2.6
2	9.2	6.5	0.9	4	(15.7)	11.4	2.7	10	(15.9)	10.8	2.5
杯				5	15.7	11.3	2.8	11	(15.9)	11.1	2.6
No.	口　径	底　径	器　高	6	15.7	9.9	3.2	高　台　付　杯			
1	15.2	10.6	3.3	7	15.9	11.5	2.6	No.	口　径	高台径	器　高
2	(15.2)	(10.3)	2.8	8	(15.9)	10.8	2.5	1	17.9	10.8	3.9

16表　ＳＤ 604 溝出土土師器計測表

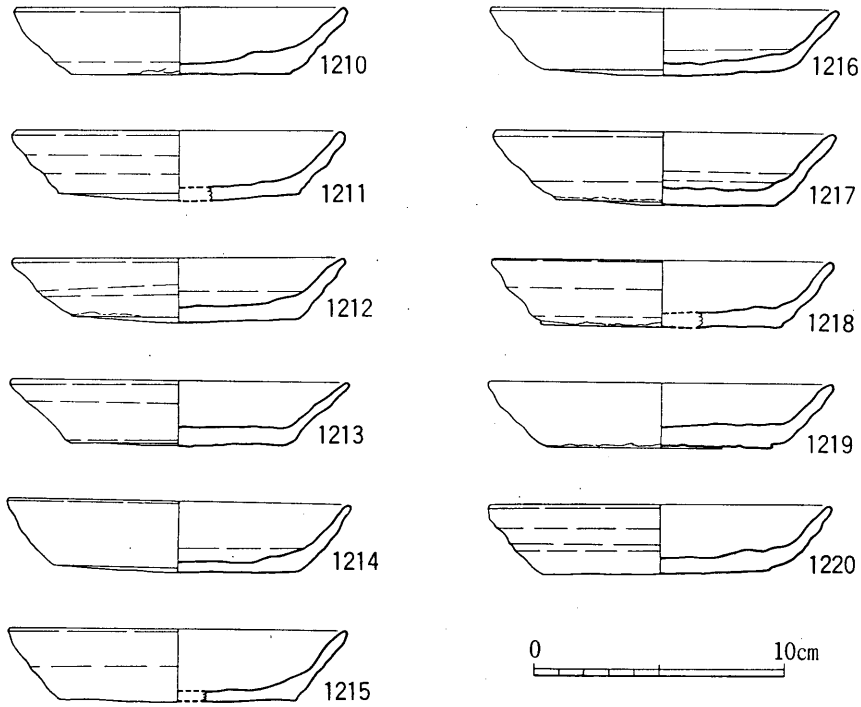
同じく3類の白磁で，見込みに沈線がめぐり，高台は高く，その内面に「上」の墨書が認められる。胎土は灰白色で底部外面を除いて明灰色の釉がかけられている。**1176**は5類の玉縁の口縁をもつ白磁で，胎土は明灰色で，同じく明白色の釉が内面と外面上半にかけられている。**1177**は3類の白磁で口縁に輪花の削りがみられ，そこから内面に細い沈線が入れられている。胎土は明灰色で，黄味灰色の釉がかけられている。**1178**は4類の白磁で，高台は低く，見込みに沈線がはいり，その内側を焼成前環状に釉をかきとっている。胎土は白色で化粧土の上に底部をのぞいて半透明の灰白色の釉がかけられている。全体のつくりが6類の高台付椀に類似している。**1179**は9類の青磁で，内外面に櫛歯による文様が描かれ，胎土は淡灰色で，灰緑色の釉がかけられている。**1180**は7C類の青磁で，外面に蓮弁が削り出され，胎土は淡灰色で，灰緑色の釉がかけられている。

小皿				杯				杯			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	7.9	6.6	1.1	5	12.5	8.6	2.3	19	13.3	9.4	2.6
2	8.15	6.75	1.0	6	12.5	8.6	2.1	20	13.3	9.3	2.7
3	(8.4)	(6.9)	1.1	7	(12.6)	(8.4)	2.5	21	13.3	8.55	2.65
4	8.4	7.1	1.0	8	(12.6)	(8.8)	2.85	22	13.4	8.7	2.8
5	8.5	7.25	1.15	9	12.6	8.3	2.35	23	13.4	9.5	2.5
6	8.8	7.3	1.15	10	12.7	9.4	2.6	24	13.4	9.1	2.5
7	(8.8)	(7.9)	1.2	11	12.9	9.4	2.7	25	13.5	8.8	2.6
8	(9.0)	(7.7)	1.0	12	13.0	9.0	2.45	26	(13.5)	9.0	2.7
杯				13	13.0	8.8	2.3	27	(13.6)	(9.6)	2.8
No.	口径	底径	器高	14	13.05	9.0	2.3	28	(13.6)	(9.6)	2.6
1	(12.3)	(8.6)	2.4	15	13.1	8.8	2.25	29	13.7	8.9	2.8
2	12.4	8.6	2.1	16	13.2	8.8	2.55	30	(13.7)	(8.8)	2.7
3	12.5	9.1	2.5	17	(13.2)	(9.2)	2.8	31	13.8	9.6	2.45
4	(12.5)	8.7	2.25	18	13.3	9.6	2.3	32	13.9	9.1	2.9

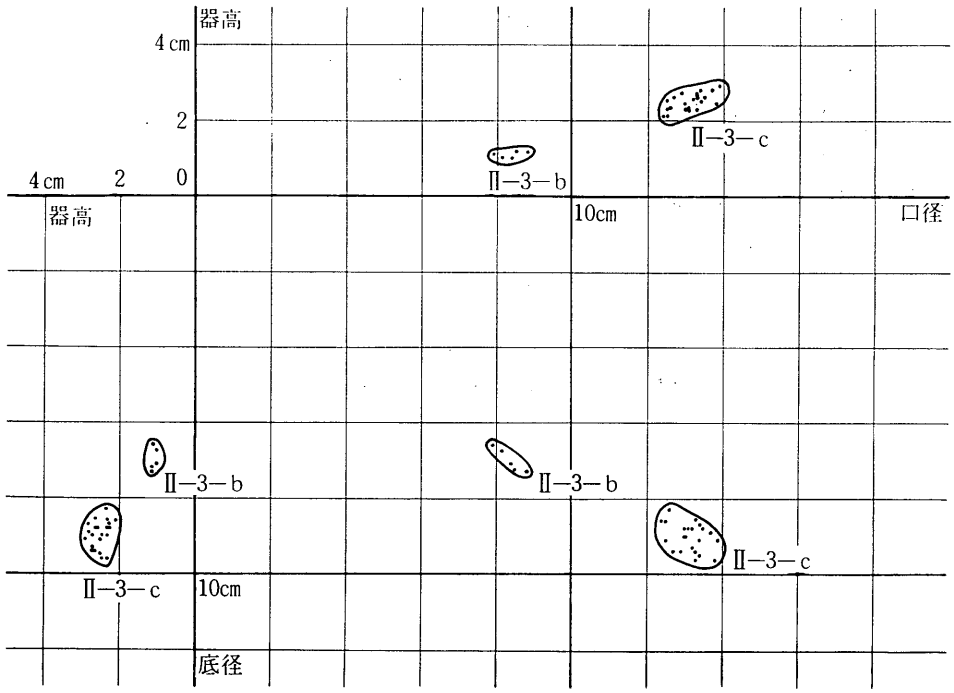
17表　SE610 井戸出土土師器計測表



34図　土師器実測図（ＳＥ610井戸出土―１）



35図　土師器実測図（ＳＥ610井戸出土―２）



18表　ＳＥ610井戸出土土師器の法量

〔3〕

SE610 井戸（34・35図，17・18表）

b．小皿（Ⅱ—3—b）（1181～1188）口径7.9～8.8cm，底径6.6～7.3cm，器高1.0～1.2cmで器壁が厚く，深さはあまりない。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目がついている。にぶい橙色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。

c．杯（Ⅱ—3—c）（1189～1220）口径12.4～13.9cm，底径8.3～9.6cm，器高2.1～2.9cmで，器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目が残っている。淡黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。

小皿				杯				杯			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	8.0	5.8	1.0	4	12.0	7.7	2.6	19	12.4	7.9	2.8
2	8.1	6.1	1.2	5	12.0	8.0	2.2	20	12.4	8.5	2.8
3	8.1	6.0	1.3	6	12.0	8.2	2.1	21	12.4	8.15	2.7
4	8.2	7.1	1.0	7	12.1	7.3	2.7	22	12.5	7.8	2.6
5	8.2	5.1	1.3	8	12.1	8.3	2.5	23	12.5	8.1	2.6
6	8.3	6.5	1.1	9	12.1	7.5	2.6	24	12.5	8.3	3.3
7	8.35	6.1	1.2	10	12.2	8.3	2.7	25	12.6	7.9	2.6
8	8.45	5.7	1.2	11	12.2	7.9	2.4	26	12.7	9.1	3.1
9	8.9	6.1	1.1	12	12.2	8.4	2.8	27	12.9	9.4	3.2
10	(8.9)	(6.5)	1.2	13	12.2	7.6	2.5	28	(13.2)	(9.4)	2.7
杯				14	12.2	7.5	2.7	29	13.0	8.0	2.4
No.	口径	底径	器高	15	12.3	8.9	2.1	30	(14.2)	(10.0)	2.6
1	11.6	8.4	3.0	16	12.3	7.8	2.75	31	(14.4)	(9.4)	2.6
2	11.8	7.6	2.5	17	12.3	8.3	2.9				
3	11.8	7.6	2.5	18	12.4	7.4	2.3				

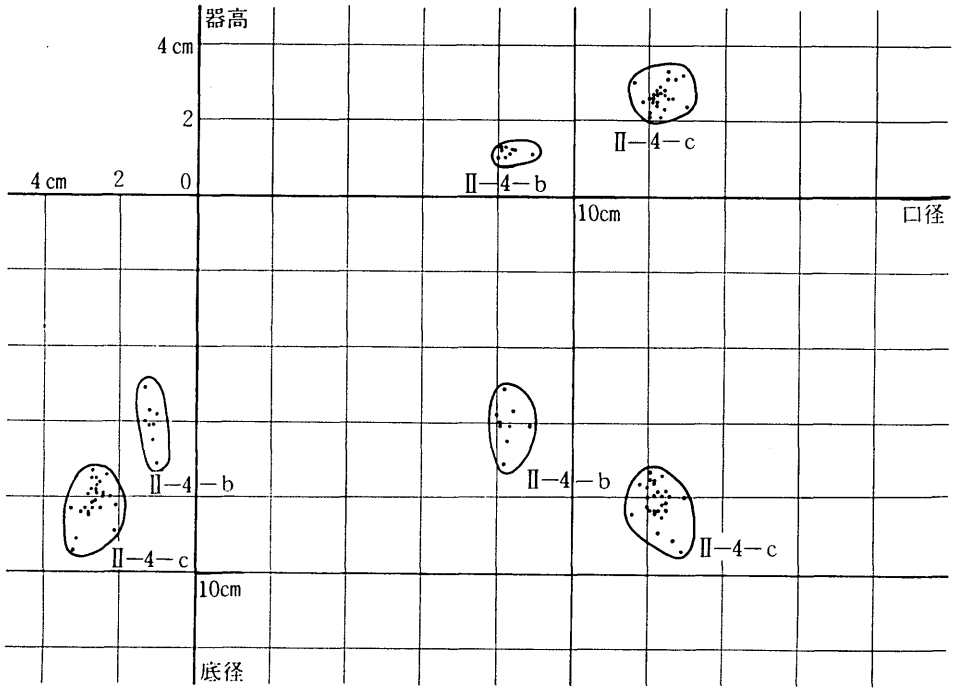
19表　SE609 井戸出土土師器計測表

〔4〕

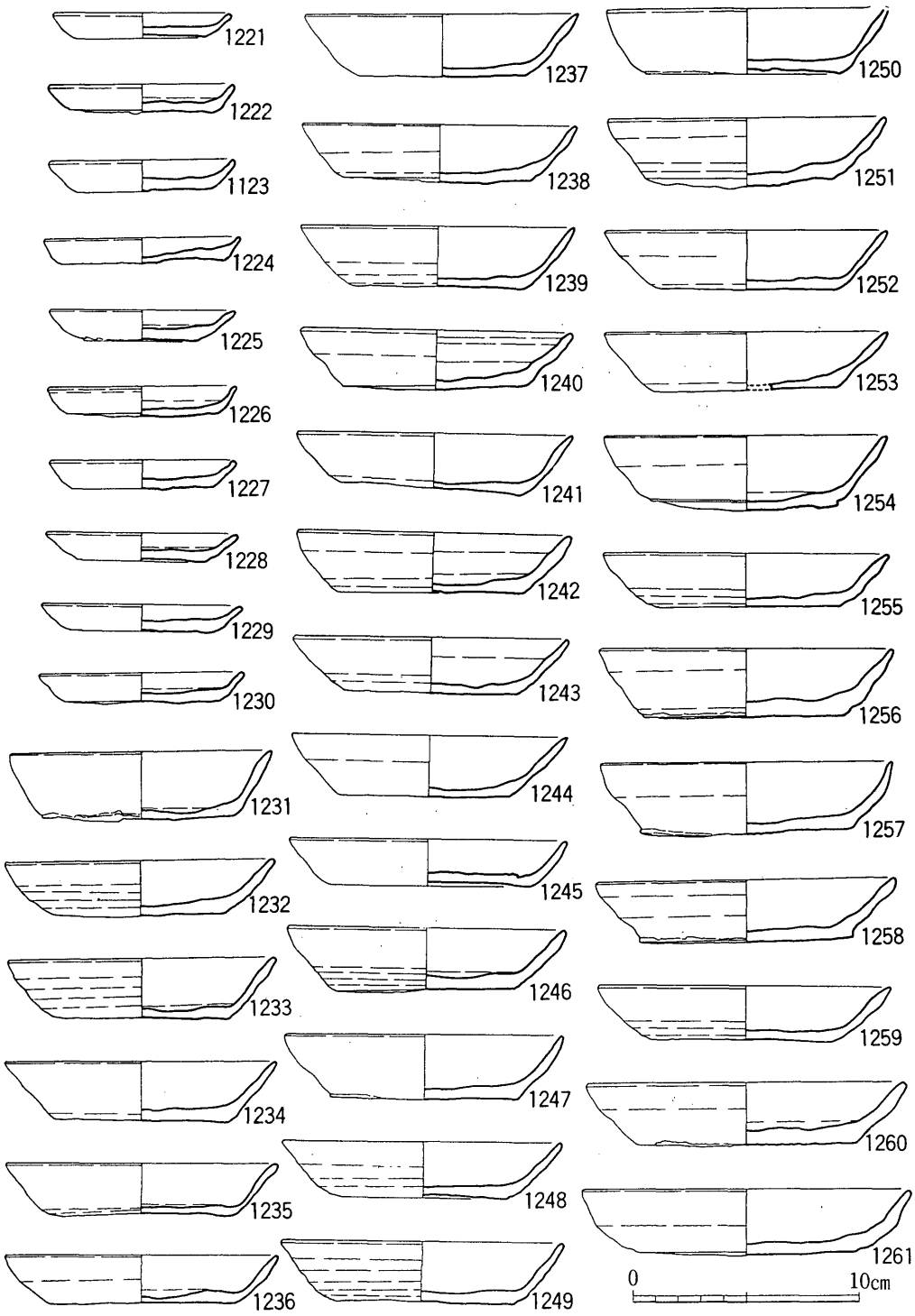
ＳＥ609井戸（36図，19・20表）

b．小皿（Ⅱ―**4**―**b**）（1221～1230）口径8.0～8.9cmであるが，ほぼ8.0～8.5cmである。底径5.1～7.1cm，器高1.0～1.3cmで，器面に横ナデが，内底にナデが施してあり，底面に糸切り痕と板目が残っている。浅黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に砂粒を含む。

c．杯（Ⅱ―**4**―**c**）（1231～1261）口径11.6～13.0cmであるが，約11.8～12.6cmの間に集中している。底径も7.3～9.4cmであるが，7.3～8.5cmに集中する。器高は2.1～3.3cmで，2.1～2.9cmに集中する。器面には横ナデが，内底にはナデが施され，底面に糸切り痕と板目がついている。淡褐色ないし灰白色を呈し，胎土に砂粒を含む。ＳＫ501土坑出土土師器とほぼ同類かややⅡ―4類の中でも古手のほうであろう。



20表　ＳＥ609井戸出土土師器の法量



36図　土師器実測図（ＳＥ609井戸出土）

SD603溝（37・38図，21・22表）

b．小皿（Ⅱ—4—b）（1262～1277）口径7.8～8.1cm，底径5.3～6.45cm，器高1.1～1.4cmで，浅黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目が認められる。

c．杯（Ⅱ—4—c）（1279～1317）口径11.6～12.8cm，底径6.8～8.45cm，器高2.4～3.0cmで，橙色ないし浅黄橙色を呈し，胎土に砂粒を少量含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目が残っている。

小皿			
No.	口径	底径	器高
1	7.8	5.8	1.25
2	7.9	5.4	1.2
3	7.9	5.8	1.4
4	7.9	5.9	1.35
5	7.9	5.8	1.4
6	7.9	6.3	1.1
7	8.0	5.8	1.3
8	8.0	5.3	1.15
9	8.0	6.0	1.3
10	8.8	5.6	1.3
11	8.1	6.0	1.3
12	8.1	5.5	1.35
13	8.1	5.8	1.3
14	8.1	5.5	1.3
15	8.1	5.85	1.4
16	(8.8)	6.45	1.4

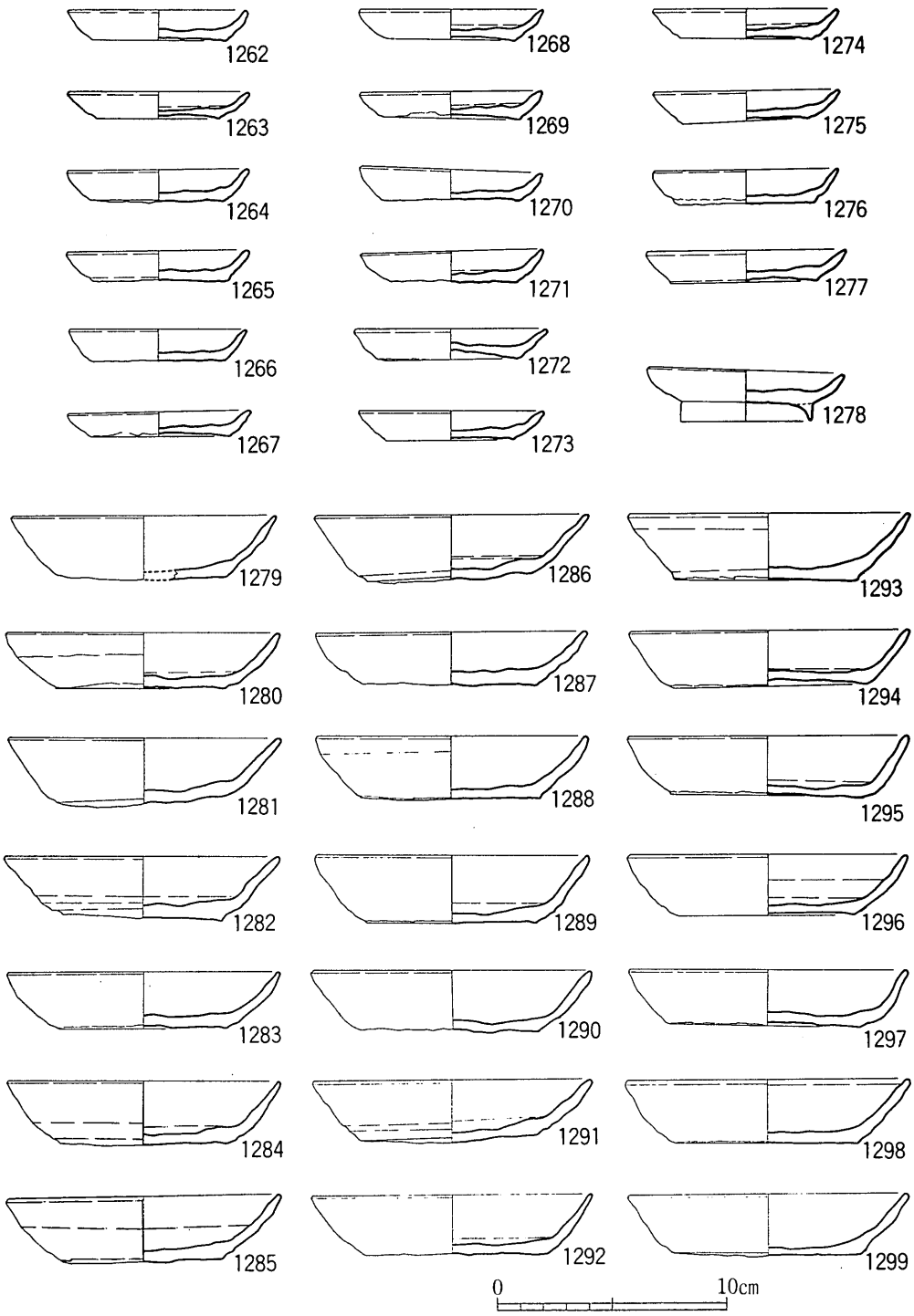
高台付小皿			
No.	口径	底径	器高
1	8.7	5.6	2.3

杯			
No.	口径	底径	器高
1	(11.6)	(7.4)	2.7
2	11.6	7.1	2.4
3	11.7	6.9	2.9
4	11.8	6.9	2.7
5	11.8	6.9	2.4
6	11.8	7.1	2.7
7	11.8	6.8	2.8
8	11.85	7.4	2.9
9	(11.9)	(7.6)	2.3
10	(11.9)	(7.9)	2.6
11	12.0	7.4	3.0
12	12.1	8.0	2.58
13	(12.1)	(7.4)	2.6
14	(12.1)	(7.9)	2.8
15	(12.1)	(7.4)	2.6
16	12.2	8.45	2.5
17	12.2	8.3	2.4
18	12.2	7.8	2.7
19	12.2	8.45	2.5
20	12.2	8.2	2.7
21	12.2	8.2	2.6
22	12.3	7.3	2.7

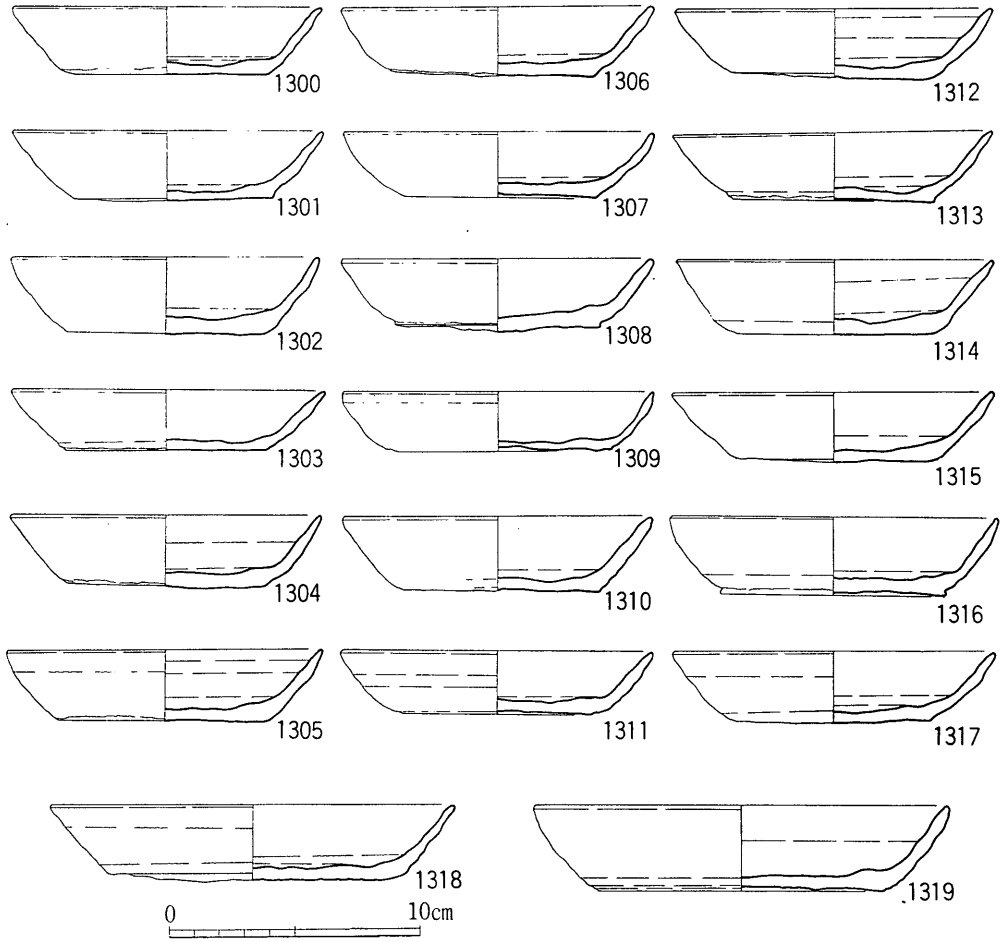
杯			
No.	口径	底径	器高
23	12.4	8.0	2.8
24	12.4	7.9	2.9
25	12.4	8.0	2.4
26	12.4	7.8	2.8
27	12.4	8.4	2.8
28	12.4	8.0	2.7
29	12.4	7.5	2.6
30	(12.5)	7.8	2.85
31	(12.6)	7.7	2.55
32	12.7	7.9	2.6
33	12.7	8.0	2.7
34	12.7	8.4	2.8
35	12.8	8.0	2.8
36	(12.8)	(8.4)	2.8
37	12.8	8.0	2.8
38	(13.2)	(8.0)	3.13
39	13.7	8.1	2.9

大杯			
No.	口径	底径	器高
1	16.0	11.8	3.0
2	(16.6)	(11.4)	3.2

21表　SD603 溝出土土師器計測表



37図　土師器実測図（ＳＤ603溝出土―１）

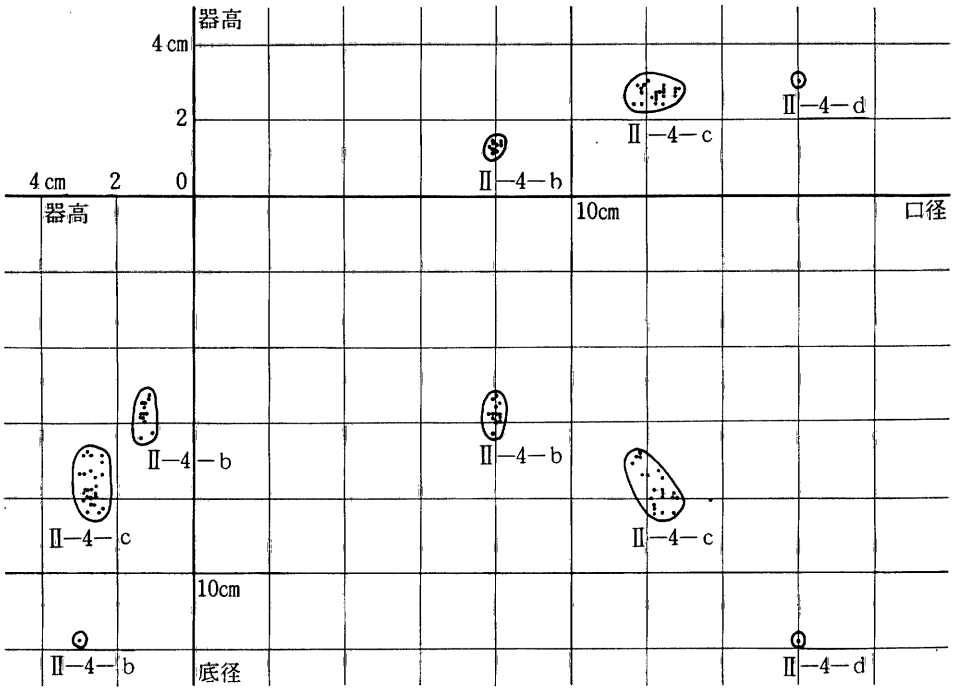


38図　土師器実測図（ＳＤ 603 溝出土―２）

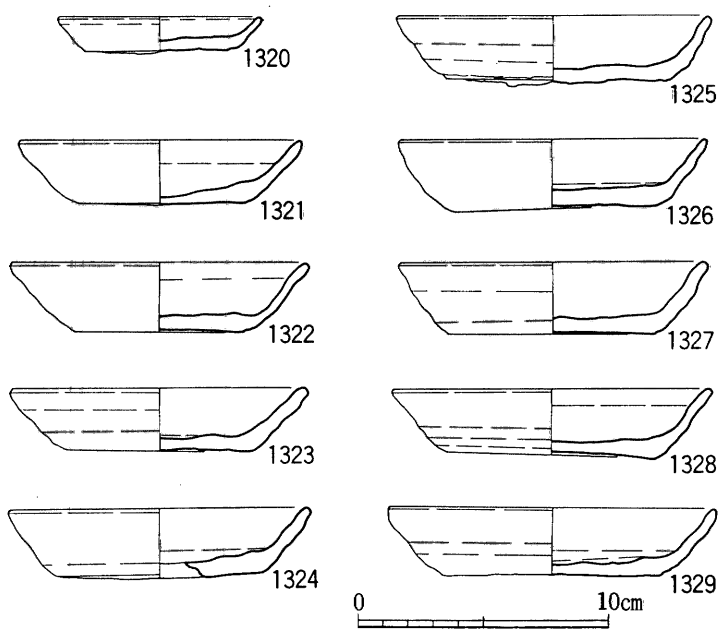
d．大杯（Ⅱ―**4**―**d**）（1318・1319）口径16.0～16.6cm，底径 11.4～11.8cm，器高 3.0～3.2cmで，つくりは杯とかわりがない。

f．高台付小皿（Ⅱ―**4**―**f**）（1278）口径8.7cm，高台径5.6cm，器高2.3cmで，器面には横ナデが，内底にはナデが施され，高台内の底面には板目がのこっている。浅黄橙色を呈し，胎土に砂粒を含む。

ＳＤ603溝出土の土師器はⅡ―４類の中でも比較的新しい方に属するものと思われる。



22表　ＳＤ 603 溝出土土師器の法量

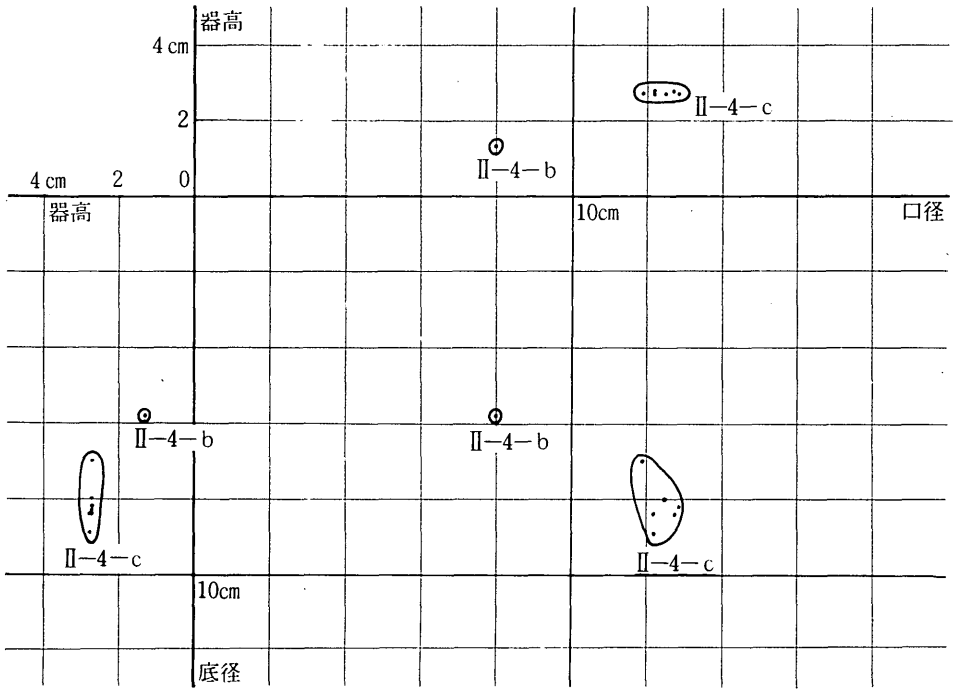


39図　土師器実測図（ＳＥ604井戸出土）

ＳＥ604井戸（39図，23・24表）

b．小皿（Ⅱ―**4**―**b**）（1320）口径8.0cm，底径1.3cm，器高1.3cmである。

c．杯（Ⅱ―**4**―**c**）（1321～1329）口径11.9～12.85cm，底径7.0～8.9cm，器高2.45～2.75cmで，器面に横ナデが，内底にナデがみられ，底面に糸切り痕と板目がのこっている。浅黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に少量の砂粒を含む。全体としてⅡ―4類土師器にはいるが，1321を除くとⅡ―3類とⅡ―4類の中間にくる土師器群である。



23表　ＳＥ604井戸出土土師器の法量

小皿				杯				杯			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	8.0	5.7	1.3	2	11.9	7.0	2.7	6	12.5	8.0	2.7
杯				3	(12.0)	(7.4)	2.45	7	12.7	8.4	2.75
No.	口径	底径	器高	4	12.2	8.4	2.7	8	12.85	8.2	2.7
1	(11.6)	(7.3)	2.6	5	12.2	8.9	2.75	9	(13.1)	8.3	2.7

24表　ＳＥ604井戸出土土師器計測表

ＳＤ601溝（40図，25・26表）

b．小皿（Ⅱ－4－**b**）（1330～1338）口径7.5～8.4cm，底径5.2～6.5cm，器高1.0～1.4cmで，浅黄色ないし灰白色を呈し，胎土にあまり砂粒を含まない。器面には横ナデが，内底にはナデが施され，底面に糸切り痕と板目がついている。

c．杯（Ⅱ－4－**c**）（1339～1367）口径11.4～12.8cm，底径7.0～8.4cm，器高2.2～3.2cmであるが，それより大きめのⅡ－3類に属すると思われる杯もある。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目がのこっている。浅黄橙色ないし灰白色を呈し胎土細砂を含む。

d．大杯（Ⅱ－4－**d**）（1368）口径15.2cm，底径11.0cm，器高3.2cmで，浅黄橙色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。

小皿			
No.	口径	底径	器高
1	7.5	5.5	1.0
2	7.6	5.5	1.2
3	7.6	5.2	1.4
4	7.8	5.9	1.4
5	7.9	6.5	1.4
6	7.9	6.1	1.4
7	8.25	5.7	1.2
8	(8.3)	6.1	1.1
9	8.4	6.4	1.1

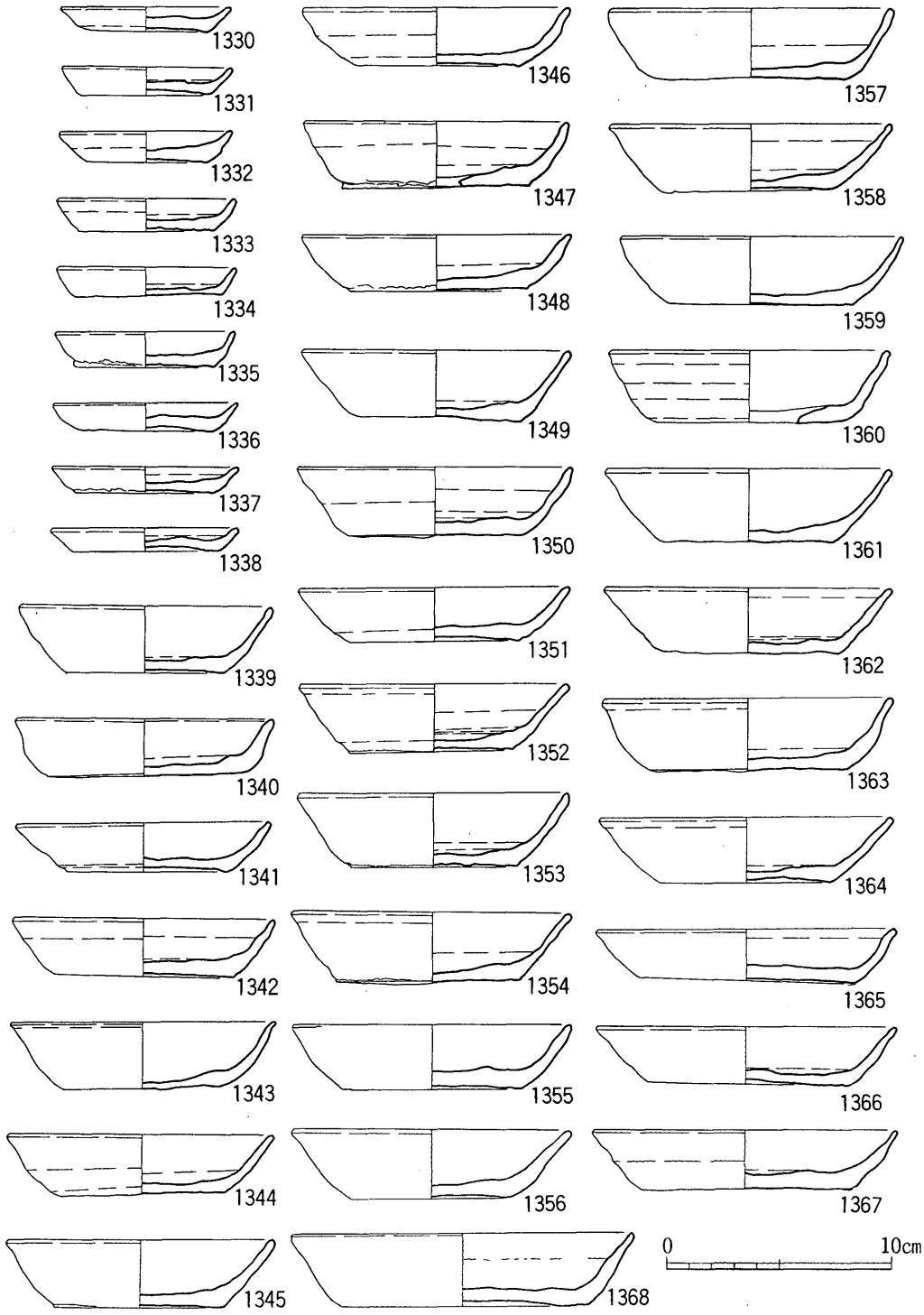
杯			
No.	口径	底径	器高
1	11.4	7.1	2.85
2	11.4	8.4	2.5
3	11.4	7.0	2.2
4	11.6	7.9	2.4

杯			
No.	口径	底径	器高
5	11.6	7.1	2.6
6	11.75	7.5	2.6
7	11.8	7.5	3.0
8	11.8	7.1	2.6
9	11.8	8.2	2.9
10	11.9	7.9	2.5
11	11.9	7.2	2.9
12	12.1	7.8	2.9
13	12.1	7.6	2.4
14	12.1	7.2	2.9
15	12.3	7.3	3.2
16	12.3	8.2	2.9
17	12.4	7.6	2.65
18	12.4	7.1	2.9
19	(12.5)	7.5	3.0

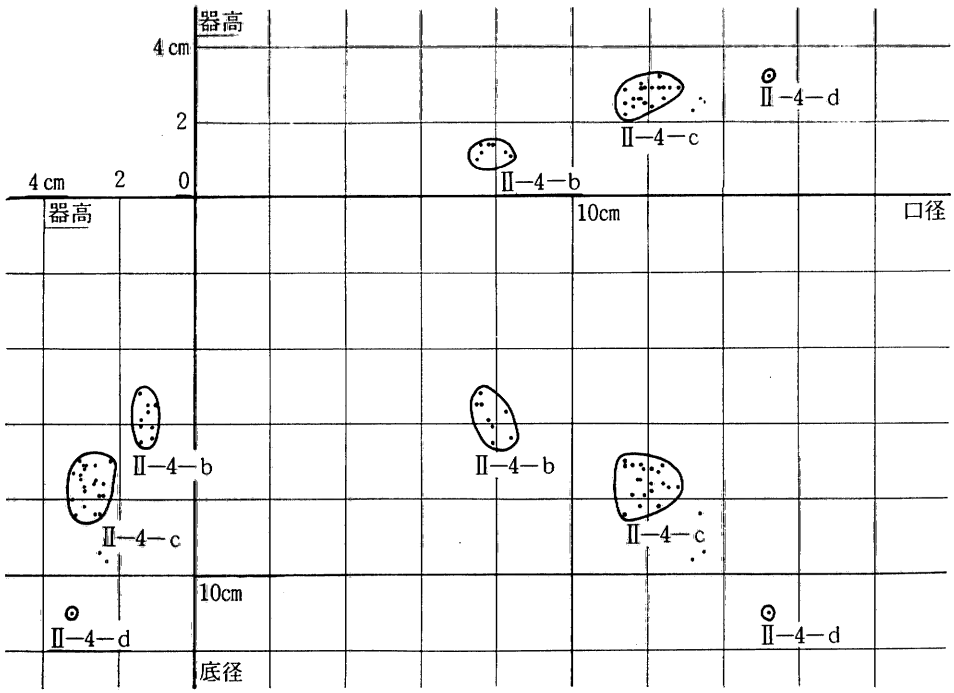
杯			
No.	口径	底径	器高
20	12.55	7.7	2.9
21	(12.6)	7.0	3.0
22	(12.6)	8.4	3.1
23	(12.8)	(7.6)	3.2
24	12.8	7.7	2.9
25	(12.9)	8.0	3.2
26	(13.0)	7.35	3.0
27	13.2	9.6	2.3
28	13.4	8.4	2.6
29	13.5	9.4	2.5

大杯			
No.	口径	底径	器高
1	15.2	11.0	3.2

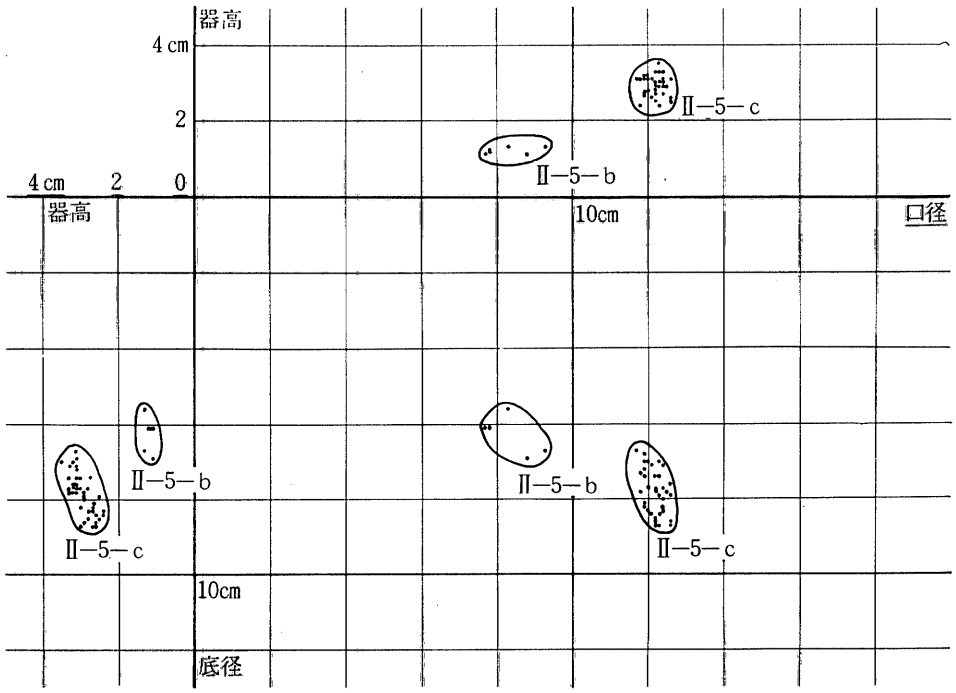
25表　ＳＤ601 溝出土土師器計測表



40図　土師器実測図（ＳＤ 601 溝出土）



26表　ＳＤ 601 溝出土土師器の法量



27表　ＳＤ 602 溝出土土師器の法量

〔5〕

SD602溝（41・42図，27・28表）

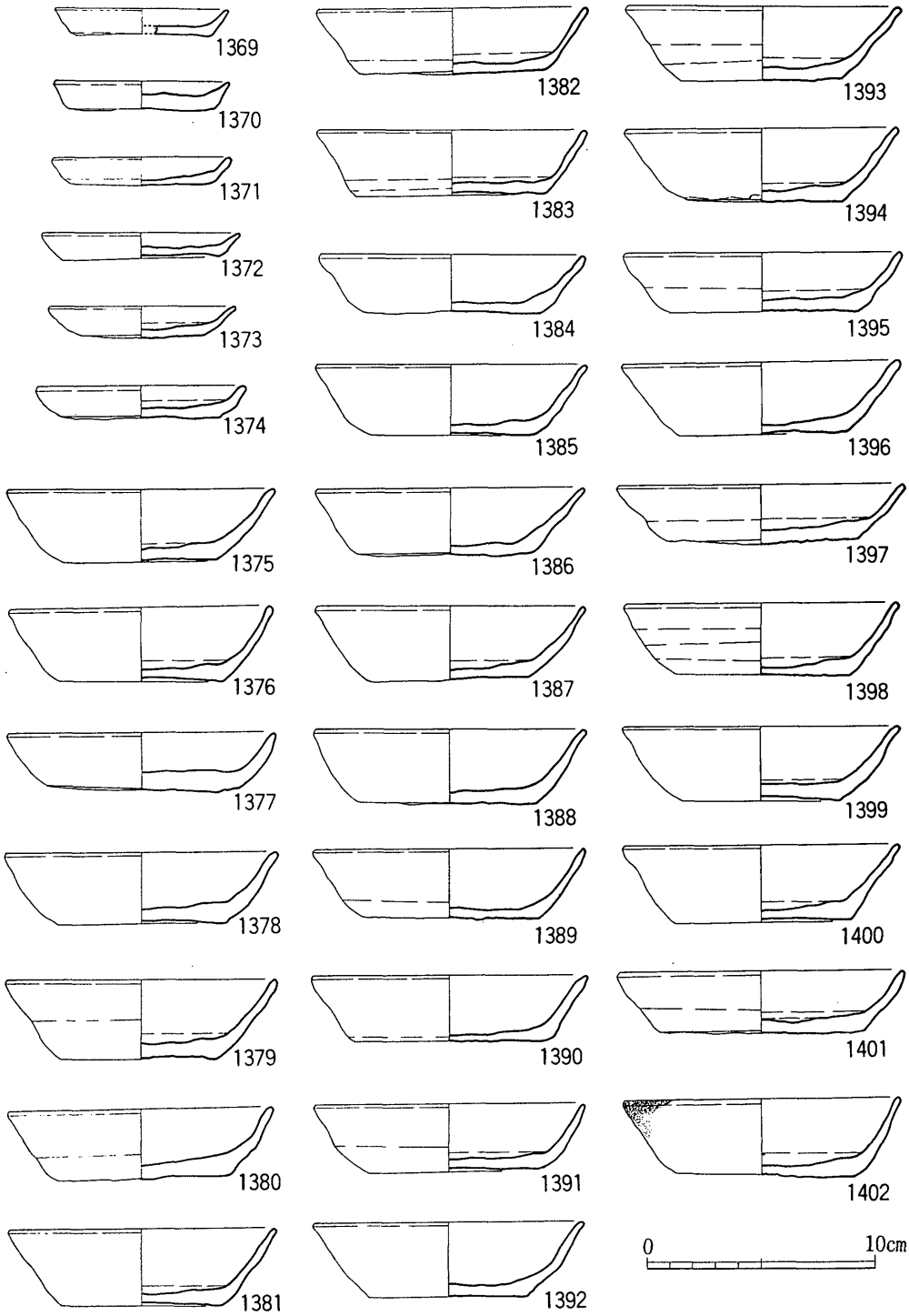
この溝は黄色土の山土で埋められているが，溝の底あたりは暗灰色粘質土で，その土層から完形ないしそれに近い土師の杯や小皿が，多量に出土している。

b．小皿（Ⅱ—**5**—**b**）（1369～1374）口径7.7～9.3cm，底径5.6～6.9cm，器高2.1～2.3cmで7cm台のものが，約半数あり器面に横ナデが，内底にはナデが施され，底面に糸切り痕と板目がついている。浅黄色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含むこの小皿群に特小皿は，まだ認められない。

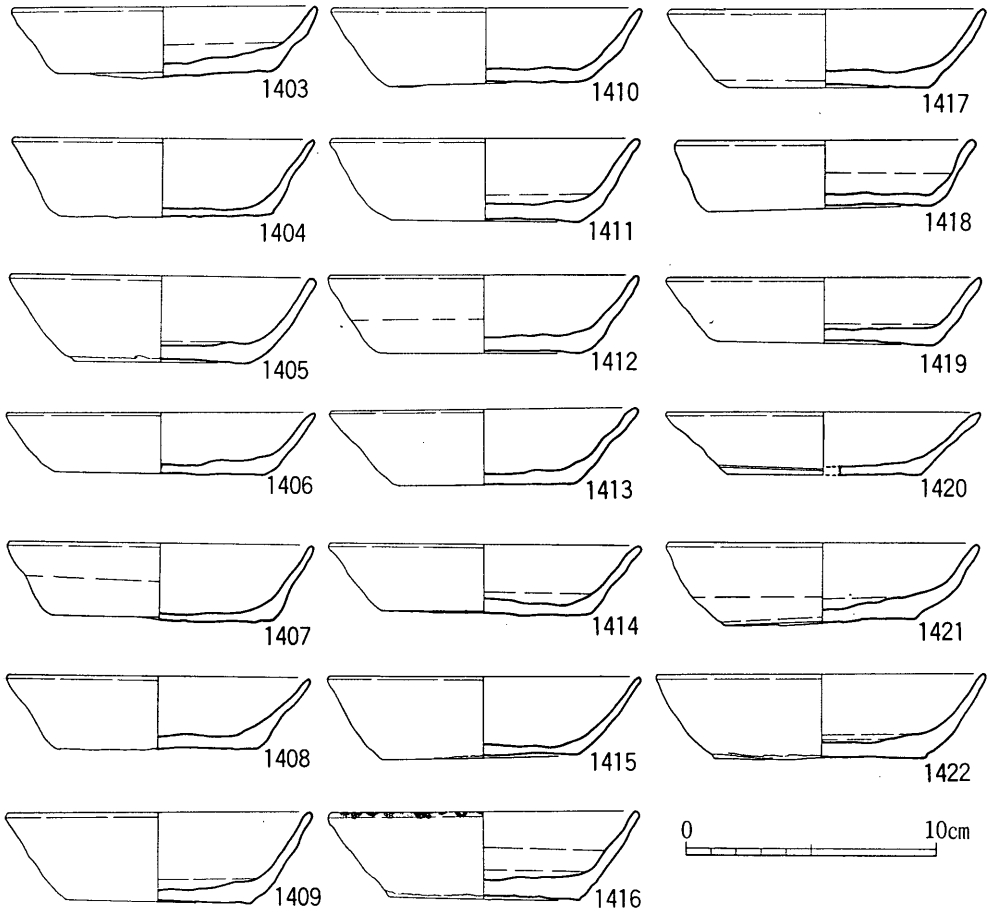
c．杯（Ⅱ—**5**—**c**）（1375～1422）口径11.7～12.6cm，底径6.7～8.7cm，器高2.3～

小皿				杯				杯			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	7.7	6.1	1.1	12	11.9	7.4	2.75	31	12.3	7.0	3.5
2	7.8	6.1	1.15	13	11.9	7.0	3.2	32	12.3	8.4	2.4
3	7.8	6.1	1.2	14	12.0	7.65	3.2	33	12.3	8.7	3.0
4	8.8	6.9	1.1	15	12.0	7.7	3.1	34	12.3	7.9	2.9
5	8.3	5.6	1.3	16	12.0	8.3	2.8	35	12.3	7.4	3.3
6	9.3	6.7	1.3	17	12.0	7.7	2.8	36	12.4	7.7	3.1
杯				18	12.0	7.0	3.2	37	(12.4)	7.4	3.1
No.	口径	底径	器高	19	12.1	7.1	3.1	38	12.4	8.2	3.0
1	11.7	6.7	3.1	20	12.1	6.9	3.1	39	(12.4)	7.6	3.15
2	11.8	7.3	2.4	21	12.1	8.4	2.6	40	12.4	8.3	2.7
3	(11.8)	7.4	3.1	22	12.2	7.4	3.0	41	12.4	8.0	2.9
4	11.8	7.8	3.1	23	12.2	8.5	2.5	42	12.4	7.1	3.3
5	11.8	7.8	3.1	24	12.2	7.7	3.0	43	12.5	7.8	2.9
6	11.9	6.8	3.2	25	(12.2)	7.4	3.1	44	12.6	8.7	2.6
7	11.9	7.0	3.2	26	12.2	7.8	3.3	45	12.6	8.6	2.6
8	11.9	8.1	2.65	27	12.2	8.7	2.7	46	12.6	7.9	2.5
9	11.9	8.2	2.7	28	12.2	7.7	3.3	47	12.6	7.6	3.1
10	(11.9)	7.8	2.5	29	12.2	8.5	2.8	48	(13.2)	7.6	3.2
11	11.9	7.2	3.1	30	12.2	8.6	2.9				

28表　SD602 溝出土土師器計測表



41図　土師器実測図（ＳＤ 602 溝出土―１）



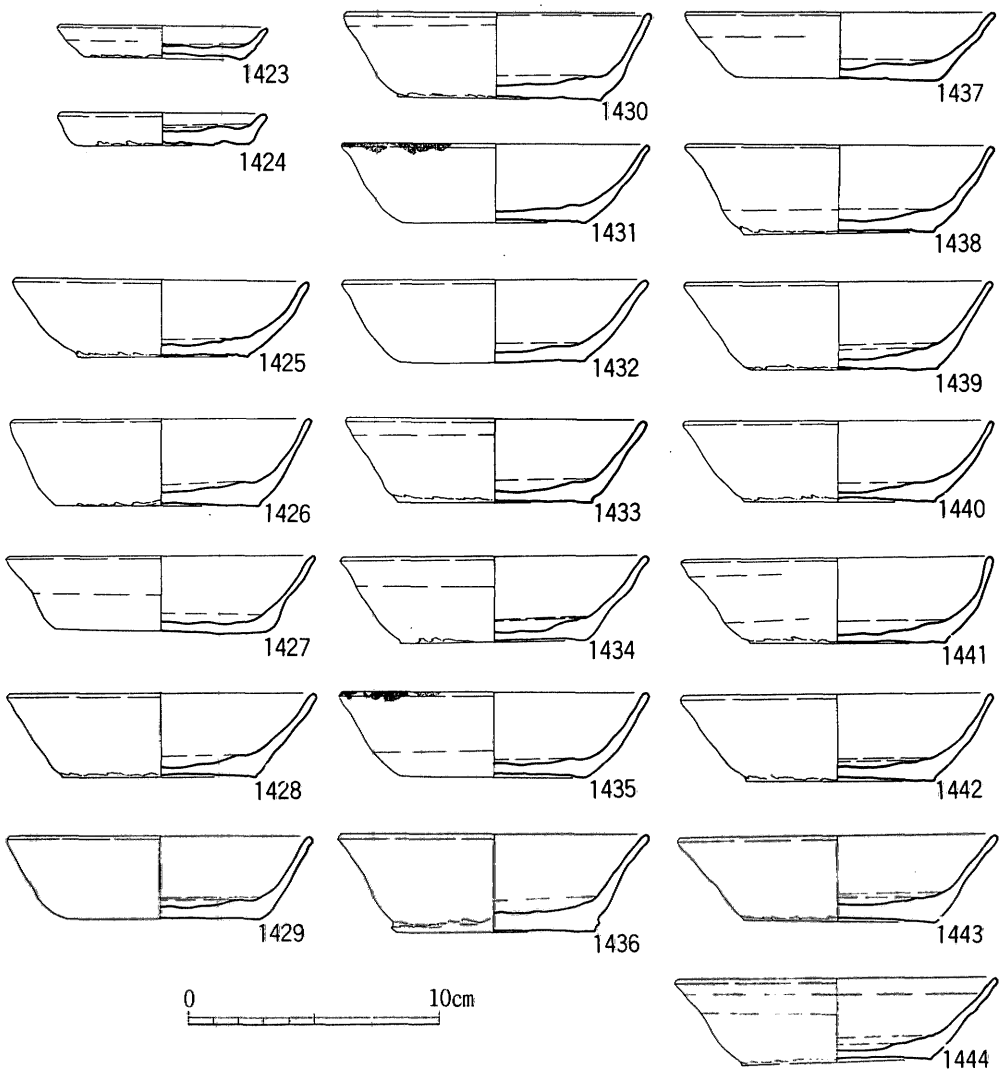
42図　土師器実測図（ＳＤ 602 溝出土―２）

3.5cmである。しかしこの中に底径がやや高くて器高が低いものと，底径が小さく器高が高いものとの２種があり，前者は底径約 7.7 ～ 8.7cmで器高約 3 cm以下で，後者は 6.7～7.8cm，器高約 3 cm前後である。前者は Ⅱ―４類の器形を残し，後者はすでに Ⅱ―５類に近い形をしている。このことからこの時期をⅡ―４類からⅡ―５類への過渡期ないし，Ⅱ―５類の最初の時期と考えてよいであろう。浅黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面には糸切り痕と板目が認められる。

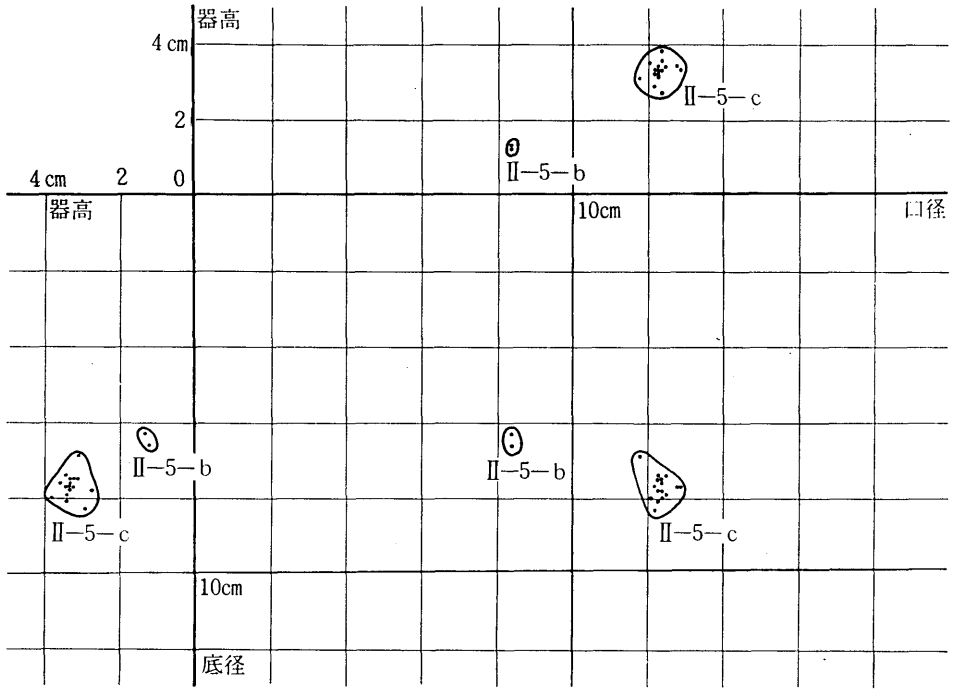
ＳＫ621土坑（43図，29・30表）

b．小皿（Ⅱ－**5**－**b**）（1423・1424）口径8.4cm，底径6.3～6.6cm，器高1.2～1.3cmで，器面に横ナデが，底面にナデが施され，底面に糸切り痕と板目が残っている。浅黄橙色ないし灰白色を呈し，胎土に少量砂粒を含む。

c．杯（Ⅱ－**5**－**c**）（1425～1444）口径11.8～12.9cm，底径6.9～8.3cm，器高2.7～3.8cmで，器面には横ナデが，内底にはナデが施され，底面に糸切り痕と板目が認められる。浅黄橙色ないし灰黄色を呈し，胎土に少量砂粒を含み，焼成は良好である。



43図　土師器実測図（ＳＫ621土坑出土）



29表　ＳＫ 621 土坑出土土師器の法量

小皿				杯				杯			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	8.4	6.3	1.3	5	12.2	7.7	3.2	13	12.4	7.8	2.7
2	8.4	6.6	1.2	6	12.3	8.1	3.4	14	12.4	7.5	3.3
杯				7	12.3	7.5	3.1	15	12.4	7.6	3.55
No.	口径	底径	器高	8	12.3	7.5	3.2	16	12.4	7.6	3.3
1	11.8	6.9	3.1	9	12.3	7.8	3.3	17	12.5	7.9	3.4
2	12.1	8.0	3.5	10	12.3	7.4	3.4	18	12.5	7.4	3.4
3	12.2	8.3	2.9	11	12.35	7.5	3.3	19	12.8	7.7	3.4
4	12.2	7.7	3.3	12	12.4	8.0	3.8	20	12.9	7.7	3.3

30表　ＳＫ621 土坑出土土師器計測表

各土坑出土土師器　(44図)

SK624土坑 (44図1445～1447)

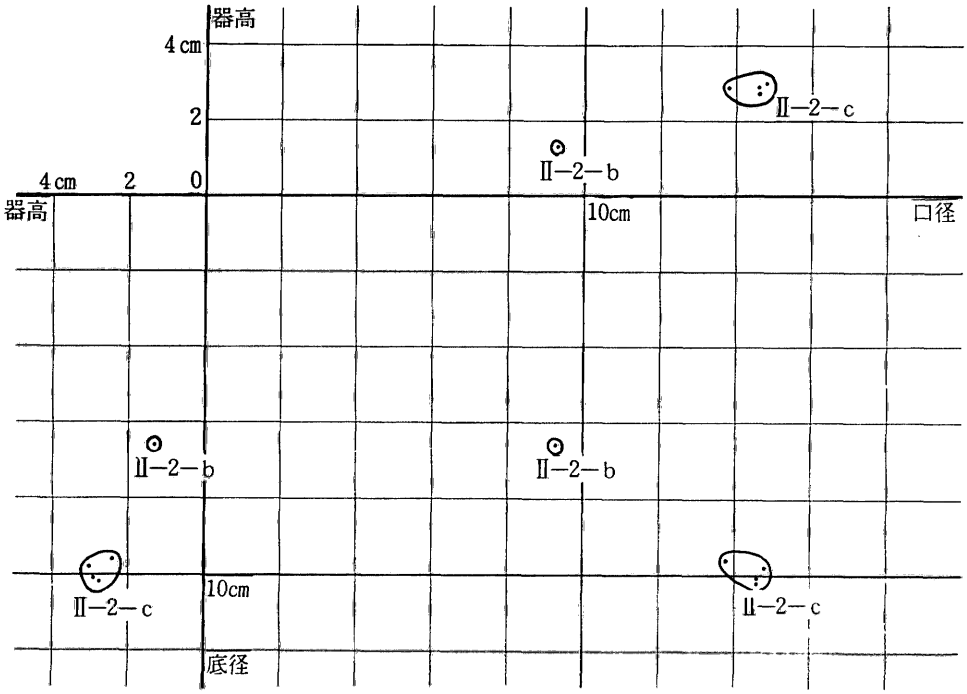
c. 杯　口径12.2～12.4cm, 底径7.5～8.7cm, 器高2.5～2.8cmでⅡ－4類土師器に相当する。

SK629土坑 (44図, 31・32表) (1448～1454)

b. 小皿 (1448) 口径9.3cm, 底径6.6cm, 器高1.3cmである。

c. 杯 (1451～1454) 口径13.8～14.8cm, 底径9.6～10.2cm, 器高2.4～3.0cmである。

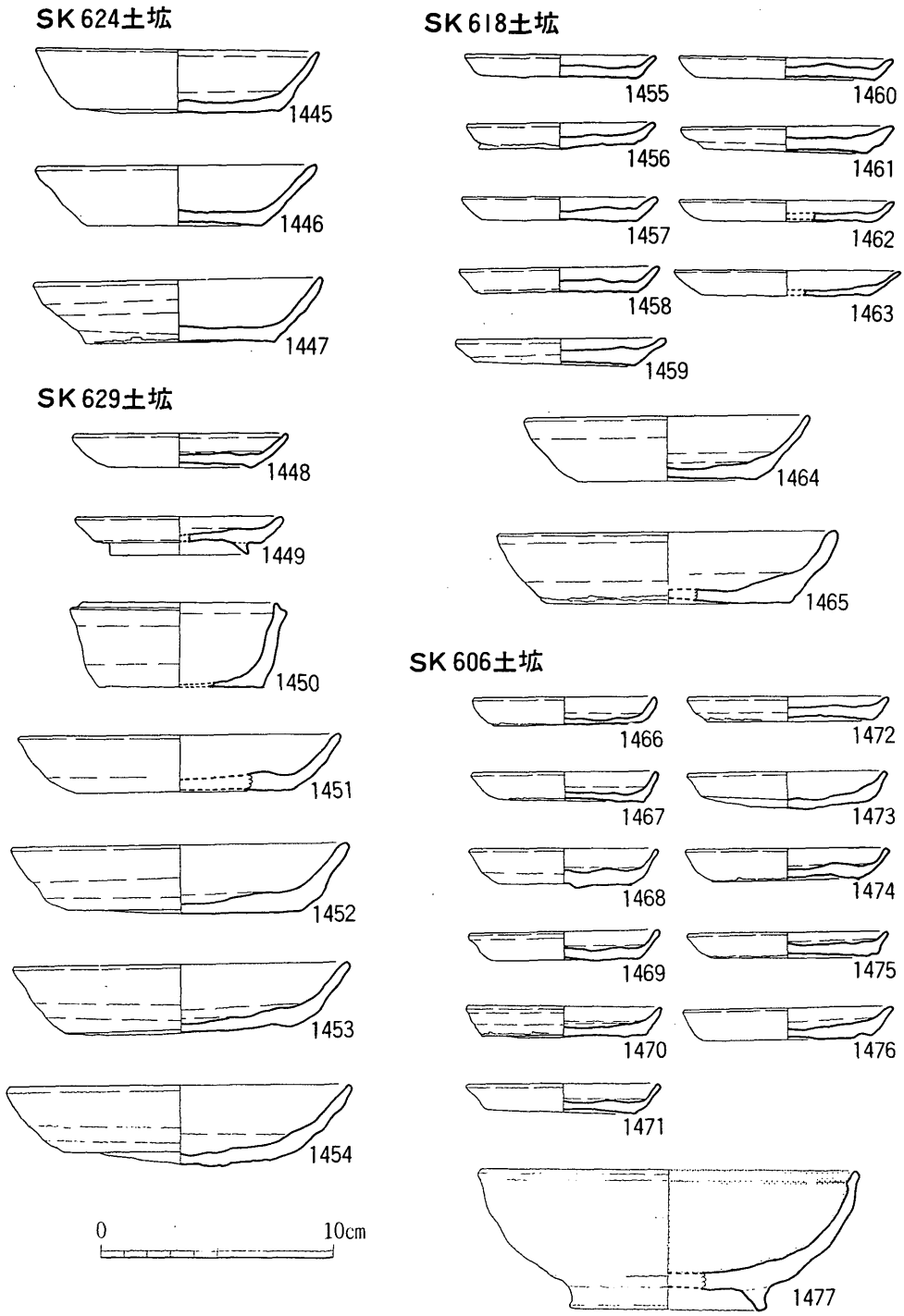
f. 高台付小皿 (1449) 口径9.0cm, 高台径6.05cm, 器高1.5cmである。



31表　SK629土坑出土土師器の法量

小皿				高台付小皿				杯			
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
1	(9.3)	6.6	1.3	1	(9.0)	(6.05)	1.6	1	(13.8)	(9.6)	2.4
								2	14.6	10.1	2.9
								3	14.6	10.2	2.75
								4	14.8	9.8	3.0

32表　SK629 土坑出土土師器計測表



44図　土師器実測図（ＳＫ624，ＳＫ629，ＳＫ618，ＳＫ606土坑出土）

このほかに**1450**は口縁端が蓋受部のようになった土器で黄灰色を呈し，胎土は砂粒を含まない。

この土器群はⅡ－2類土師器で，かつて高台付小皿はⅡ－3類のものの混入かと考えたこともあったが，Ⅱ－2類にも少量伴うようである。

ＳＫ618土坑（44図1455～1465）

b．小皿（1455～1463）口径8.3～9.8cm，底径6.6～7.8cm，器高0.8～1.1cmで薄手で器高が低い。

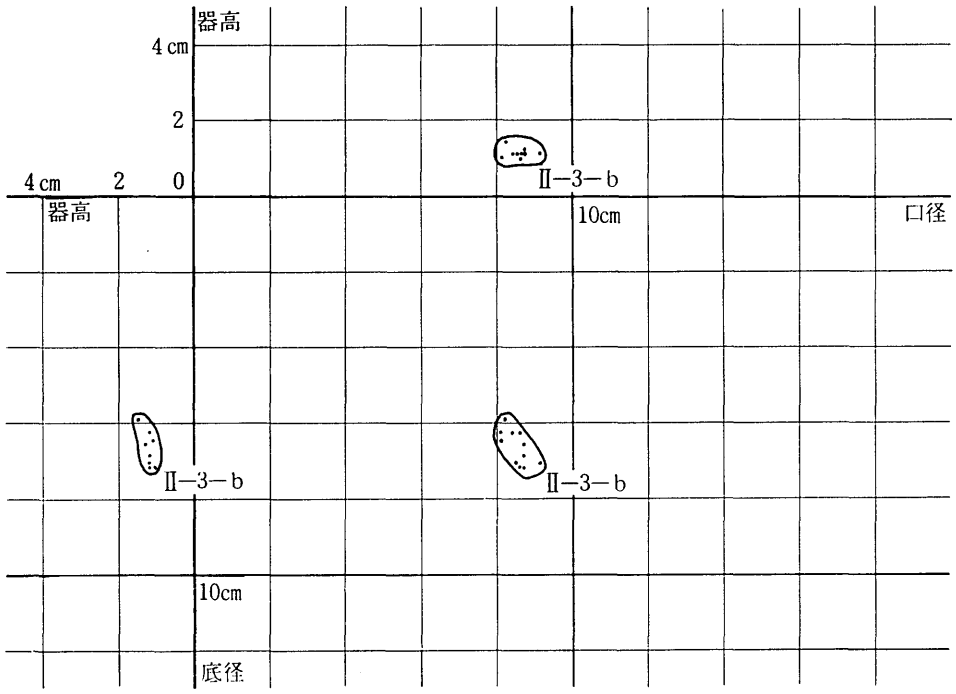
c．杯（1464・1465）**1464**は口径12.4cm，底径7.8cm，器高2.5cm，**1465**は口径14.4cm，底径10.6cm，器高3.1cmで，いずれも復原径である。

この土器群はⅡ－3類土師器に相当するもので，杯の一部にⅡ－2類に近いものもまじっているようである。

ＳＫ606土坑（44図，33・34表）（1466～1477）

b．小皿（1466～1476）口径8.1～9.1cm，底径5.85～7.1cm，器高1.05～1.5cmで，Ⅱ－3類土師器に該当するものである。

内黒土器椀（1477）口径16.6cm，高台径8.6cm，器高5.9cmで内面黒色で，研磨されているかどうか不明である。外面は浅黄橙色で，胎土に砂粒を含まない。この土器は下層からの混入と思われる。



33表　ＳＫ606土坑出土土師器の法量

小　皿				小　皿				小　皿			
No.	口　径	底　径	器　高	No.	口　径	底　径	器　高	No.	口　径	底　径	器　高
1	8.1	6.4	1.1	6	8.6	6.2	1.2	11	9.1	7.0	1.2
2	8.1	6.2	1.1	7	8.6	7.1	1.05	高　台　付　椀			
3	8.2	5.85	1.5	8	8.7	7.1	1.2	No.	口　径	底　径	器　高
4	8.4	6.2	1.2	9	8.7	6.5	1.3	1	(16.6)	(8.6)	5.9
5	8.5	7.0	1.2	10	8.7	6.8	1.2				

34表　ＳＫ606 土坑出土土師器計測表

各井戸出土土師器　(45図)

ＳＥ602井戸（45図1478～1480）

c．杯　2種類に分離し，**1478**は口径13.4cm，底径9.0cm，器高2.4cmでⅡ－3類土師器に相当する。**1479**と**1480**は口径14.1～14.4cm，底径9.8～9.9cm，器高2.9cmで，Ⅱ－2類土師器である。

ＳＥ608井戸（45図1481～1486）

b．小皿（1481～1484）口径7.95～9.2cm，底径5.4～7.9cm，器高1.1cmで，**1484**は特に大きい。

c．杯（1485・1486）口径12.2～12.8cm，底径8.2～8.5cm，器高2.6～2.7cmである。一応Ⅱ－4類土師器であるが，Ⅱ－3類とⅡ－4類の中間に位置し，ＳＥ604井戸とほぼ同類であろう。

ＳＥ613井戸（45図1487～1492）

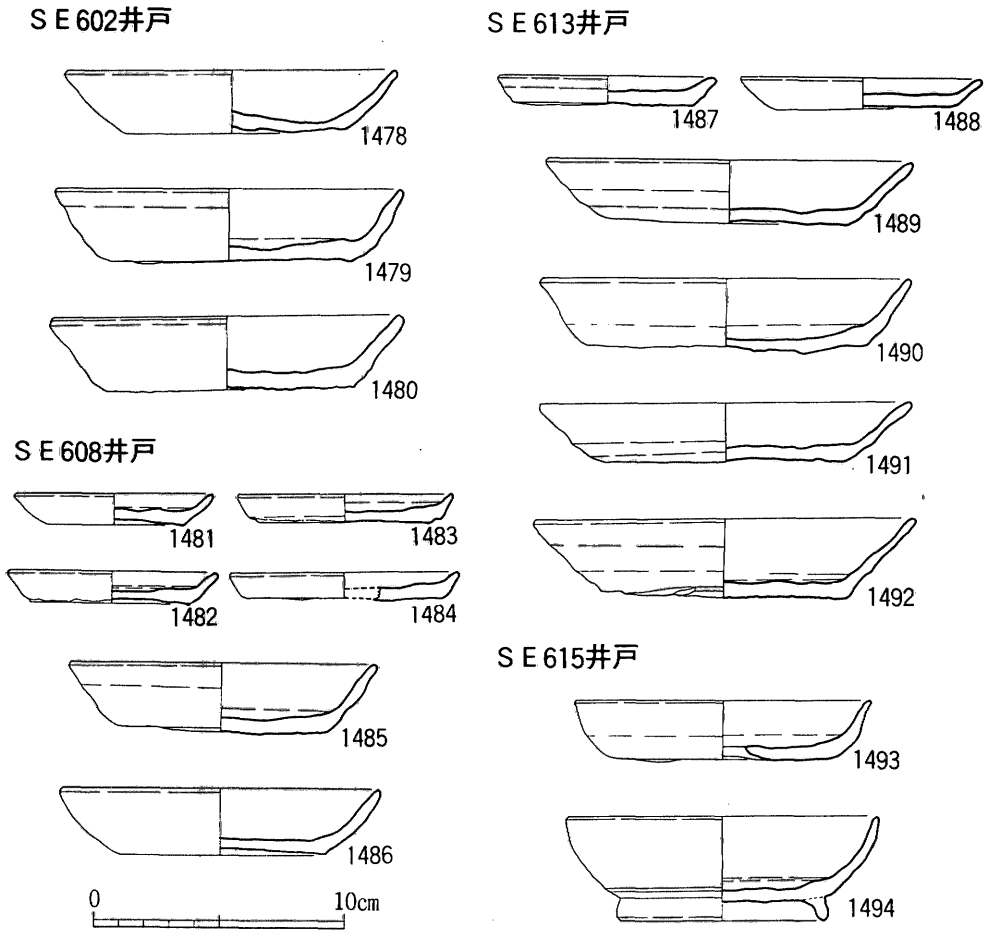
b．小皿（1487・1488）口径9.5～9.6cm，底径7.0～7.2cm，器高1.25cmで，比較的薄手である。

c．杯（1489～1492）口径14.6～15.25cm，底径9.4～11.2cmであるが，**1490**のみ底径が大きい。器高2.4～3.05cmである。Ⅱ－2類土師器のなかでもやや古い方に位置づけることができる。

ＳＥ615井戸（45図1493・1494）

b．小皿（1493）口径11.9cm，底径8.6cm，器高2.3cmで，底面にヘラ切り痕が残っている。なお底面中央に内側から叩いて穿孔している。

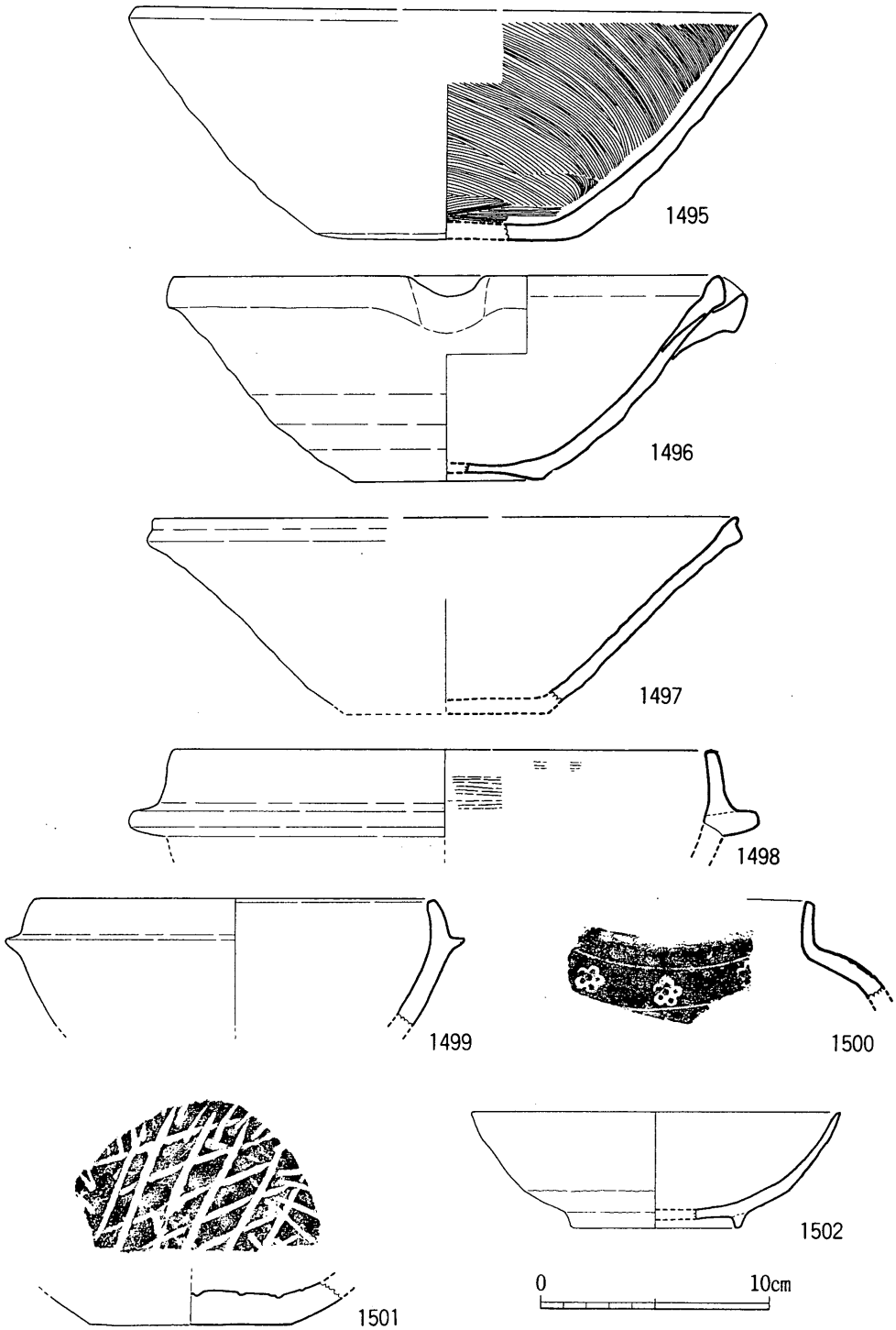
i．高台付小椀（1494）口径12.3cm，高台径8.0cm，器高4.15cmで体部に丸味があり，器面にナデがみられる。高台内の底面にヘラ切り痕が残っている。Ⅰ－2Ａ類またはⅠ－2Ｂ類に相当する土師器である。



45図　土師器実測図（ＳＥ602，ＳＥ608，ＳＥ613，ＳＥ615井戸出土）

4.　片　　口　（46図1495～1497）

片口の破片は多数出土したが，比較的形のあるもののうち，**1495**は片口部は不明であるが，瓦器質で内面に刷毛目がついている。口縁には横ナデが施されているが，外面は荒れているため器面調整は不明である。全面黒色で，胎土は比較的精製されている。旧トレンチ埋土内出土。**1496**は口縁が肥厚してやや内へ折れ，その外面が黒色を呈するもので，外面は横ナデが施され，内面下部は使用ずれのためかザラザラした感じである。灰色を呈し胎土に砂粒を少し含むやや軟質の須恵器質の片口である。ＳＤ602溝出土。**1497**は片口部を欠いているが，口縁部が部厚く黒色である。灰色を呈し胎土に少量砂粒を含む。３層出土。**1501**は摺鉢の底部と思われるもので，内底部に粗い沈線が斜格子目状に入れられ，おそらく器壁の内面にも沈線がつけられていたものと思われる。土師質で外面黒色，内面褐色を呈している。ＳＤ601溝出土。



46図　各種土器実測図

5. 土　鍋　(46図1498・1499)

石鍋と器形が類似し鍔がついている。**1498**はその製作法がよくわかる例である。内面は横方向の粗い刷毛目があり，他は横ナデが施してある。鍔の下面は煤により暗褐色に変色している。土師質で淡茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。3層出土。**1499**はやや小型で，鍔より下部は焼成による赤変がみられる。土師器質で，黄褐色を呈し，胎土に細砂を多く含む。3層柱穴出土。

6. 土　釜　(46図1500)

瓦器質で肩部の沈線間に梅花文の型押しがみられる。淡褐色で，胎土に細砂を多く含む。2層出土。

7. 瓦器椀　(46図1502)

今回の調査では，瓦器椀が多くつくられる時期の遺構がすくないためか，瓦器椀の量は多くない。**1502**は全面黒色であるが，口縁部内外が特に黒色が強く，口縁外面は横ナデが施してあり，外面上半には横位の極めて粗いヘラ磨きがみられる。胎土は精製され砂粒をほとんど含まず，焼成は堅い。SK628出土。

8. 磁　器　(47～50図)

第6次の調査でも磁器類が多量に出土したが，ある面では完形に近いものなど大型破片は少なかった。分類については多少の矛盾や細分化の問題も出てきたが，一応従来通りの分類に従った。

1類（47図1503～1509）深緑色ないし褐味灰緑色の釉が薄くかかった青磁で，胎土は白灰色ないし灰色を呈するものが多い。いわゆる越州窯製とよばれているものである。見込みと床付部に重ね土の跡が残っているものも多い。**1504**は高台をもち床付部には釉はない。4層からの出土である。**1508**は小さな円盤状の底部で見込みと底面に重ね土の跡がみられる。**1509**は脚部で，胎土はにぶい褐色で，化粧土を施し，灰褐色の釉がかかっている。**1504**を除いてすべて3層出土である。

3類（47図1510～1514）白磁で，口縁部がやや外へ張り出し，薄手の高い高台をもつ椀で，口縁内側や見込みにも沈線が入れられたものが多い。また白い化粧土の上に釉がかけられているようである。**1514**は内面に櫛描文が描かれている。**1510**・**1512**・**1514**は3層出土，**1511**はSE616井戸出土，**1513**は4層出土。

4類（47図1515～1518）見込みの部分に，焼成前に環状に釉をかきとった跡を残す白磁で，高台部は3類にくらべてやや太めで低い。**1517**の胎土は淡灰色で，釉は濁緑灰色である。内面に

は櫛描文が描かれている。**1518**は小皿で化粧土の上に体部上半と内面に灰白色の釉をかけている。以上すべて3層出土である。

その他の白磁として**1519**は太い高台をもち，見込みに焼成前に釉を環状にかきとっている。胎土は明灰色で内面に化粧土の上に薄灰色の釉がかかっている。2層出土。**1520**は底面を除いて白味を帯びた灰白色の釉がかかり，胎土は白色に近い。SK628土坑出土。**1521**は見込みの部分が大きくくぼんでいるもので，底部の高台は大きくない。胎土は浅黄灰色で，釉は明オリーブ灰色で，貫入がみられる。SE604井戸掘方出土。**1522**は3類に似た白磁であるが，高台部が低い。見込みに沈線があり，胎土は灰白色で釉は黄白色である。3層出土。**1523**は見込みに焼成前に環状に釉をかき取り，高台床付部も釉をかきとっている。胎土は灰白色で，透明な明オリーブ灰色の釉がかかっている。器形，製作法，釉が特異であり，あるいは新しい時代のものかもしれない。3層から出土。

c.（1524）白磁壷の底部で，極めて厚い。釉のない部分は褐色を呈している。胎土は淡灰色で，釉は黄味灰色である。なお高台床付部付近には，焼成時に焼付がないように白味を帯びた重ね土状のものが薄く塗布されている。SK606土坑出土。

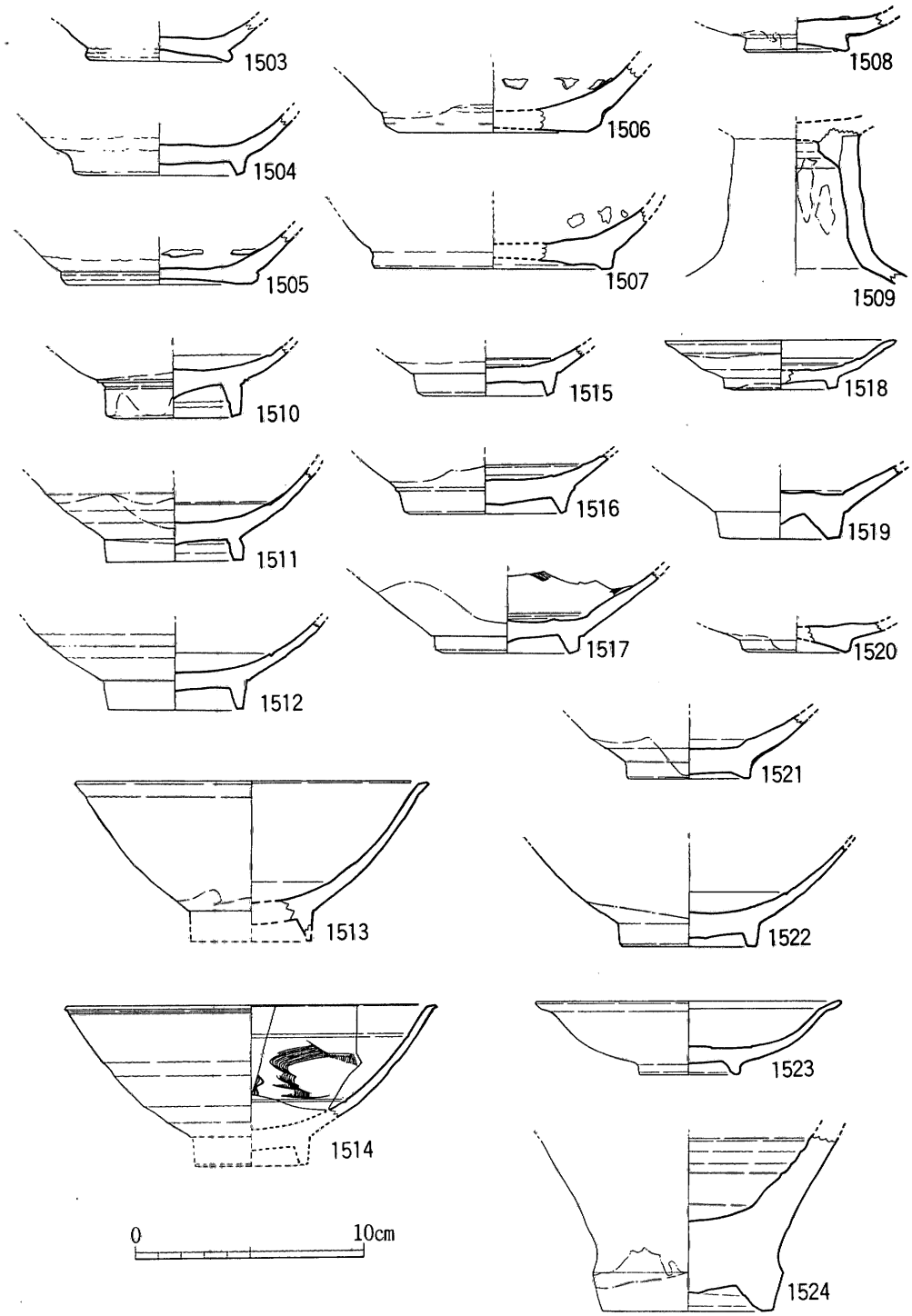
6類（48図1525～1534）いわゆる口禿の白磁で，焼成前に口縁先端の釉が削りとられている。**1525**はSE609井戸出土で底部には釉はかかっていない。**1526**は旧トレンチの埋土内出土で，やはり底部には釉はかかっていない。**1527**は3層出土で底面にも薄く釉がかかっている。**1532**は底面にもやや厚く緑白色の釉がかかり，底部の中央が大きく盛り上がっている。3層出土。**1533**は見込みに沈線と焼成前に釉を環状にかき取った跡があり，6類の椀形の底部かとも思われるが，4類の小皿の可能性が大である。SD602溝出土。**1534**は椀の底部で見込みに沈線があり，胎土は白色で，釉は灰白である。SK601土坑出土。

7類（48図1528～1531）低い高台を有し，胴部はやや丸味をおびた青磁で，数種に分けられるが，底部ではあまり差はない。

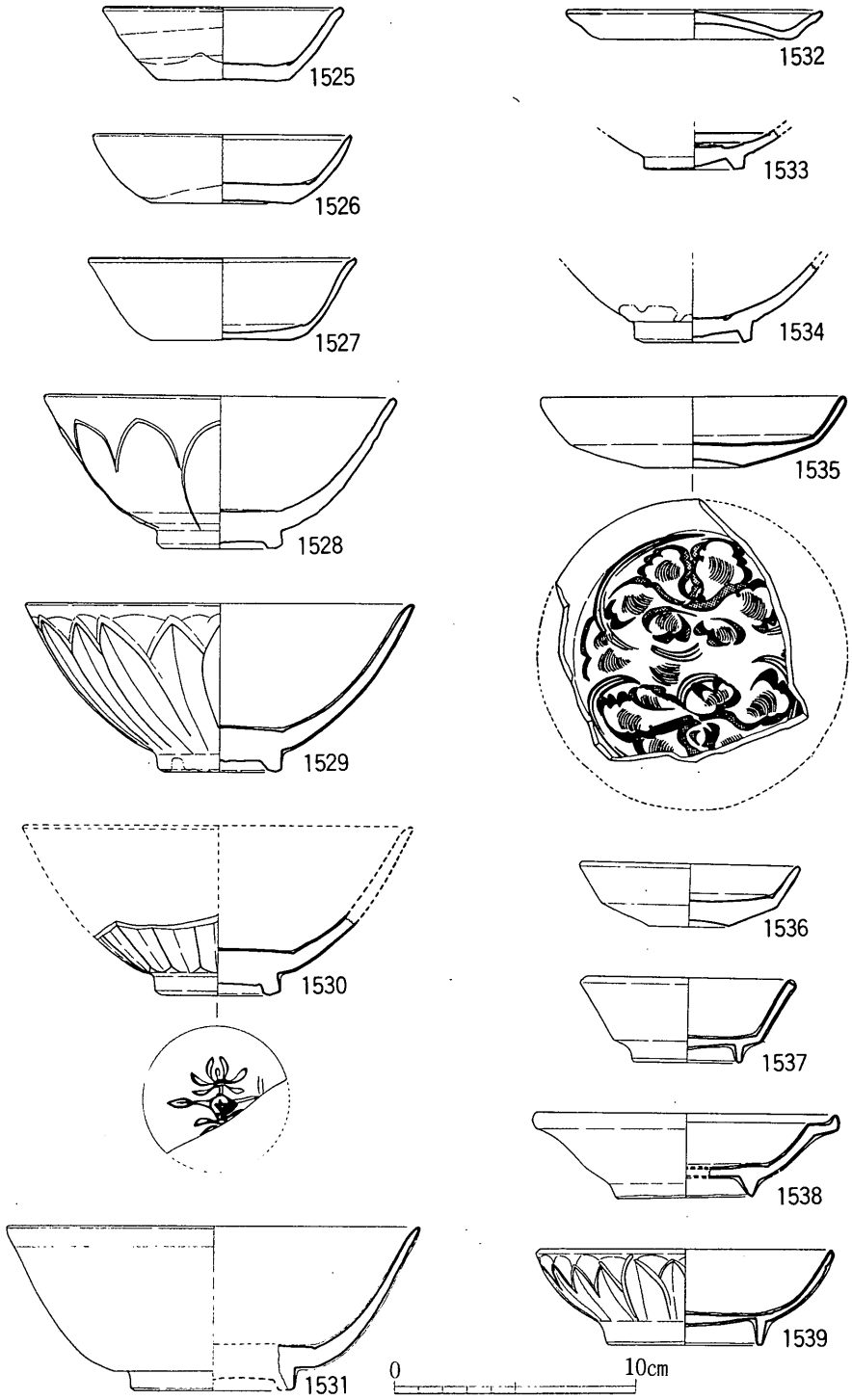
C（1528～1530）外面に蓮弁又が削り出されたり，沈線によって蓮弁が描かれたものである。**1528**は沈線により蓮弁が描かれたもので，胎土は体部は灰白色で，薄くかかっている。3層出土。**1529**は蓮弁が削り出され，胎土灰白色で，釉は淡緑色である。3層出土。**1530**は見込みに型押しの花文が施されたもので，胎土は灰白色で，オリーブ灰色の釉がかけられている。

D（1531）無文のもので，胎土は明灰色で，釉は半透明の暗緑色で貫入がある。4層からの出土であるが，糸切り底をもつ土師器に伴うものであろう。

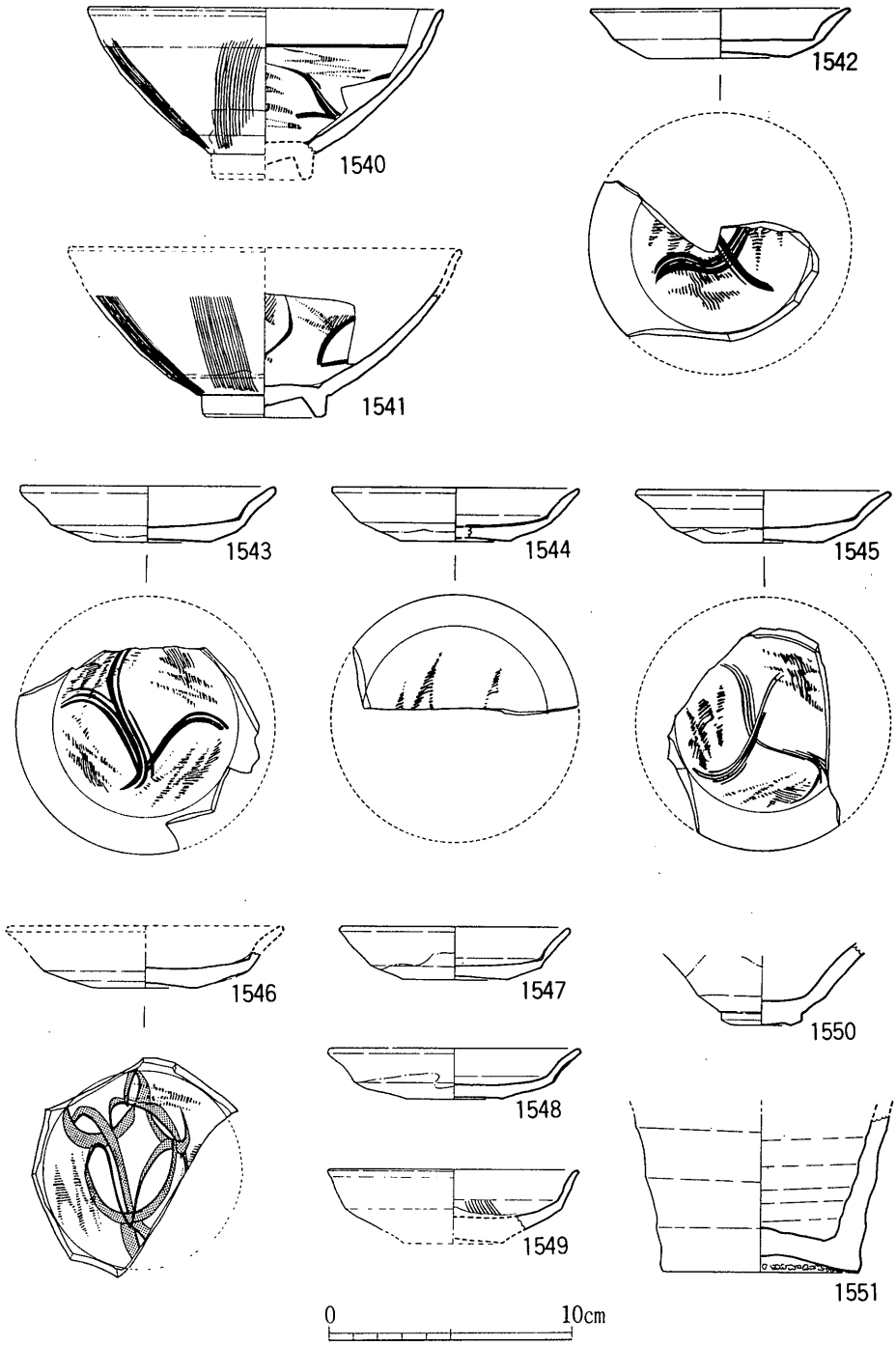
d（1535・1536）7類の小皿で，**1535**は口縁と底部との境が屈折し，見込みにヘラと櫛歯で牡丹の文様が美しく描かれた優品である。やや上げ底の底面は，焼成前に釉をかき取っている。胎土は淡灰色で，釉は暗緑色を呈している。SD602溝出土。**1536**は同様の作りで，胎土は灰白色で，釉はオリーブ灰色である。3層出土。



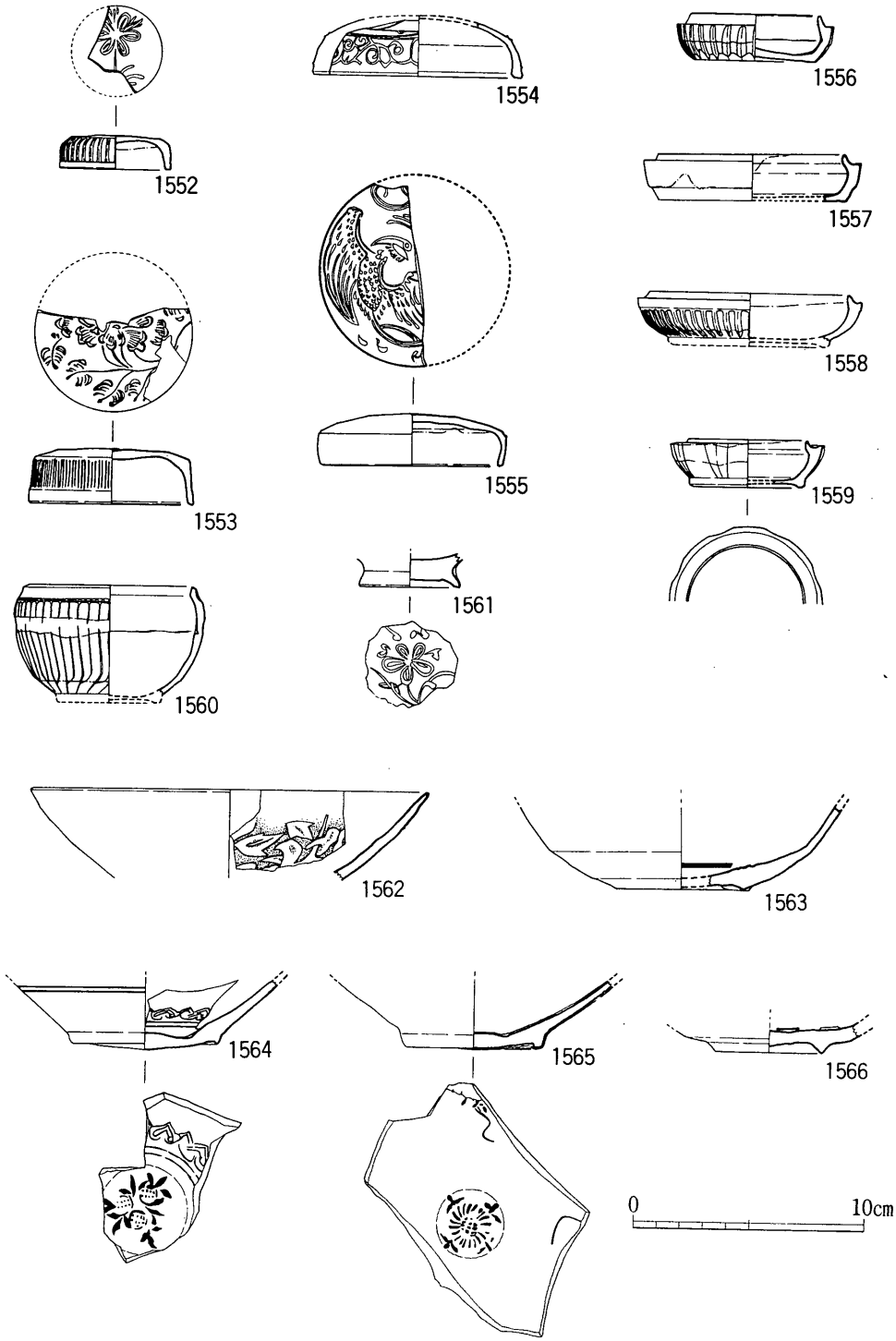
47図　青磁，白磁実測図（1）



48図　青磁，白磁実測図（2）


1540
1541
1542
1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1550
1551
0
10cm

49図　青磁，天目実測図



50図　青白磁，高麗青磁実測図

8類（1537～1539）厚く釉がかかり，高台は薄く床付部分は尖り，釉は焼成前に削り取られ，褐色を呈している。いわゆる竜泉窯系といわれているものである。**1537**は無文の小形品で，口縁端には釉をためるため溝が彫られている。胎土は白色で，釉は淡緑青色で縦の貫入が部分的に認められる。3層出土。**1538**は平たい口縁の先端が上に折れるもので，胎土は黄白色で，釉は灰黄色で貫入がみられる。3層出土。**1539**は外面に蓮弁が削り出されたもので，胎土は白色を呈し，釉は淡緑色で内面に大形の貫入があり，釉に気泡が含まれている。3層出土。

9類（49図1540～1549）いわゆる珠光青磁とよばれ，同安窯系のものである。櫛歯による文様が特徴的で，胎土は灰色ないし灰白色で，灰緑色ないし灰黄色の釉がかかっている。**1540**は椀で外面に櫛歯による条線が引かれ，内面には沈線と櫛歯による文様が描かれている。胎土は灰白色で，釉はオリーブ灰色である。3層出土。**1541**は同様な椀の底部で，胎土は灰白色で，釉はオリーブ黄色を呈している。3層出土。**1542～1549**は小皿で，椀と同様に沈線と櫛歯による文様が描かれている。**1542**は3層出土で，釉はオリーブ灰色であり，底面に釉はなく，床付部は焼成前に釉をかきとっている。**1543**はＳＤ601溝出土で，底部には釉はかかっていない。釉は灰白色である。**1544**は櫛歯文だけで，釉は緑灰色を呈している。3層出土。**1545**は2層出土で，釉は浅黄色である。**1546**は曲線文様をもつもので釉は浅黄色である。3層出土。**1547**は無文の小皿で釉は浅黄色で，ＳＫ616土坑からの出土である。**1548**は3層からの出土で，釉は浅黄緑色である。**1549**はやや形が変っていて，口縁部が薄く，外反する傾向はない。やや深めで，見込みに櫛歯文が認められる。胎土はオリーブ灰白色で，釉は灰オリーブ色で，極めて薄くかかっている。

10類（49図1550・1551）いわゆる天目とよばれるもので，胎土は褐色で，釉は黒色であるが粗製である。4層からの出土であるが，糸切り底土師器に伴うものであろう。**1551**は天目瓶の底部で，内外面に黒色の釉がかかり，その一部は褐色を呈している。床付部には焼成時に焼き付かないように敷いた砂が付着している。胎土は灰色でＳＥ618井戸出土である。

11類（50図1552～1561）薄い青の釉がかかった青白磁で，胎土は白色で，合子などが多い。**1552**は合子の蓋で型に入れてつくられ，天井部に花の浮文があり，体部外面に蓮弁様の刻みがみられる。釉は薄い青色で外面および天井内面にかけられている。ＳＤ601溝出土。**1553**は同じく型に入れてつくられたもので，天井部に花の浮文があり，体部外面には細かな縦すじが入れられている。釉は緑灰色で，外面および天井内面にみられる。3層出土。**1554**は同様に表面に唐草の浮文があり，釉は薄青色でＳＥ604井戸からの出土である。**1555**は**1553**と同様な作りで，天井部に飛鳥の浮文があり，外面と天井内面に淡緑灰色の釉がかかっている。3層出土。**1556**は合子の身で，体部に接合部が認められる。内面と体部外面に薄青色の釉がかかり，底部外面は焼成前に削りとられている。底面と蓋受部に釉はない。ＳＤ601溝出土。**1557**は無文で，釉は薄青色である。3層出土。**1558**は**1556**とほぼ同じ作りで，薄青色の釉がかかっている。上層出土。**1559**は体部の8箇所にくぼみがあり，輪花状をなす。釉は薄青色で，3層からの出土

である。**1560**は小壺形の合子の身で，同様に型に入れてつくられていて，体部に接合面が認められる。底部を除いて，淡黄緑色の釉がかけられ，口縁端は焼成前に釉をかき取っている。3層出土。**1561**は椀の底部で見込みに花の浮文がみられ，薄青色の釉がかけられ，底面は焼成前に釉をかきとっている。3層出土。

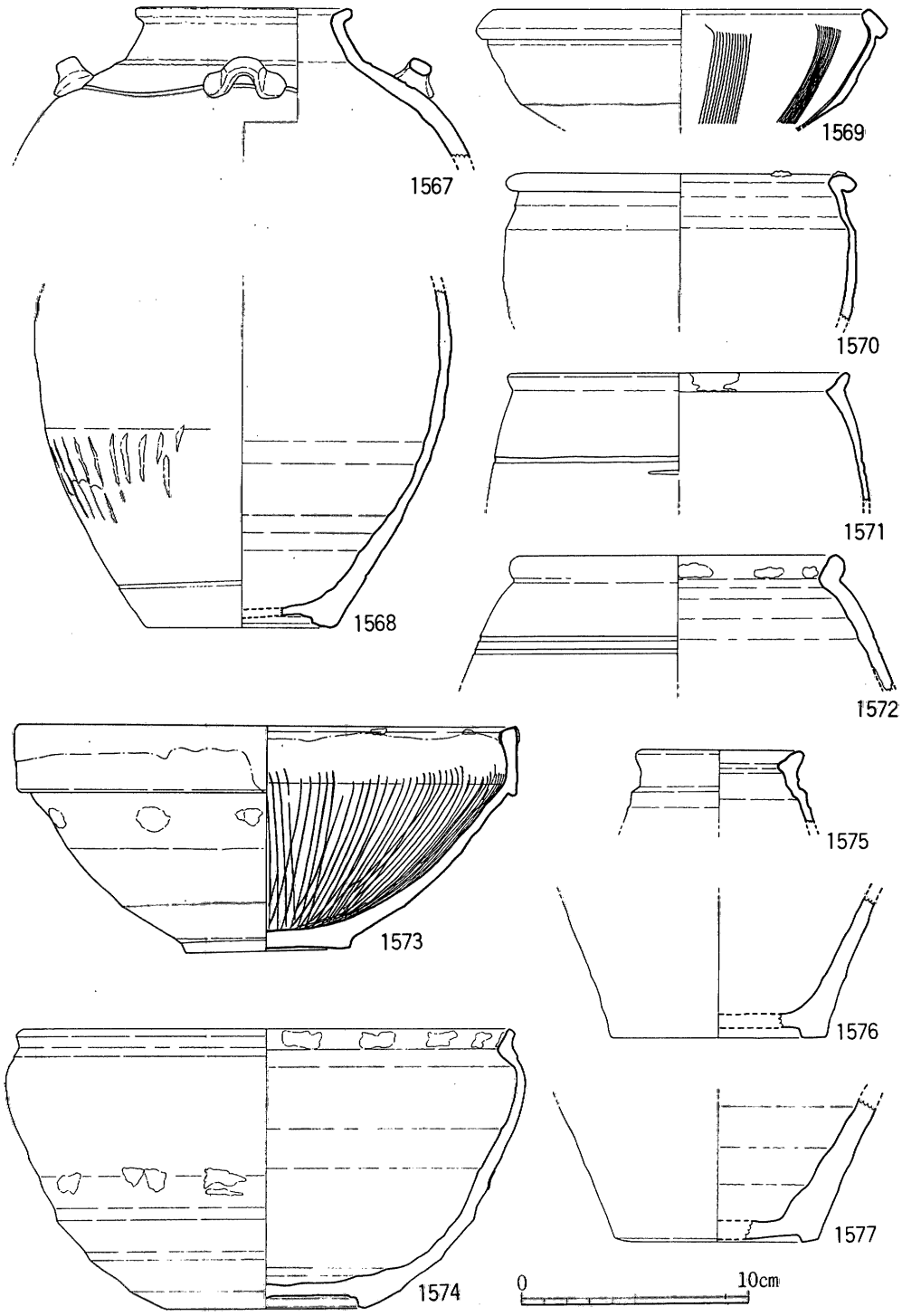
12類（50図1562～1566）高麗青磁とよばれるもので，青灰色ないし緑青色の釉がかけられ，胎土は明灰色である。**1562**は内面に型押しの花の浮文があり，釉はオリーブ灰色で胎土は明灰色である。ＳＥ604井戸掘方出土。**1563**は見込みに2本の沈線がめぐり，全面に灰緑色の釉がかかり，底面に目跡が残っている。胎土は明灰色で，3層からの出土である。**1564**は体部外面に2本の平行線が，見込みに文様が白土で象眼されている。胎土は明灰色で全面に半透明緑青色の釉がかかり，底面に目跡が残っている。ＳＤ601溝出土。**1565**は，体部内面と見込みに白土の象眼文様があり，胎土は明灰色で，緑青色の釉が全面にかかり，底面の3箇所に目跡が残っている。4層出土であるがⅡ―1類の土師器にともなう可能性が大である。

9. 雑　　器（51図）

明瞭な青磁・白磁・青白磁・天目などの磁器のほかに，色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないので，ここでは一応雑器としてまとめた。破片としてはかなり多いが，実測でき，器形のわかるもののみ取扱った。なお多少の矛盾は出ているが分類は従来通りである。

1類（1567・1568・1572・1576・1577）短い口縁がやや開き，器面に薄い釉がかかっているもので，口縁内側と胴下部に目跡がついているものも多い。**1567**は口縁がやや開き，短い頸部と張った胴部をもつもので，四耳壺になるものと思われる。口縁内側に重ね土の跡が残り，肩部にやや波状になる沈線がめぐらされている。胎土は明灰色で，外面に褐味灰緑色の釉がかかっているが，内面にはあまり釉はかかっていない。3層柱穴出土。**1568**は胴部以下で，底部はやや高台状に削られている。胴部下半にヘラ削りの跡を残している。外面には暗褐緑色の，内面には灰緑色の釉がかかっている。胎土は下半は淡灰褐色を，上半は褐灰色を呈している。ＳＤ304溝出土。**1572**は口縁が肥厚して開き，その内側に重ね土の跡が残っている。肩部に2本の沈線がいれられている。胎土は淡灰色で，釉は外面では緑灰色を内面では薄く風化して濁黄色を呈している。3層出土。**1576**・**1577**は底部で灰緑色の釉がかかっているが，風化して黄味を帯びている。ともに3層からの出土である。

3類（1571・1574）短かい口縁をもち，釉はかかっているかどうか判断に苦しむ程度に薄く，器面は黒褐色を呈し，口縁内面と胴下部に重ね土の跡が残っているものが多い。**1571**は口縁内部に重ね土の跡が残り，胴部に沈線が1本入れられ，器面，胎土ともに灰褐色を呈し，釉はほ



51図 雑 器 実 測 図

とんどみられない。ＳＤ601 溝出土。**1574** は口が広く，やや浅い鉢形のもので，底部は削られてやや高台になっている。口縁内側と胴下部に重ね土の跡が残り，胎土はにぶい橙色で薄い灰褐色の釉がかかっている。３層出土。

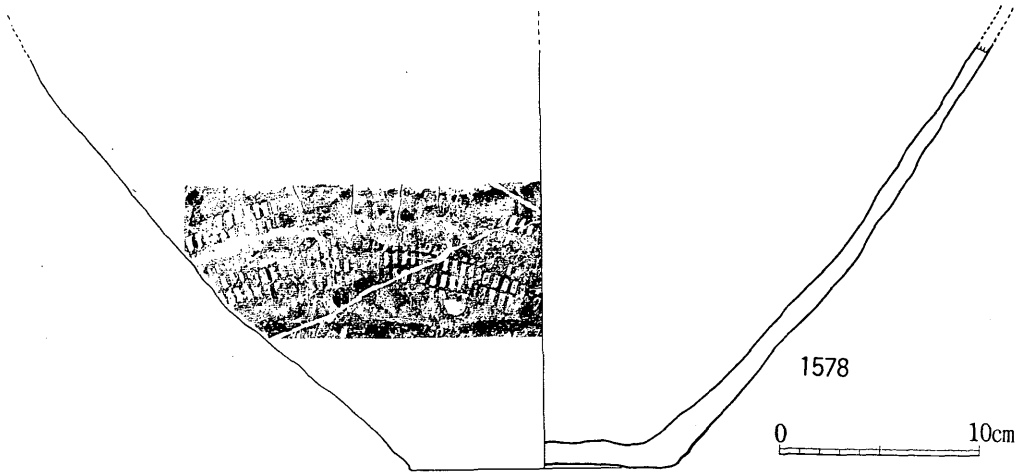
9類（1569・1573）摺鉢で，**1569**は小型で口縁が折り曲げて重ねており，内面に13本１組の櫛目間隔をおいている。体部下半はヘラ削りされているため，極端に薄くなっている。胎土は灰黄色を呈し，器面には釉らしきものは認められず褐灰色を呈している。２層出土。**1573**はほぼ完形品で，口縁は折り曲げたような形をしていて，体部下半はヘラ削り痕を残す。内面には７本１組の櫛目が全面に入れられている。口の部分には褐釉がかけられ，口縁内面11箇所と外面口縁下に12箇所の重ね土の跡が残っている。胎土は褐色を呈し，器面は暗褐色を呈している。ＳＫ617土坑出土。

11類（1570）褐釉の陶器で，口縁は肥厚して横に折れ，口縁上端に重ね土の跡が残っている。胎土は紫褐色で，褐色の釉がかかっている。３層出土。

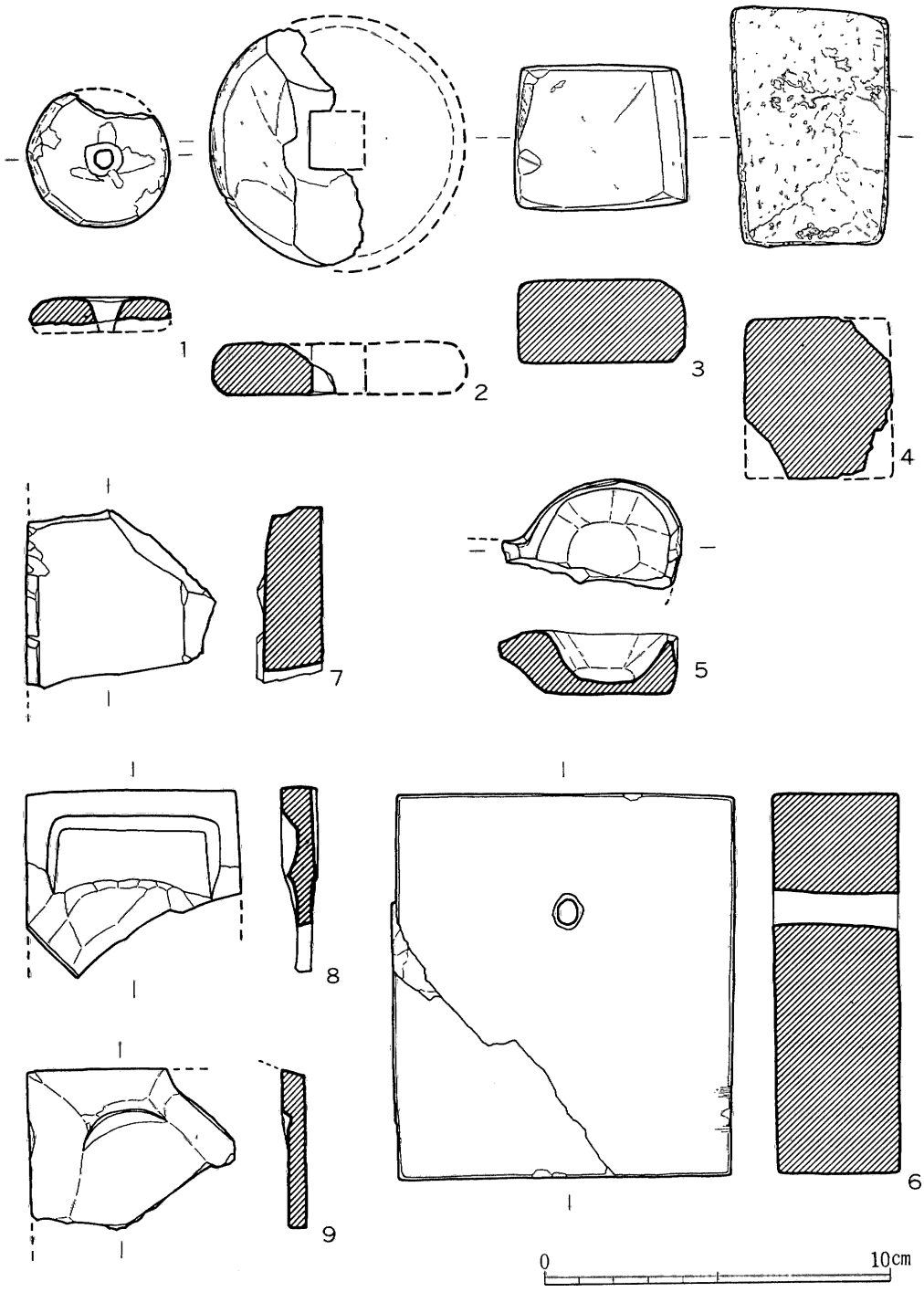
そのほか**1575**は瓶形と思われ胎土は褐味灰色で薄い灰褐色の釉がかけられている。３層出土。

10.　常滑陶器　（52図）

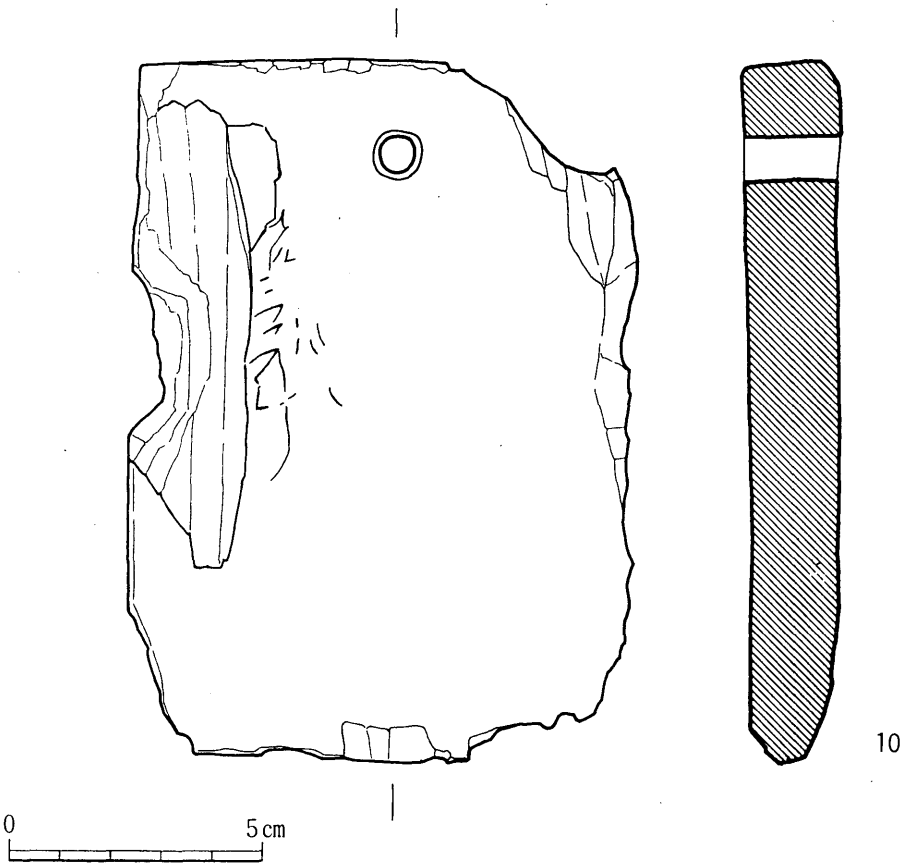
大甕の底部で，外面は縦位のヘラナデが認められ，上部と中部に長格子目の叩き目がめぐっている。黒褐色ないし暗灰色を呈し，底部近くでは褐色を呈する部分もある。内面は横位のナデがみられ，灰色を呈している。胎土は褐味灰色で，大粒の砂粒を少量含んでいる。ＳＤ 604 溝出土。



52図　常滑陶器実測図



53図 石 製 品 実 測 図



54図　陰刻滑石製品実測図（⅔）

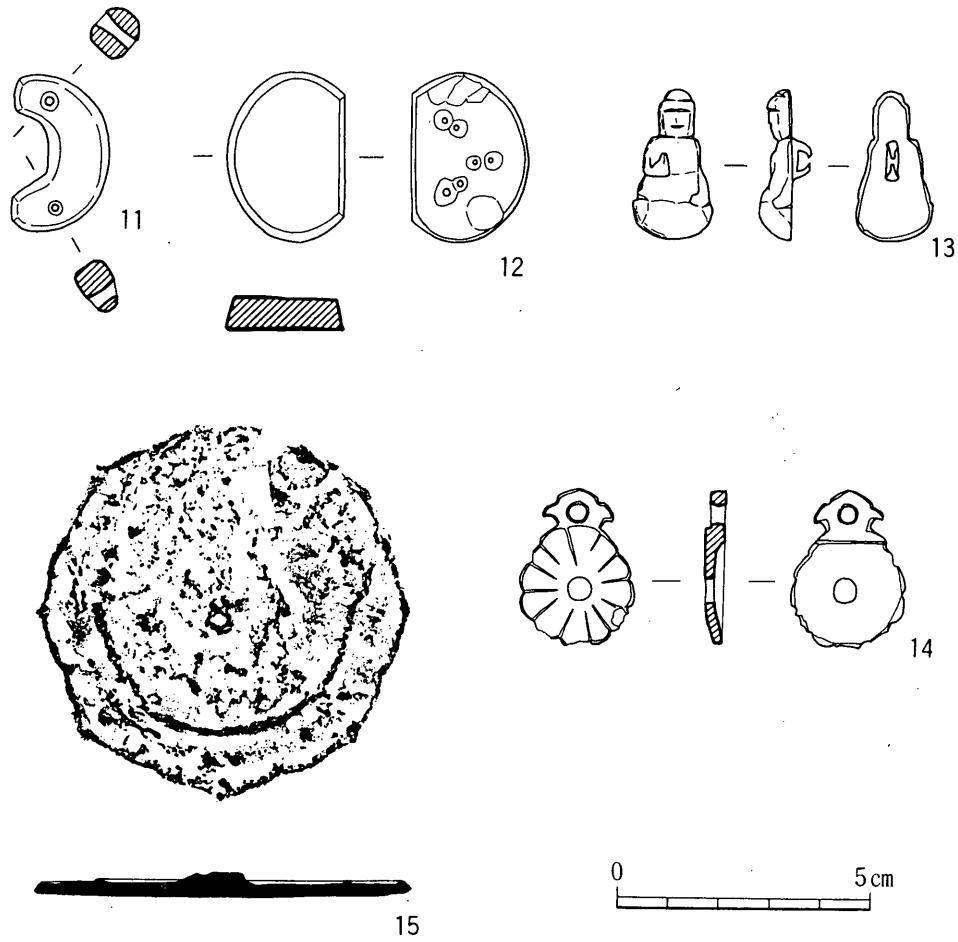
11. 石　製　品（53～55図，図版31）

第6次調査において石製品の出土は少なく，過去の調査例と同様に滑石製品が主体をなし，その他に石鍋・硯・砥石などが見られる。**1**は径4.1cmをはかり5mmの円形孔を有し周縁には稜が4ヶ所ほど残されている。裏面は剝落しており厚さ9mmが残る。孔は一方からの穿孔である。下層SK633土坑出土。**2**は半折するが復原径7.4cmをはかり，厚さは1.5cmである。一辺1.7cmの方形孔を有する。MF17区3層出土。第4次調査でも同様な形状をなすものが出土している。**3**は滑石製方形板で長辺5cm，短辺4.2cm，厚さ2.5cmをはかり重さは122gである。器面は滑らかに研磨されている。SK612土坑出土。**4**は軽石で長辺7cm，短辺5.1cm，厚さ4.3cmをはかり直方体をなす。重さは50gをはかる。MF15区3層出土。第5次調査でも楕円形状のものに小孔を穿ったものが出土しており，ともに「浮き」と考えられる。**5**は滑石製石匙で半折するが現存長5.2cm，高さ2.35cmで，匙部は，内径3.5cm，深さ

1.5cmをはかる。底面は柄に直交する規則的で丁寧な削りで，内面・周縁部は不規則な削りがなされている。MG16区3層出土。**6**は長辺11.1cm，幅9.8cm，厚さ3.6cm，重さ1048gの方形有孔板で，上半中央部に楕円形の孔を有し径7.5mm，両面よりの穿孔である。器面は平滑でうすい黒灰色に変色している。ME 12区3層出土。**7**～**9**は硯で，7は現存長5.1cmの小片で，上端わずかに傾斜し海部へとつづく部分を残す。陸立ち上がり壁は2mmである。輝緑凝灰岩製で2層からの出土である。**8**は上端海部を残すもので，幅6.1cm，厚さ1.1cm，海は5mmの深さで壁はゆるく立ち上がる。裏面一部剝落するが上げ底状の底面をなす。灰色の硬質砂岩製である。2層出土。**9**も海を一部残すのみで上面は剝落する。現存海深さ3mmで隅は孤を描く。現存長4.7cm，灰色でスレート製である。ME 16区4層出土。**10**は滑石製石板で，上面に線刻の文字が彫られているものである。長辺13.8cm，短辺9.9cm，厚さ1.9cm，重さ495gをはかり，上端小口部は鋸による切断である。火気にあったらしく器面は黒変している。文字と思われる線刻は上半左寄り，長辺方向に鋭い刃物状のもので刻まれたものらしく細線で浅いV字状の断面をなす。文字は器面が剝落していて上半部の一部を消失し判読不可能であるが末尾のものは『年』と読みとれないこともない。ME15区3層出土。**11**は，両端に孔を有する勾玉である。全長3.1cm，全幅1.95cm，最大幅1.28cm，最大厚0.9cmをはかる。図示した上面はやや丸味を帯びるが裏面は偏平な面をなす。上端部断面径は8.5mmで下端部より1mmほど大きくこの部分が頭部になるものと思われる。孔は両面より穿孔されているが，上端の孔は図示した面の方が，下端の孔は裏面の方がそれぞれ孔径が大きい。不透明な明緑灰色をなし硬玉製である。SD 605溝内より出土し，ヘラ切り底土師器に伴うものである。**12**は石帯で，長径3.3cm，短径2.3cm，厚さ0.65cmをはかる。楕円形の長辺片側を切断したもので裏面に径1mmほどの稚拙な2対1孔の潜り穴を3箇所に穿っている。黒灰色をなし硬質の石材を使用している。MF17区3層出土。第4次調査では，蛇紋岩製の方形をなす石帯が出土している。

12. 金属製品 （55・56図，図版32）

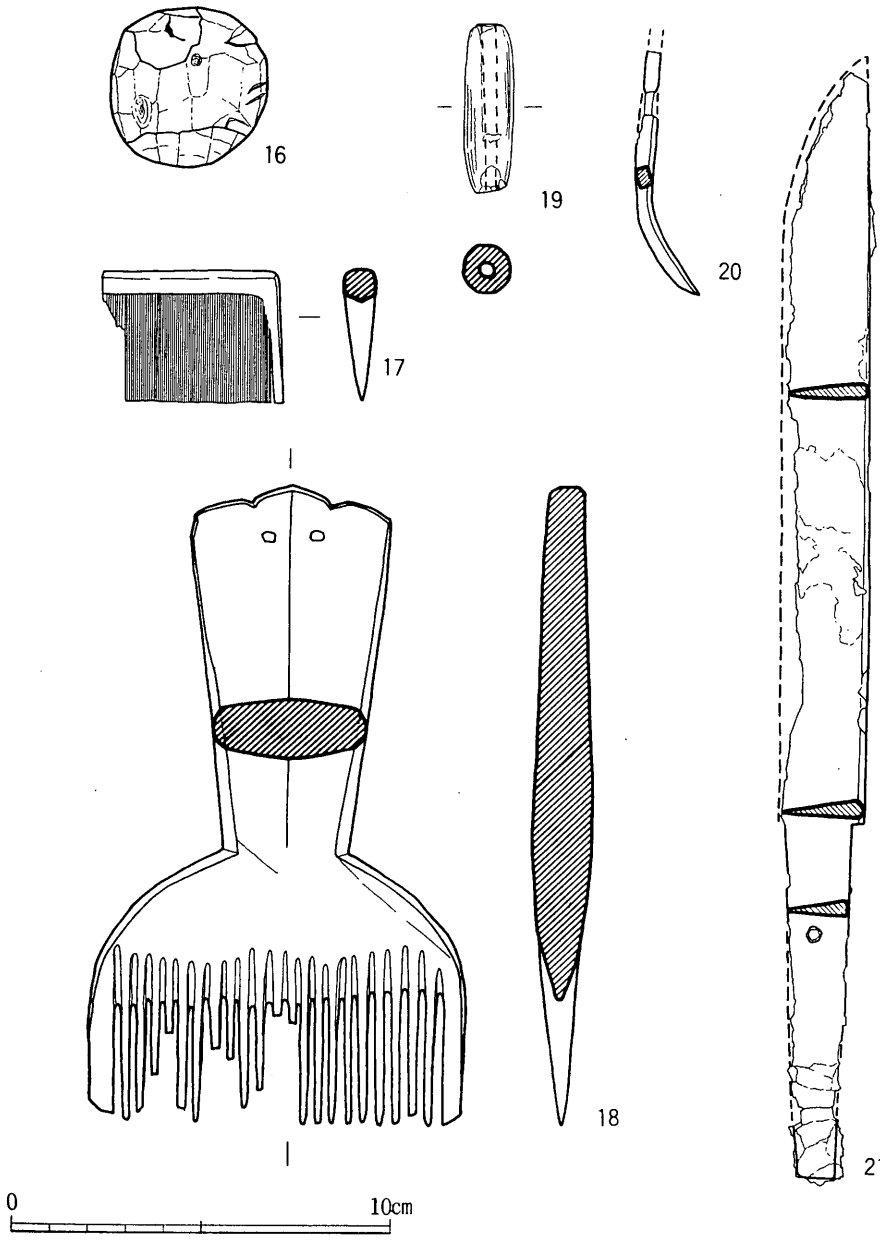
13は懸仏如来坐像で，懸仏は神仏習合の信仰から生まれたもので，平安時代中期頃からつくりはじめられ，初期のものは鏡や円鏡形の金属板に毛彫りあるいは浮彫していたものがその後木円板などに鋳像を取り付ける形式のものへと変化してゆくが，今回出土の如来坐像はこうした懸仏に取り付けられるもので，青銅製の鋳造仏である。全長2.94cm，台座幅1.62cm，台座高0.6cm，頭部幅0.74cm，頭部高0.48cmの形状をなす。印相は，右手掌を前方に向けて右胸の前に置き，左手は膝の上に仰掌するいわゆる施無畏与願印で，台座に坐する如来形の坐像である。裏面には，外径0.7cm，孔径0.3cm，高さ0.4cmの半円形の把手がつく。器面が風化していてはっきりしないが，質も悪く作風も粗雑な作りである。



55図　石製品，金属製品実測図（⅔）

こうした半肉彫の仏像を取り付ける形式の懸仏は室町時代に多くみられるものであるが，今回出土のものはＳＤ601溝付近糸切り底土師器層上げ土の中から発見されたもので，確実な遺構からの出土ではないが，糸切り底土師器はⅡ―４ないしⅡ―５類に属し鎌倉時代後半に比定されるものであり，ほぼこの時期のものといえよう。中世信仰形態を知る上において貴重な資料である。註

14は鶏頭鈕を有する青銅製品で，下端縁をわずかに欠くが現存長3.1cmをはかる。鶏頭部高８mm，幅1.4cm，厚さ３mmで孔径４mmをはかる。胴部は，長さ2.3cm，幅2.2cm，厚さ２mmで径５mmの孔を中心に放射状に延びた線刻で周縁を12葉の単弁菊花紋につくり出しているが，単弁は乱れている。裏面鈕と胴とに段を有し，胴部は上面側へまるく窪み裏面周縁に



56図　木製品，土製品，金属製品実測図

は幅1.5mmほどの平坦面をつくる。両面とも滑らかで緑灰色をなし光沢をもつが，胴部裏面だけは鋳出されたままの荒れた器面をなす。この胴部裏面が他のものに接合されるものと思われる。MG12区3層出土。3次調査でも同種のものが出土しているが，今回出土のものに比して一回り大きく鈕と胴との間に肩を有している。飾金具と思われる。**15**は八稜鏡で面径7.6cm，鈕高4.55mm，縁高2.7mmをはかる。錆による腐蝕が著しく，3分の1ほどは捲れ上がって破損している。縁は断面三角形をなし鏡背の鈕孔・文様などははっきりしないが，径4.9cmの一重圏で外区と内区を区分している。鏡面も錆で腐蝕しているがわずかに反りがみられる。MK19区上層遺構面にて検出されている。**20**は鉄製釘で頭部を欠損するが，現存長6.5cmをはかり断面は6×4mmの方形をなす。ME15区3層出土。**21**は現存長29.5cmをはかる鉄製小刀で刃部約20cm，柄部9.5cmである。刀身幅約2.2cm，背は直で関部付近にて5.3mmをはかり隅は丸くなる。柄には目釘穴が1箇所みられ目釘が残っており図示した面が目釘頭である。SE612井戸内出土。小刀であるが井戸内からの出土でもあり，中世の食生活を絵巻物に描いた『酒飯論絵詞』では包丁師が小刀を使って料理を行なっている状況が描かれていて，今回出土した小刀は包丁と考えることもできよう。

13. 土製品・木製品 （56図，図版32の1）

19は土錘で全長4.4cm，最大幅1.3cm，上端の孔は下端のものよりも1mmほど大きく4mmをはかる。黄褐色をなすが一部暗灰色を呈している。軽石製浮きと共に御笠川で使用されたものであろう。

16は「毬打」用の毬で径4.1cmをはかり，球状をなす。下端部は丁寧な削りがなされている。SE604井戸掘り方内出土。**17**・**18**は櫛で，17は現存幅4.8cm，高さ3.5cm，厚さ0.9cmで歯数は4cm幅にて58本を数え，密な歯である。棟断面は下端中心で山形をなし，鋸引きによる両面からの切り出しであることがわかる。棟の隅は丸く仕上げ全面丁寧に削っている。肩部はほぼ直角をなしまっすぐ延びる。SE614井戸内出土。**18**は長手の柄がつく櫛で，全長16.8cmをはかる。櫛部は幅9.9cm，高さ7.2cm，厚さ1.6cm，柄は長さ9.6cm，最大幅5.3cmで頭部は浅い切り込みで鶏頭状に仕上げられている。柄には中央に稜が入り，それをはさんで左右に1個ずつ貫通孔が穿たれている。歯数は全部で12本を数え，きわめて疎である。鋸による歯のつくり出しで棟断面下端は山形をなす。解櫛として使用されたものであろう。SE610井戸内出土。この他にも小破片が数点出土している。

井戸桶板材に見られる焼印は井戸の項で説明した通りである。（57図，図版14の2）

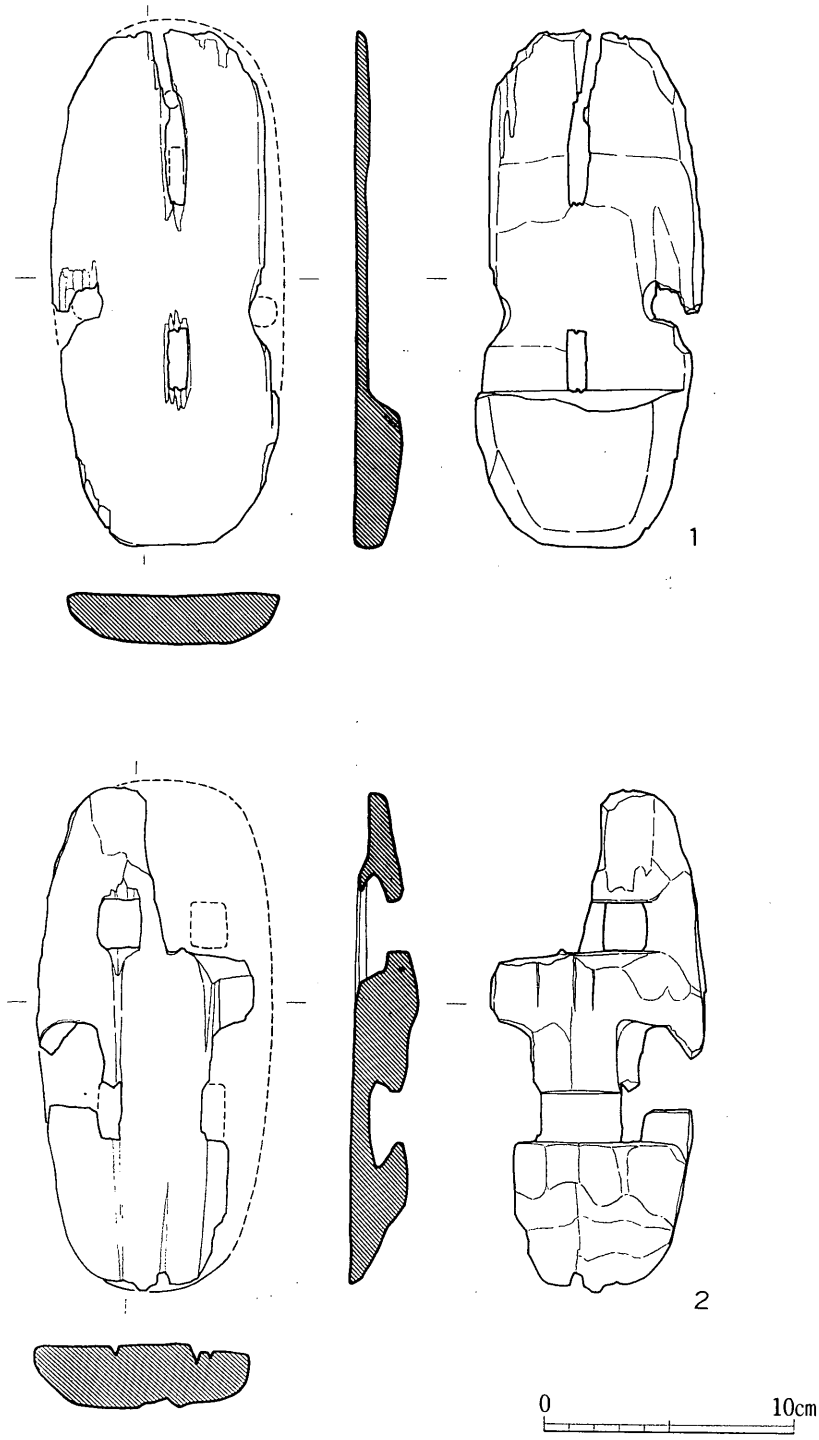
57図　桶板焼印拓影（⅔）

14.　下　　駄（58図，図版34）

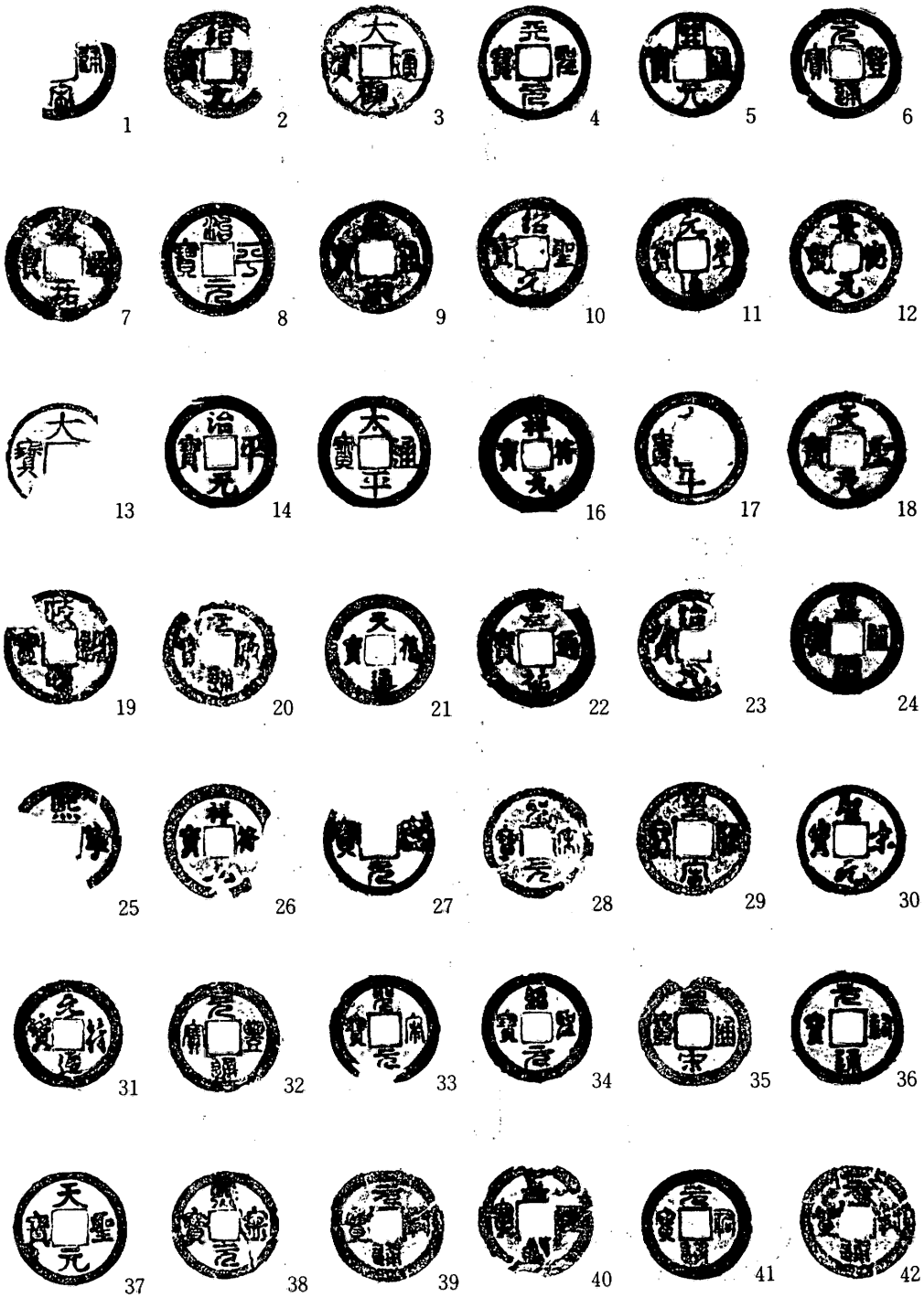
1は台部上面中央に2×0.2cmの細長い枘穴を2条ずつ前後に2ヶ所あけ，そこに楔形の薄板で歯を止める差歯下駄である。現存長20.5cm，最大幅9.6cmをはかる。裏面は後歯から前が剝落している。ＳＥ603井戸内出土。2も差歯下駄で台部の前後4ヶ所に枘穴が穿たれているが前歯のものは2×1.5cm，後歯のものは2×1cmと前歯をとめる枘穴が大きい。歯を差し込むための溝は断面方形をなさず台部上面側が広くなる楔状をなす。現存長20.4cm，復原幅9.5cmをはかる。ＳＥ601溝内出土。

15.　銅　　銭（59図，35表，図版33）

6次の調査では42枚の銅銭が出土し，他にも小片が見られ過去の調査も含めて最も出土数が多い。判読可能なものは17種41枚で皇宋通宝・元豊通宝・嘉祐通宝はいずれも4枚の出土をみる。北宋銭が主体で唐銭の開元通宝が1点みられる。ほとんど3層からの出土で，11世紀後半から12世紀初頭のものに集中していることは他の調査区についても同様である。ＭＦ21区からは6枚銹着の状態で出土し，1039年～1101年までのものがみられる。遺構内からの出土は5例を見，ＳＥ609井戸内上部から元豊通宝が土師器Ⅱ―4類と共伴して出土している。



58図 下 駄 実 測 図



59図　銅　銭　拓　影（2/3）

図版番号	銭貨名	外径 水平	外径 垂直	外縁厚さ	出土地点 地区	出土地点 層位	初鋳年	備考
1	□宋通宝			1.5	MF12	3層		皇宋通宝
2	紹□元宝	24.15		1.55	MF12	〃	宋 哲宗 1094	紹聖元宝
3	大観通宝	24.75	24.65	1.7	MG15	〃	〃 徽宗 1107	
4	天聖元宝	24.9	24.9	1.2	ME19	〃	〃 仁宗 1023	
5	開元通宝	23.45	23.25	1.05	MJ19	〃	唐 高祖 621	背面上方に仰月「⌣」の鋳印あり
6	元豊通宝	24.15	24.0	1.2	MG16	〃	宋 神宗 1078	
7	嘉祐通宝	25.35	25.0	1.55	MH16	〃	〃 仁宗 1056	
8	治平元宝	25.0	24.9	1.45	MG15	〃	〃 〃 1064	
9	皇宋通宝	24.7	24.9	1.45	ME15	〃	〃 〃 1039	方孔に4ケ所切り込みあり
10	紹聖元宝	24.15	24.35	1.8	MG16	〃	〃 哲宗 1094	〃
11	元豊通宝	24.8	24.8	1.35	MF16	〃	〃 神宗 1078	
12	景徳元宝	24.7	24.85	1.45	MF16	〃	〃 真宗 1008	
13	大□□宝			1.85	ME18	〃		
14	治平元宝	24.55	24.6	1.2	ME15	〃	宋 仁宗 1064	
15	太平通宝	24.5	24.5	1.2	ME15	〃	〃 太宗 976	
16	祥符元宝	25.2	25.15	1.1	MJ18	〃	〃 真宗 1008	
17	□平□宝	24.1		1.4	MJ18	〃	〃 太宗 976	太平通宝
18	天聖元宝	25.35	25.3	1.35	MF9	〃	〃 仁宗 1023	
19	政和通宝	24.7	24.9	2.0	MF9	〃	〃 徽宗 1111	
20	元符通宝		24.85	1.7	MF12	〃	〃 哲宗 1098	
21	天禧通宝	24.45	24.4	1.35	MF12	〃	〃 真宗 1017	
22	嘉祐通宝	26.1	25.6	1.35	MF13	〃	〃 仁宗 1056	
23	治□元宝		24.5	1.5	MF13	〃	〃 〃 1064	治平元宝
24	嘉祐通宝	24.6	24.6	1.35	MF13	〃	〃 〃 1056	
25	熙寧□宝			1.15	MF14	〃	〃 神宗 1068	熙寧元宝
26	祥符元宝	25.0	24.8	1.4	MH16	〃	〃 真宗 1008	
27	□寧元宝		24.55	1.4	MH16	〃	〃 神宗 1068	3枚銹着（2ケ所に穿孔）
28	聖宋元宝	24.25		1.75	MH16	〃	〃 徽宗 1101	
29	皇宋通宝	24.85	24.8	1.3	MF21	〃	〃 仁宗 1039	
30	聖宋元宝	24.05	24.0	1.35	MF21	〃	〃 徽宗 1101	
31	元符通宝	24.1	24.15	1.55	MF21	〃	〃 哲宗 1098	6枚銹着

32	元豊通宝	24.55	24.45	1.4	MF21	3層	宋	神宗 1078	
33	聖宋元宝	23.95		1.5	MF21	〃	〃	徽宗 1101	
34	紹聖元宝	23.95	23.95	1.5	MF21	〃	〃	哲宗 1094	
35	皇宋通宝		25.0	1.35	MH19	柱穴	〃	仁宗 1039	
36	元祐通宝	24.7	24.8	1.9	MH14	〃	〃	哲宗 1086	
37	天聖元宝	25.1	24.95	1.3	MH15	〃	〃	仁宗 1023	
38	熙寧元宝	23.8	23.4	1.5	MJ15		〃	神宗 1068	SE609 井戸上面
39	元豊通宝	24.5	24.4	1.5	MJ15		〃	〃 1078	SE609 井戸内上部
40	嘉□通宝	25.0	25.65	1.35	MJ19		〃	仁宗 1056	嘉祐通宝 P-38
41	元祐通宝	24.35	24.2	1.2	MF15		〃	哲宗 1086	SK616 土坑内
42	元符通宝	25.50	25.25	1.4	MG9		〃	〃 1098	P-57

35表 銅 銭 計 測 一 覧 表 (単位mm)

その他に，瓦片を削って再利用した径2～3cmの小円板や土製支脚などが数点出土している。また，ガラス製小玉4，滑石製臼玉1，土玉1が出土している。玉類の計測値は次の通りである。（36表，図版32の1）

	高さ	長径	短径	孔径	出土地点
ガラス製小玉（ブルー）	5.9	8.8	7.8	1.5	MM20区 3層
ガラス製小玉（グリーン）	4.6	6.8	6.4	2.5	SE604 井戸掘り方内
ガラス製小玉（ライトブルー）	4.6	4.9	4.3	1以下	ME18区 4層
ガラス製小玉（イエロー）	3.0	4.9	4.3	1.3	SK607 土坑
滑石製臼玉	4.8	7.2	7.0	2.4	MG12区 4層
土玉	12.6	16.1	13.5	1.5	ME16区 4層

36表 玉 類 計 測 一 覧 表 (単位mm)

註 懸仏如来坐像については九州歴史資料館の西村強三・八尋和泉氏に有益な御教示をいただいた。

五、おわりに

当遺跡の最終調査である第6次の調査では，特に目新しい遺構，遺物の検出はなかった。それでも上層からは，鎌倉時代の包含層と，南北にはしる溝と直角に曲がる濠状遺構がみつかり，また多数の井戸もあり，各時期の井戸の様式変化を把えることができた。下層からは全面にわたる包含層や遺構は認められなかったが，従来不明確であった平安時代はじめの土師器を出土する井戸や包含層がみつかった。しかし柱穴が多数検出されたにもかかわらず，建物の検討が十分でなく，今後に残された問題である。とくに土師器については，昭和51年度に同様に報告される君畑遺跡の古墓群から出土した土師器をも考慮に入れると，平安時代前半の土師器編年の大筋を把むことが出来，従来の当遺跡の編年を修正することが可能となった。たとえば従来Ⅰ—2類としていた土師器群は，君畑遺跡の12号墓と18号墓との比較において，12号墓の小皿は口径約11cm以下で器高約2cm以下であるのに対し，18号墓の小皿は口径約11～12cm，器高約2～2.5cmと大形で完全に分離する。第3次調査時のＳＫ341土坑出土の小皿は，この中間の口径約11cm前後，器高約2cm前後である。ＳＫ339土坑出土の小皿は口径10～11cmに集中し，君畑12号墓出土のものに類似している。椀についてもＳＫ341土坑出土のものは口径12cm以上，器高4cm以上であるのに対し，ＳＫ339土坑出土の椀はそれより小さなものも多くなる。器形についてもＳＫ341土坑出土の椀や高台付椀は口縁がややまっすぐなのに対し，ＳＫ339土坑出土のものはやや口縁が外に開く傾向がみられる。

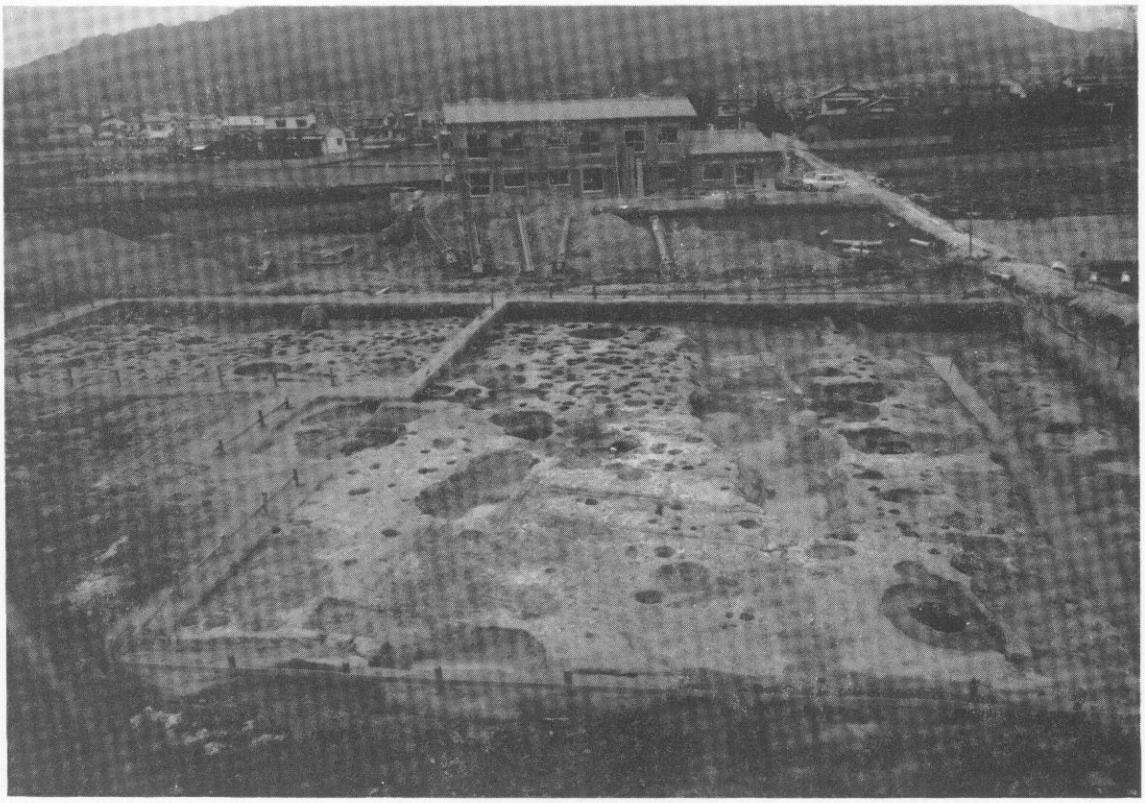
以上のことから君畑12号墓出土の土師器をⅠ—2Ａ類，ＳＫ341土坑出土の土師器をⅠ—2Ｂ類，ＳＫ339土坑や第6次調査時のＳＫ633土坑，君畑遺跡12号墓出土土師器をⅠ—2Ｃ類と細分することが出来た。ただしⅠ—2Ａ類の全器種が明確でないことや，まだ個々の土師器を細分する決め手にとぼしく，器形，製作手法など検討する必要がある。ＳＥ614井戸出土の土師器については，高台付椀の体部が直線的で，Ⅰ—2類とは分離でき，小皿は口径約11～12cmで，12cmを越えるものもある。器高は3cm前後でⅠ—2Ａ類の小皿より大きい。これに相当するのが君畑2号墓出土土器であり，Ⅰ—2Ｂ類土師器とした。ＭＥ13区下層出土土師器は，高台付椀の体部は直線的で，器形は君畑遺跡1号墳玄室内出土の須恵器に類似し，小皿も口径約12cm以上，器高3cm以上のものが多くなり，これをⅠ—1Ａ類土師器とした。そのほか浦城Ⅰ類に相当するⅠ—3類土師器はⅠ—2Ｃ類やⅠ—4類土師器とは直接につながらず，それをつなぐと思われる土師器が大宰府調査の資料中にみられるため，Ⅰ—3類を3Ａ，3Ｂ，3Ｃ類に細分し，浦城Ⅰ類をⅠ—3Ｂ類とした。Ⅰ—1Ａ類土師器を奈良末～平安初頭と考え，ほぼ平安時代から鎌倉時代末期に至る土師器の編年が完成に近づいた。今後各種の遺構・遺物を肉付けよることにより，当時の文化を理解できるようになった。なお整理報告にあたっては，九州歴史資料館の調査課の方々をはじめ，多くの方々から御援助や御教示をいただいたことに対し，深く感謝いたします。最後に当遺跡の土師器編年と遺構対照表における絶対年代等についてはまだ不明確な点が多い。

土師器分類	推定年代	第3次	第4次	第5次	第6次	君畑遺跡	付近の遺構	共伴土器
Ⅰ－1A類	8世紀末 ～9世紀初頭				ME13区 下層			黒色土器，内黒土器，磁器1類
Ⅰ－1B類	9世紀前半～9世紀中頃				SE614 井戸	2・4号墓		黒色土器，内黒土器
Ⅰ－2A類	9世紀後半～10世紀初頭					18・1・3号墓		黒色土器，内黒土器
Ⅰ－2B類	10世紀初頭～10世紀中頃	SK341 土坑 MF35区下層				8・9・10・16・19号墓		
Ⅰ－2C類	10世紀中頃～10世紀後半	SK339 土坑			SK633 土坑	12号墓		黒色土器，内黒土器
Ⅰ－3A類	10世紀末 ～11世紀前半						大宰府史跡第38次調査 SK802土坑	
Ⅰ－3B類（浦城Ⅰ類）	11世紀前半～11世紀中頃							瓦器椀，白磁
Ⅰ－3C類	11世紀中頃～12世紀初頭						大宰府史跡第38次調査 SD860溝	白磁
Ⅰ－4類	12世紀初頭～12世紀中頃	SD305 溝						白磁，瓦器椀
Ⅱ－1類	12世紀中頃～12世紀後半	SK312土坑下部 SK312土坑上部 SK338土坑	SE401 井戸 暗茶褐色粘質土		SD604 溝	6号墓		白磁，青磁7・9類 常滑，雑器1・11類
Ⅱ－2類	12世紀末 ～13世紀前半		SD401 溝	SK520 土坑	SE602 井戸 SE613 井戸 SK629 土坑		浦城Ⅱ－1類	青磁7・9類 瓦器椀
Ⅱ－3類	13世紀前半～13世紀中頃	SK317 土坑	SK407 土坑 MP27区黒褐色土	SE505 井戸 SE514 井戸	SE610 井戸		大宰府史跡第33次調査SD605溝4層	磁器6・8類
Ⅱ－4類	13世紀後半～14世紀初頭	SK309 土坑	SK424 土坑	SK501 土坑 SK513 土坑	SD601溝，SD609溝 SD603溝，SD604溝		浦城Ⅱ－2類	
Ⅱ－5類	14世紀初頭～14世紀中頃	SK339 土坑		SD502 溝 SE516 井戸	SD602 溝 SK621 土坑			

37表 土師器分類と遺構対照表

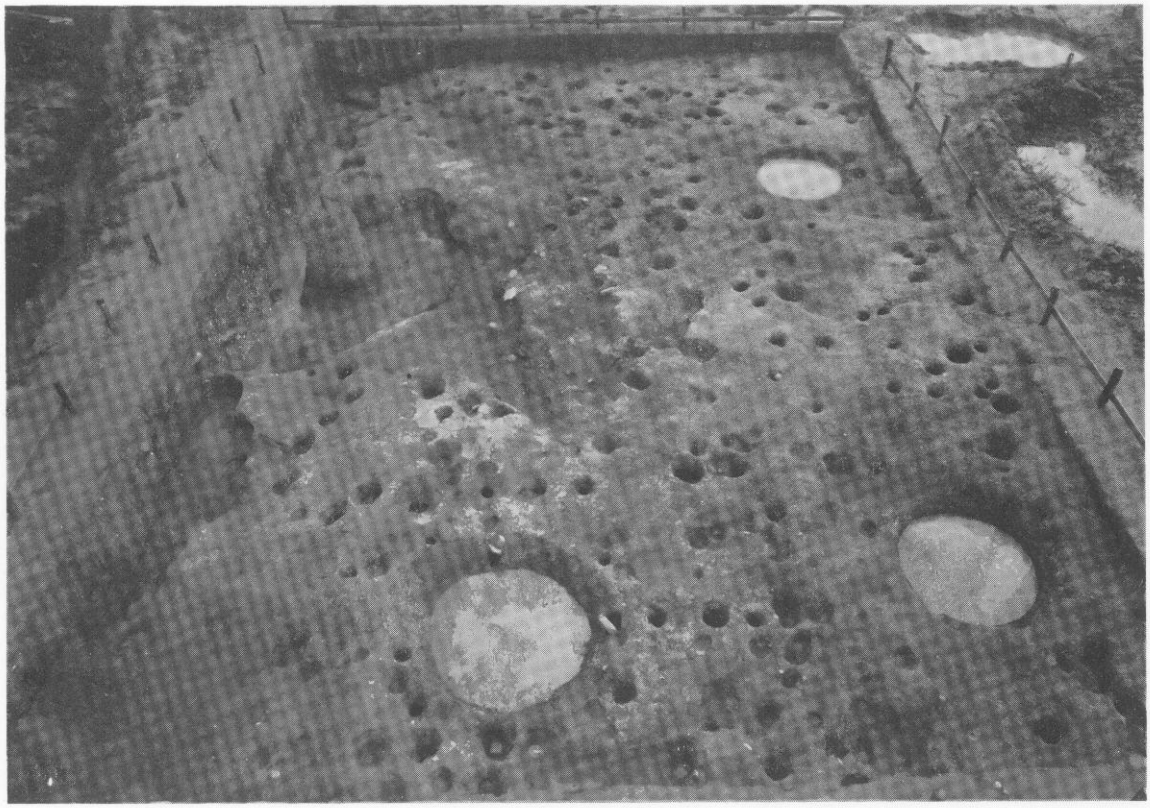
図　版

遺跡全景

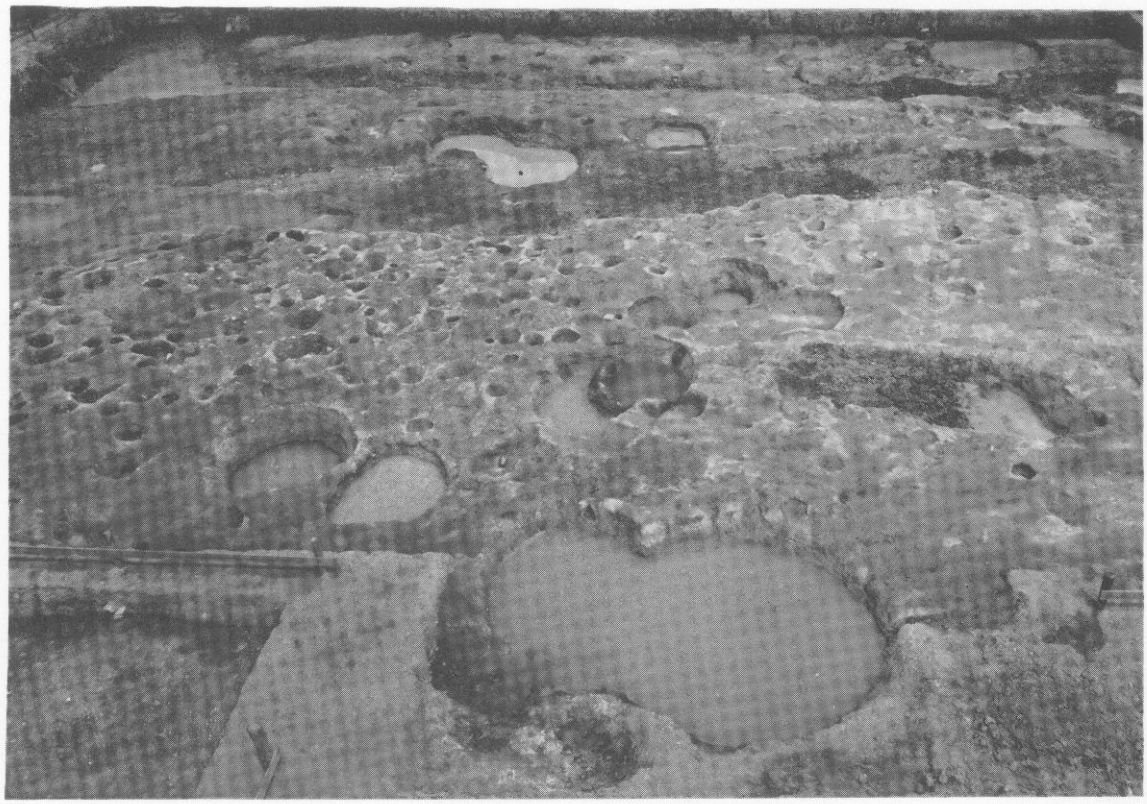


1.　遺跡全景（南から）

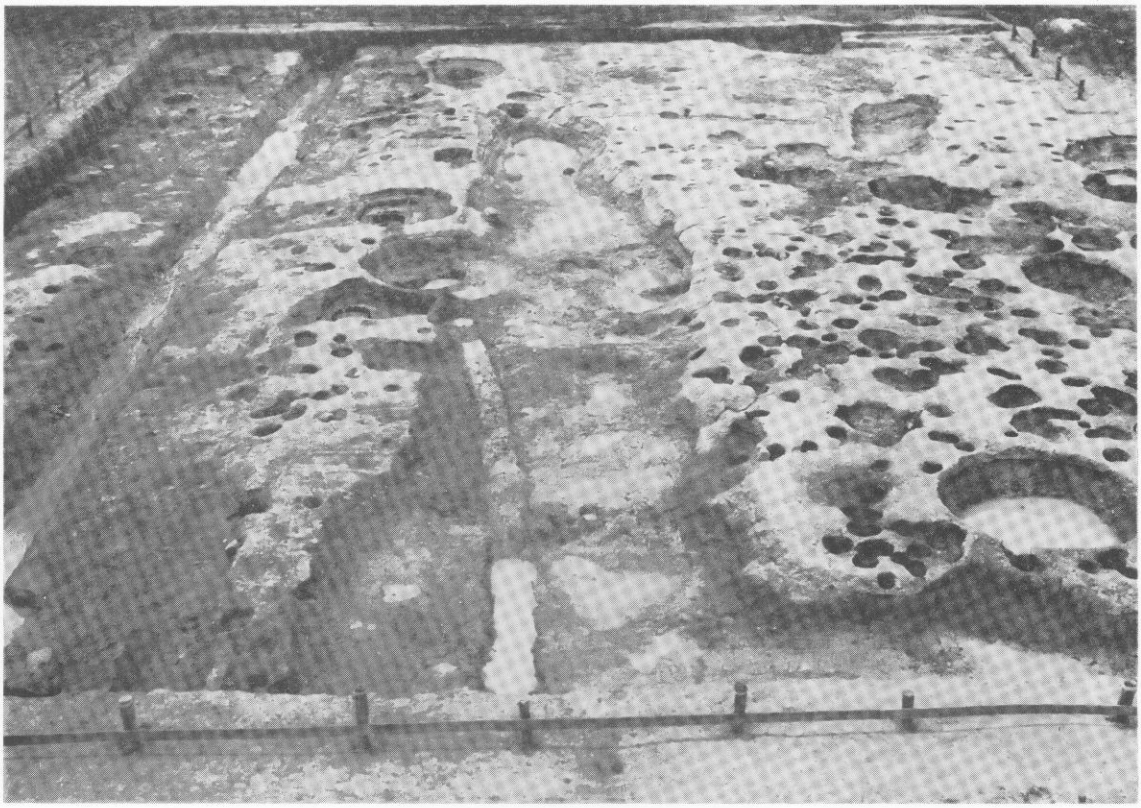
2.　遺跡全景（東から）



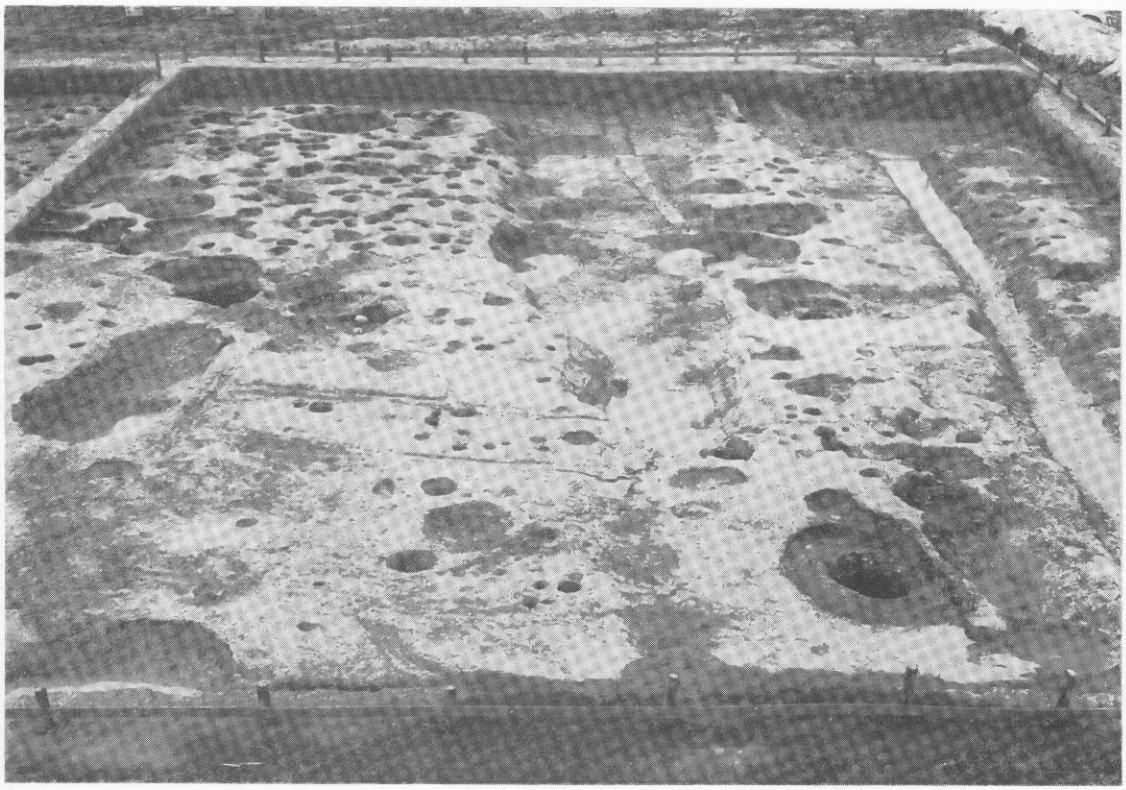
1.　西区下層（西から）



2.　東区下層全景（西から）

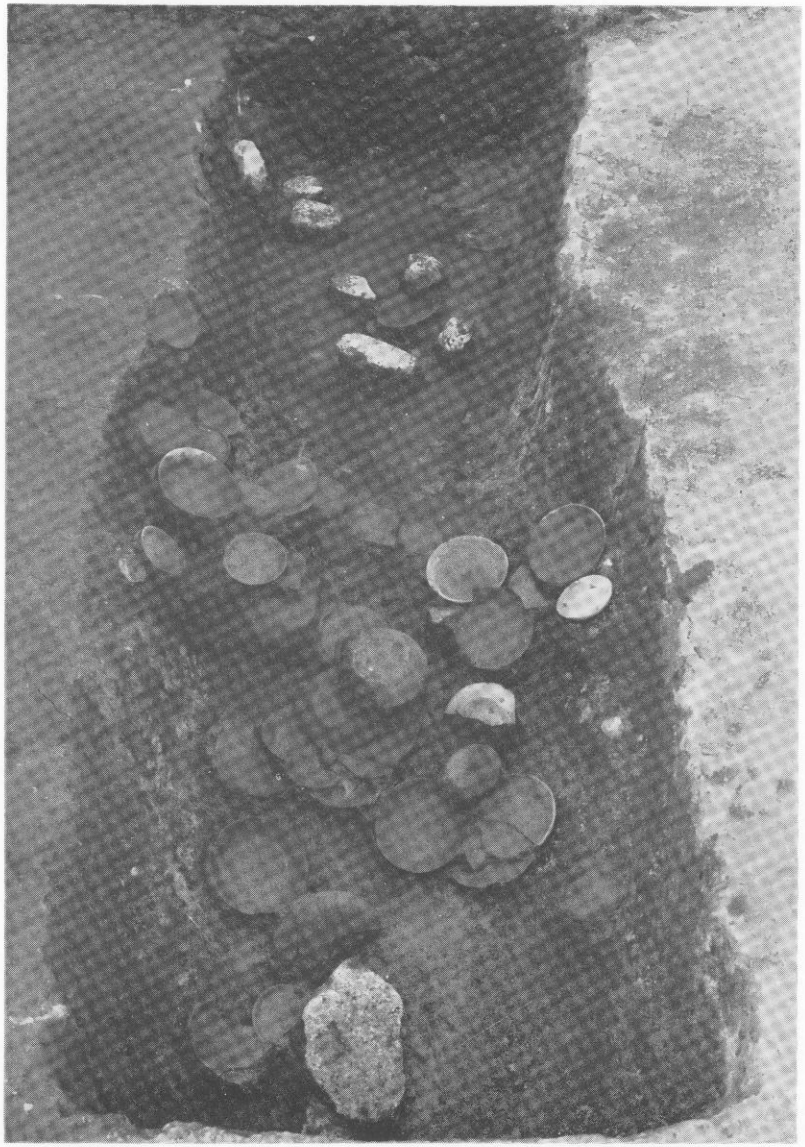


1.　東区下層（北から）

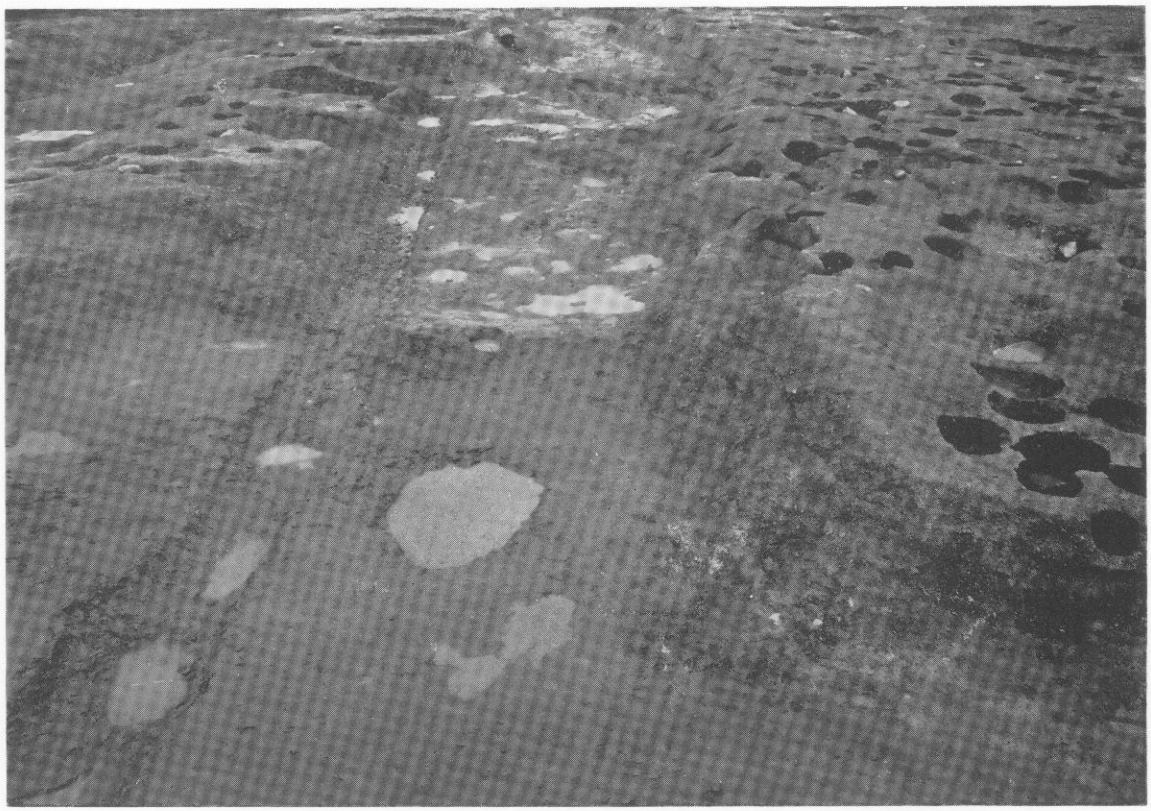


2.　東区下層（南から）

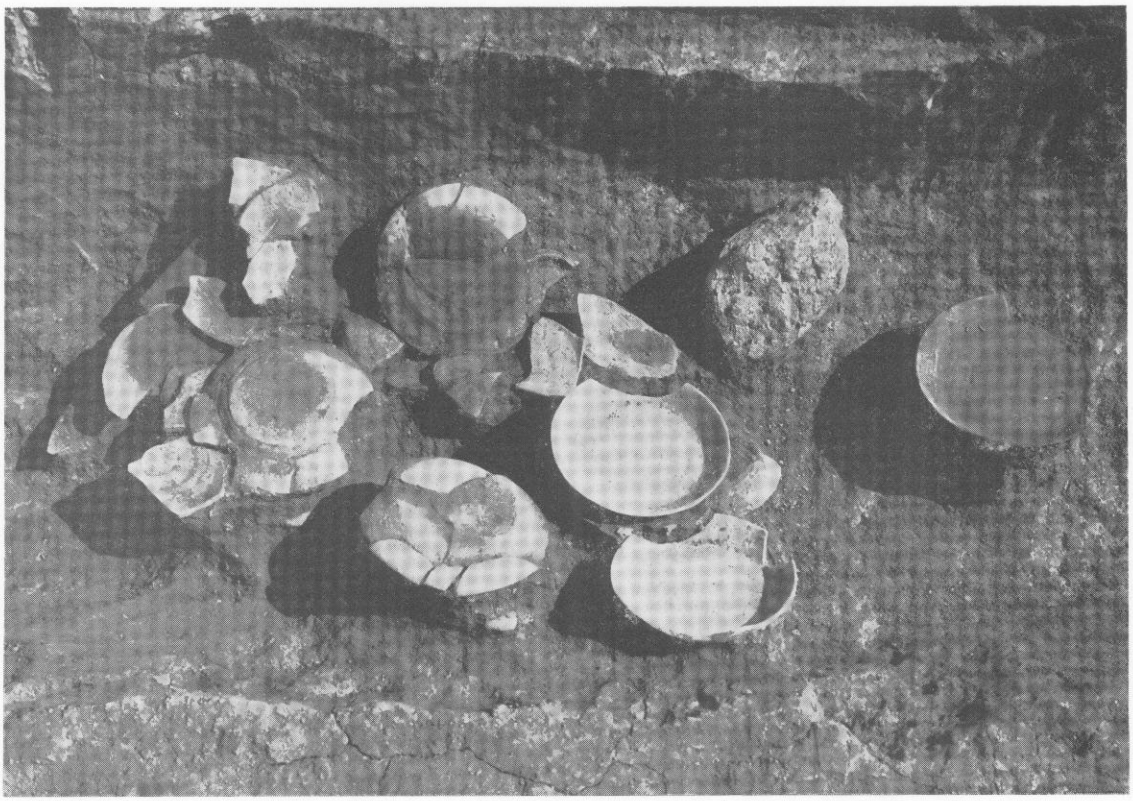
1. SD601溝（北から）



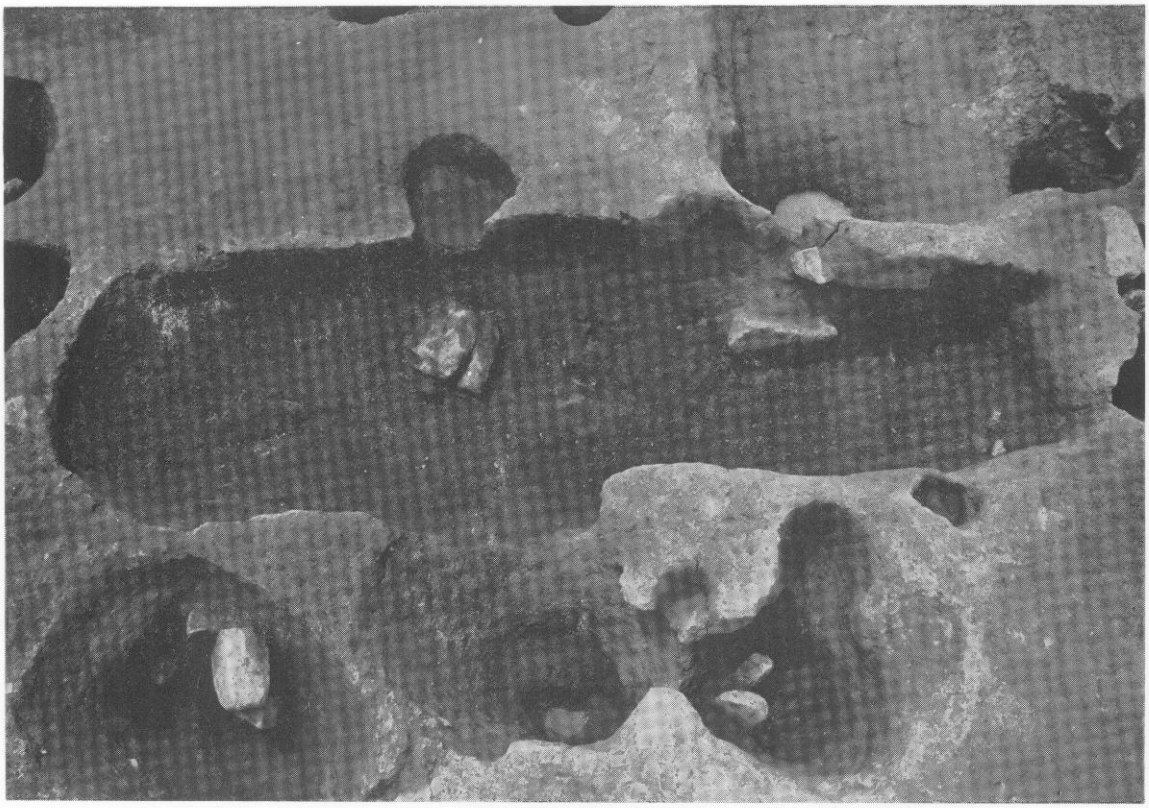
2. SD603溝内遺物出土状態（南から）



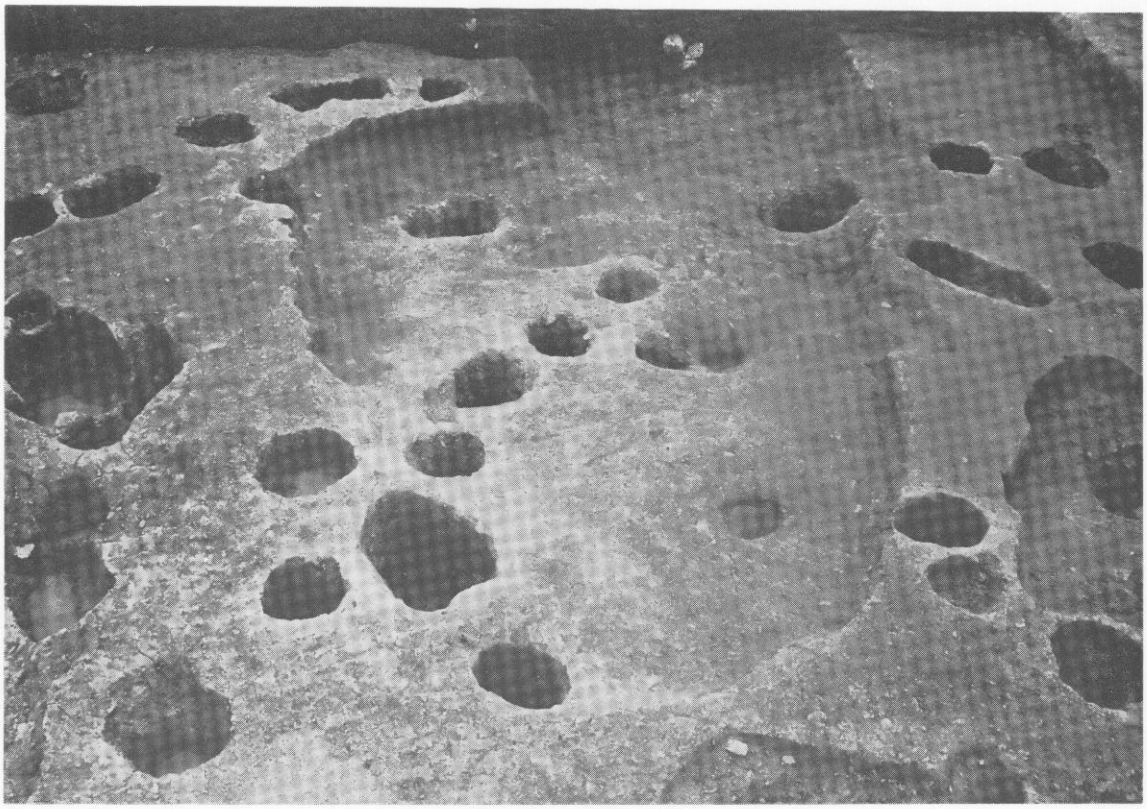
1.　ＳＤ 602 溝（北から）



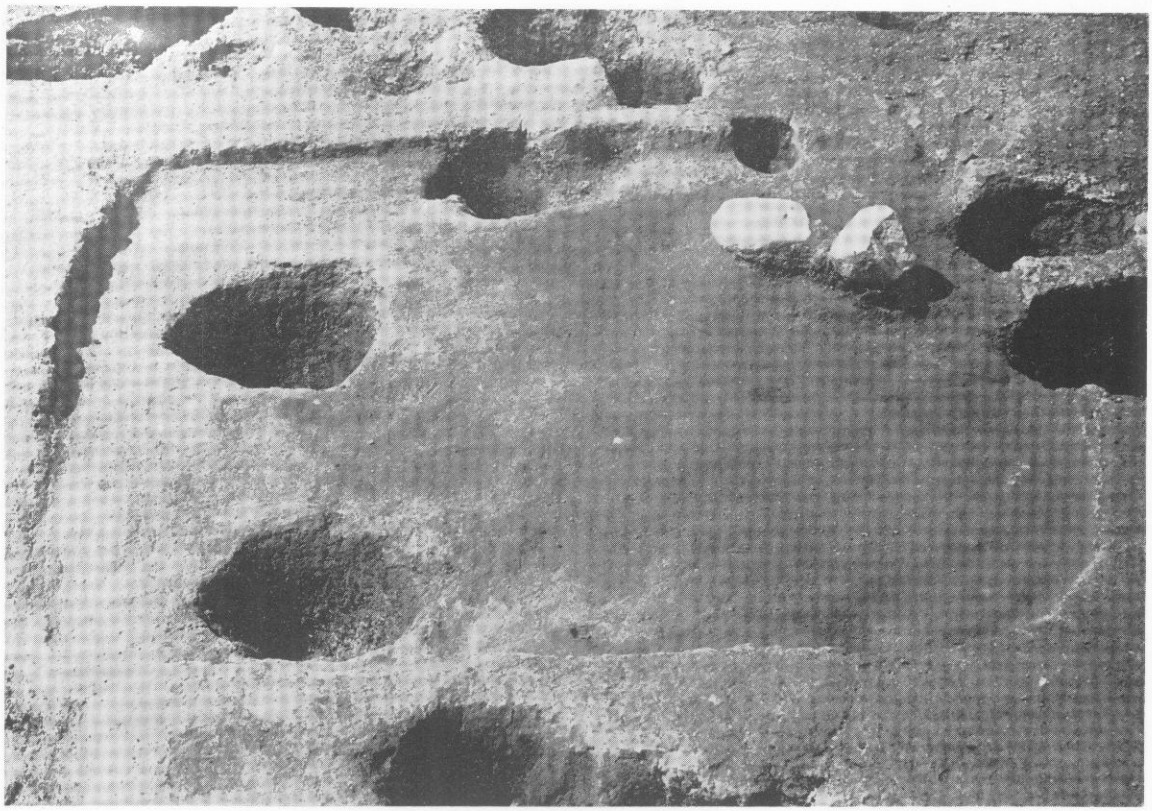
2.　ＳＤ 604 溝内遺物出土状態



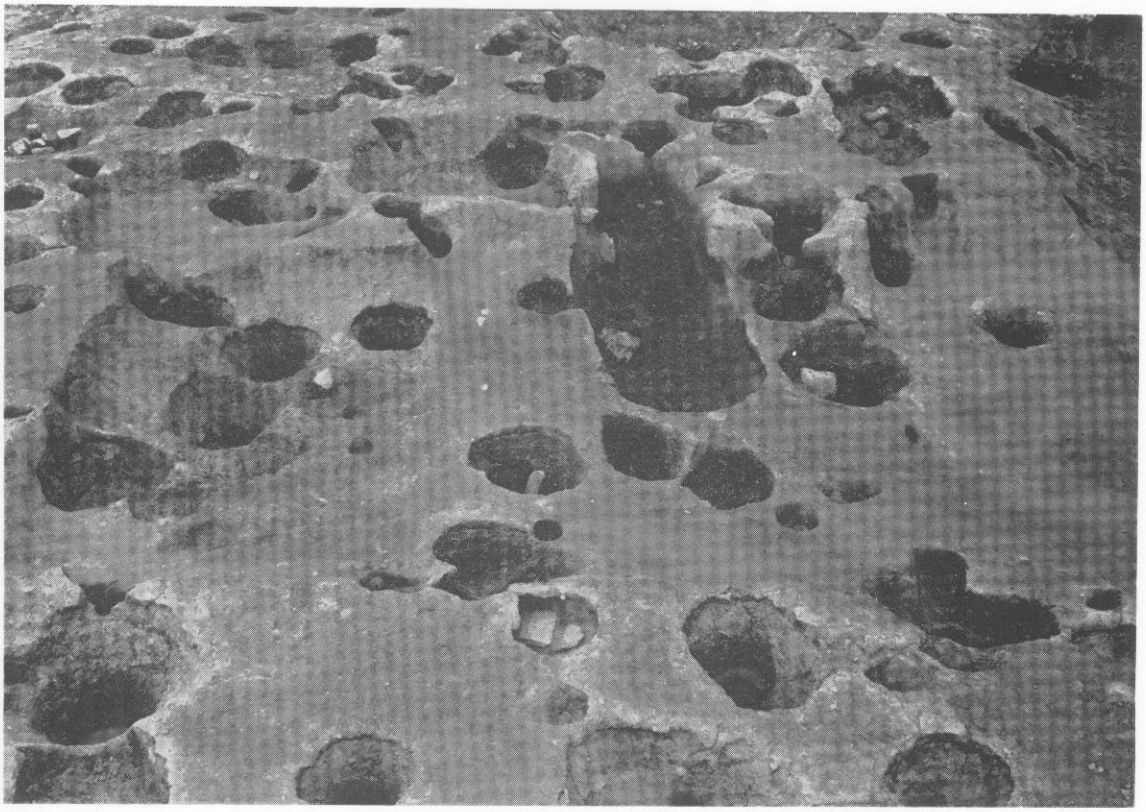
1.　ＳＫ 602 土坑（北から）



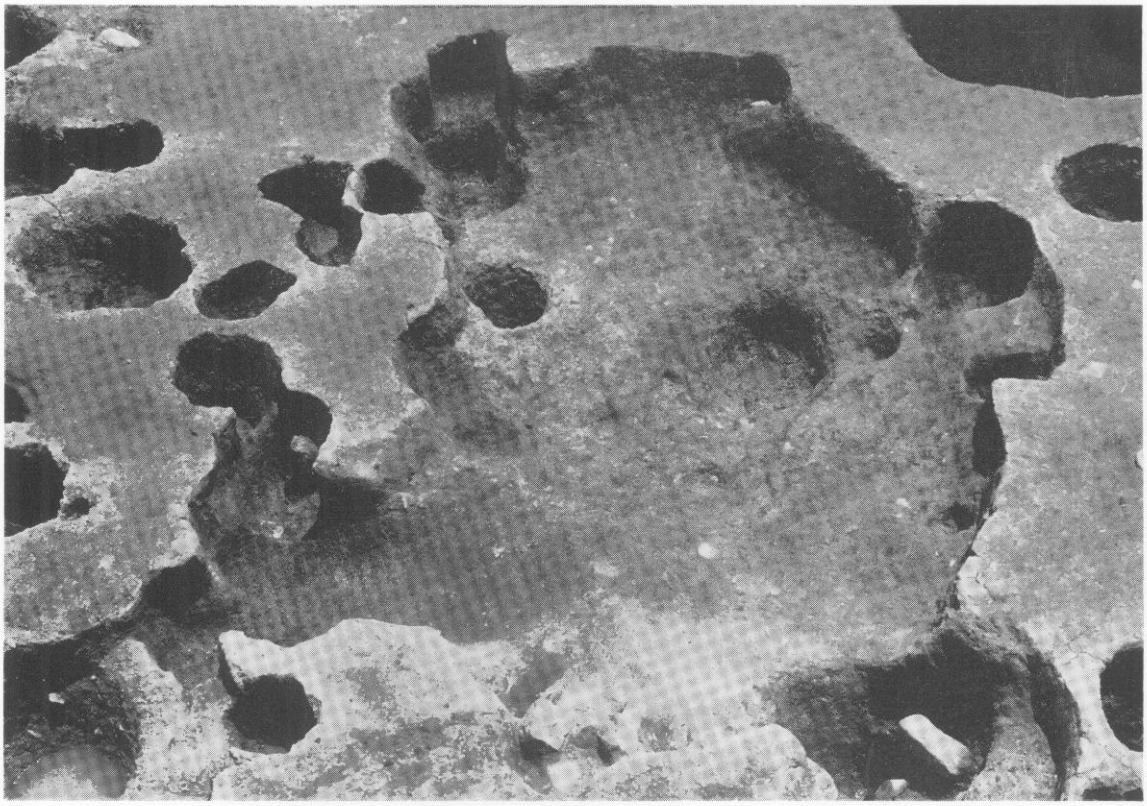
2.　ＳＫ 612・613・614 土坑（西から）



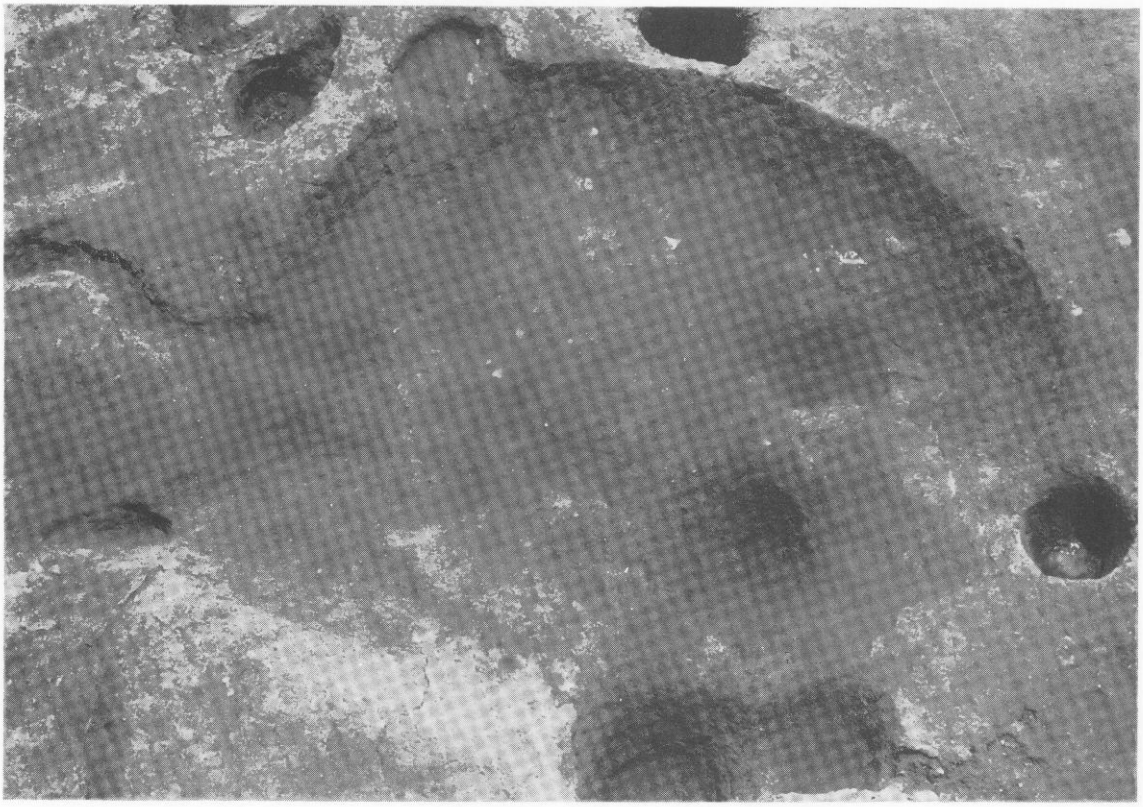
1.　ＳＫ 607 土坑（北から）



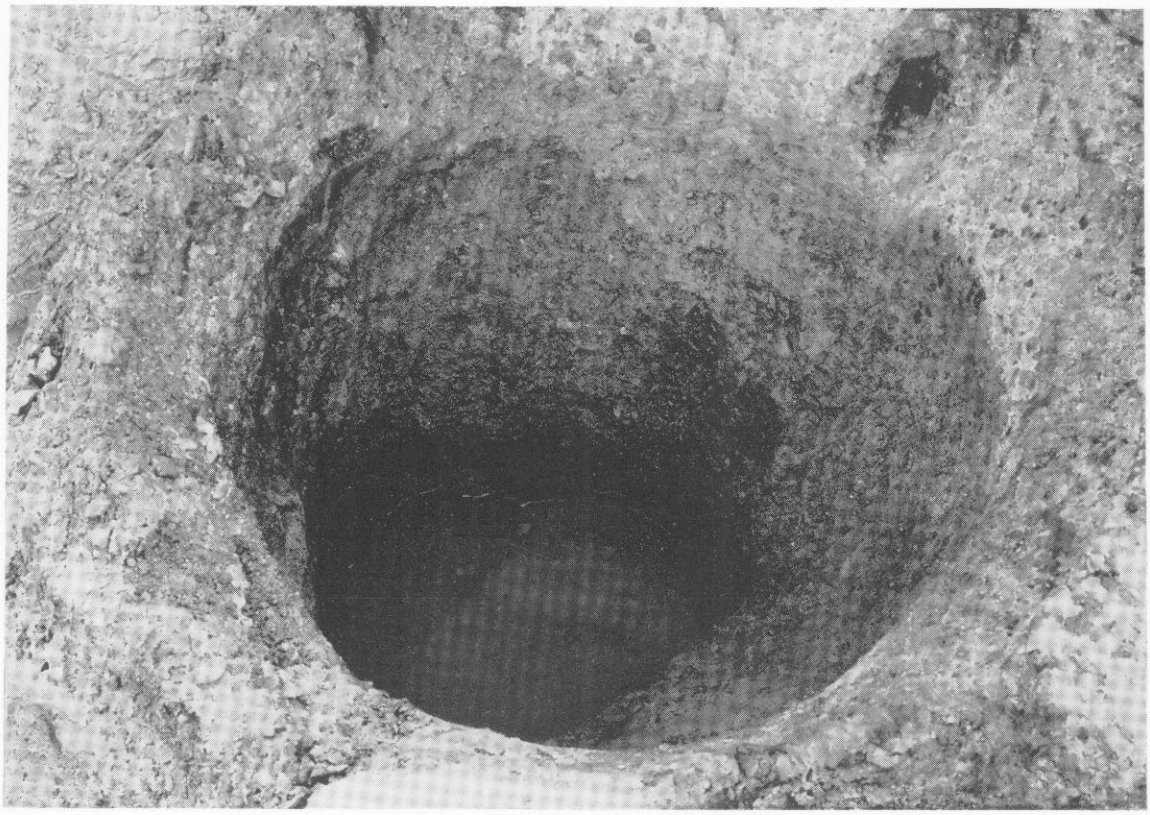
2.　ＳＫ602・606土坑（東から）



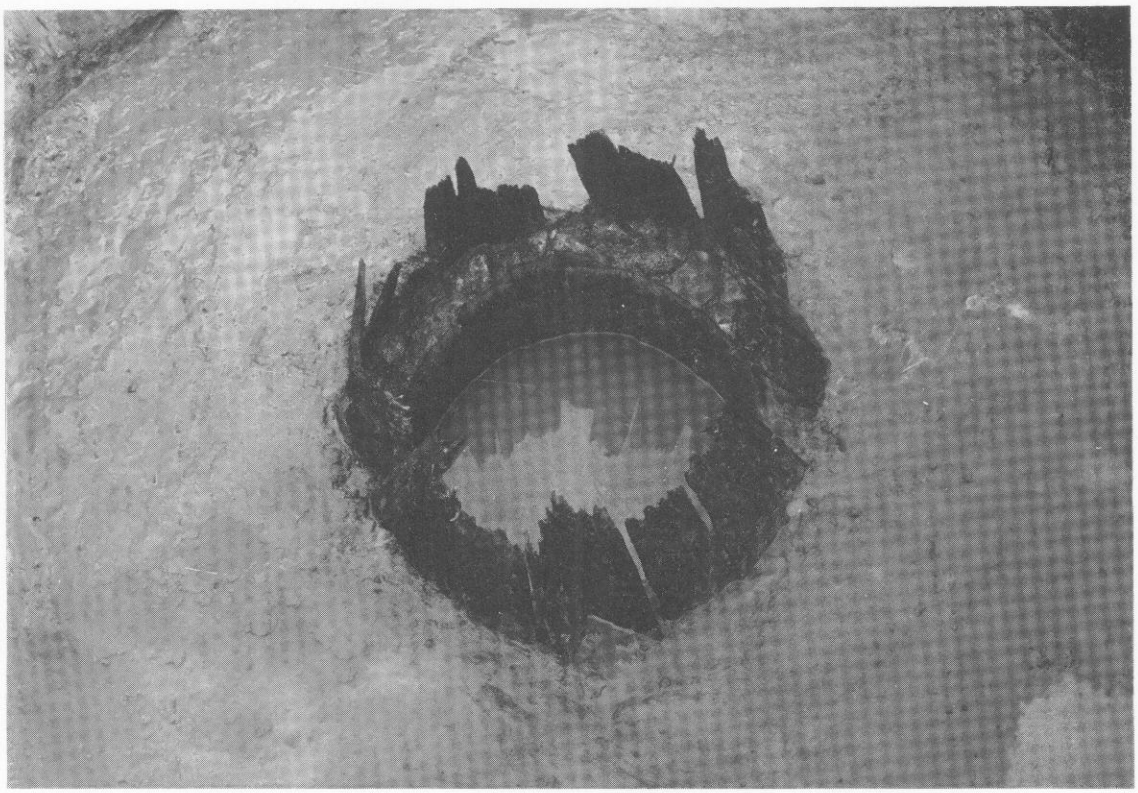
1.　ＳＫ 610 土坑（西から）



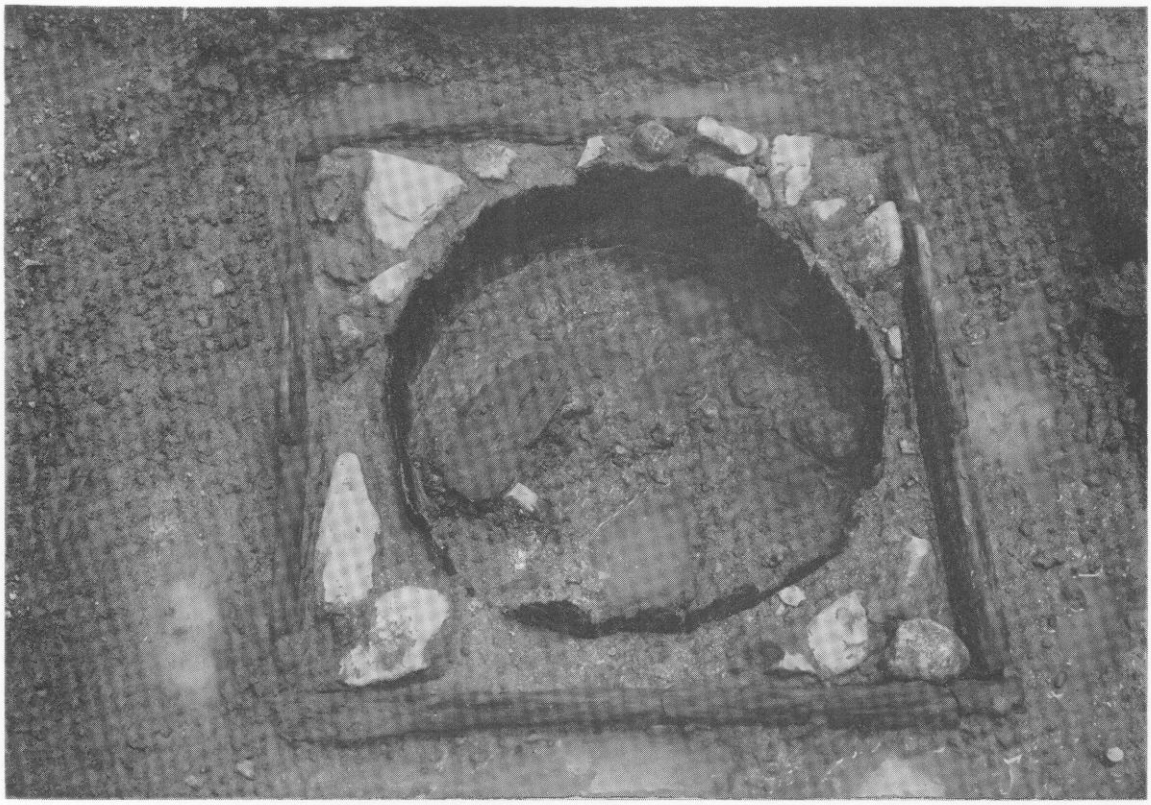
2.　ＳＫ 609 土坑（北から）



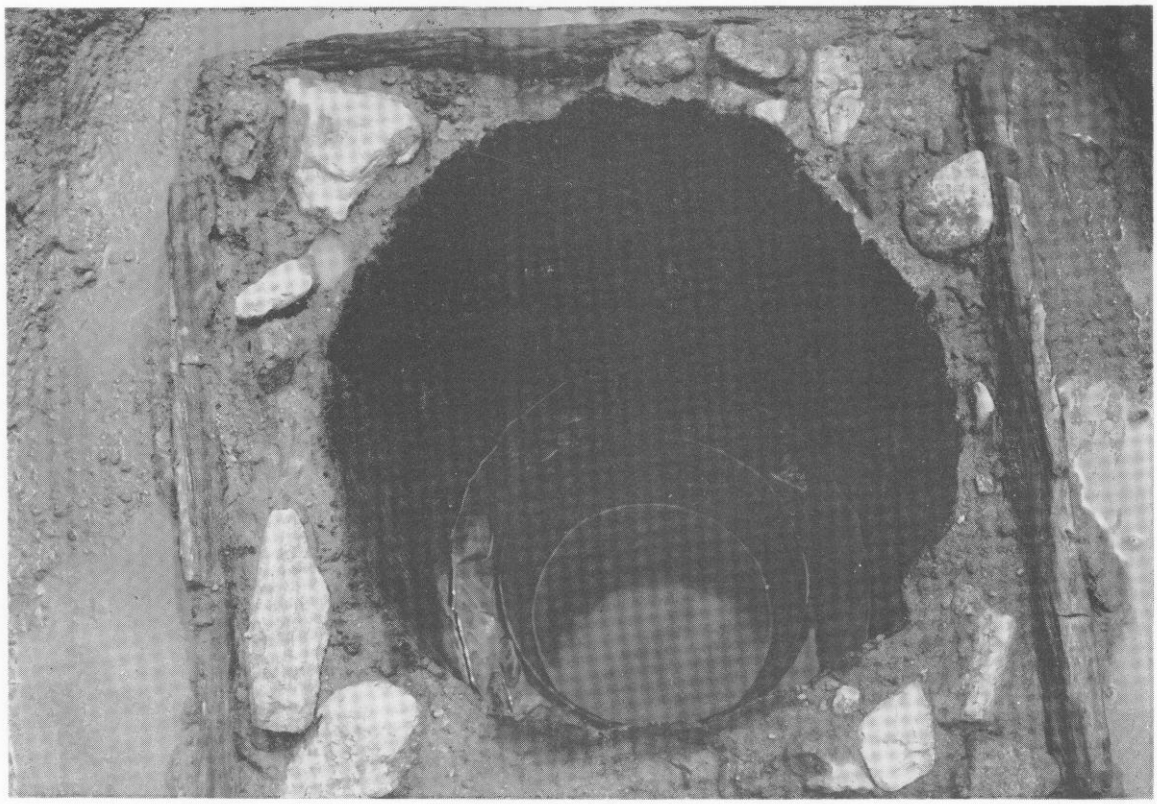
1.　ＳＥ601 号井戸



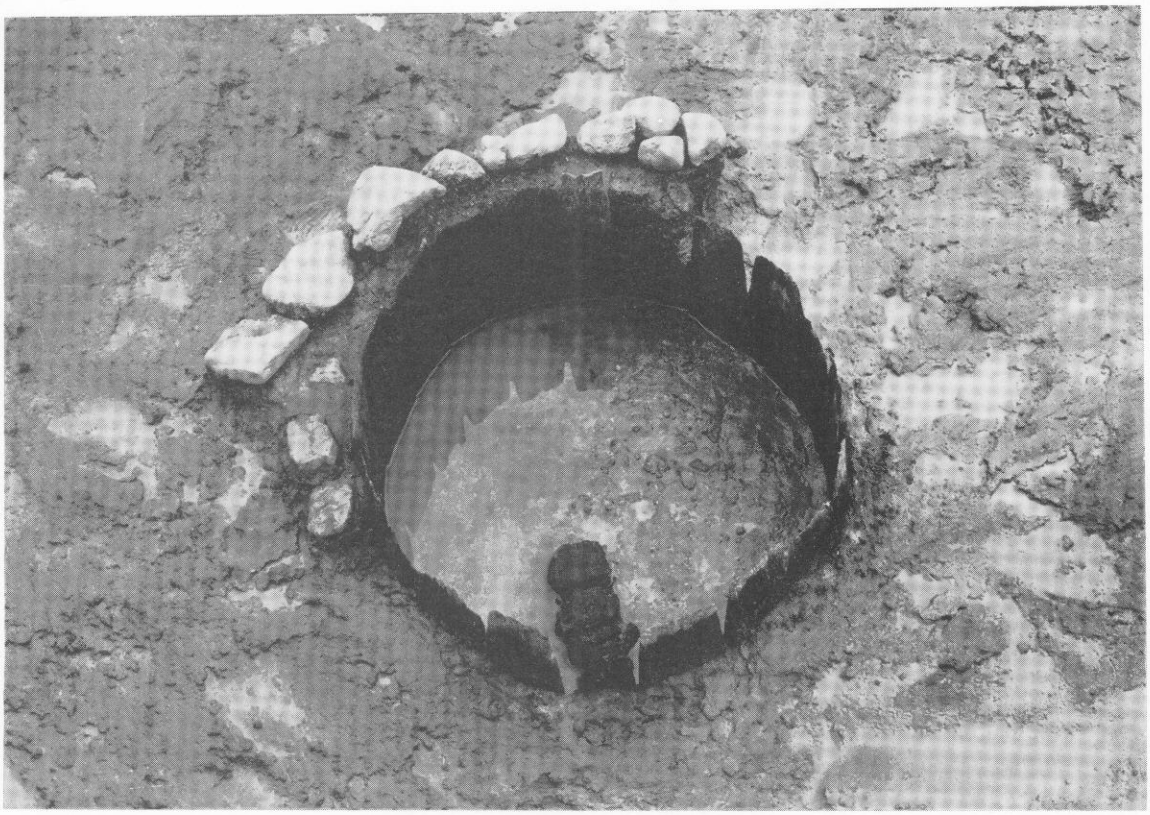
2.　ＳＥ602 号井戸



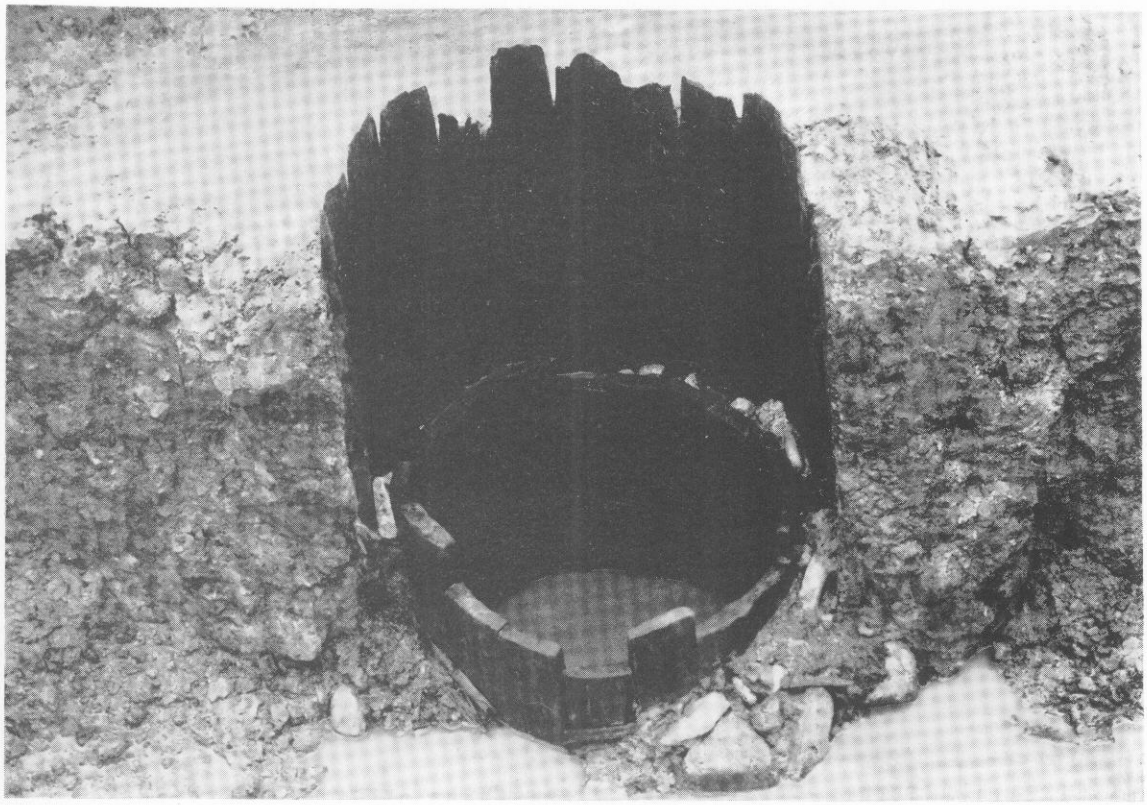
1.　S E 603 号井戸



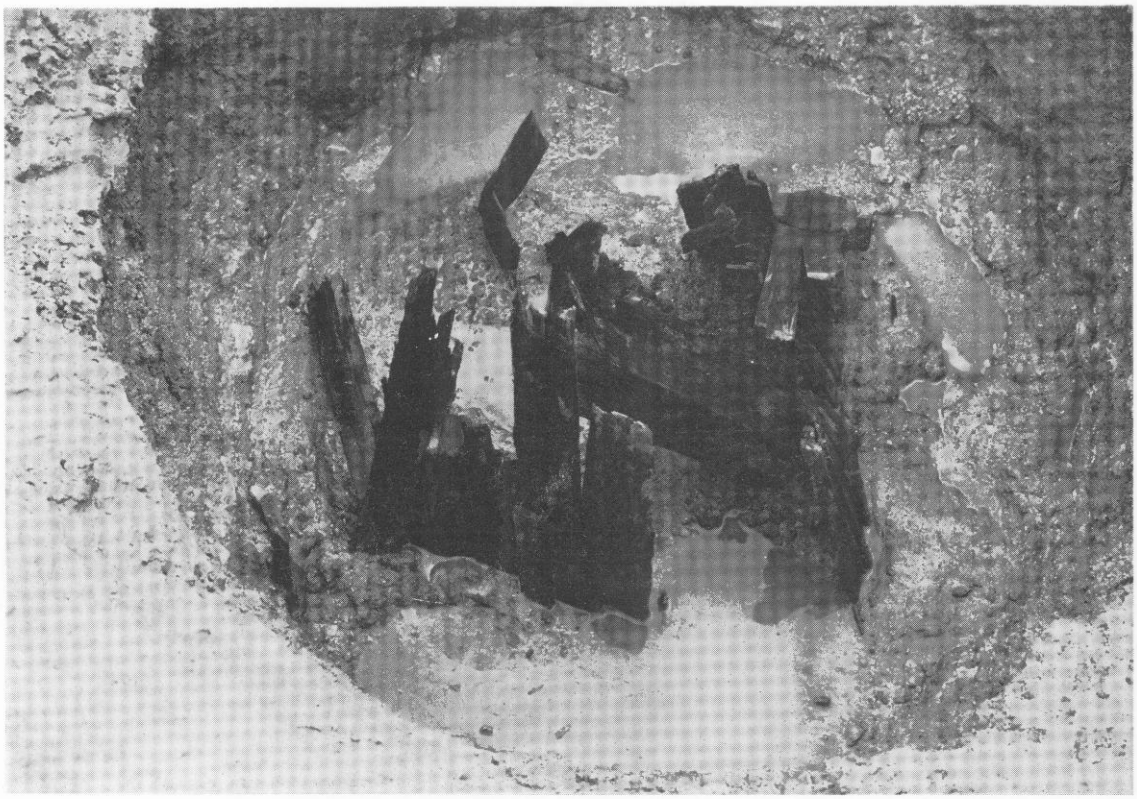
2.　S E 603 号井戸



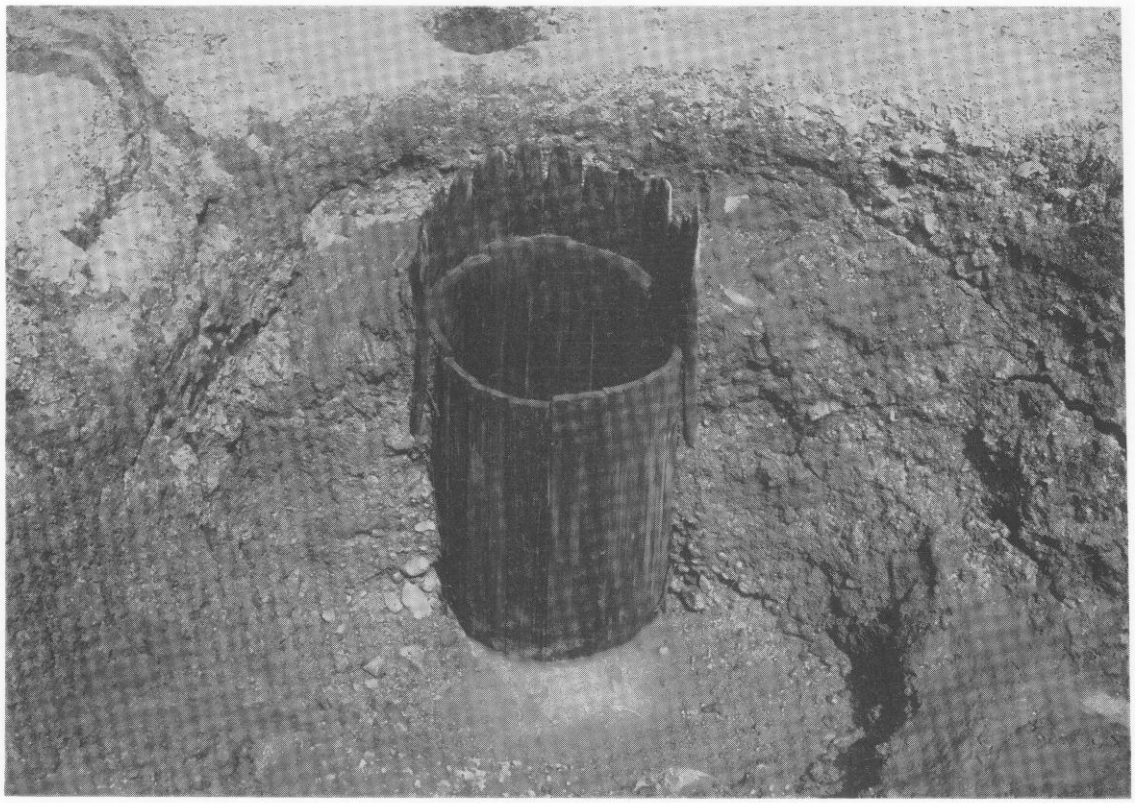
1.　S E 604 号井戸



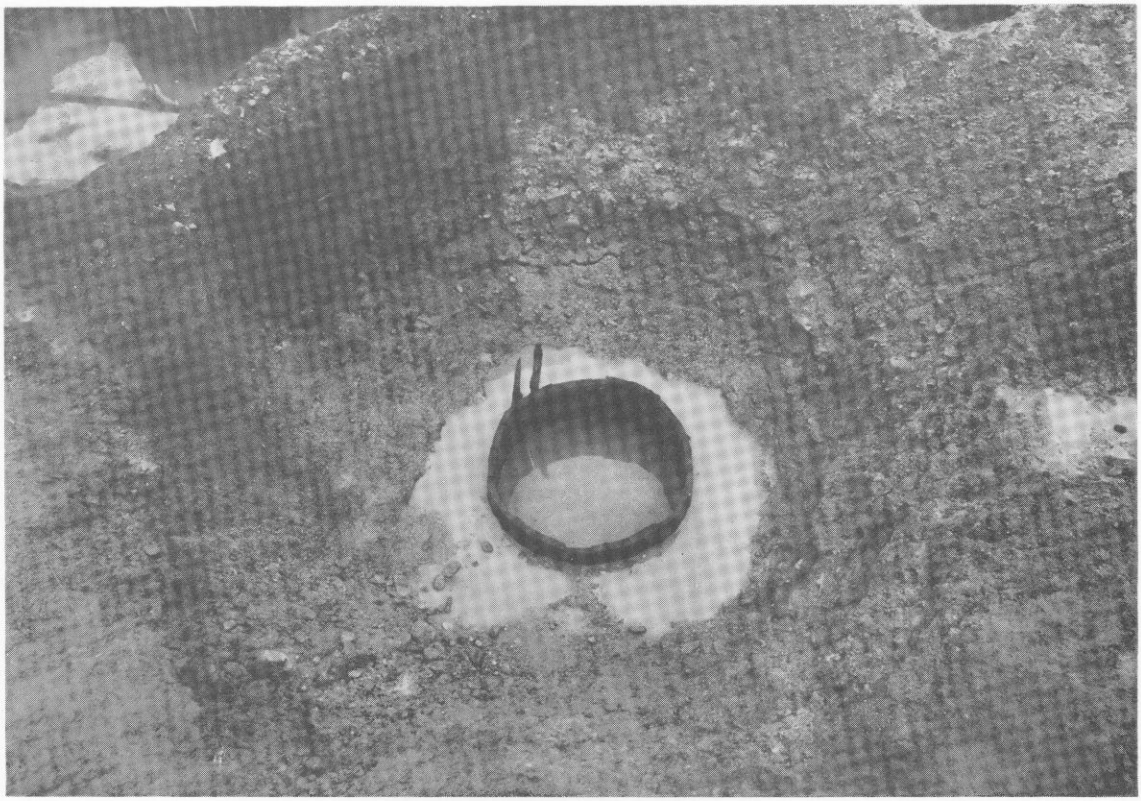
2.　S E 604 号井戸



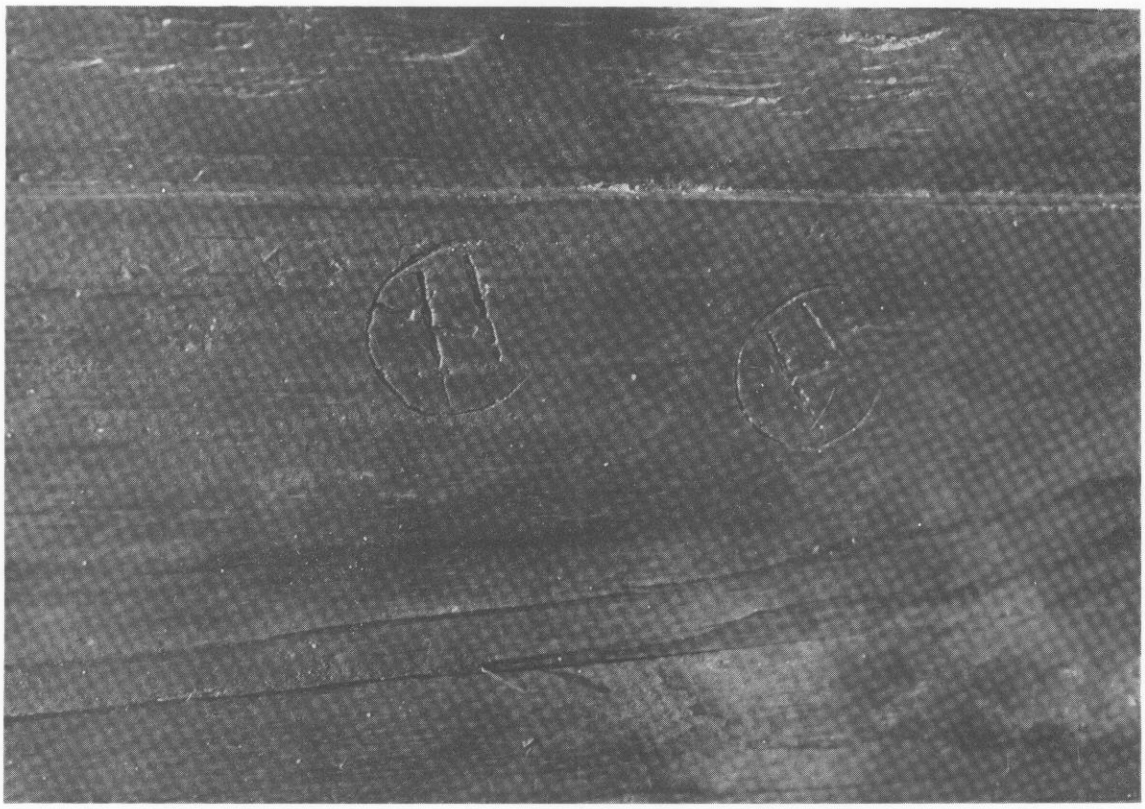
1.　ＳＥ 605 号井戸



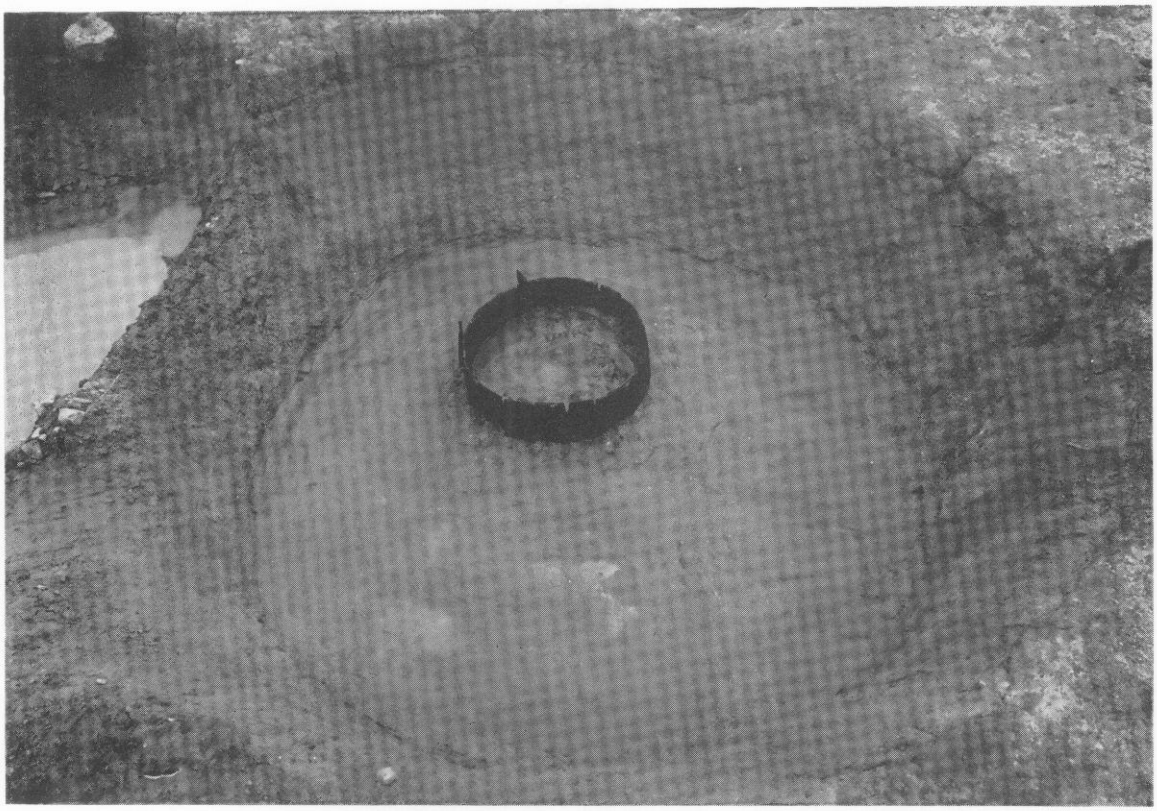
2.　ＳＥ 607 号井戸



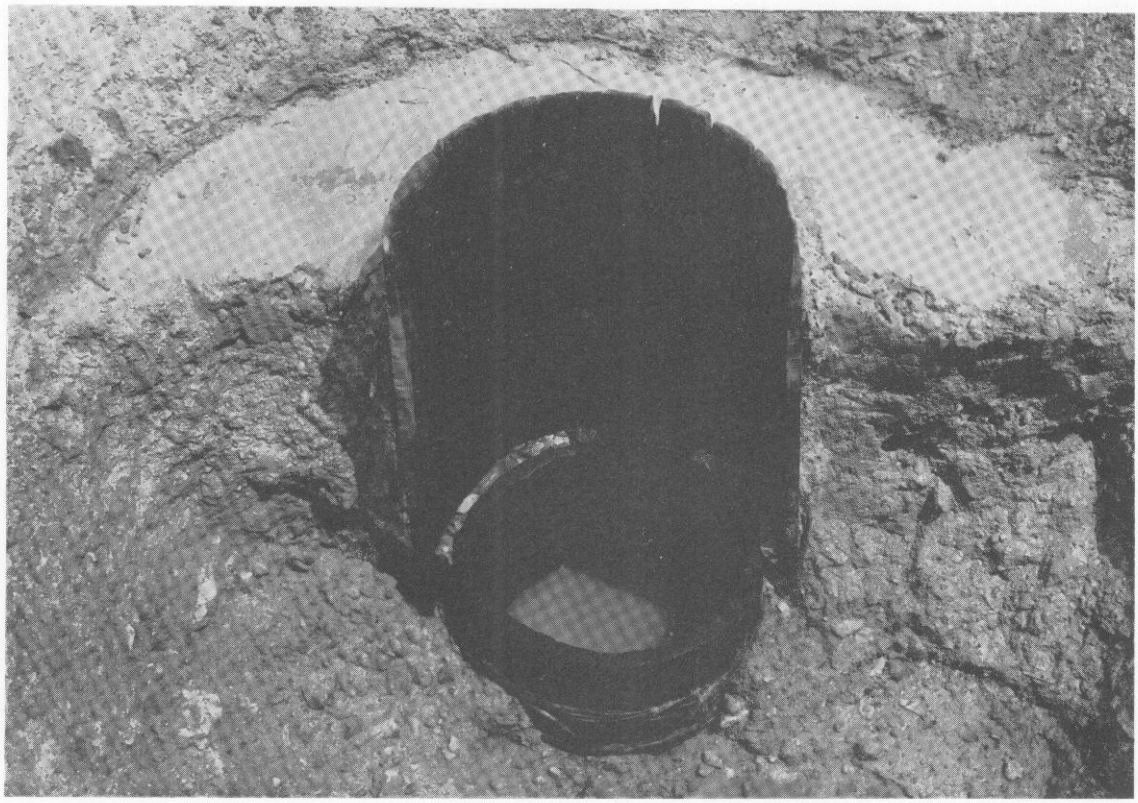
1.　ＳＥ 608 号井戸



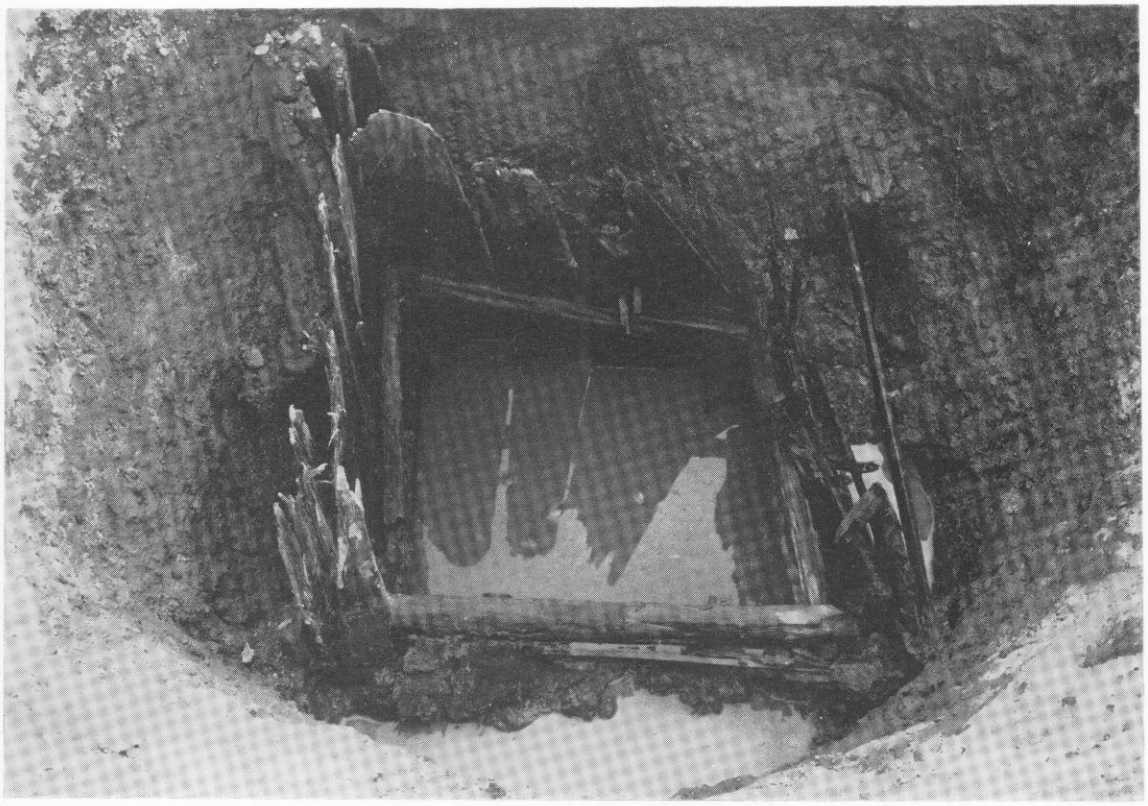
2.　ＳＥ 608 号井戸側陰刻



1.　ＳＥ 609 号井戸

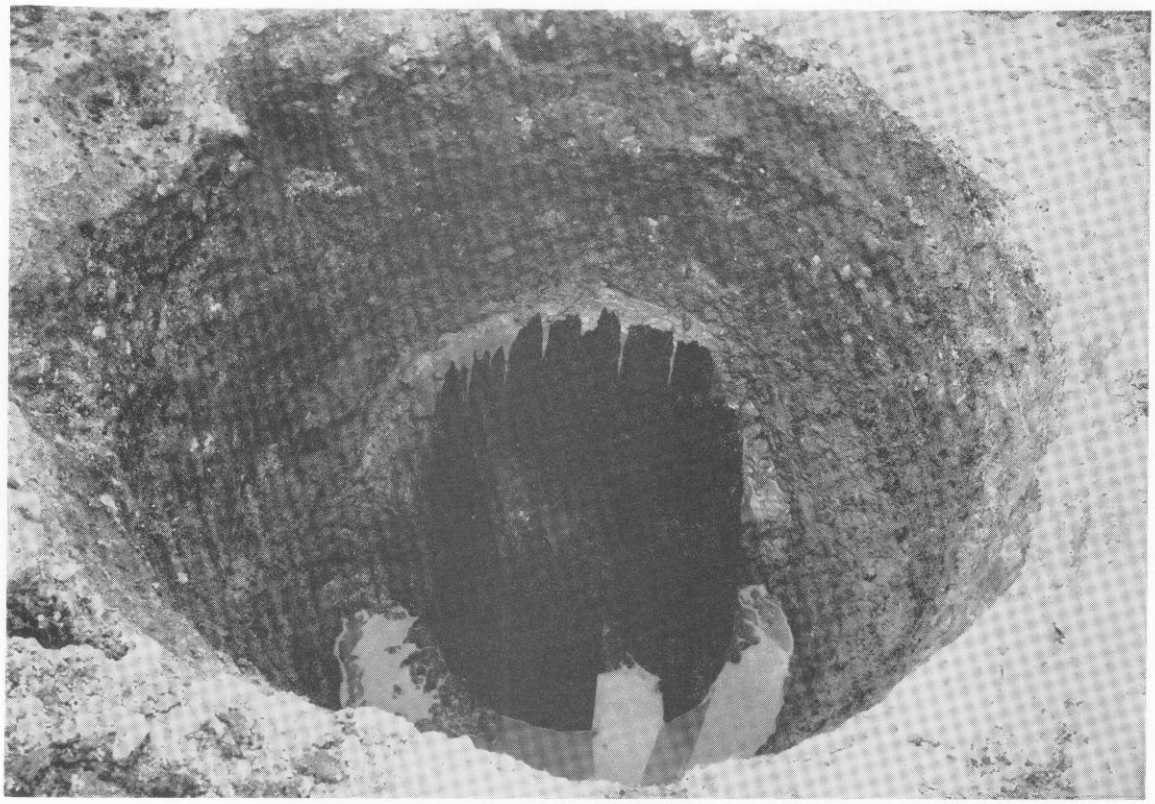


2.　ＳＥ 609 号井戸

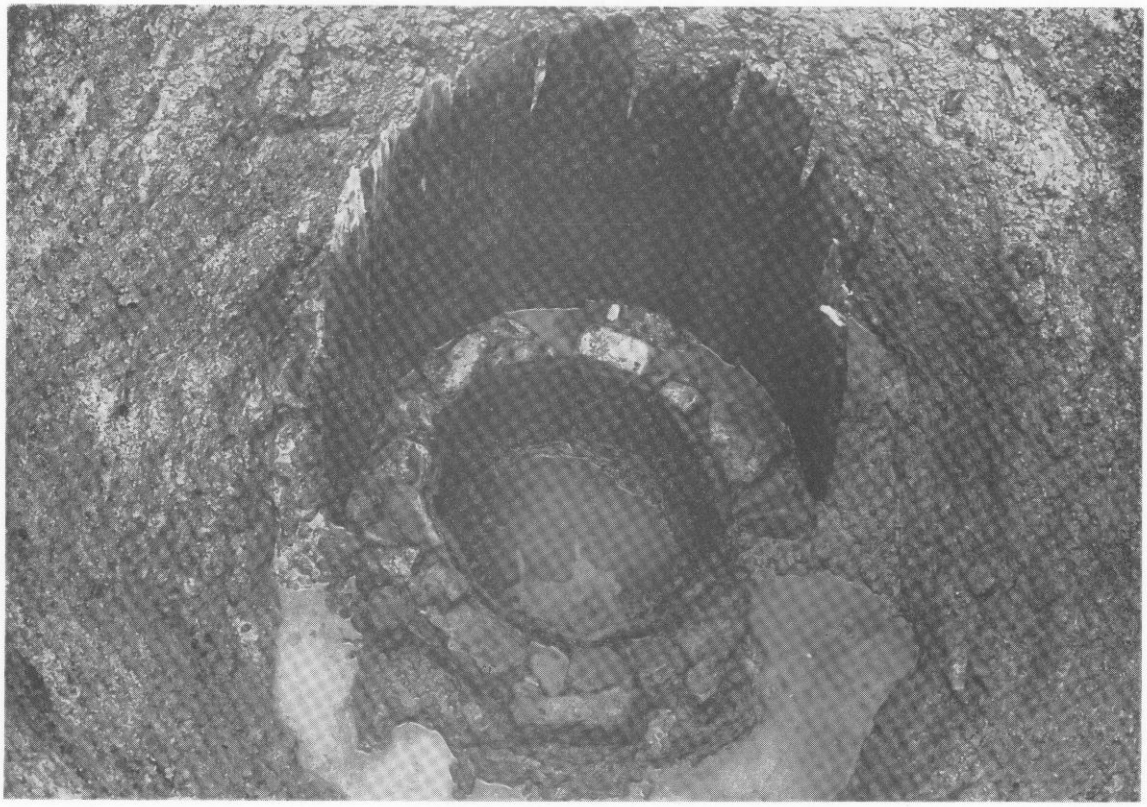


1. ＳＥ 610 号井戸

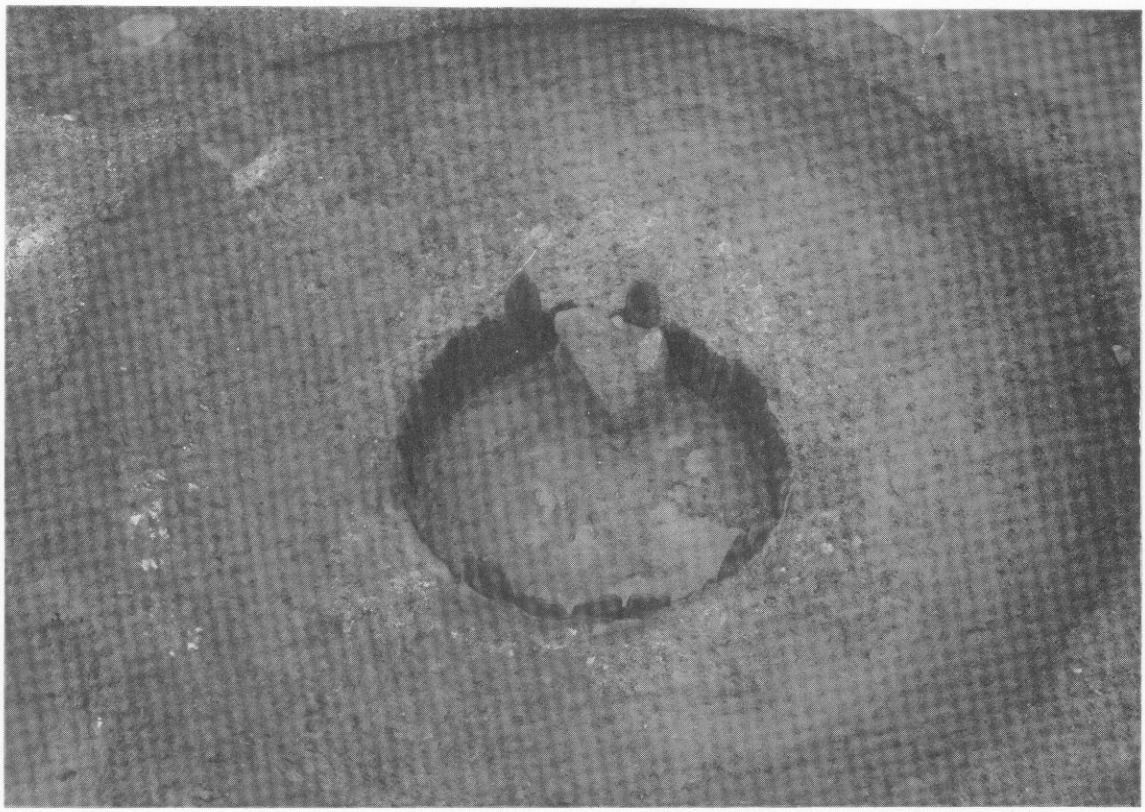
2. ＳＥ 613 号井戸



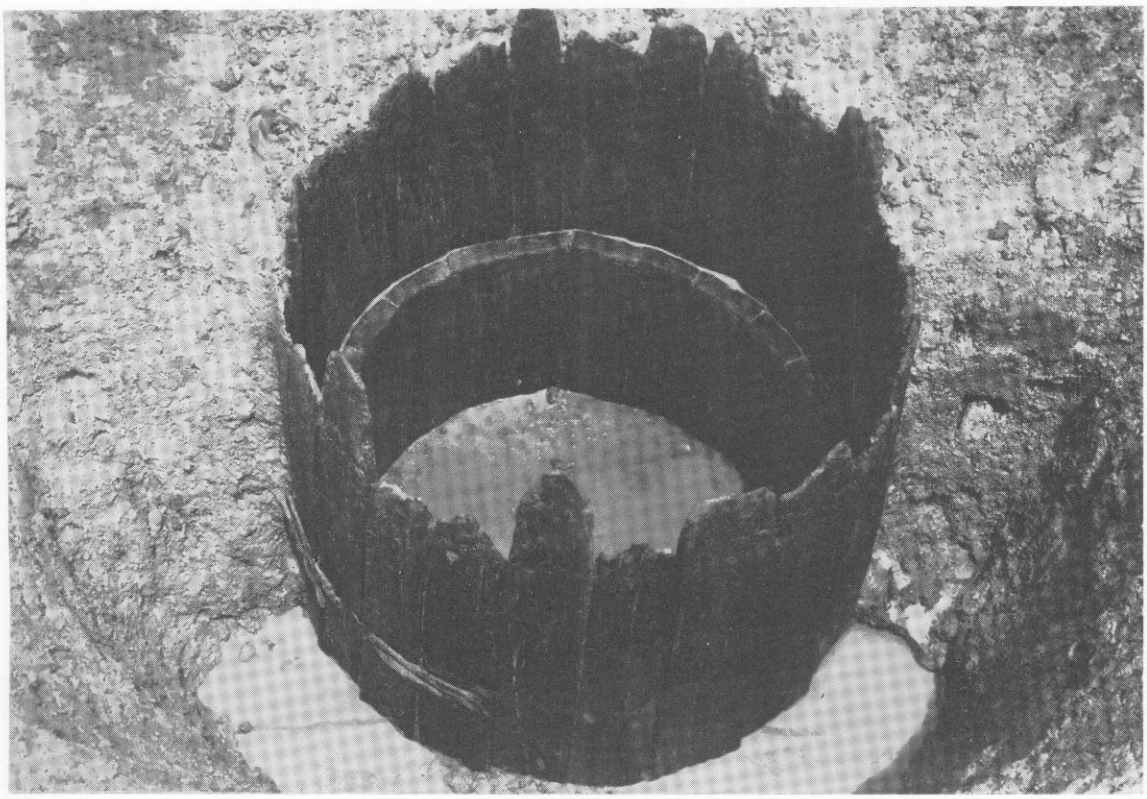
1.　S E 611 号井戸



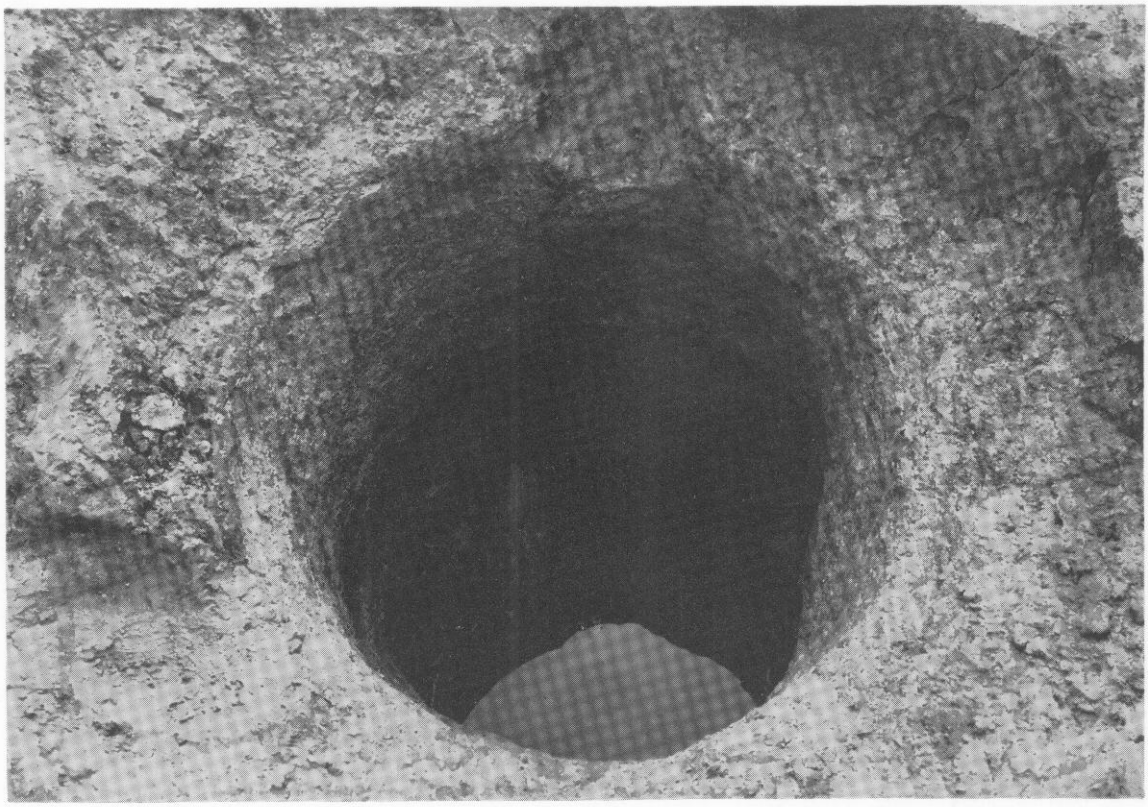
2.　S E 611 号井戸



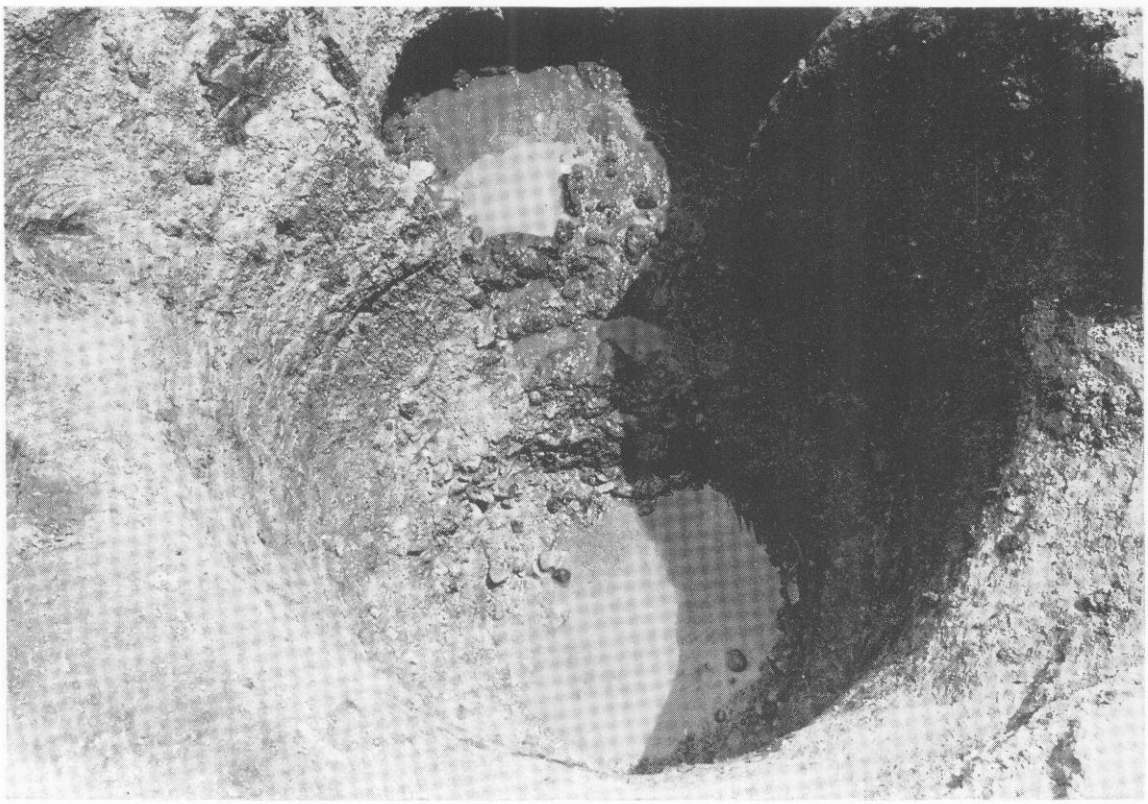
1.　S E 612 号井戸



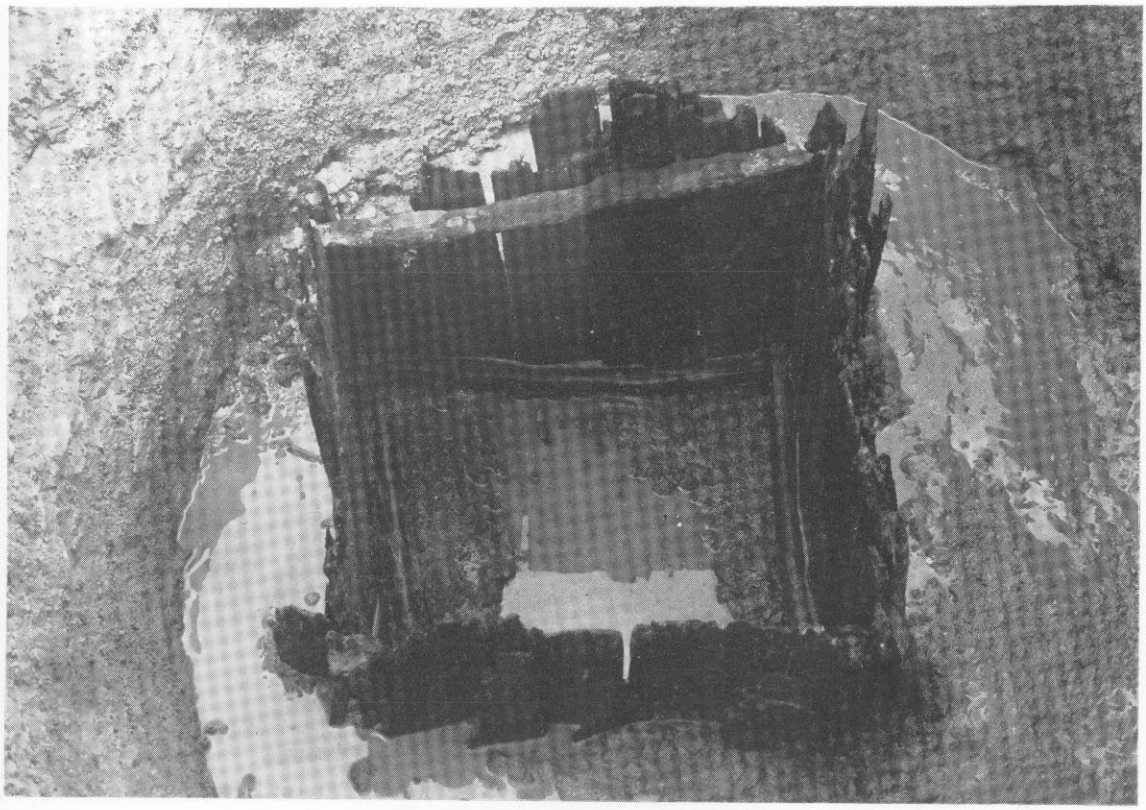
2.　S E 612 号井戸



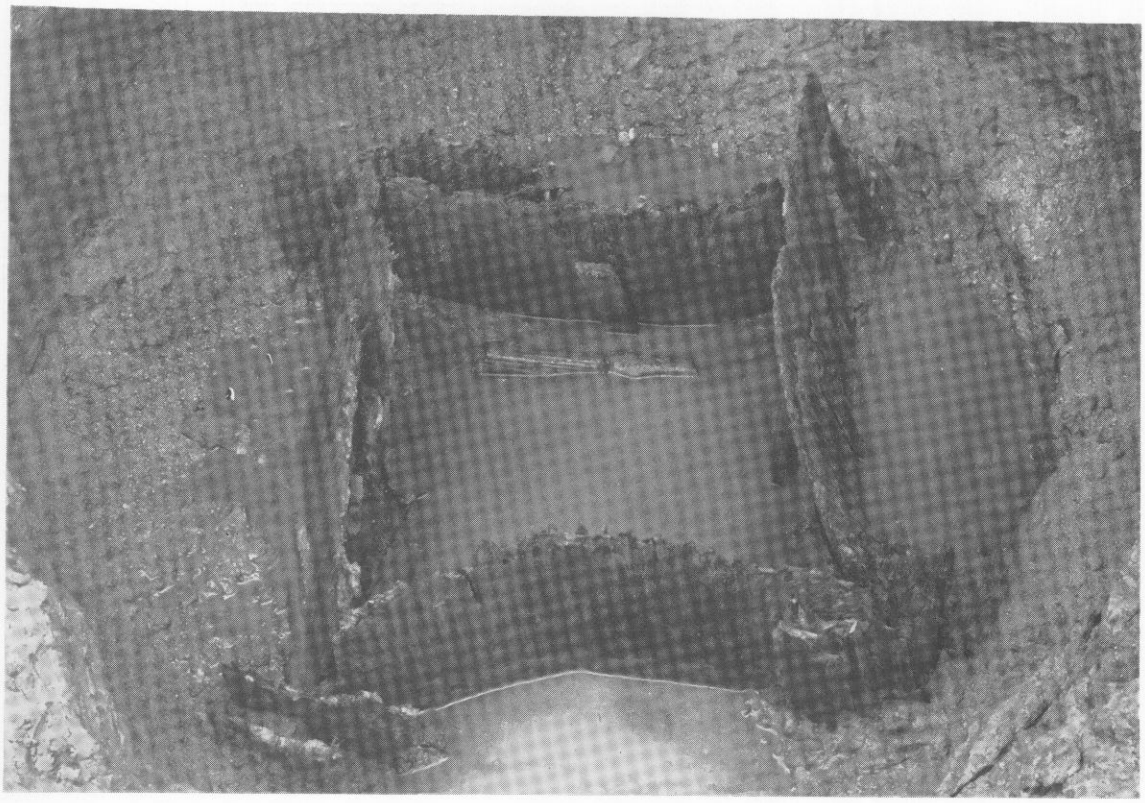
1.　ＳＥ 615 号井戸



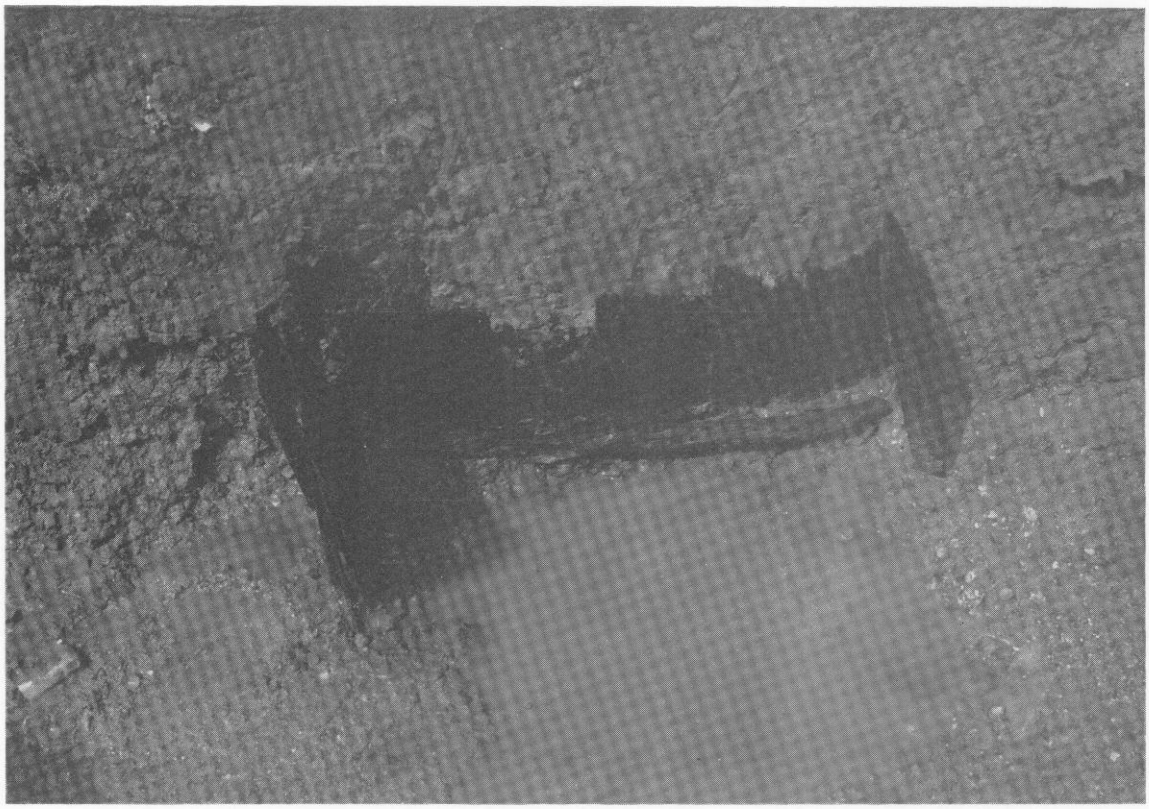
2.　ＳＥ 616 号井戸



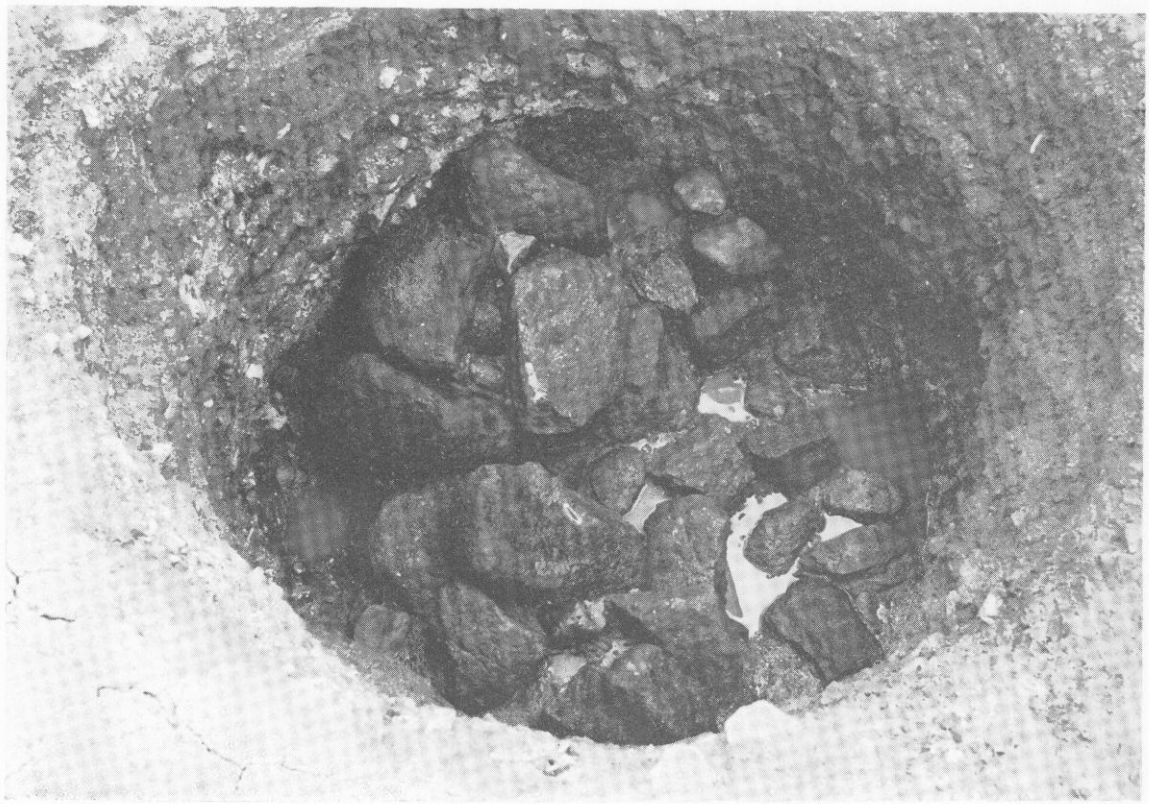
1.　ＳＥ 613 号井戸



2.　ＳＥ 614 号井戸



1.　ＳＥ617号井戸

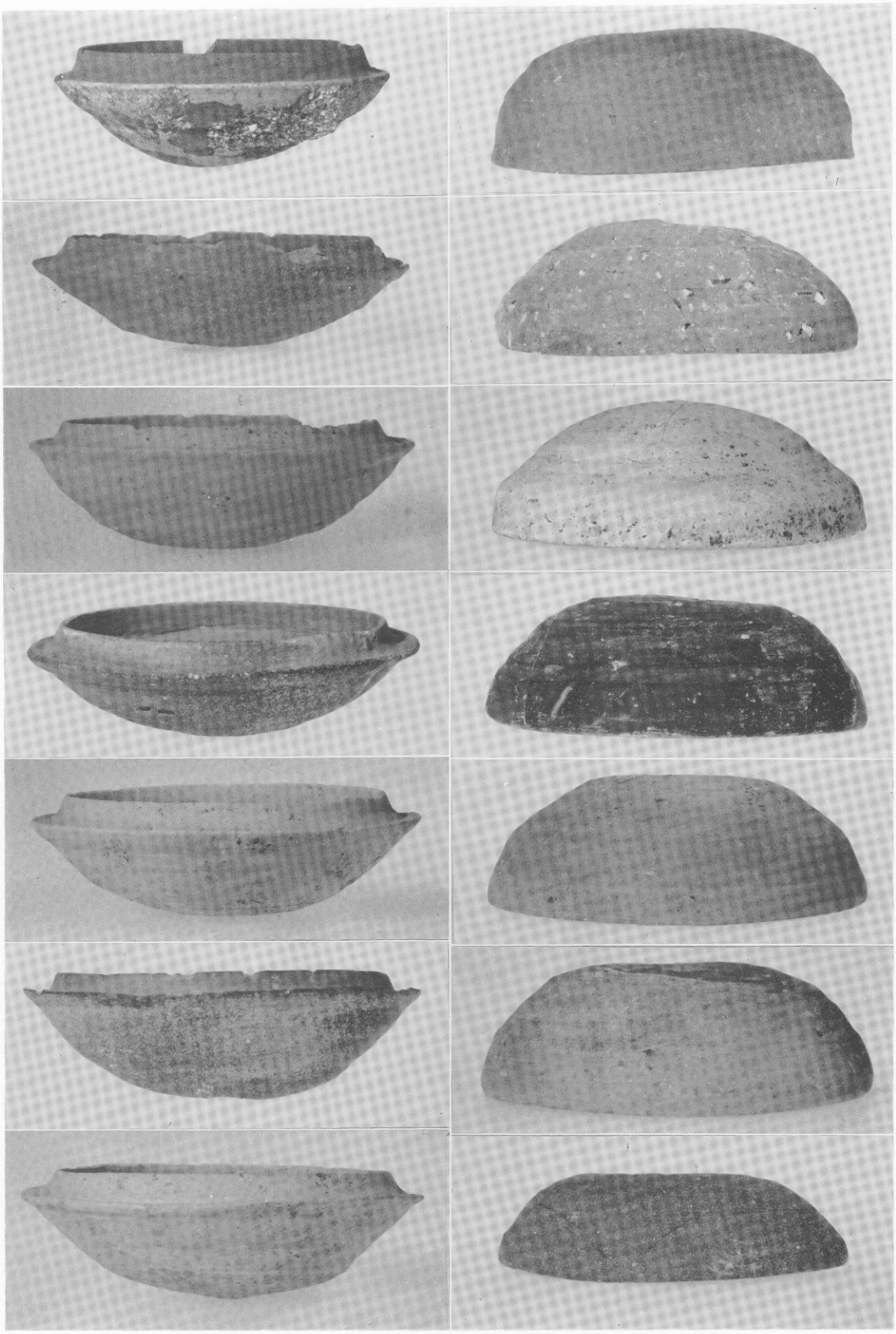


2.　ＳＥ618号井戸

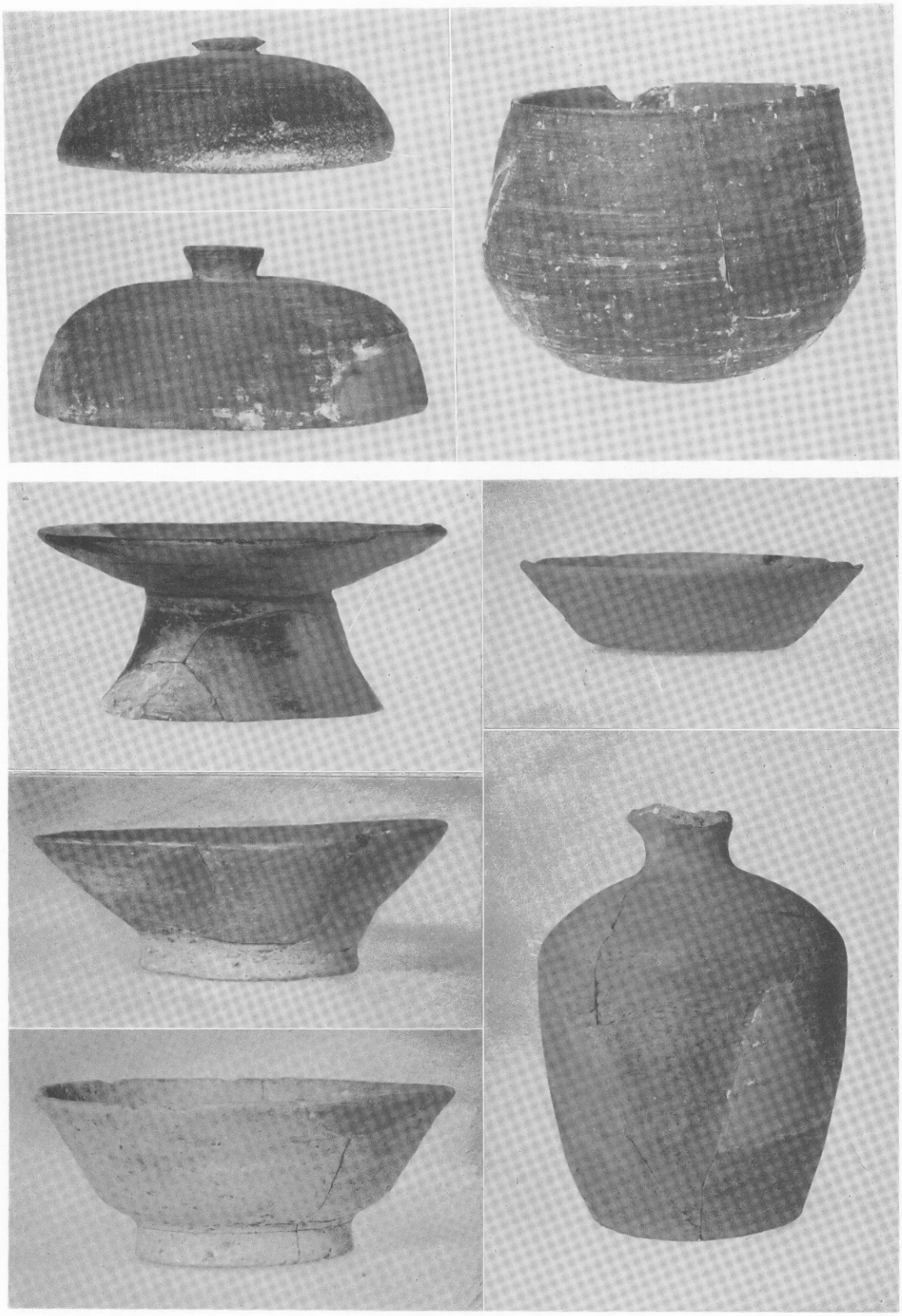
1. ＭＦ21区銅銭出土状態

2. 鏡出土状態

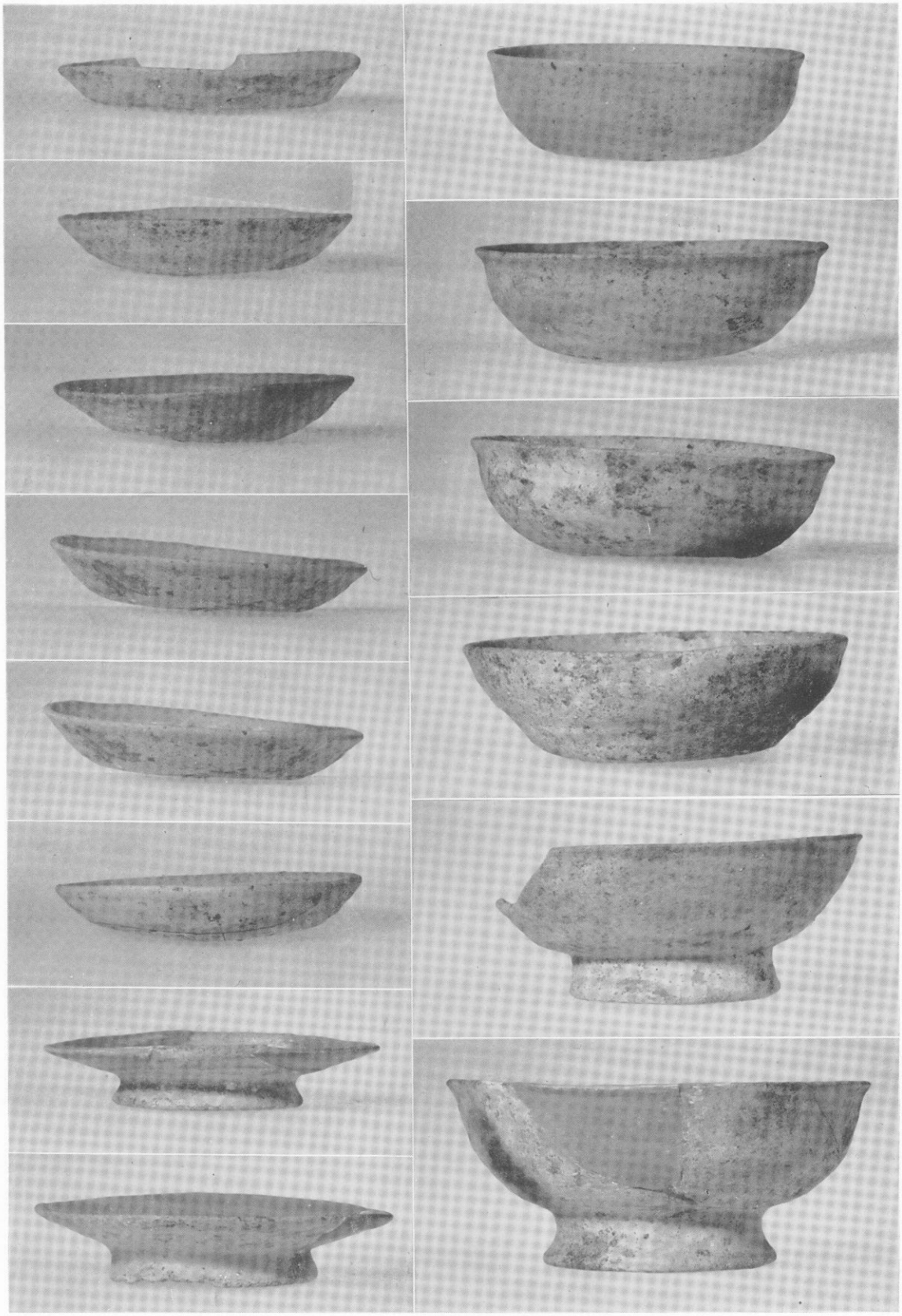
S D 602 溝出土青磁



ＳＫ634 土坑（５層）出土須恵器

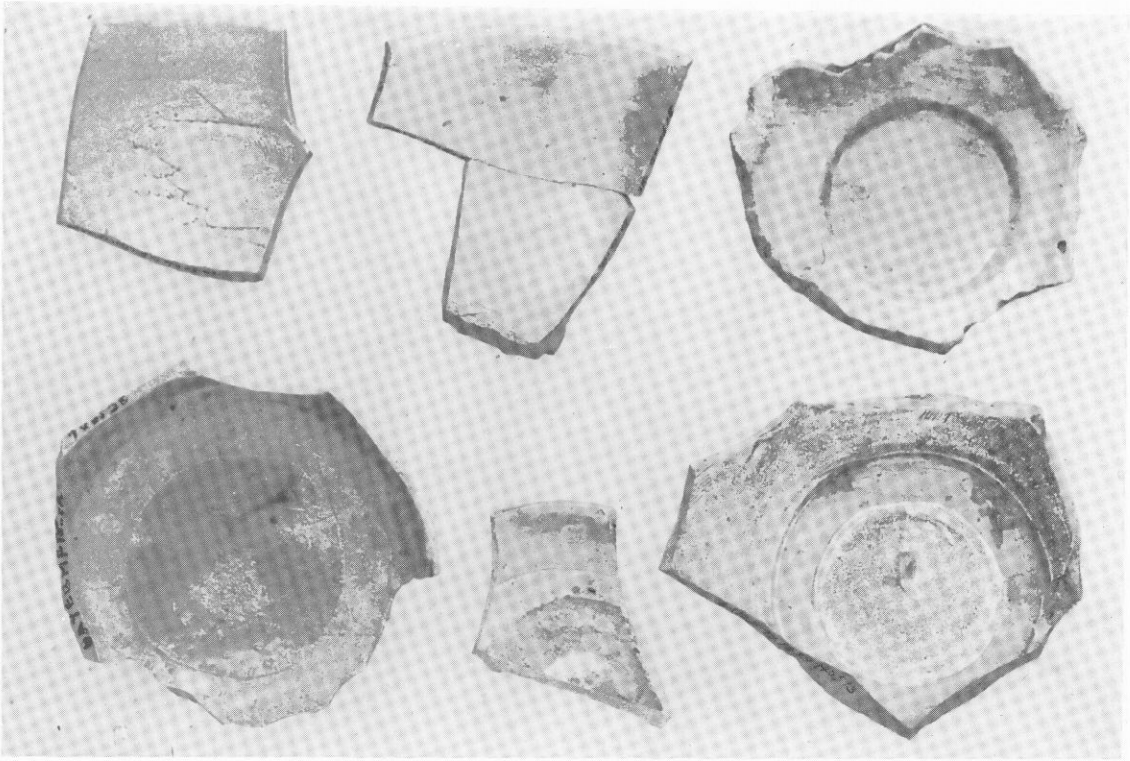


ＳＫ634 土坑（５層）出土須恵器（上）　ＭＥ13区４層出土土器（下）

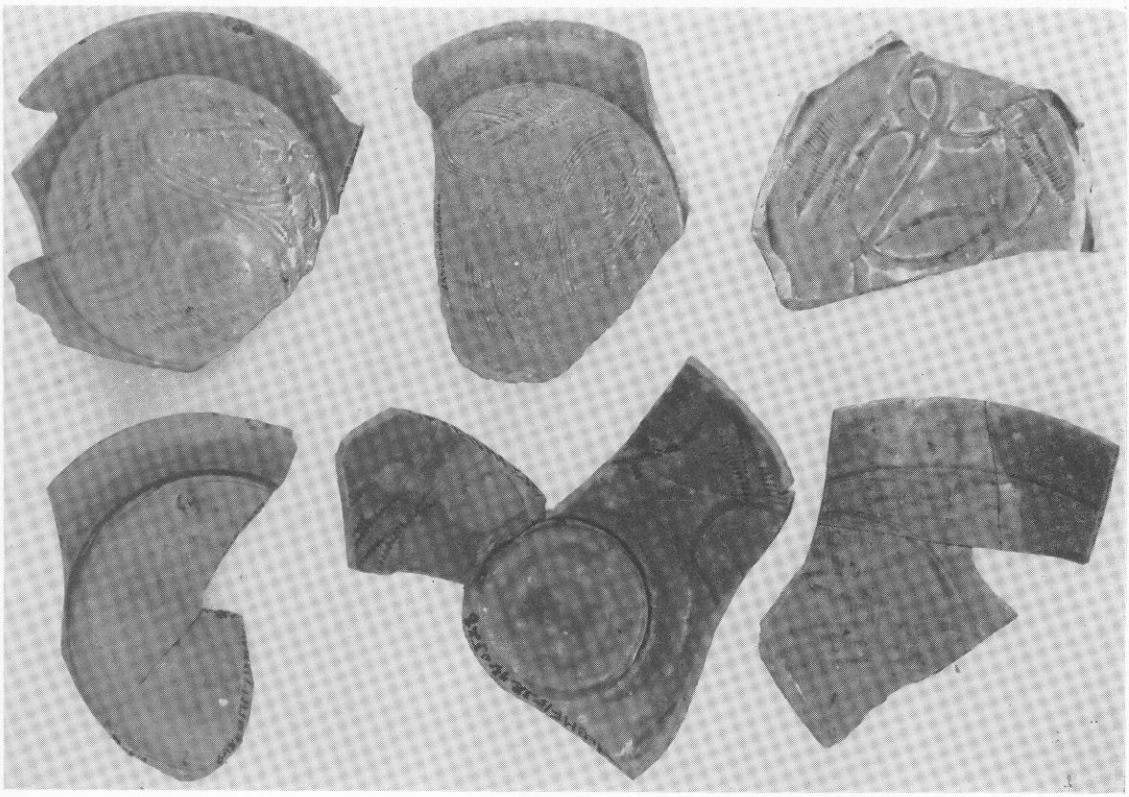


S K 633 土坑出土土師器

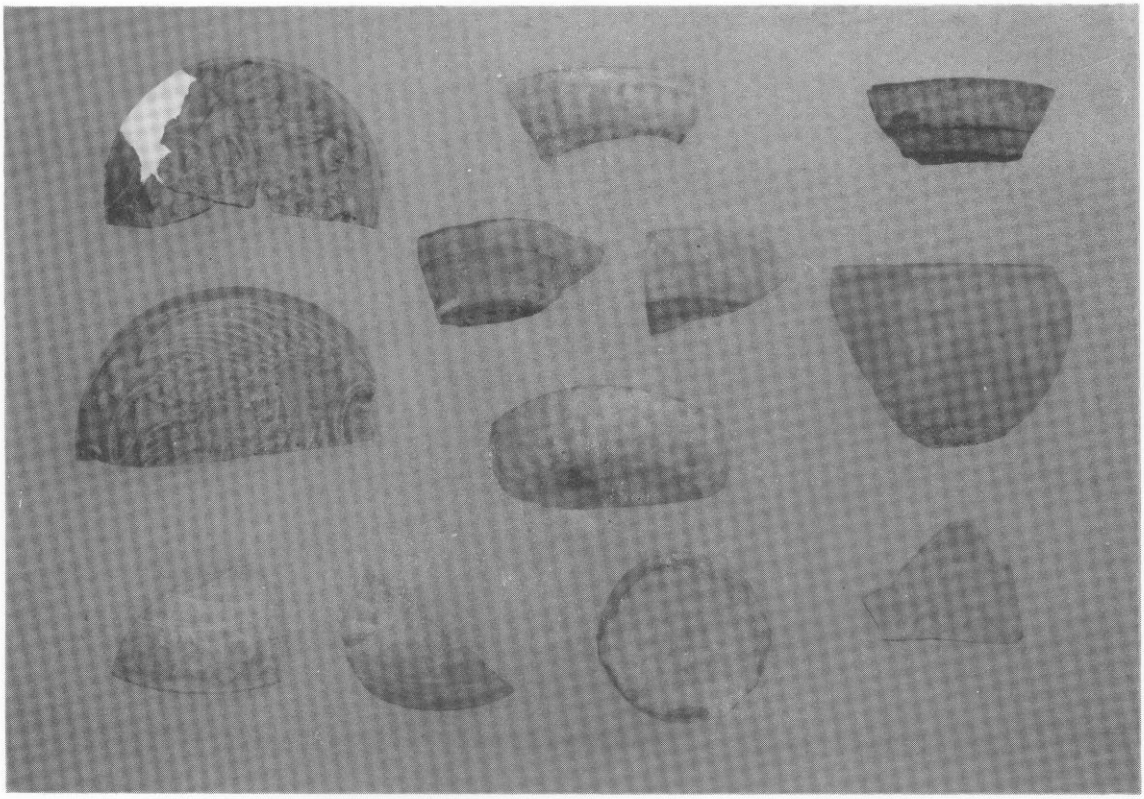
S D 603 溝出土土師器



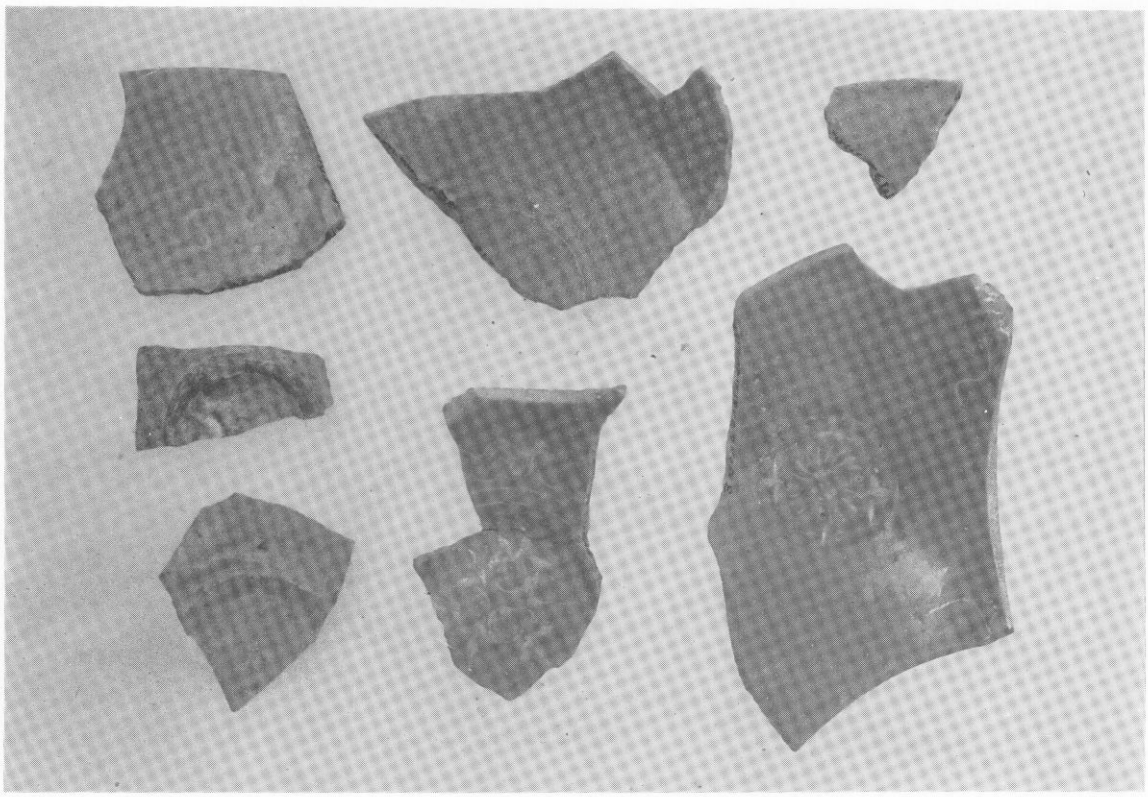
1. 白 磁



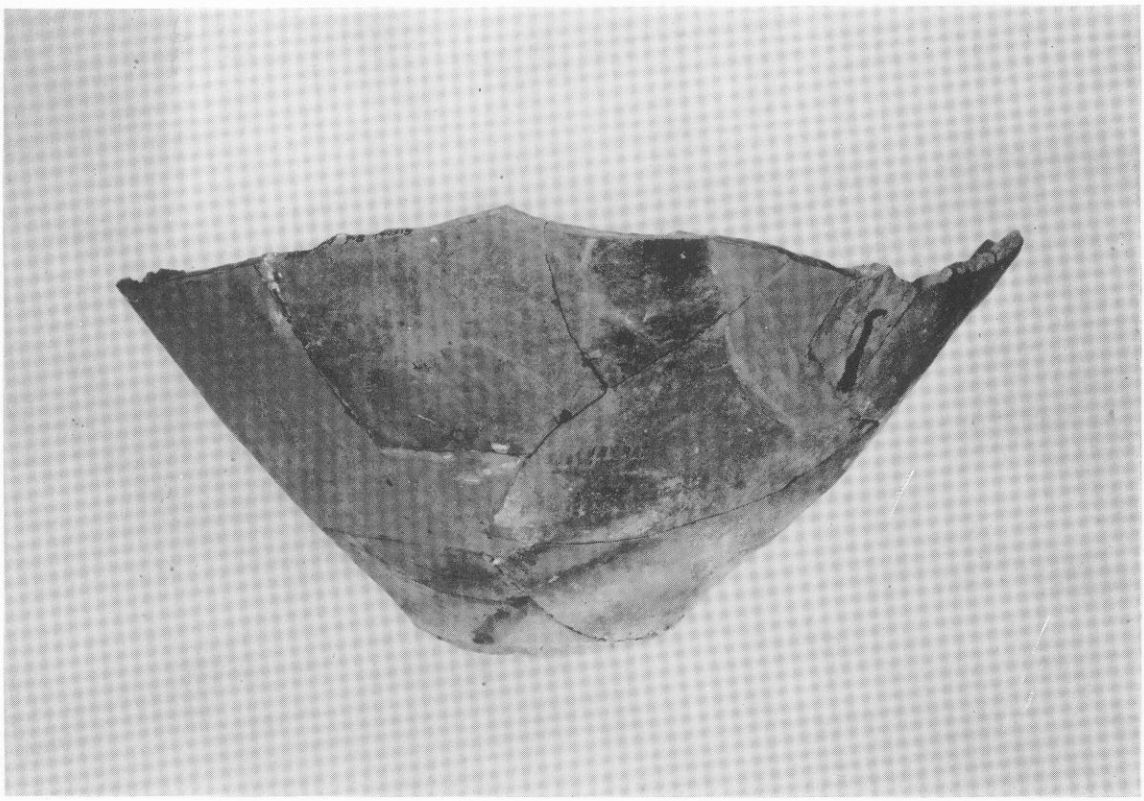
2. 青磁9類



1. 合 子

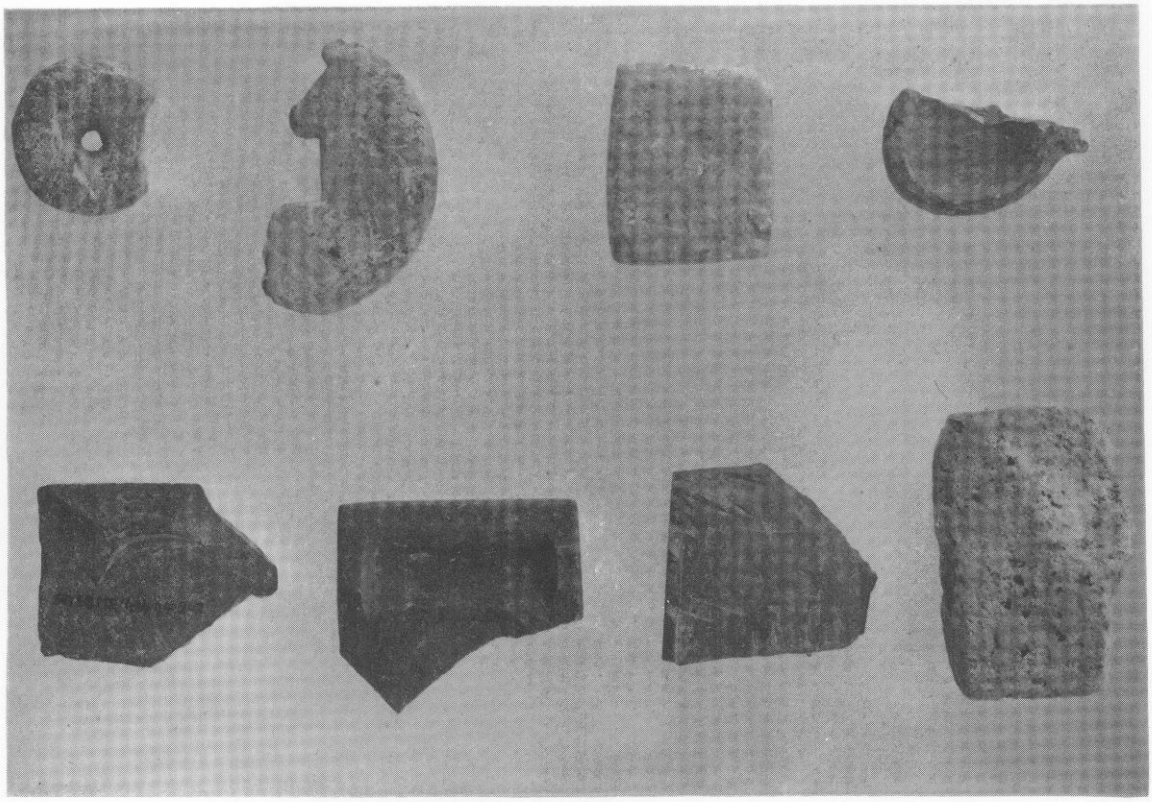


2. 高麗青磁

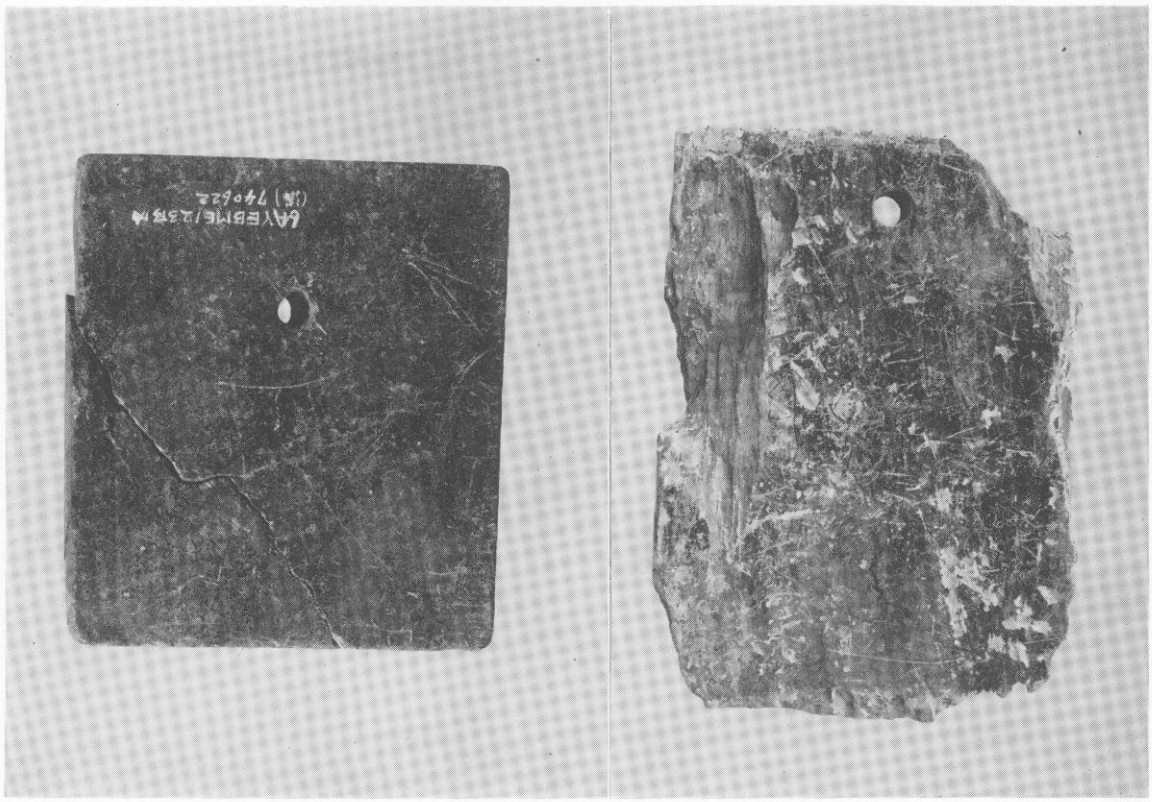


1. 常滑甕底部

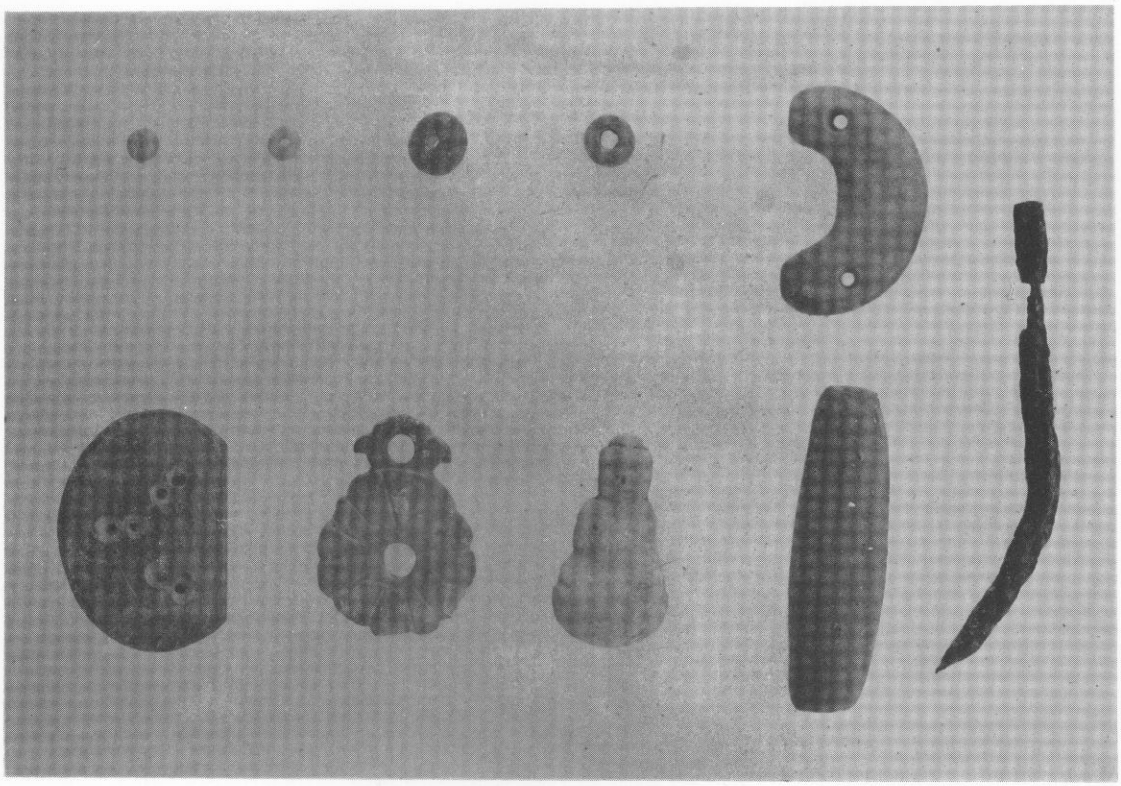
2. 褐釉陶製摺鉢



1. 石製品（1）

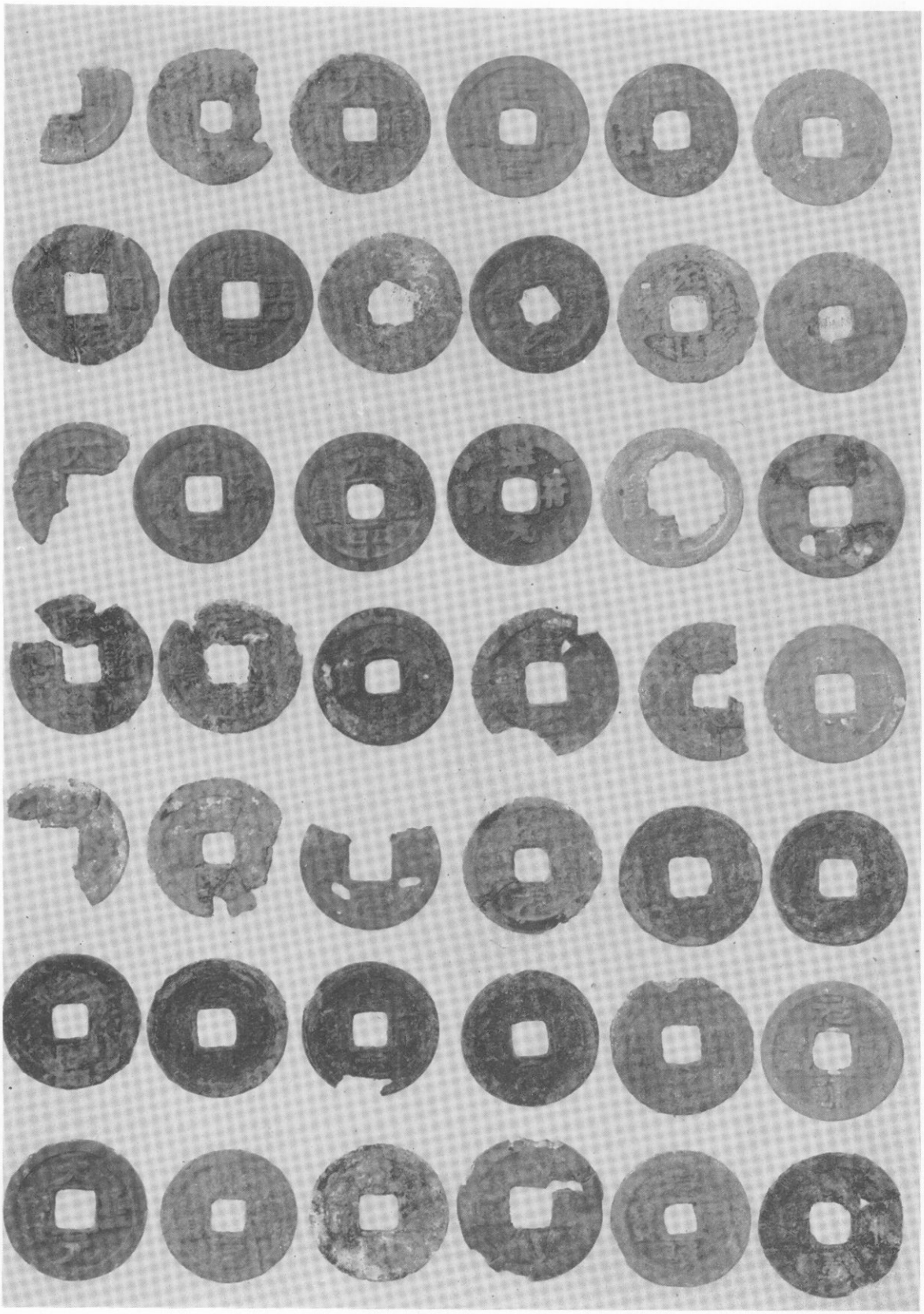


2. 石製品（2）

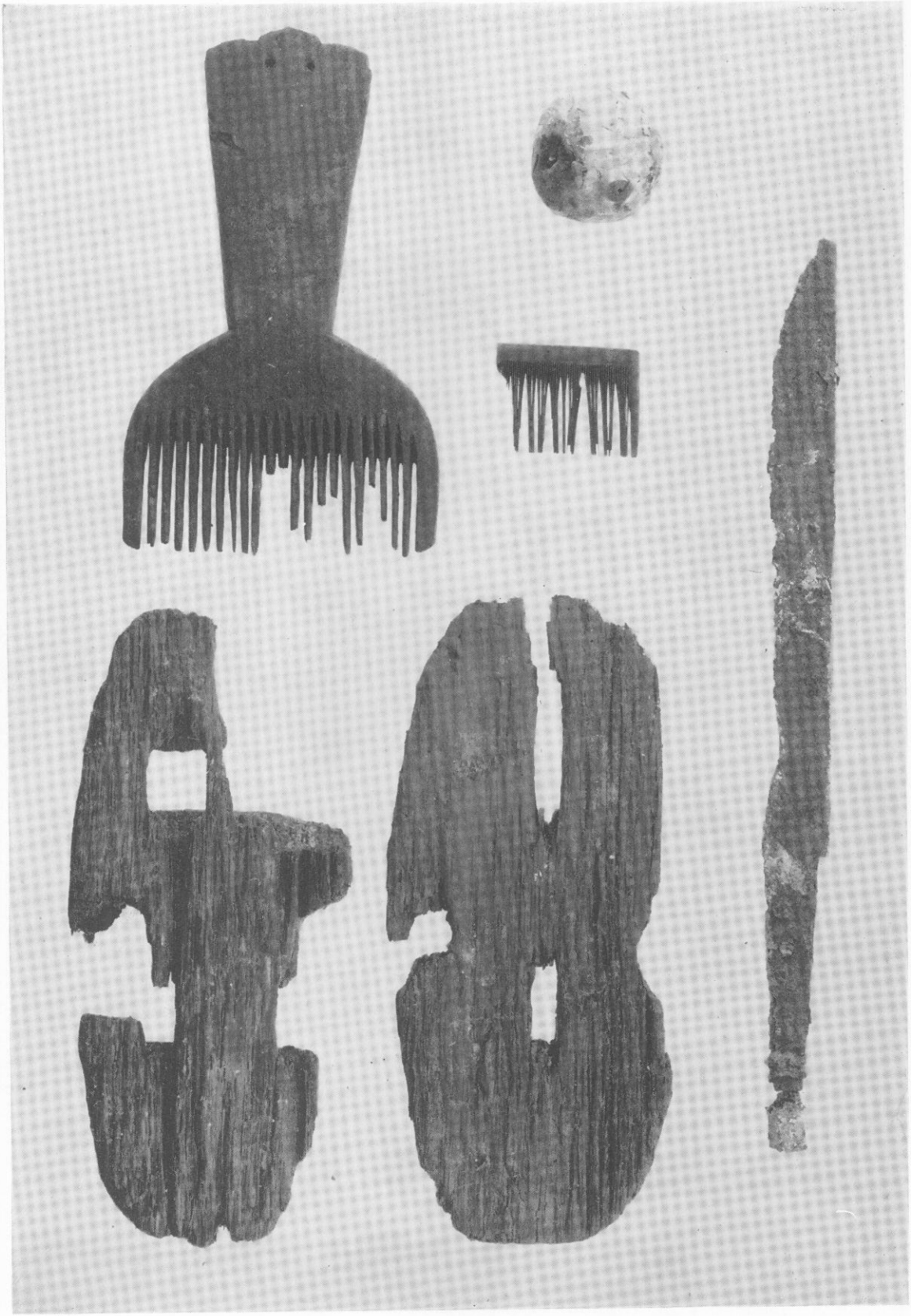


1. ガラス製品・石製品・金属製品・土製品

2. 八 稜 鏡



銅　銭



木製品・金属製品

福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告

——第　6　集——

昭和52年３月31日

発　行　福　岡　県　教　育　委　員　会
福岡市中央区西中洲６街区29号

印　刷　栄　光　印　刷　株　式　会　社
福岡市東区箱崎下入道800